

千歳市

# キウス5遺跡(8)

—般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財調査報告書—

平成19年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

千歳市

# キウス5遺跡(8)

—一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財調査報告書—

平成19年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



調査状況



土層断面



畑跡 4・5・6



杵



炉鉤



箕



曲物

## 例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局札幌開発建設部が行う国道337号新千歳空港関連工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成15および18年度（2003・2006年度）に実施した、千歳市キウス5遺跡低位部の埋蔵文化財発掘調査報告書である。当遺跡は上記とともに16年度にも調査を実施し、さらに継続中であるが、低位部調査が終了したため、ここに報告書を刊行する。  
なお、当該事業による当遺跡の調査報告書としては1冊目だが、当センターでは、日本道路公団（当時）による北海道横断自動車道建設工事に伴う発掘調査で調査報告書を7冊刊行しているため、混乱を避けるため「(8)」を付し、当センターにおけるキウス5遺跡の8冊目の調査報告書の扱いとする。
2. 本書の執筆は、付篇を除いて、三浦正人・菊池慈人・末光正卓・袖岡淳子・広田良成が分担し、文責は各項目の末尾に括弧で示した。現場・整理とも写真撮影等は菊池が担当した。編集は三浦・菊池が行った。
3. 遺物の実測・トレースは、土器・石器を三國谷環が、木製品等を田村直子・寒河江温子が行い、遺構図・土層図等の諸図のトレースは、石岡美保子が行った。
4. 放射性炭素年代測定は、榎地球科学研究所に依頼した。  
木製品の樹種同定は、当センター第1調査部第1調査課 田口 尚が行った。
5. 調査・報告にあたり、下記の諸機関、各氏から御指導御協力をいただいた。  
千歳市教育委員会埋蔵文化財センター、恵庭市教育委員会、恵庭市郷土資料館、北海道地質研究所、清水建設㈱、三和土質基礎㈱、金田一建設㈱、  
山田昌久、大塚和義、藤沢 敦、熊谷公男、佐川正敏、南川雅男、木村英明、椿坂恭代、  
佐々木高明、横山英介、野村 崇、大沼忠春、須永薫子、能登 健、小島敦子、  
中島友文、平山明寿、茅野嘉雄、山田悟郎、小林幸雄、出利葉浩司、右代啓視、古原敏弘、  
大谷敏三、田村俊之、高橋 理、松田淳子、豊田宏良、上屋真一、松谷純一、長町章弘、  
藤井誠二、野中一宏（故人）、石橋孝夫、工藤義衛、澤田 健、青野友哉、長谷部一弘、  
福田裕二、野村祐一、森 靖裕、山田 央、高杉博幸、角田隆志、乾 哲也、小野哲也、  
奈良智法、熊谷 誠、天方直仁、森岡健治、藪中剛司、乾 芳宏、赤石慎三、内山真澄、  
石神 敏、石川直章、原 靖寿、松田隆二、加藤孝幸、フィリップ・ダレス

## 記号等の説明

\* 土層名には以下のように略号・別称を用いることがある。

樽前 a 降下軽石堆積物：Ta-a・(標準土層の) II 層

(標準土層の) III 層：第 I 黒色腐植土層・I 黒・I B

白頭山苔小牧火山灰：B-Tm

樽前 c 降下火砕堆積物のうち岩片を主とする層：Ta-c 1・(標準土層の) IV 層

(標準土層の) V 層：第 II 黒色腐植土層・II 黒・II B

恵庭 a 降下軽石堆積物：En-a

En-a 起源のローム層：En-L・(標準土層の) VI 層

En-a 未風化軽石礫層：En-P

火山灰の略号は、曾屋龍典・佐藤博之 (1980) 『千歳地域の地質』

北海道火山灰命名委員会 (1982) 『北海道の火山灰』による。

\* 遺構には下記の略号を用いている。

LS : V 層 (第 II 黒色腐植土層) の集石      LC : V 層 (第 II 黒色腐植土層) の炭化物集中

UH : III 層 (第 I 黒色腐植土層) の住居跡      UP : III 層 (第 I 黒色腐植土層) の土坑

USP : III 層 (第 I 黒色腐植土層) の杭穴

UFC : III 層 (第 I 黒色腐植土層) のフレイク集中

\* 遺構図

遺構図の縮尺には、40分の1, 100分の1, 200分の1があり、各図にスケールを付し示してある。

遺構平面図の「+」はグリッドラインの交点で、交点傍らの数字がそのグリッド名を示している。

遺構平面図の「・小数字」は、その地点の標高 (m) である。

\* 遺物図

遺物図の縮尺は、

復元土器：4分の1      拓本土器：3分の1      剥片石器：2分の1

礫石器：3分の1      木製品：3分の1・6分の1・8分の1・12分の1・24分の1

となっており、それぞれにスケールを付し示してある。

# 目 次

口絵

例言・記号等の説明

目次

図目次・表目次・写真図版目次

## I 章 緒 言

1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯	1
(1) 一般国道337号新千歳空港関連工事	1
(2) 柏台1遺跡とその後の試掘調査	3
(3) 平成13年度以降の発掘調査	4
(4) キウス5遺跡低位部の調査の経緯	5

## II 章 遺跡の位置と環境

1. 位置と立地	7
2. 地形と地質	10
3. 近現代の環境変化	14

## III 章 低位部調査の概要

1. 調査の方法	16
(1) 調査予定地の内容推定と問題点抽出	16
(2) 調査準備工と進行	16
(3) 発掘区の設定と水準点	16
(4) 低位部発掘調査の手順	18
(5) 遺物の取り上げと整理・保管（一次整理）	20
(6) 二次整理・収蔵	20
2. 遺物の分類	21
3. 土層の区分	24
4. 旧河道の変遷	33
5. 遺構・遺物の概要	39

## IV 章 低位部の遺構とその遺物

1. 畑跡 付. 杭穴群	41
2. 建物跡	52
3. 溝状遺構	52
4. 土坑	59

5. フレイク集中・集石・炭化物集中・その他 .....	65
6. 炭窯跡 .....	68
7. 遺構出土の遺物 .....	69
(1) 遺構出土の土器 .....	69
(2) 遺構出土の石器 .....	74
<b>V章 低位部の遺物</b>	
1. 土器等 .....	77
(1) 概要 .....	77
(2) 復原土器 .....	92
(3) 破片土器 .....	96
(4) 土製品 .....	108
2. 石器・石製品 .....	113
3. 後期旧石器 .....	128
4. 鉄製品 .....	130
5. 木製品 .....	131
(1) 出土状況 .....	131
(2) 木製品分類と一覧表について .....	131
(3) 種別木製品 .....	145
(4) 用材傾向 .....	196
<b>VI章 成果と課題</b>	
1. 千歳川水系における低湿部の遺跡調査とその意義 .....	201
2. アイヌ文化期の畑—コタンからのアプローチ— .....	209
<b>付篇 放射性炭素年代測定結果</b> .....	225
<b>写真図版</b> .....	229
<b>報告書抄録</b>	



## 目 次

### I 緒 言

図 I-1	道央圏連絡道路建設計画図	2
-------	--------------	---

### II 遺跡の位置と環境

図 II-1	遺跡の位置(1)	8
図 II-2	遺跡の位置(2)	9
図 II-3	遺跡周辺の地質	11
図 II-4	遺跡周辺の地形	12
図 II-5	石狩低地東縁断層帯	13

### III 低位部調査の概要

図 III-1	年度別調査区・ 低位部調査施設配置図	17
図 III-2	調査区設定図	19
図 III-3	台地上基本土層図	24
図 III-4	低位部土層図(1)	26
図 III-5	低位部土層図(2)	27
図 III-6	低位部土層図(3)	28
図 III-7	低位部土層図(4)	29
図 III-8	低位部土層図(5)	30
図 III-9	低位部土層図(6)	31
図 III-10	低位部土層図(7)	32
図 III-11	河道変遷図(1)	34
図 III-12	河道変遷図(2)	35
図 III-13	河道変遷図(3)	36
図 III-14	河道変遷図(集約)	37

### IV 低位部の遺構とその遺物

図 IV-1	キウス5遺跡低位部 遺構位置図	42
図 IV-2	キウス5遺跡低位部遺構位置 平成15年度部分拡大図	43
図 IV-3	畑跡と杭穴群	44
図 IV-4	畑跡畝間の耕起痕	45
図 IV-5	畑跡断面図	47
図 IV-6	杭穴群(1)	48
図 IV-7	杭穴群(2)	49
図 IV-8	杭穴群(3)	50
図 IV-9	UH-6	55
図 IV-10	溝状遺構1	57
図 IV-11	溝状遺構2	58
図 IV-12	UP-1~9	60

図 IV-13	UP-10~15	62
図 IV-14	UFC-1、LS-1・2、 LC-1~3	66
図 IV-15	骨片集中・一個体土器出土状況	68
図 IV-16	低位部遺構出土の破片土器	70
図 IV-17	低位部遺構出土の石器	75
図 IV-18	UH-6 出土土器の測定値比較	76

### V 低位部の遺物

図 V-1	低位部包含層土器出土分布図	78
図 V-2	低位部包含層土器 時期別分布図(1)	79
図 V-3	低位部包含層土器 時期別分布図(2)	80
図 V-4	低位部包含層土器 層別分布図(1)	82
図 V-5	低位部包含層土器 層別分布図(2)	83
図 V-6	低位部包含層土器 層別分布図(3)	84
図 V-7	低位部包含層土器 層別分布図(4)	85
図 V-8	低位部包含層土器 層別分布図(5)	86
図 V-9	低位部包含層土器 層別分布図(6)	87
図 V-10	低位部包含層土器 層別分布図(7)	88
図 V-11	低位部包含層土器 層別分布図(8)	89
図 V-12	低位部包含層土器 層別分布図(9)	90
図 V-13	低位部包含層土器 残存状態別分布図	91
図 V-14	低位部包含層出土の 復原土器(1)	93
図 V-15	低位部包含層出土の 復原土器(2)	94
図 V-16	低位部包含層出土の 口縁部破片土器(1)	97
図 V-17	低位部包含層出土の 口縁部破片土器(2)	99
図 V-18	低位部包含層出土の 口縁部破片土器(3)	100

図 V-19	低位部包含層出土の 口縁部破片土器(4)	101
図 V-20	低位部包含層出土の 底部破片土器	102
図 V-21	低位部包含層出土の 胴部破片土器(1)	104
図 V-22	低位部包含層出土の 胴部破片土器(2)	105
図 V-23	低位部包含層出土の土製品	108
図 V-24	低位部包含層土器出土分布図	113
図 V-25	低位部包含層土器 器種別出土分布図(1)	114
図 V-26	低位部包含層土器 器種別出土分布図(2)	115
図 V-27	低位部包含層土器 器種別出土分布図(3)	116
図 V-28	低位部包含層土器 器種別出土分布図(4)	117
図 V-29	低位部包含層土器 器種別出土分布図(5)	118
図 V-30	低位部包含層出土の石器(1)	120
図 V-31	低位部包含層出土の石器(2)	121
図 V-32	低位部包含層出土の石器(3)	123
図 V-33	低位部包含層出土の石器(4)	124
図 V-34	低位部包含層出土の石器(5) 石製品	125
図 V-35	低位部包含層出土の旧石器	129
図 V-36	低位部包含層出土の鉄鍋	130
図 V-37	低位部包含層出土 木製品 分布図(縄文時代)	132
図 V-38	低位部包含層出土 木製品 分布図(縄文~アイヌ文化期)	133
図 V-39	低位部包含層出土 主要木製品 分布図(縄文~アイヌ文化期)	134
図 V-40	低位部包含層09-56区 木製品集中出土状況図	135
図 V-41	木製品(1) 縄文時代	150
図 V-42	木製品(2) 縄文時代	151
図 V-43	木製品(3) 縄文時代	152
図 V-44	木製品(4) 縄文時代	153
図 V-45	木製品(5) 縄文時代	154
図 V-46	木製品(6) 縄文時代	155
図 V-47	木製品(7) アイヌ文化期	156
図 V-48	木製品(8) アイヌ文化期	159
図 V-49	木製品(9) アイヌ文化期	161

図 V-50	木製品(10) アイヌ文化期	162
図 V-51	木製品(11) アイヌ文化期	165
図 V-52	木製品(12) 縄文~アイヌ文化期	167
図 V-53	木製品(13) 縄文~アイヌ文化期	168
図 V-54	木製品(14) 縄文~アイヌ文化期	169
図 V-55	木製品(15) 縄文~アイヌ文化期	170
図 V-56	木製品(16) 縄文~アイヌ文化期	171
図 V-57	木製品(17) 縄文~アイヌ文化期	172
図 V-58	木製品(18) 縄文~アイヌ文化期	173
図 V-59	木製品(19) 縄文~アイヌ文化期	174
図 V-60	木製品(20) 縄文~アイヌ文化期	175
図 V-61	木製品(21) 縄文~アイヌ文化期	176
図 V-62	木製品(22) 縄文~アイヌ文化期	177
図 V-63	木製品(23) 縄文~アイヌ文化期	178
図 V-64	木製品(24) 縄文~アイヌ文化期	179
図 V-65	木製品(25) 縄文~アイヌ文化期	180
図 V-66	木製品(26) 縄文~アイヌ文化期	181
図 V-67	木製品(27) 縄文~アイヌ文化期	182
図 V-68	木製品(28) 縄文~アイヌ文化期	183
図 V-69	木製品(29) 縄文~アイヌ文化期	184
図 V-70	木製品(30) 縄文~アイヌ文化期	185
図 V-71	木製品(31) 縄文~アイヌ文化期	186
図 V-72	木製品(32) 縄文~アイヌ文化期	187
図 V-73	木製品(33) 縄文~アイヌ文化期	188
図 V-74	木製品(34) 縄文~アイヌ文化期	189
図 V-75	木製品(35) 縄文~アイヌ文化期	190
図 V-76	木製品(36) 縄文~アイヌ文化期	191
図 V-77	木製品(37) 縄文~アイヌ文化期	192
図 V-78	木製品(38) 縄文~アイヌ文化期	193
図 V-79	木製品(39) 縄文~アイヌ文化期	194
図 V-80	木製品(40) 縄文~アイヌ文化期	195
図 V-81	木製品の樹種構成グラフ	199

## VI 成果と課題

図 VI-1	千歳川流域の低湿性遺跡分布図 203
図 VI-2	畑をめぐる周辺状況 211
図 VI-3	『蝦夷生計図説』より(1) 214
図 VI-4	『蝦夷生計図説』より(2) 215
図 VI-5	キウス 5 遺跡出土の農耕に 関する木製品 215

## 付篇

暦年代校正結果(1)	227
暦年代校正結果(2)	228

## 表 目 次

### Ⅱ 低位部調査の概要

表Ⅱ-1	キウス5遺跡低位部 遺構一覽	39
表Ⅱ-2	キウス5遺跡低位部 出土遺物	40

### Ⅳ 低位部の遺構とその遺物

表Ⅳ-1	低位部遺構出土破片土器 観察表(1)	71
表Ⅳ-2	低位部遺構出土破片土器 観察表(2)	72
表Ⅳ-3	低位部遺構出土土器点数	73
表Ⅳ-4	低位部遺構出土石器点数	74
表Ⅳ-5	低位部遺構出土掲載石器一覽	75

### V 低位部の遺物

表V-1	低位部包含層出土復原土器 観察表(1)	94
表V-2	低位部包含層出土復原土器 観察表(2)	95
表V-3	低位部包含層出土 口縁部破片土器観察表(1)	106
表V-4	低位部包含層出土 口縁部破片土器観察表(2)	107
表V-5	低位部包含層出土 底部破片土器観察表	107
表V-6	低位部包含層出土 胴部破片土器観察表	107
表V-7	低位部包含層出土土製品 観察表	108
表V-8	平成15年度低位部包含層 出土土器点数(1)	109
表V-9	平成15年度低位部包含層 出土土器点数(2)	110
表V-10	平成18年度低位部包含層 出土土器点数(1)	111
表V-11	平成18年度低位部包含層 出土土器点数(2)	112
表V-12	平成15年度低位部包含層 出土石器点数	126
表V-13	平成18年度低位部包含層 出土石器点数	126

表V-14	低位部包含層出土 掲載石器一覽	127
表V-15	低位部包含層出土 旧石器一覽	128
表V-16	日本列島出土木製品分類 北海道関係(1)	136
表V-17	日本列島出土木製品分類 北海道関係(2)	137
表V-18	出土木製品一覽(1) V層相当層:縄文時代(1/1)	139
表V-19	出土木製品一覽(2) Ⅲ層相当:推文~アイヌ文化期(1/5)	140
表V-20	出土木製品一覽(3) Ⅲ層相当:推文~アイヌ文化期(2/5)	141
表V-21	出土木製品一覽(4) Ⅲ層相当:推文~アイヌ文化期(3/5)	142
表V-22	出土木製品一覽(5) Ⅲ層相当:推文~アイヌ文化期(4/5)	143
表V-23	出土木製品一覽(6) Ⅲ層相当:推文~アイヌ文化期(5/5)	144
表V-24	木製品の樹種同定結果	197
表V-25	木製品の樹種構成	199

### 付 篇

キウス5遺跡低位部 放射性炭素年代測定試料一覽	225
----------------------------	-----

## 写真図版目次

図版 1	平成15年度の調査(1) .....	231	図版40	木製品	縄文時代 分割材・切片・木端 .....	270
図版 2	平成15年度の調査(2) .....	232	図版41	木製品	アイヌ文化期 銀・容器・串 .....	271
図版 3	平成18年度の調査(1) .....	233	図版42	木製品	アイヌ文化期 箕 .....	272
図版 4	平成18年度の調査(2) .....	234	図版43	木製品	アイヌ文化期 自在鉤・杵・建材 .....	273
図版 5	土層断面(1) .....	235	図版44	木製品	アイヌ文化期 曲物 .....	274
図版 6	土層断面(2) .....	236	図版45	木製品	アイヌ文化期 桶側板 .....	275
図版 7	燧跡(1) .....	237	図版46	木製品	縄文～アイヌ文化期 柱・建材 .....	276
図版 8	燧跡(2) .....	238	図版47	木製品	縄文～アイヌ文化期 柱・建材 .....	277
図版 9	燧跡(3) .....	239	図版48	木製品	縄文～アイヌ文化期 板 .....	278
図版10	UH-6 .....	240	図版49	木製品	縄文～アイヌ文化期 棒 .....	279
図版11	溝状遺構 .....	241	図版50	木製品	縄文～アイヌ文化期 杭 .....	280
図版12	UP(1) .....	242	図版51	木製品	縄文～アイヌ文化期 杭・芯持材 .....	281
図版13	UP(2) .....	243	図版52	木製品	縄文～アイヌ文化期 芯持材 .....	282
図版14	その他の遺構 .....	244	図版53	木製品	縄文～アイヌ文化期 芯持材 .....	283
図版15	木製品出土状況(1) .....	245	図版54	木製品	縄文～アイヌ文化期 芯持材 .....	284
図版16	木製品出土状況(2) .....	246	図版55	木製品	縄文～アイヌ文化期 芯持材 .....	285
図版17	木製品出土状況(3) .....	247	図版56	木製品	縄文～アイヌ文化期 芯持材 .....	286
図版18	木製品出土状況(4) .....	248	図版57	木製品	縄文～アイヌ文化期 芯持材・分割材 .....	287
図版19	木製品出土状況(5) .....	249	図版58	木製品	縄文～アイヌ文化期 分割材 .....	288
図版20	木製品出土状況(6) .....	250	図版59	木製品	縄文～アイヌ文化期 分割材 .....	289
図版21	遺物出土状況(1) .....	251	図版60	木製品	縄文～アイヌ文化期 残材 .....	290
図版22	遺物出土状況(2) .....	252	図版61	木製品	縄文～アイヌ文化期 残材 .....	291
図版23	旧河道完掘状況 .....	253	図版62	木製品	縄文～アイヌ文化期 残材 .....	292
図版24	遺構出土の土器 .....	254	図版63	木製品	縄文～アイヌ文化期 残材・剥材・切片・段木 .....	293
図版25	遺構出土の石器 .....	255	図版64	木製品	縄文～アイヌ文化期 剥材・木端・切片 .....	294
図版26	包含層の復原土器 .....	256	図版65	木製品	縄文～アイヌ文化期 切片・剥材・木端 .....	295
図版27	包含層の復原土器 .....	257	図版66	木製品	縄文～アイヌ文化期 切片・木端 .....	296
図版28	包含層出土の口縁部破片土器 .....	258				
図版29	包含層出土の口縁部破片土器 .....	259				
図版30	包含層出土の口縁部破片土器 .....	260				
図版31	包含層出土の底部・胴部破片土器 .....	261				
図版32	包含層出土の胴部破片土器・ 土製品 .....	262				
図版33	包含層出土の剥片石器 .....	263				
図版34	包含層出土の剥片石器・石斧 .....	264				
図版35	包含層出土の礫石器 .....	265				
図版36	包含層出土の遺物 大珠・旧石器・鉄鍋 .....	266				
図版37	木製品 縄文時代 槌・板・棒 .....	267				
図版38	木製品 縄文時代 柱・芯持材・分割材 .....	268				
図版39	木製品 縄文時代 芯持材 .....	269				

## I 緒 言

## 1. 調査要項

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

遺跡名：キウス5遺跡（北海道教育委員会登録番号 A-03-93）

平成15年度

所在地：千歳市中央1287-7、-12、-13、-14、1286-6

調査面積：5,000㎡（うち低位部 4,200㎡）

調査期間：平成15年4月1日～平成16年3月31日（低位部現地調査6月24日～10月30日）

平成18年度

所在地：千歳市中央1287-7

調査面積：3,200㎡（うち低位部 1,280㎡）

調査期間：平成18年4月1日～平成19年3月31日（低位部現地調査5月24日～10月18日）

## 2. 調査体制

平成15年度

第2調査部長	西田 茂
第4調査課長	三浦 正人（発掘担当者）
主 査	皆川 洋一
主 任	菊池 慧人
主 任	末光 正卓
主 任	広田 良成

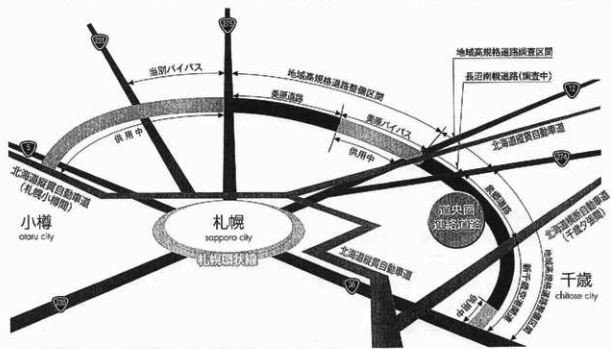
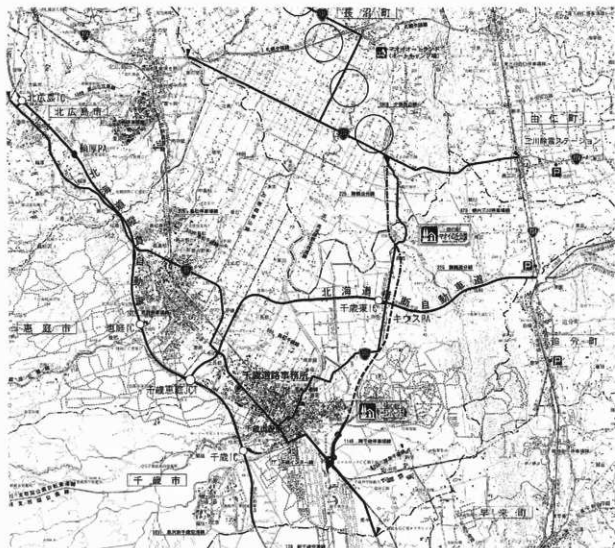
平成18年度

第1調査部長	千葉 英一
発掘担当者	第3調査課長 三浦 正人（低位部発掘担当）
同	主 査 菊池 慧人（低位部発掘担当）
同	主 査 愛場 和人
同	主 査 袖岡 淳子
同	主 査 末光 正卓
同	主 査 広田 良成

## 3. 調査の経緯

## (1) 一般国道337号新千歳空港関連工事

この調査の原因である一般国道337号新千歳空港関連工事は、北海道開発局札幌開発建設部が実施している地域高規格道路「道央圏連絡道路」計画の一環である。道央圏連絡道路（一般国道337号）は道央都市圏の新しい交通・物流ルートとなる4車線道路で、新千歳空港を起点とし、北海道横断自動車道千歳東IC、北海道縦貫自動車道江別東IC、重要港湾石狩湾新港、北海道横断自動車道鏡函ICを結ぶ延長約80kmの半環状道路である（図I-1）。市町村としては千歳市、長沼町、南幌町、江別



北海道開発局「千歳道路事務所 事業概要」パンフレットより抜粋

図1-1 道央圏連絡道路建設計画図

市、当別町、札幌市、石狩市、小樽市を連結している。事業は新千歳空港関連・泉郷道路・長沼南幌道路・美原バイパス・美原道路・当別バイパスの6区間に分けられている。「新千歳空港関連」事業は新千歳空港と北海道横断自動車道千歳東ICを結ぶ9.2km区間で、平成元年度に事業化された。このうち新千歳空港から千歳市街地への2.5kmのほか、昭和55年度に事業化された当別バイパス（当別町～小樽市）23.8kmが平成15年度までに部分供用され、平成16年3月26日には石狩川を渡河する美原大橋を含む美原バイパス3.9kmが2車線で暫定供用されている。

平成2（1990）年12月札幌開発建設部は千歳市教育委員会を経由して北海道教育委員会（以下、道教委）あてに、国道337号根志越道路整備工事に伴う千歳市柏台から同市中央までの路線内における埋蔵文化財保護のための事前協議書を提出した。協議を受けた道教委は平成3年6月、路線内の遺跡所在確認調査を実施した。その結果、周知の祝梅川・祝梅川矢島・祝梅川山田・祝梅川上田・アンカリトー6・アンカリトー7・キウス13号周堤墓（のちのオリカ1遺跡）・キウス5遺跡と未記載の仮称祝梅砂丘遺跡（のちの柏台1遺跡）・仮称キウス7～10遺跡の12箇所、対象面積299,000㎡、全計画路線の半分程度について範囲確認調査が必要と判断、同年7月道教委から札幌開発建設部へ回答された。

平成7（1995）年5月、事業名の変更等により、再度事前協議書が札幌開発建設部から道教委に提出された。ここで事業名が一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事となり、事業地の面積約828,000㎡、工期は平成8年4月1日から平成12年12月15日、埋蔵文化財包蔵地保護については現状保存は困難なため範囲確認調査（試掘）を希望する旨協議された。

## （2）柏台1遺跡とその後の試掘調査

平成7年11月と平成8年5月、道教委は当事業地内で初の範囲確認調査を千歳市柏台地区の仮称祝梅砂丘遺跡とした包蔵地で実施した。その結果、地表下約4mにある恵庭a降下軽石層（En-a）直下の風成堆積物中から、旧石器時代の遺物である黒曜石製剥片石器類が検出された。範囲や工法など遺跡の取り扱いについて協議が行われ、工事前の発掘調査を実施することとなった。柏台1遺跡として記載されたこの遺跡は、平成9（1997）・10年に財団法人埋蔵文化財センター（以下、センター）が越田賢一郎・福井淳一を担当者として6,300㎡の発掘調査を実施、En-a直下に広がる疎林樹木痕とEn-a下位の火山灰質シルト層から約32,000点の旧石器時代遺物を検出した。遺物は15カ所の集中域に分かれ、13カ所で伊跡、琥珀玉も1点確認できた。（北理調報138集）

その後、新千歳空港周辺の整備が事業の中心となっていたため、埋蔵文化財関係調査は一時的に途絶えていた。以降の範囲確認調査は以下のとおりである（平成18年3月現在）。

- 平成12（2000）年6月 仮称チブニー川左岸遺跡（平成3年所在確認調査：仮称キウス8）実施。4,800㎡について調査必要と判断。チブニー1遺跡と呼称。
- 平成13年5月 チブニー川の右岸（平成3年所在確認調査：仮称キウス9）の一部実施。2,500㎡について調査必要と判断。チブニー2遺跡と呼称。
- 平成13年9月 キウス9遺跡（平成3年所在確認調査：仮称キウス10）南半部実施。
- 平成13年10月 キウス13号周堤墓と周辺を試掘。周堤墓とされていた部分は耕作等の削平による高まりの残存と判明したため、遺物の得られた範囲をもってオリカ1遺跡と名称変更し、3,900㎡の調査必要区域を設定した。
- 平成13年9月・10月 オリカ1遺跡の北東400mにあるオリカ2遺跡（平成3年所在確認調査：仮称キウス7）実施。9月は確認調査範囲の中央を通る市道祝梅第2道路の北側、11月は南側が対

象。樽前c降下軽石層より上位の焼骨片の多量検出と縄文期の土器石器から、アイヌ文化期の集落跡と縄文期の遺物包含地と目される約9,000㎡について調査が必要と判断。

- 平成14年6月 オルイカ1遺跡の現オルイカ川右岸確認調査未了地について実施。1,600㎡の調査必要範囲が確定。
- 平成14年7～8月・10月 キウス5遺跡で実施。旧河道部の低地と台地部を合わせた約15,000㎡の調査必要範囲が確定した。西側に試掘未了部分あり。
- 平成14年10月 テブニー2遺跡の北半部実施。
- 平成15年10月 テブニー2遺跡の確認調査未了地（市道協和中央線の両側）実施。遺物の出土等により遺構確認を含めて約15,000㎡の追加確定。
- 平成16年10月 祝梅川山田遺跡の一部実施。祝梅川上田遺跡の隣接地として判断保留。梅川4遺跡も対象となったが、以前別件のため道教委と千歳市教委により実施済でデータがあると判明し、調査が必要と判断（用地未買収による不確定部分あり）。
- 同 キウス9遺跡（平成3年所在確認調査：仮称キウス10）北半部（キウス川左岸部未了）実施。縄文期の竪穴と思われる凹みや縄文土器・縄文土器石器を確認。16,500㎡については調査が必要と判断。800㎡判断保留。
- 平成17年5月 キウス9遺跡北半部のうち未了であった7,700㎡実施。同上の結果を得、保留800㎡も含めて25,000㎡で発掘調査必要と判断。
- 平成17年10月 祝梅川上田遺跡・梅川1遺跡・祝梅川小野遺跡、3遺跡約43,000㎡を対象に実施。祝梅川上田遺跡は16年10月分と併せて調査が必要と判断。南側7,625㎡は遺跡のありかたから梅川2遺跡として、北側の9,100㎡を祝梅川上田遺跡として調査対象（北側に試掘未了部あり）。梅川1遺跡は部分的な試掘で未了区が多く判断保留だが、土器・木製品等の遺物の出土はある。祝梅川小野遺跡は台地部の大半と低地部の一部で遺物が出土し、調査が必要と判断されるが、用地未買収による不確定部分がある。
- 平成17年11月 オルイカ2遺跡と南長沼用水を挟んだ隣接地約13,000㎡のうち土地買収の済んだ部分で実施。オルイカ2遺跡の延長として試掘未了区に調査対象が広がる可能性があり、判断保留。
- 平成18年9月 祝梅川小野遺跡の試掘未了区で実施。台地部はすべて調査が必要と判断される。
- 平成18年10月 オルイカ2遺跡の試掘未了区で実施。調査必要な範囲、約7,500㎡ほぼ確定。アンカリーター7遺跡の用地買収済部分約12,000㎡で実施。少量の遺物出土。南北両側に試掘未了部分多く判断保留。

### （3）平成13年度以降の発掘調査

以上の範囲確認調査から発掘調査が必要と判断された遺跡は、平成13年度から附北海道埋蔵文化財センターが、札幌開発建設部札幌新道建設事務所（平成16年度から千歳道路事務所）の工事計画に則って以下のごとく発掘調査を実施している（平成18年度現在）。

- ◇平成13年度 テブニー1遺跡 4,360㎡ 担当者：佐川俊一・笠原 興 主に縄文後・晩期・縄文期・アイヌ期の土器・石器・鉄製品 報告書：北埋調報173集
- ◇ 同 テブニー2遺跡 450㎡ 担当者：山中文雄 主に縄文晩期の遺物 報告書：北埋調報173集
- ◇平成14年度 オルイカ1遺跡 5,460㎡ 担当者：佐川俊一・末光正卓 縄文後期の住居跡・後期晩期の土器石器・アイヌ期の平地住居跡など 報告書：北埋調報188集



- ◇ 同 オルイカ2遺跡 3,230㎡ 担当者:和泉田毅・阿部明義 旧石器ブロック・縄文中期晩期の土器石器・アイヌ期の平地住居跡(集落)など 報告書:北埋調報189集
- ◇平成15年度 オルイカ1遺跡 1,600㎡ 担当者:菊池慈人・末光正卓 主に縄文後期の遺物 報告書:北埋調報206集
- ◇ 同 チブニー2遺跡 2,000㎡ 担当者:皆川洋一・広田良成 縄文中期の住居跡と遺物・擦文期の墓と鉄製品・アイヌ期の平地住居跡と鉄製品・青磁碗など 報告書:北埋調報207集
- ◇ 同 キウス5遺跡 5,000㎡(低地4,200㎡・台地800㎡) 担当者:三浦正人 縄文中期の住居跡と遺物・旧河道部で縄文期と近世の木製品・低位部に近世の烟跡 報告書:旧河道部と低位部は当報告、台地部は未報告、調査年報16参照
- ◇平成16年度 オルイカ2遺跡 6,500㎡→5,500㎡に変更 担当者:阿部明義・広田良成 旧石器ブロック・縄文中期晩期の土器石器・アイヌ期の平地住居跡(集落)など 報告書:北埋調報221集
- ◇ 同 チブニー2遺跡 14,700㎡→13,400㎡に変更 担当者:皆川洋一・菊池慈人・佐藤剛 縄文晩期・擦文期の墓・主に縄文晩期の遺物 報告書:北埋調報225集
- ◇ 同 キウス5遺跡 1,056㎡ 担当者:皆川洋一・菊池慈人 主に縄文晩期・擦文期の遺物 報告書:未報告、調査年報17参照
- ◇平成17年度 キウス9遺跡 17,000㎡→17,044㎡に変更 担当者:三浦正人・皆川洋一・菊池慈人・新家水奈・愛場和人・阿部明義・広田良成 石刃燧70点・縄文早期前期晩期の遺構遺物・擦文期前期の住居と鍛冶遺構(集落)・アイヌ期の平地住居跡など 報告書:北埋調報252集
- ◇ 同 チブニー2遺跡 1,300㎡ 担当者:皆川洋一・菊池慈人 旧石器や縄文晩期の遺物など 報告書:北埋調報225集
- ◇平成18年度 キウス9遺跡 7,956㎡ 担当者:三浦正人・菊池慈人・愛場和人・袖岡淳子・末光正卓・広田良成 石刃燧22点・縄文晩期および擦文期前期の遺物など 報告書:北埋調報252集
- ◇ 同 キウス5遺跡 3,200㎡(低地1,280㎡・台地1,920㎡) 担当者:三浦正人・菊池慈人・愛場和人・袖岡淳子・末光正卓・広田良成 旧石器ブロック・縄文中期の遺構(住居・土坑・焼土列)遺物・擦文期前期の住居群・低位部に近世の烟跡・旧河道部で近世の木製品など 報告書:旧河道部と低位部は当報告書、台地部は未報告、調査年報19参照
- ◇ 同 祝梅川上田遺跡 9,100㎡ 担当者:鈴木 信・皆川洋一 旧石器ブロック・縄文早期中期後期の遺物・アイヌ期の平地住居跡(集落)と鉄製品など 報告書:北埋調報238集
- ◇ 同 梅川2遺跡 7,625㎡ 担当者:鈴木 信・皆川洋一 縄文期の遺物散布地 報告書:北埋調報238集
- ◇ 同 梅川4遺跡 5,000㎡→6,350㎡に変更 担当者:鈴木 信・宗像公司 縄文晩期後葉の土坑墓群 報告書:未報告、調査年報19参照

#### (4) キウス5遺跡低位部の調査の経緯

これらのうち、当報告のキウス5遺跡低位部の調査に至る経緯について詳述する。以下、表現上「低位部・低地・低湿部」が混在するが、同じ部分を指している。キウス5遺跡は千歳市中央地区の北部に位置し、馬追丘陵から西流する河川キウス川の右岸に広がる。すでに平成6年から10年の5年間にわたり道東自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査として、日本道路公団から委託を受けた当センターと千歳市教育委員会が、計55,885㎡を調査。東西1,000m以上に及ぶ広範囲の台地・低地から旧石器・縄文早期～晩期の各期の住居跡や土坑墓、縄文後晩期の木製品、擦文期とアイヌ期の墓などを調査し

た。当センター分の報告は平成7年から11年にかけて『千歳市キウス5遺跡・キウス7遺跡(2)・ケネフチ8遺跡』北埋調報92集・『千歳市キウス5遺跡(2)』北埋調報104集・『同(3)』北埋調報115集・『同(4)』北埋調報116集・『同(5)』北埋調報125集・『同(6)』北埋調報126集・『千歳市キウス5遺跡(7)・キウス7遺跡(6)』北埋調報136集として7冊を刊行。千歳市教育委員会分は『キウス5遺跡における考古学的調査』として平成10年に刊行された。このうち北埋調報92・104・115・125集の4冊でキウス川旧河道低地部の報告を掲載している。

当国道建設工事の計画では、キウス川橋脚工事や、現国道と道東自動車道に接続すべく“キウスランプ”の工事が順次行われることになっていた。工事に伴う当遺跡の範囲確認調査は、道教委によって前掲したとおり平成14年7～8月と10月に実施され、旧河道部の低地と台地部を合わせた約15,000㎡の調査必要範囲が確定した。当センターもオルイカ1・2遺跡の調査中であり、試掘調査に協力している。さらに現国道との接続部分に残っていた試掘未了部分も、平成19年度に確認調査を行った。

平成15年度の計画として札幌開発建設部は道教委に対し、平成16年度以降に予定しているキウス川右岸橋台工事と河川直線化および護岸工事に合わせて、キウス5遺跡のキウス川寄り低位部約5,500㎡の調査を平成15年度内に終了させて欲しいとの要望を出した。道教委は、低位部約5,500㎡を単年度で発掘するのは困難として、札幌開発建設部に再検討を打診。工事計画や予算規模を勘案し札幌開発建設部と道教委は、15年度分は低位部4,200㎡と台地部800㎡の計5,000㎡の調査で合意した。これを受けた当センターは、低位部調査の計画と準備に時間を要することから、平成15年はオルイカ1遺跡1,600㎡とチブニー2遺跡2,000㎡を5月から先行調査することとし、この間を鋼矢板打設・ウェルポイント設置・高電圧工事・表土除去・ベルトコンベア設置などの準備期間に当てた。両遺跡の調査終了と同時に6月下旬から約4ヶ月の調査を開始。低位部は北東部が台地側の低い張り出し、東西中央軸から南部にかけてはキウス川旧河道、そこに洪水堆積層が広がる様相であった。洪水堆積平坦面の南西側では近世の畑跡を確認、旧河道とそれ以前の河川堆積層からは、縄文各期の遺物や縄文期と近世の木製品が検出された。

1年おいた平成17年、対岸でキウス9遺跡の調査を進めている間、15年度に調査を終えた低位部地区でキウス川右岸橋台工事が着工し11月にほぼ完成した。

平成18年度のキウス地区の計画として札幌開発建設部は道教委に対し、キウス9遺跡の残り7,956㎡とキウス5遺跡の低位部の残り約1,300㎡(精査1,280㎡)、およびキウス5遺跡台地部の残りをできるだけ調査して欲しい旨の要望を出した。道教委は、低位部1,280㎡と台地部1,920㎡の計3,200㎡を年度内調査とするのが妥当として、札幌開発建設部に検討を打診、了承された。これを受けた当センターは、低位部調査の準備に時間を要することから、平成18年はキウス9遺跡を5月上旬から先行調査し、この間を鋼矢板打設・ウェルポイント設置・高電圧工事・表土除去・ベルトコンベア設置などの準備期間に当てた。15年度の経験と面積が小さめだったことから準備期間を短縮することができ、5月24日～9月29日の約4ヶ月の期間で発掘調査を終了できた。近世の畑跡の続きや、旧石器、縄文各期～擦文期の遺物や縄文期と近世の木製品の検出があった。さらに10月中に埋め戻しや器材撤去も終了させた。

調査の整理作業は、平成18～19年度に行い、当報告の運びとなった。

(三浦 正人)

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 位置と立地 (図II-1・2)

キウス5遺跡は千歳市の市街地から北東約8km、中央地区にあるキウス遺跡群に位置する。キウス遺跡群は、石狩低地帯東部の馬追丘陵から西流するキウス川の兩岸の丘陵平坦部と下端部周辺に広がる東西約2km・南北約1.5kmにわたる、後期旧石器～アイヌ文化期の全時代を網羅する大遺跡群で、国指定史跡キウス周堤墓群も含んでいる。丘陵平坦部にある遺跡のうち、下端部近くの右岸に位置する遺跡をキウス5遺跡、対岸をキウス9遺跡と称している。この遺跡群は北海道横断自動車道建設などに伴い、すでに平成5～10年に当センターと千歳市埋文センターによって、キウス4・5・7遺跡の一部が計123,570㎡調査されている。

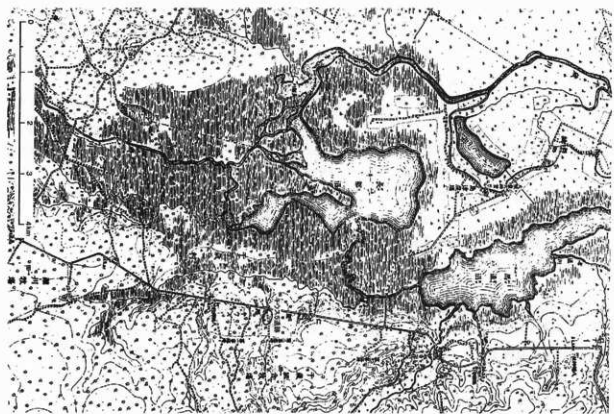
キウス5遺跡の立地する馬追丘陵は、北から栗山町・長沼町・由仁町・千歳市・安平町(旧追分町と旧早来町)と、南北延長約30kmにおよんで隆起している標高150m前後の連なりで、273mの馬追山を最高地点とする。キウス遺跡群の東方は標高約100mのコムカラ峠で、峠の西北西下にキウス川の源流がある。キウス川——コムカラ峠のルートは、丘陵を横断して石狩低地帯と夕張方面や道東部を結ぶ道のひとつとして早くから開けていたようである。

一方、丘陵西側に広がる石狩低地帯は、支笏火山が形成した火砕岩台地によって千歳市南部を分水界とし、日本海側と太平洋側に分かれている。このうち当遺跡が面する日本海側の南東部は、分水界近くまで低平で、遺跡付近から望める千歳市祝梅・根志越・中央・泉郷地区や恵庭市漁太地区、長沼町は、古くはトンメ沼・長都沼(ヲサツトウ)や馬追沼(マライトウ)・ボンユバリ沼・釜沼(イコクシ沼)・チカuppセトシ沼・鶴沼などの沼があり、周辺には低湿地が広がっていた。蛇行の著しい千歳川・祝梅川・剣淵川(ケヌフチ川)・漁川・夕張川やそれらの小支流と馬追丘陵からの小河川も流入し、多雨や融雪期には広範囲で冠水する湛水地帯であった。キウス川もこの低湿地帯の東縁を集水して沼に向かうオルイカ川に流れ込む一小流である。往時は遺跡やコムカラ峠から西を眺めれば、低地帯手前には水を湛えた沼が広がり、遠くに樽前山・恵庭岳・漁岳・空沼岳・札幌岳・無意根山・手稲山など標高1000～1500m級の山々が連なる眺めであった。

地名「キウス」の初出は、安政4(1857)年の調査記録である松浦武四郎『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』「第十六巻由宇発利日誌巻の二」にケ子ブチ(ケヌフチ)・ウリウカ(オルイカ)の次に「キユウシ 小川、巾三間計。過て谷地を五丁計行てまた木原少し過 (後略)」とあり、『東西蝦夷山川地理取調図 五』の中にも「キユウシ」と記されている。ただ、この報告の手控えの一部である『石狩・テシホ・クスリ外十二所川々取調帳』の図には同じ位置に「キニウシ」とある。判読本では「キユウシ」としているが、二とユの誤読と思われる。武四郎が最初の聞き取りの時は、「キニウシ」と聞き書きしたものとみられる。そうすると後の『北海道蝦夷語地名解』(永田方正 1891)による「Ki-usi・キウス=鬼茅大キ處・川ノ名」とあるものや、『ちとせ地名散歩』(長見義三 1976)の「ki-us-iカヤ・の群生する・所」の説明がわかりやすい。いくつかのアイヌ語辞典や地名研究・植物誌では、「ki」はカヤを表わしていることがわかる。また「キネ」は本来は草のこととされているが、カヤ・アシ・ガマのようなゴザ類みや家を建てる時に使うような茎の長い植物のことを指しているともみることができる。「キウス=キウス」はもともと「キネウシ」(「キニウシ」)と呼称されていたのであろう。湿原の中を流れゆく小河川のイメージと重なる地名と言えよう。地図にも明治29(1896)年陸地測量部製版の「北海道假製五万分一図」『長都』では「キウス」と川の名が、明治35年陸地測量部改



図Ⅱ-1 遺跡の位置(1) この図は国土地理院、平成11～13年発行5万分の1地形図「恵庭」「千歳」「道分」「早来」を使用、一部加筆し、10万分の1に縮小したものである。



(この図は、(上)陸地測量所、明治29年製図の縮尺三万分の一地形図、札幌第七號「長都(おさつ)」

(下)同、明治42年製分像正測、43年改図の縮尺五万分の一地形図、札幌第七號「魚いざり」に  
加筆し、約75,000分の1に縮小複製したものである。)

図Ⅱ-2 遺跡の位置(2)

版の『漁』では「キウス」と地区名として示されている。

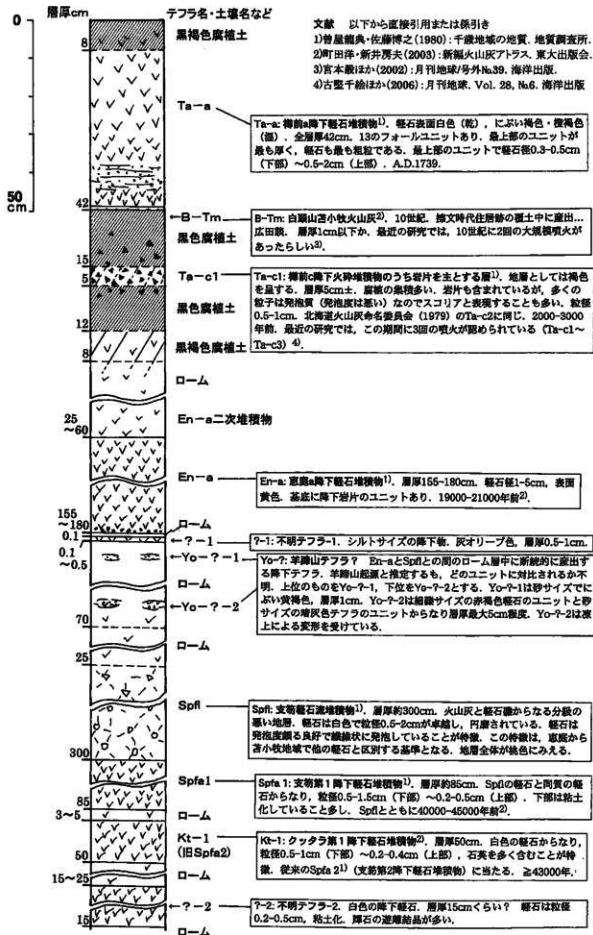
周辺の遺跡については、前述した近隣の発掘調査の報告書『キウス7遺跡(3)』北埋調報105(1996)・『キウス4遺跡(5)』北埋調報144(2000)・『キウス4遺跡(6)』北埋調報148(2000)・『オリカ2遺跡』北埋調報189(2003)・『チブニー2遺跡(2)』北埋調報207(2004)などで取り上げられている。それら報告書を参照願いたい。なお、『Ⅷ章 成果と課題』には、千歳川水系における低湿度遺跡の現状や調査の歴史を概観した一文を掲載した。

## 2. 地形と地質(図Ⅱ-3~5)

遺跡周辺では数層のテフラ(火山灰)が基盤の礫岩・砂岩・頁岩層を覆っている。まず起源不明の白色降下軽石が約15cmあり、20cmほどのロームを挟んでその上に約50cmの厚さで43,000年ほど前のクッター第1降下軽石堆積物(Kt-1 従来の支笏第2降下軽石堆積物Spfa2にあたる)がある。薄いローム層を挟んで、その上に約40,000年前の支笏第1降下軽石堆積物Spfa1が1m弱堆積し、これらを火山灰と軽石礫からなる軽石流堆積物Spflが約3m厚で覆っている。この上の1m厚のローム(Spflの風成二次堆積物)の中間ほどに、羊蹄山起源とみられる降下テフラが2枚点在する。このロームを起源不明のテフラとロームの薄層が覆い、さらに上を厚さ1.5~2mと厚く覆うのが約20,000年前の恵庭岳起源の降下軽石En-a(En-P)である。さらに直上にEn-aの二次堆積とこの風化ローム層であるEn-Lが20~50cm堆積している。この上は厚さ5~10cmの暗褐色粘質腐植土(漸移層)、5~15cmの黒色粘質腐植土(第Ⅱ黒色土層)とあり、これをおよそ2,000~3,000年前の樽前山起源の降下火砕堆積物(岩片主体)Ta-clが約10cm厚で覆っている。最近の研究(古壙千絵ほか2006『樽前山における9000年間のマグマ系の変化』『月刊地球28-6』)では、この期間に3回の噴火が認められるという(Ta-cl~Ta-c3)。この上に10~15cmの黒色粘質腐植土(第Ⅰ黒色土層)が発達する。この腐植土層中には10世紀前葉の白頭山起源のB-Tmの薄層が窪みなどに点在する。最近の研究(宮本毅ほか2002『白頭山10世紀噴火の噴火推移』『月刊地球号外No.39 活動的火山』)によれば、10世紀に2回の大規模噴火があったらしい。第Ⅰ黒色土層を厚さ30~50cmで覆うのが1739年降下のTa-a(樽前a降下軽石堆積物)で13枚のフォールユニットで成っている。この上位は約10cmある現表土の黒褐色腐植土である。また、1667年降下のTa-b(樽前b降下軽石堆積物)はキウス地区では確認されていないが、これで区分される第0黒色土層(第Ⅰ黒色土層の上部)に対応する層として低位部では第Ⅰ黒色土層の上部が茶褐色気味になる部分もある。

なお、テフラについては1部1 櫻花園正光の観察・分析によるところが大きい(図Ⅱ-3)。テフラ全般の文献は、曾屋龍典・佐藤博之(1980)『千歳地域の地質』地質調査所と、町田洋・新井房夫(2003)『新編火山灰アトラス』東大出版会、である。

地形学的にいえば、遺跡群周辺には丘陵・谷底平野・古砂丘・扇状地・沖積平野が発達している。丘陵地内には狭長な谷底平野があり、谷底部には段丘が発達しており、キウス5遺跡はこの谷底平野部と段丘面に位置する。この東西に長い段丘面は、支笏カルデラ起源の軽石流堆積物(Spfl)に覆われた丘陵地が、湧水・流水による浸食下刻作用により谷地形が広がるのと相対的に、ほぼ水平な台地状の広がりなしたものである。標高は23~45mで、100mにつき2mほどの割合で低下する東高西低の緩斜面である。遺跡の低位部は現標高18~20mほどで、谷底平野を走るキウス川の旧河道とその蛇行浸食や洪水による河川堆積層として広がる。扇状地は馬道丘陵西端に小規模に認められ、眼前の石狩低地帯は沖積平野である。古砂丘はSpflの風成二次堆積物から成り、遺跡群の南西方面に砂丘列



図II-3 遺跡周辺の地質

キウス5遺跡

キウス4遺跡

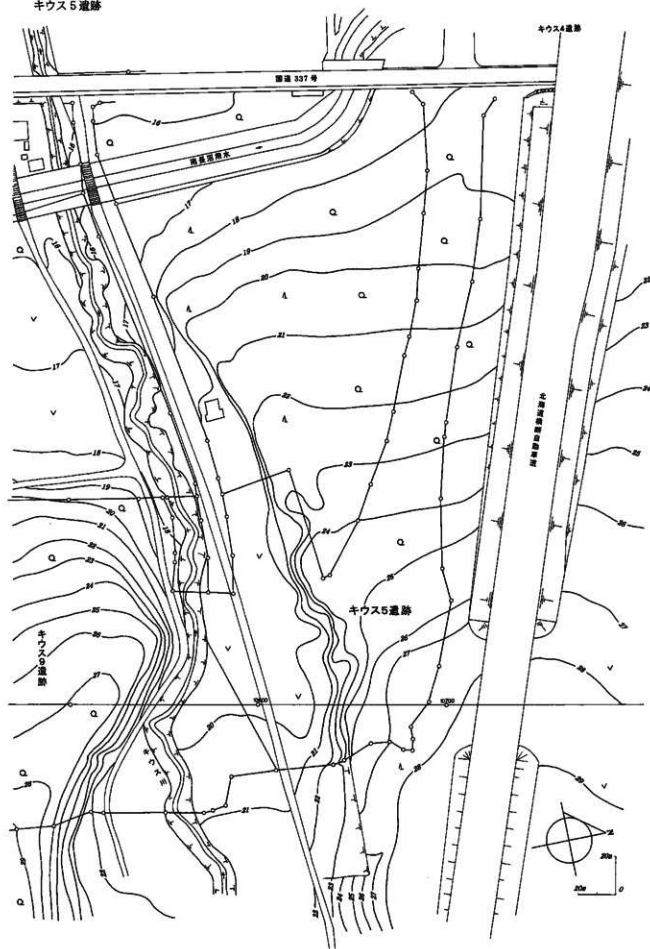
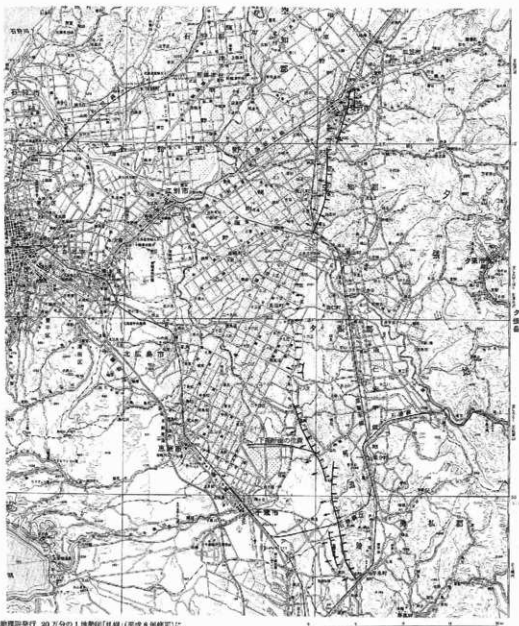


図 11-4 遺跡周辺の地形

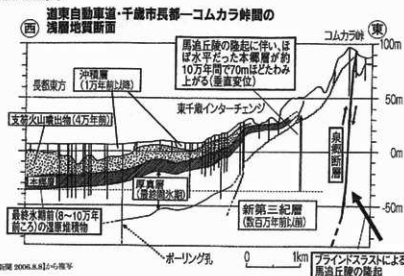




この図は、国土院発行 20万分の1地勢図「札幌」(平成6年修正)に、

【同半幅「石狩低地東縁断層帯」地質と地殻変動断層 2006.8.8】から

トレースした断層帯等を印刷したものである。



【同半幅「石狩低地東縁断層帯」地質と地殻変動断層 2006.8.8】から転写

図II-5 石狩低地東縁断層帯

として存在する。後期旧石器以降の遺跡が立地し、後期旧石器でも古いものは丸子山遺跡のように砂丘下でも確認される。

丘陵地には数本のリニアメント（地質構造を反映した線状地形）が認められる。泉郷から南南東に延び遺跡群付近を通るリニアメントが泉郷断層である。最近の研究では、馬追丘陵の隆起構造の形成は、東上りの隠れた低角逆断層（ブラインドスラスト）群の活動が本質的な影響を与えているという。東から西へ伸し上がる作用が主要で、地表面に現れた既知の活断層群は付随的な状況と判断されている。道東自動車道建設工事のためのボーリング調査では、「馬追丘陵からその前面の低地では10万年前ごろの地層の変位（たわみ上がり）が70mにも達している」ことがわかり、「地震があると馬追丘陵が隆起するという現象は」「前面（西側）の低地を相対的に低下させることになる」という（岡孝雄『石狩低地東縁断層帯』『地震と津波』北海道新聞 2006. 8. 8）。馬追丘陵にみられる既知の活断層群は石狩低地東縁断層帯と呼ばれ、泉郷断層をはじめ岩見沢断層・栗沢断層・長沼傾動帯・馬追断層・絵淵断層などで構成される延長60kmを超える活断層帯である。この断層帯は、地表面にずれが現れた西側上りの逆断層で、道立地質研究所が1998～1999年に行ったボーリング調査によれば、最新活動期は約3,000年前、活動間隔は2,000～3,000年程度と推定されている（同）（図Ⅱ-5）。

### 3. 近現代の環境変化

発掘調査前のキウス川縁辺は、国道から1kmほど奥までは人家もあり開墾されて畑地として利用されていた部分もあったが、耕作放棄され荒地となっている部分も多かった。長見義三によれば、昭和30年頃、キウス川の奥には開墾入植の痕があり家や庭・沢縁のカタクリの群落や背後のクリ林がみられた。川の源流部の協和峠（コムカラ峠）の斜面にはスキー場があったという（長見義三前掲書）。また川の岸辺や台地端には、調査でも発見された炭窟が作られていた。周囲の木を炭焼きし、川の流れを利用して運び出していたものと思われる。キウス川沿いの道路は、右岸（キウス5遺跡側）を上流・コムカラ峠まで向かう（途中から左岸側）道と、キウス5遺跡中央部でこの道と分かれ低地から台地に登る道とがある。

周辺の樹木は落葉広葉樹が主体で、未開墾部や川縁では林となっていた。オニグルミ・クリ・ヤマグワ・コクワ・ホオノキ・タラノキ・ヤマブドウ・ヤナギなどがみられた。また千歳森林組合による植林で、マツやイチイ主体の人工林も広く分布する。

調査中、掘削排土には頻繁にエゾシカやキタキツネの足痕がマークされ、糞も確認できた。表層の窪み等にはアオダイショウが生息していることがあり、林辺ではエゾリスやノネズミも目視された。キウス川の支流でキウス7遺跡に分け入る沢はエゾサンショウウオの生息地であったという。上空には常にノスリかトンビが飛翔旋回していた。キウス川では現在魚影等は確認できないが、低地帯の長都沼には、ワカサギ・フナ・コイ・エビなどが生息していた。また水鳥も多く、キジ・ガン・カモ・ハクチョウ・ツルなどが飛来生息していた。長都沼と連結する千歳川水系はサケの上る川で、ウグイなどの魚も大量に生息している。

千歳市の「中央」という地名は、昭和初期にも使用されていたようであるが、市域の中央であるという意味の「中の里」という原案（1984『千歳市農業協同組合史』）と、長都沼の東岸地帯の中央の意味（長見義三前掲書）から、昭和26（1951）年に大字廃止字名改正で確定されたと考えられる。それ以前は、キウス・チブニー・オルイカという三字により中央地区が構成されていた。前掲『農協史』や『千歳市史』（1969）によれば、中央地区の開拓は現在の国道337号線の前身である、明治22（1900）年着工、23年（24年？）竣工の千歳由仁道路（由仁街道）の開削に始まるという。この道路は幅2間・

延長5里33町16間におよび、岩見沢千歳間道路の一部として敷設された。当時のキウス・テブニー・オリイカの各河川流域は、熊笹と大木の密林であったといい、現在でも当時を彷彿とさせる情景が中央八幡神社周辺に残っている。神社は明治30（1897）年に八幡宮平留伊賀神社として建立された。また、明治33年には現中央保育所（旧中央小中学校）の前身である私設木白簡易教育所が浄土真宗の説教所として設けられ、明治35年には公式に認められ、大正4（1915）年に木白尋常小学校となった。大正5年頃にはオリイカ川や長都沼周辺が開墾され、漁場が設けられたという。

昭和6（1931）年、コムカラ峠から道分道路沿いの緩斜面の民有地312町歩が開放され12戸が入植した。『郷土史クヌフチ物語』（1992）によれば、中央地区を南北に縦貫する農業水利の南長沼用水は、明治45年に長沼村議会で建議書が議決され、大正11年南長沼土功組合が発足、同14年に着工し、千歳川蘭越頭首工からの幹線水路33,000mが竣工したのは昭和2（1927）年であった。また同書によると、由仁街道は昭和11年、石狩東部における北海道第七師団と東北第八師団の対抗大演習の際、砂利敷きの道路に改修されたという。

ちなみに現在の国指定史跡キウス周堤墓群は、明治期の由仁道路開墾時に周堤2基が南北に貫通掘削されている。大正10年度の河野常吉の調査（1924・1974復刻『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』）をもとに、集中した5基が昭和5年6月22日道庁告示第844号で、史蹟名勝天然記念物「史蹟キウスのチャシ」となった。昭和25年には南長沼用水の改修工事の際、200mほど南に離れた1基から耕作中に石柱が見つかり墓坑が検出されたという。昭和39・40年には千歳市教育委員会名で大場利夫（北海道大学）と石川徹（中央小中学校長）を中心に2基の部分調査が行われ、墓坑等が検出されている（1967『千歳遺跡』）。さらに昭和40年には由仁道路の拡幅による道路側溝で切断された墓坑が周堤から発見され、石川が調査を手がけている（1969『北海道考古学第5号』）。そして昭和43年には離れた2基を加えた7基が、北海道指定史跡「千歳キウス環状土籬群」に指定し直された。さらに昭和54年10月23日をもって国指定史跡となった。

前述した遺跡眼前の低湿地帯は、現在は、治水と土地改良等を目的とした昭和26～44年（1951～1969）の国営灌漑排水事業やその後の圃場整備事業・土地改良事業によって、沼や低地の干拓・埋め立て、河川や水路の整備・直線化が行われ、地下および表層の水位が低下し、水田や畑地として利用されている。

昭和の末期、日本道路公団が北海道横断自動車道計画に着手。平成になるとこの周辺にも用地買収や森林伐採の手が入り、前述した発掘調査や建設工事が本格化し、平成11年（1999年）10月道東自動車道の一部として開通、千歳東インターチェンジやキウスパーキングエリアが設置された。

以上のように、近代に入ってから現在まで、遺跡とその周辺を取り巻く環境や実相は、開墾・耕作・工事などで常々変化を余儀なくされている。

（三浦 正人）

### Ⅲ 低位部調査の概要

#### 1. 調査の方法

##### (1) 調査予定地の内容推定と問題点抽出

試掘調査によって推定される遺跡内容と主な問題点は、以下の如くである。

- \* 段丘上の調査範囲と一体である。
- \* 低湿部調査範囲は約5,500㎡であるが、工事工程上急ぎの橋脚工事分(広大)と次年度以降残部(狭小)の2カ年に分割される。
- \* 旧河道部は現高から深さ4m以上になる地帯も予想される。安全確保が重要で、排土量も多くなる傾向にある。
- \* 旧河道部を含む段丘縁であるため、四方からの湧水・浸水がある。
- \* 縄文時代からアイヌ文化期の遺物混在が予想され、木製品など有機質遺物の出土が想定される。

##### (2) 調査準備工と進行(図Ⅲ-1)

調査面積は、工事工程と鋼矢板打設形状の調整により、平成15年度4,200㎡、18年度1,280㎡となった。なお平成15年度調査後、工事進行計画の都合で2年間着手に到らず、18年度になって低湿部残部の全面調査の運びとなったものである。

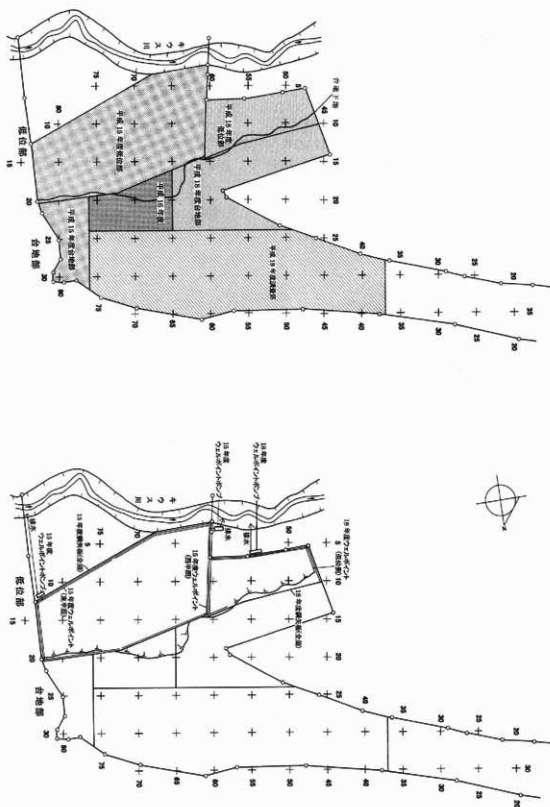
低湿部の調査となることから、調査範囲全周に鋼矢板を打設し、土砂崩落防止と浸水や雨水の流れ込み阻止を図った。鋼矢板は長さ10mのものを平成15年度は678枚、18年度は412枚使用した。鋼矢板打設後、上層を覆っている表土・耕作土・Ta-a火山灰はバックホウなどの重機で除去した。低湿部の湧水・浸水対策は、ウェル・ポイント工法を用い、予備ポンプを常駐して集水・排水を行った。ウェル・ポイント工法は、先端が網状になった集水部を取り付けた揚水管を一定間隔で地面に打ち込み、ポンプで吸水し地下水位を下げる工法で、当調査では鋼矢板列に沿って配置した。揚水管は長さ6mのものを平成15年度は全周に172本、18年度は15年度の経験から段丘部を除いて66本を設置した。予備ポンプは降雨後の流れ込みなど、上面からの水の排出には欠かせない。これらの工法は作業の安全確保にもつながり、遺物検出も泥土中からよりは容易となるなどの効果があった。

また、排土には土砂量や高低差を考慮してV字ベルトを装備したベルトコンベアを導入した。15年度は20台、18年度は10台を設置し、調査位置や土量・排土位置等により組み替えながら稼働させた。なお、18年度は排土集積場の狭さから、重機による定期的な排土の移動を行った。

準備工やベルトコンベア・排土移動は外部発注し、現場や機器の安全確保・点検等の管理を委託した。その際に撤収計画も含めた事前の計画書を準備し、それに則った工程をとった。

##### (3) 発掘区の設定と水準点(図Ⅲ-2)

現地調査の基本図は、札幌開発建設部の「一般国道337号千歳市新千歳空港関連用地測量 用地平面図1000分の1」を使用した。南北の基軸線を直線である本線車道中央線にとり、線上のポイント「10600」を通り南北基軸線に直交するラインを設定し東西基軸とした。ここから各方向に4mの方眼を設定し、低位部と段丘が一体の調査区に網をかけた。全調査区の広さを考慮して、東西ラインは南から数字(A)を振り東西基軸を10ラインとした。南北ラインには西から数字(B)を振り南北基軸を75ラインとした。これで区切られる4m四方のグリッドは西南の交点の数字の組み合わせ「数字(A)-数字



図III-1 年度別調査区(上)・低位部調査施設配置図下

(B)で呼称する。さらにグリッドを2m四方に分割して小グリッドを設定、反時計回りに西南角からa・b・c・dを付すこともある。

この方眼の世界測地系に基づく平面直角座標系第四系におけるおもな座標値は、以下のとおり。

「10600」	=10-75杭	: X = -124357.522	Y = -43463.382
「10700」	=35-75地点	: X = -124259.472	Y = -43443.740
	10-50杭	: X = -124337.883	Y = -43561.434
	5-65杭	: X = -124357.522	Y = -43463.382
	15-80杭	: X = -124341.840	Y = -43439.844

低位部の杭頂高は、至近の一等水準点第7322号（千歳市中央2406番地の2先）16.6677mより測量し、20mごとの基準杭（5の倍数の交点）に仮置きした。成果によるおもな杭高は、

5-65杭	: 18.061m	15-65杭	: 19.210m
10-75杭	: 19.104m	15-80杭	: 20.430m

また、15年度に設けた3級基準点（標高27.055m）から測量した18年度のおもな杭高は、

10-50杭	: 18.035m	10-55杭	: 17.191m
10-60杭	: 18.863m		

である。

ちなみに低位部は、前述した鋼矢板打設と上層土除去後に杭を打設しており、杭高は発掘調査開始面より5～10cm高い位置となる。

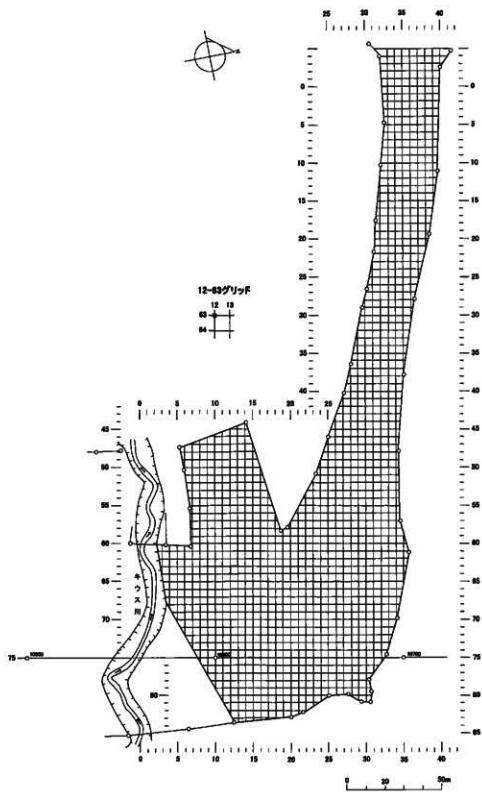
#### (4) 低位部発掘調査の手順

遺物包含層より上層の土砂を重機と人力で除去した後、15年度は、遺構・遺物の全体的濃淡を把握するため、北東部の段丘から連続する第Ⅰ黒色土が明瞭な緩斜面～平坦面では、25%調査を行った。結果、段丘から離れるに従い第Ⅱ黒色土の発達が悪く、その下位の基盤も河川堆積物で構成されることがわかったため、およそ16ライン以南・75ライン以東は25%調査をもって発掘を終え、排土場とすることにした。残る部分は第Ⅱ黒色土およびその相当層を調査した。南西部の低位平坦面（洪水堆積）には畑と思われる畝状痕があり、そのまま遺構調査に入った。中央部を貫流する旧河道には、台地側平坦面を含めて、南北方向の70・75ラインにトレンチを設定し、土層と深度の掌握に努めた。また、南西角付近には炭竈跡があり、これを先行して調査した。トレンチ調査後、旧河道は全面調査に入ったが、水場等の遺構は検出されず、遺物混在層からの遺物探しが調査の主眼となった。畑跡とその他の遺構を調査し終えた低位平坦面も、埋まっている数筋の旧流路を検出しながら掘削し、遺物発見に努めた。縄文時代早期の旧流路を発見調査して15年度分を終了した。

18年度も南東部には15年度に続く畑跡が検出され、調査を先行させた。東西に貫流する旧河道は段丘寄りに流れ、河川堆積物と段丘崩落層とが混雑した状態であった。15年度の経験と知見から、トレンチや25%調査は当初には行わず、西側から調査に入り、55ラインを土層観察面とした。低位平坦面も畑跡調査を終了後、第Ⅰ黒色土層から順次下層調査を進行。50・55ラインにトレンチを設定、洪水堆積と埋まっている旧流路を確認し、掘削不要と判断した部分を残して終了した。

黒色土層や河川堆積層の遺物包含層調査が主体となったが、土壌や遺物の状況に応じて移植ゴテ・竹ペラ・箸・串やスコップ・ジョレン・ツルハシなどを用いて、すべて人力による手掘り作業を実施した。大型の自然木根や幹は、スコップ・鉋・鋸・チェーンソーなどで分断し除去した。排土はベルトコンベアを廻々組み替えながら、ベルトコンベアに手箕・一輪車などの方法で排出した。一部段丘側の排土は北側鋼矢板外に直接出した。

(三浦)



図Ⅲ-2 調査区設定図

### (5) 遺物の取り上げと整理・保管（一次整理）

土器・石器等の遺物は、「遺跡名・出土地点（遺構名・グリッド）・層位・遺物種別・取り上げ番号・取り上げ日」を記入したビニール袋に入れて取り上げた。この袋ごとに「取り上げ台帳（仮台帳）」に登録し管理した。水洗・乾燥・分類は、原則日付順に進めた。分類した遺物は、出土地点や層位、遺物名等の個別情報を記録した「遺物カード」を作成し、遺物とともにそれぞれビニール袋に収納した。あわせて、遺物カードの記載事項について一覧表を作成した（「遺物登録台帳（本台帳）」に登録）。遺物は原則として、出土位置を実測して取り上げたものについてのみ「遺物番号」を付したが、この番号が、実測図や台帳上において遺物と照合するための、いわゆる「取り上げ番号」となる。しかし、石器類では03年度調査分のみ、各遺構やグリッドごとに「遺物番号」を通して付すこととなったので、出土位置を実測して取り上げたものは、遺物番号と取り上げ番号の両方を有し、両者は一致しない。また、接合作業を行う土器については、この情報の一部を直接遺物に記入する注記作業をおこなった。注記は遺跡名のキウス5遺跡を「キ5」と略記し、出土地点、層位、遺物番号の順に記入した。原則的に「磨耗」・「小破片」については、注記を行っていない。（末光 正卓）

微細遺物は周辺の土ごとに取り上げ、水洗・水篩選別を行って乾燥後取り上げた。

木製品は、土層に留意し移植ゴテ・竹べら・箸・串等を用いて慎重に検出した。検出後は即座に取り上げるのを基本としたが、現場残置が必要な場合は乾燥防止のため水を含ませた晒し布で保全本ビニールシートで葎した。ウェルポイントを作動しているため、日に二・三度水掛けを行い水分を補給した。層や位置などを記録し、各製品に1点ずつNoを与えて取り上げた。すぐに水洗して付着した土や草本の根を除去し、水漬けで一時的保管した。1製品ずつにフィルム印刷したカードからミネートカードを取り付けた。分割した物は傷つけないようにストックングで包括・付帯したり、穴あきビニール袋に収納し散逸を防いだ。大型木製品には相応の木箱を作成、長尺物は筒状フィルムで覆い乾燥防止の対応をした。

土壌サンプルは、充分乾燥させた後フローテーション法で浮遊物と残渣に分別し、乾燥後紙袋や封筒に入れ、湿気を防除しながら選別鑑定まで保管した。（三浦）

### (6) 二次整理・収蔵

土器・石器・金属製品・微細遺物等

土器の二次整理では、再分類・集計点検と接合・復元作業および拓本作業を行った。土器の接合作業は、遺構出土のものから着手した。同時期（同群）の破片に未分類のものを加え、原則として「磨耗」・「小破片」を除くものを対象とした。遺構内での接合、遺構が位置するグリッド、及びそこに位置する別の遺構の土器との接合を行い、順次、周辺のグリッドへと接合できる破片を探すように作業を進めた。包含層出土のものについても同様に行った。最終的に、接合した破片の集まり具合を把握し、復元可能なものとそれ以外のものに分類し、前者は復元作業を行い立面の実測図を作成した。また、特徴が認識しやすい口縁部や底部の破片を掲載遺物として主に選出し、拓影図と垂直方向の断面図を組み合わせて掲載した。並行して集計作業も行い、出土点数表や出土分布図等を作成した。掲載土器については、実測図のトレース作業・図版作成を行い、写真撮影を行うとともに、観察表や接合データを作成した。（末光）

石器等は、分類・石材鑑定・図化用選別・集計などを再度行った。報告書掲載石器は順次、実測・トレースを行って図版作成・写真撮影を行い、全石器等の一覧表を作成した。

鉄製品は、保存処理を施した後、実測・写真撮影等を行った。



フローテーションで得られた微細遺物の選別・同定作業は、肉眼により残渣資料の選別を行い、肉眼では同定困難なものと浮遊物は実体顕微鏡を用いた。

#### 木製品

保存処理前に実測できるものは先行して図化するが、脆弱な製品等は保存処理を施してから図化作業となる。樹種同定・木取り・製品名決定などの観察作業を経て、一覧表作成・図版作成・写真撮影を行う。再度処理が必要なものはこの後、保存処理へ回る。保存処理については基本的に依然と変わっていないので、北埋調報192『千歳市ユカンボシC15遺跡(6)』2003を参照願いたい。

#### 記録類

調査や報告のために入手した図面類や現地記録した遺物取り上げ台帳・現地状況図・土層図・遺構図・遺物出土状況図・撮影写真フィルムといった記録類は、各担当者が整理し報告書作成に供した。状況図・地形図・土層図・遺構図などの報告書に掲載する図面は素図を作り、トレース・複写・細部加工・貼り付けなどの図版作成を行った。現場写真は二次整理後の遺物写真ともども、アルバムとパソコンで管理されている。報告に必要なモノクロプリントは自前で焼き付ける。

#### 収納保管

報告書作成作業の後、新たに作成したものを含む記録類の整理と遺物の収納作業を行った。土器・石器等は、遺物種別ごとに掲載・未掲載別に分けてコンテナに収納した。木製品は保存処理を終えたものから順次記録され、パッキングや温湿度管理のもと収納保管される。図面類・写真類も記録保存資料として保管される。(三浦)

## 2. 遺物の分類

### (1) 土器

土器は、次の三つの分類基準を用いて分類した。

#### 「時期分類基準」

##### 「Ⅰ群」：縄文時代早期

- a類：貝殻文、条痕文、沈線文を有する土器群
- b類：東釧路式系土器群

##### 「Ⅱ群」：縄文時代前期

- a類：縄文尖底土器群
- b類：円筒土器下層式、及びそれに伴う土器群

##### 「Ⅲ群」：縄文時代中期

- a類：円筒土器上層式、サイベ沢Ⅷ式、萩ヶ岡1・2式に相当する土器群
- b類：萩ヶ岡3式(天神山式)、柏木川式、北筒式に相当する土器群

##### 「Ⅳ群」：縄文時代後期

- a類：余市式(伊達山式・タブコブ式)、入江式に相当する土器群
- b類：ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式に相当する土器群
- c類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当する土器群

##### 「Ⅴ群」：縄文時代晩期

- a類：大洞B・BC式、及びそれに伴う土器群
- b類：大洞C1・C2式、及びそれに伴う土器群
- c類：大洞A・A'式、及びそれに伴う土器群

「Ⅳ群」：統縄文時代に属するもの

「Ⅴ群」：擦文文化期に属するもの

「未分類」：時期が判断できないもの

「土製品」：土製品は大きく次の二つに分けられる。

・土製品そのものを目的とし製作されたもの

・土器破片等を再加工し、土製品としたもの（再生土製品と呼称する）

再生土製品は、その性質上、通常の破片と厳密に分類することができない側面がある。

#### 「破片部位の分類基準」

土器破片で部位について次のように分類した。丸括弧内は、台帳等の記入に用いた記号である。

「口縁部」(ri)：口唇部が残存している破片

「底部」(ba)：底部が残存している破片

「胴部」(bo)：口縁部、底部破片以外のもの

「不明・その他」：明確に部位を特定できないもの、あるいは、剥落した貼付部分や、口縁の突起部分の破片等

#### 「残存状態に関する分類基準」

土器破片の残存状態を次のように分類した。丸括弧内は、台帳等の記入に用いた記号である。

「良好」：破片の表裏面及び、割れ口ともに良好な状態のもの

「剥離」(ハ)：破片の表裏面のいずれか、あるいは両面が、約1/2以上剥離・剥落している状態のもの

「磨耗」(マ)：破片が磨耗（特に割れ口）している状態のもの

「小破片」(小)：大きさが長径2cm程度以下の小さな破片

この分類の目的は、報告書作成を目的とする二次整理作業を、効率よく進めることに主たる狙いをおいたものである。整理作業は、「良好」・「剥離」のものを中心として行った。

「磨耗」のものは、表裏面に文様や器面調整の痕跡等が明瞭に残存しておらず、時期等を判断する上で制約が大きい。しかも磨耗した割れ口は、接合作業に耐えられないと考えた。また、「小破片」は、その小ささのため、時期を判断することが困難であり、さらに器形復原を目的とする接合作業に与える影響が少なくと考えた。

本遺跡の低位部では、旧キウス川の旧河道があり、磨耗した土器の点数が多い。また、Ⅰ群からⅤ群まで、各時期の遺物が認められる。(末光 正卓)

## (2) 石器等

一次整理後の石器は遺構出土のもの、包含層出土で器種別に分け、二次整理作業を行った。台帳は手書きのものをパソコンに入力し、双方のデータの整合性をチェックしたのち集計作業、分布図の作成に用いた。

本遺跡の低位部は旧河道により攪乱を受けており、掲載した石器については層位ごとに抽出をおこなわず、形態的特徴を捉えやすいものにした。分布図においても層位別に示さず出土石器等全体及び器種ごとに図示した。定形石器における破損品の占める割合は示さなかった。定形石器の破損状況については人為のほか、河床での転石など自然営為によるものが考えられた。

石器の計測は「長さ」、「幅」、「厚さ」、「重さ」の項目についておこない、計測値を表に示した。前者3項目は実測図上で互いに直交する軸の数値を示した。欠損部分のあるものは残存長の数値を（丸括弧）でくくった。「重さ」の数値は剥片石器・100g未満の磨製石器・礫石器については小数点第2位まで計測、100g以上1kg未満の石斧・礫石器については小数点第1位まで計測、1kgを超える台石・石皿は1gを最小単位とする数値で示した。欠損部分のある石器の重量は（丸括弧）でくくった。石器は一次整理において器種別の分類をおこなったあと、一器種の細分はしていない。分類は以下の名称を用いた。（袖岡 淳子）

剥片石器	礫石器
石鏃	すり石
石槍・石槍もしくはナイフ	たたき石
両面調整石器	石錘
石錐	砥石
つまみ付きナイフ	台石・石皿
スクレイパー	
ピエス・エスキーユ	礫
Rフレイク（加工痕のあるもの）	被熱礫
Uフレイク（使用痕のあるもの）	自然礫
石核	
フレイク	後期旧石器
	細石刃核
磨製石器	細石刃様剥片
磨製石斧	彫器
石製品	搔器
	削器

### （3）木製品

第V章3節木製品の(2)項に示してある。

### 3. 土層の区分

平成15年度調査においては、低位部の初年度調査であるため、より詳細に土層の様子や深度を把握することにつとめた。台地部から低位部への連続性が明確になることを意識して、南北ラインである62ライン、70ライン、75ラインを主たる土層観察面とした。また旧河道の複雑な幾筋もの流路を、より詳細に把握するために64+2mライン、66ラインにおいても土層観察を行った。平成18年度の調査においては、15年度の調査から得られた知見から調査区ほぼ中央の55ラインだけを土層観察面とした。

土層は調査区の中央を東から西に貫いて流れる、キウス川の旧河道の蛇行浸食と洪水が繰り返して出来た層が、幾重にも複雑に重なる河川堆積物層である。そのため層序は、各土層断面で大きな差異があり、整合させることは困難であるため、土層間での層名の統一は、位置が近くほぼ様相が同じである62ライン、64+2mラインと66ライン、70ラインと75ライン間でのみ行った。また層位は、台地部と同様にTa-cを基準として、それより上層がⅢ層相当、下層がV層相当という区分とした。以下土層図の位置関係を示し、各土層の特徴を記す。

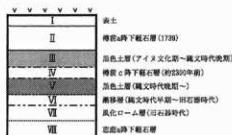
#### 図Ⅲ-4 低位部土層図(1) (55ライン)

平成18年度調査区のほぼ中央、07～11-55区のセクションである。08～11-55区には、15年度の調査前に表土とTa-aを除去した際に、キウス川の旧河道と認識された大きな流路がある。これは擦文文化期からアイヌ文化期の旧河道であり、全部の土層面で見られるが、このセクションでは、北岸から南岸までの全体を観察することができる。この流路では、北側台地部の裾と南側の低平地を削る急激な蛇行浸食を繰り返し、台地部急斜面からの崩落土を伴い、短時間に堆積した様子が観察できる。ここからはアイヌ文化期の木製品が多く出土した。09-52区では完形の曲物蓋が出土しており、09-56区では箕や建材等が集中(図V-40)して出土した。

07-55区の低平地は縄文時代早期からアイヌ文化期に堆積したものである。Ⅲ層上面においては近世アイヌ文化期と考えられる畑が耕されている。ここにおいてはTa-cは明確には認識されず、Ⅲ層の下部と混合した状態で確認された。Ta-cの含有が少ない上層をⅢ-1層(49層)、多い下層をⅢ-2層(50層)とした。以下は河床(Spfa1)までシルト質土、細砂、粗砂等が互層となって堆積しており、この51～80層までがV層相当である。最下部の70～80層は粗砂や小砂利が主体で、腐植草木や大型の流木が多量に混入する。

#### 図Ⅲ-5 低位部土層図(2) (62ライン)

平成15年度調査区の西端、04～14-62区のセクションである。ここでは南側の低平地を削って、3筋の大きな流路が見られる。06～10-62区の流路は縄文時代前期から縄文時代後期のものであり、この中央を削って縄文時代後期から擦文文化期の流路がある。11～14-62区では55ラインから続く、擦文文化期からアイヌ文化期の流路がある。北端には55ラインと同様に、浸食による台地部急斜面からの崩落土の堆積が見られる。Ⅲ層上面には近世アイヌ文化期の畑跡の断面が見られる。ここでは腐植化したⅢ層(Ⅲ-1～Ⅲ-3層)とTa-c(Ⅲ層)との間に、砂、シルト質土、腐植土の互層が堆積し、この1層～12層までがⅢ層相当である。Ta-c以下の腐植



図Ⅲ-3 台地上基本土層図

土、シルト質土、青灰色砂、灰黄褐色砂、暗灰黄色砂の14層から河床(31層: Spfa 1)面までがV層相当である。

#### 図Ⅲ-6 低位部土層図(3) (64+2mライン)

62ラインより10m東側、06~11-64区のセクションである。06~09-64区に縄文時代前期から後期の流路があり、これを削って08・09-64区を中心とした縄文時代後期から擦文文化期の流路がある。Ⅲ層相当、V層相当ともに62ラインとほぼ同様の堆積である。Ta-c(11層)の堆積が明瞭であり、これより上層の1~10層までがⅢ層相当である。12~38層までがV層相当であるが、ここでは河床は検出していない。

#### 図Ⅲ-7 低位部土層図(4) (66ライン)

平成15年度調査区の中央やや西側、05~10-66区のセクションである。06・07・08-66区に縄文時代前期から後期の流路があり、それを削って09-66区を中心に縄文時代後期から擦文文化期の流路がある。Ⅲ層相当、V層相当ともに62ライン・64+2mラインと同様の堆積である。Ta-c(8層)の堆積が明瞭であり、これより上層の1~7層までがⅢ層相当であり、以下の河床(33層: Spfa 1)面までがV層相当である。

#### 図Ⅲ-9 低位部土層図(6) (70ライン)

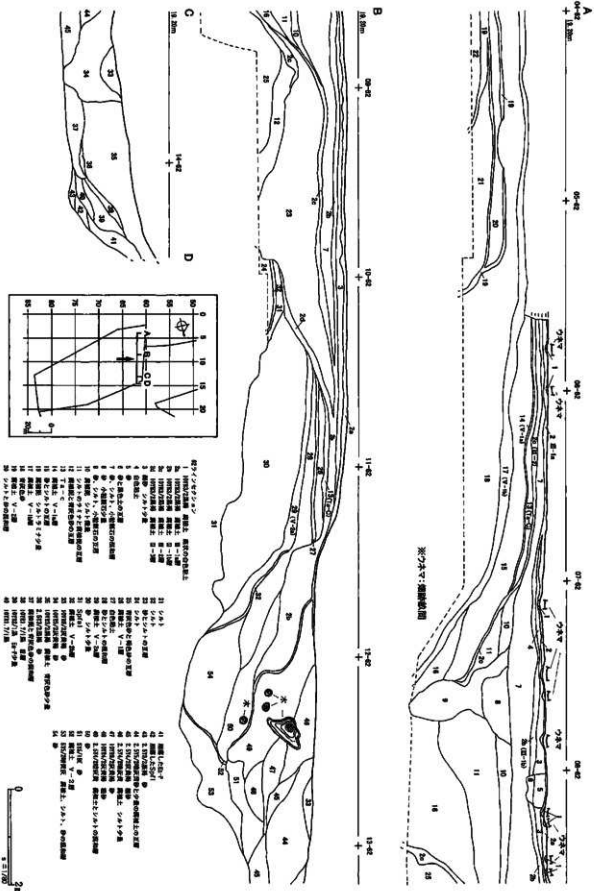
平成15年度調査区の中央やや西側、06~17-70区のセクションである。12~17-70区は台地部下縁から続く低平地である。15-70区と13-70区に縄文時代早期から後期にかけて台地部の縁辺を流れる小規模の流路がみられる。07・08-70区には縄文時代後期から擦文文化期の流路があり、09・10・11-70区に擦文文化期からアイヌ文化期の流路がある。Ta-cは明確には堆積しておらず、洪水のためにⅢ層と混合した状態で確認された。Ta-cが少ない上層をⅢ-1層、多い下層をⅢ-2層とした。V層は上部の腐植土層をV-1~V-4dと細分した。それ以下はシルト質土、砂、細砂、粗砂が互層となって堆積し、河床面までがV層相当であるが、ここでは河床は検出していない。

#### 図Ⅲ-10 低位部土層図(7) (75ライン)

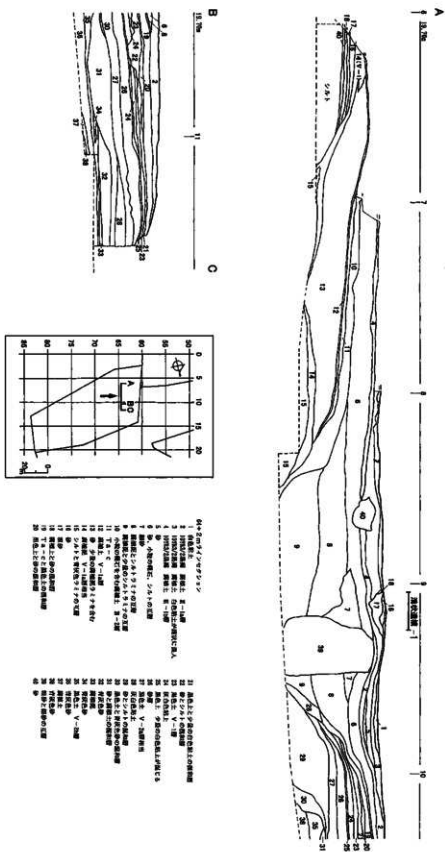
平成15年度調査区の中央やや東側、08~19-75区のセクションである。70ラインとほぼ同じ様相を呈している。セクション北端の台地部下縁から14-75区までは低平地が続いている。11・12・13-75区では台地部の縁辺を流れる縄文時代早期から後期の流路が、小規模な変化を頻繁に繰り返しているのが見られる。10-75区に縄文時代後期から擦文文化期の流路があり、セクション南端の08・09-75区では擦文文化期からアイヌ文化期の流路が見られる。Ⅲ層、V層ともに70ラインと同様の堆積である。

(菊池 慈人)





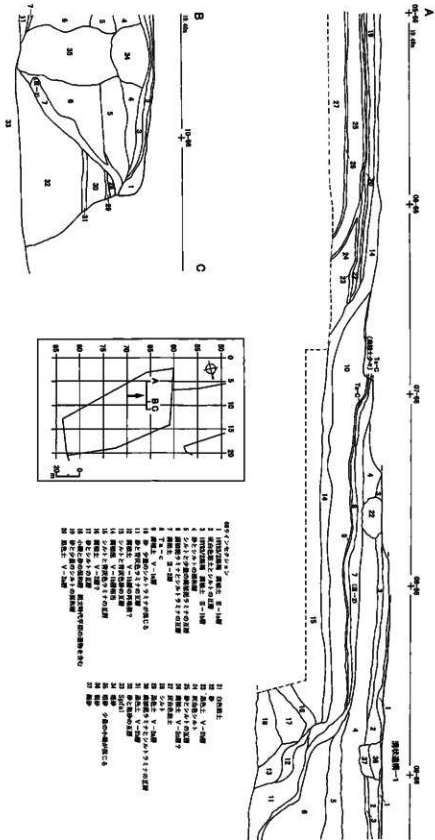
図三-5 低位部土層図(2)



図一六 低位部土層図(3)







図三-7 低位部土層図(4)

キウス5道群 表

10	100426	キウス5道群	
11	100427	キウス5道群	
12	100428	キウス5道群	
13	100429	キウス5道群	
14	100430	キウス5道群	
15	100431	キウス5道群	
16	100432	キウス5道群	
17	100433	キウス5道群	
18	100434	キウス5道群	
19	100435	キウス5道群	
20	100436	キウス5道群	
21	100437	キウス5道群	
22	100438	キウス5道群	
23	100439	キウス5道群	
24	100440	キウス5道群	
25	100441	キウス5道群	
26	100442	キウス5道群	
27	100443	キウス5道群	
28	100444	キウス5道群	
29	100445	キウス5道群	
30	100446	キウス5道群	
31	100447	キウス5道群	
32	100448	キウス5道群	
33	100449	キウス5道群	
34	100450	キウス5道群	
35	100451	キウス5道群	
36	100452	キウス5道群	
37	100453	キウス5道群	
38	100454	キウス5道群	
39	100455	キウス5道群	
40	100456	キウス5道群	
41	100457	キウス5道群	
42	100458	キウス5道群	
43	100459	キウス5道群	
44	100460	キウス5道群	
45	100461	キウス5道群	
46	100462	キウス5道群	
47	100463	キウス5道群	
48	100464	キウス5道群	
49	100465	キウス5道群	
50	100466	キウス5道群	
51	100467	キウス5道群	
52	100468	キウス5道群	
53	100469	キウス5道群	
54	100470	キウス5道群	
55	100471	キウス5道群	
56	100472	キウス5道群	
57	100473	キウス5道群	
58	100474	キウス5道群	
59	100475	キウス5道群	
60	100476	キウス5道群	
61	100477	キウス5道群	
62	100478	キウス5道群	
63	100479	キウス5道群	
64	100480	キウス5道群	
65	100481	キウス5道群	
66	100482	キウス5道群	
67	100483	キウス5道群	
68	100484	キウス5道群	
69	100485	キウス5道群	
70	100486	キウス5道群	
71	100487	キウス5道群	
72	100488	キウス5道群	
73	100489	キウス5道群	
74	100490	キウス5道群	
75	100491	キウス5道群	
76	100492	キウス5道群	
77	100493	キウス5道群	
78	100494	キウス5道群	
79	100495	キウス5道群	
80	100496	キウス5道群	
81	100497	キウス5道群	
82	100498	キウス5道群	
83	100499	キウス5道群	
84	100500	キウス5道群	
85	100501	キウス5道群	
86	100502	キウス5道群	
87	100503	キウス5道群	
88	100504	キウス5道群	
89	100505	キウス5道群	
90	100506	キウス5道群	
91	100507	キウス5道群	
92	100508	キウス5道群	
93	100509	キウス5道群	
94	100510	キウス5道群	
95	100511	キウス5道群	
96	100512	キウス5道群	
97	100513	キウス5道群	
98	100514	キウス5道群	
99	100515	キウス5道群	
100	100516	キウス5道群	

図 1-8 低位部土層圖(5)

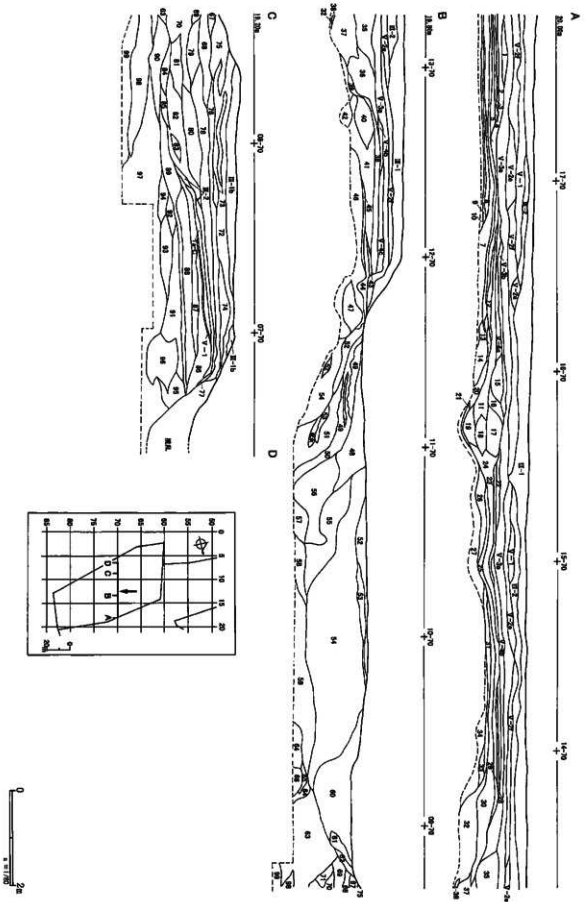


図 1-9 低位部土層図(6)

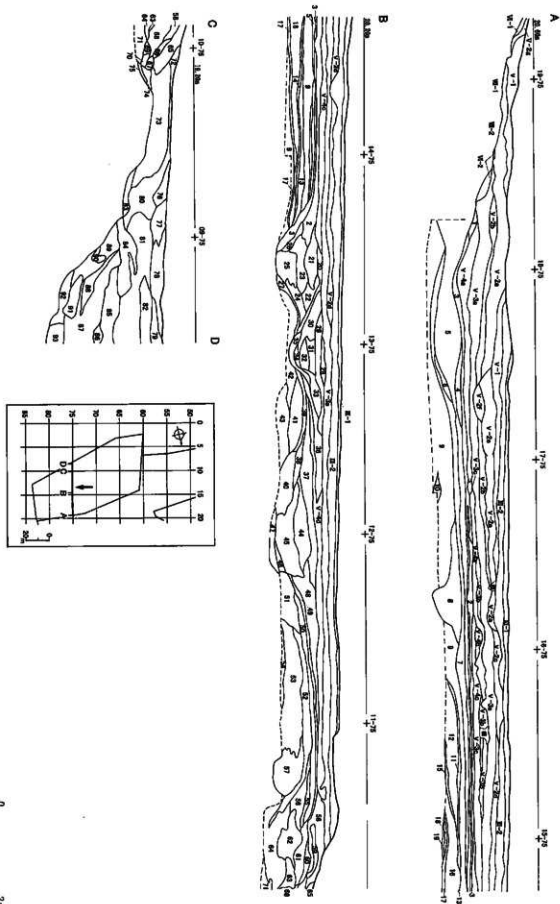


図 10 低位部土層図(7)

#### 4. 旧河道の変遷

発掘調査によってキウス川の旧河道が幾筋も重なっていることが明らかになった(図Ⅲ-14)。キウス川の開削した谷は、その蛇行浸食や洪水による土砂と降下テフラによってそのたびに流路を埋められ、河道を変えて流れることを繰り返している。その結果の現河道であり、地形的には現在はこの谷の中でも最も南寄り(キウス9遺跡寄り)を流れていると見ることができる。従って河道の位置によっては、現在キウス5遺跡に含まれている遺跡の広がり、キウス9遺跡側であったこともあるのである。至近では、キウス5遺跡低位部の近世アイヌ文化期の畑跡とその関連は、当時はキウス9遺跡側にあり、川を挟んだ対岸がキウス5遺跡であったことになる。このことについてはⅡ章2節の畑跡の考察でまた触れることにする。

以下に、端点標高・コンターライン・調査中に現れた地形・河床地形・遺物の時期と分布・土層堆積状況などの調査データから、一部推定を交えながらキウス川の河道の変遷を検討した結果を示す(図Ⅲ-11~14)。なお、河床にはポットホールが点在し深い位置からも遺物が出土することや、台地との距離や土層の違いによる浸食深度の浅深もあり、河床の新旧関係と上下関係は不整である。

##### 図Ⅲ-11 ①

調査では他の河床との比較から最も古い面として現れる部分である。寸断されており、流れとしてはわかりにくい、大略、北流してきた川が調査区中央部で台地に当たり90°屈曲して西流したと推定される。河床にはさらに幾筋かの流れが見られる部分もある。河床はほとんど43,000年ほど前のクッタラ第1降下軽石堆積物(Kt-1)だが、一部はその下層の起源不明の白色降下軽石層に及んでいる。

##### 図Ⅲ-11 ②・③

これも河床部が寸断されているが推定される流れは、台地に沿って北西に緩く振れながら西流する状況が見える。②と③の前後関係は不明。河床の状況は①と同じである。

##### 図Ⅲ-11 ④・⑤

④と⑤の前後関係は不明。ともに台地に沿って北西流してきた川が調査区中央部で大きく屈曲し南流・南西流している。台地北西側からの何らかの作用があったと推定される。河床は上記①~③と同じか、約40,000年前の支笏第1降下軽石堆積物(Spfa1)にあたる。

##### 図Ⅲ-12 ⑥

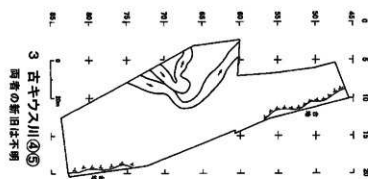
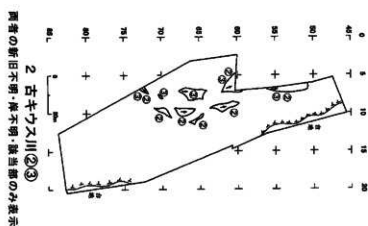
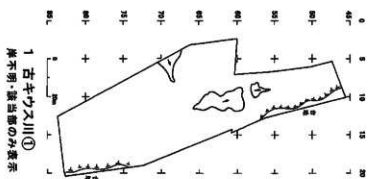
基本的に台地に沿って流れている。特に北岸は北西にある台地急斜面にかなり近接する。出土遺物から、後期旧石器時代~縄文時代早期にかけての流路と見られる。河床はSpfa1で、調査区西側で部分的にKt-1を露出させる。④⑤から大きく流れの方向が変わるのは、約20,000年前の恵庭岳噴火の降下軽石(En-a)が要因であろう。

##### 図Ⅲ-12 ⑦

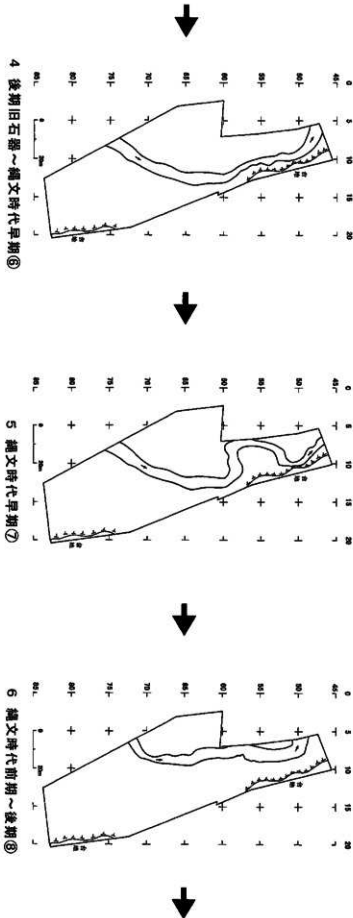
⑥と同じ台地低平地沿いの流れが、台地急斜面手前でほぼ直角に南流に変換する。さらにすぐ西流に屈曲し、北に回り込む形で⑥の流れに戻る状況。北西部の台地急斜面の崩落が原因と推定される。遺物の出土から縄文時代早期の流路と見られる。河床は⑥とほぼ同じ。

##### 図Ⅲ-12 ⑧

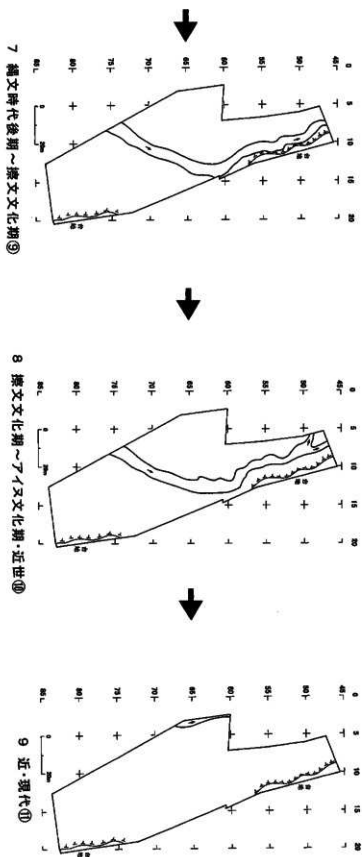
調査区よりも上流部からの流路変化があり、台地からやや離れた位置を北西~西流する。台地急斜面沿いの途中から台地から逃げるように南へ屈曲する。出土遺物から縄文時代前期以降、後期までの流れと見られる。河床は東側はほぼSpfa1で、西部の屈曲点手前付近は一部Kt-1が露出している。



図三-11 河川変遷図(1)

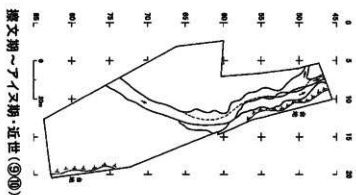
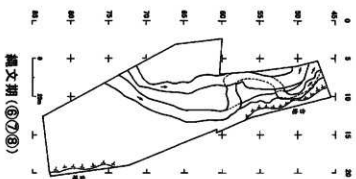
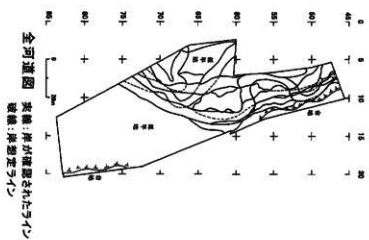


図Ⅲ-12 河道変遷図(2)



図Ⅲ-13 河道変遷図(3)





図III-14 河道変遷図(集約)

## 図Ⅲ-13 ⑨

台地側低平地に沿う部分は、縄文時代早期頃の流れの位置に戻る。台地急斜面に当たる部分でこの斜面に沿って西南西に流れを変える。⑨の時期よりもさらに台地急斜面に接近し、斜面を浸食している。出土遺物から縄文時代後期以降、擦文文化期にかけての流路といえる。河床は低平地沿いでは河川堆積物を削り込む状況、西側に進むとSpfa 1である。

## 図Ⅲ-13 ⑩

台地側低平地沿いでは⑨と同じ流れだが、台地急斜面にかかる付近からその斜面浸食による土砂の崩れの影響か、流路の南岸を浸食して移動し西流する。さらに調査区南西角にある河川堆積の塊を分岐点として、ともに旧河道をなぞるように分流する。河床はほとんど以前の河川堆積物で、一部Spfa 1を露出させる。この旧河道は1739年降下の樽前a降下軽石堆積物(Ta-a)に覆われており、調査前にTa-aを除去した時から旧河道と捉えられた流路である。下流部でこのTa-a前半の降下ユニットにより川が堰き止められて流れが止まり、Ta-a後半の降下ユニットがこれを覆ったものと推定される。擦文文化期から1739年までのアイヌ文化期の旧河道と見られ、木製品の出土も多い。南岸に近世アイヌ文化期所産の畑が耕作された。

## 図Ⅲ-13 ⑪

⑪で1739年以前の流れがTa-aで埋まり、キウス川の水は新たな流路を求めて、北側のキウス5遺跡側台地を離れ南側のキウス9遺跡側台地縁へ動いたのだろう。図にあるごとく、調査区の南辺をかすめており、これは現キウス川の河道とほぼ一致するものでもある。流れの北側に炭窯が構築されるなど、1739年以降、近～現代の流れといえる。

図Ⅲ-14に主に縄文期の流路変遷(⑥⑦⑧)と、主に擦文～アイヌ期の流路変遷(⑨⑩)を統括して示した。

以上、キウス川の谷が馬追丘陵を抜け、石狩低地帯に入ろうとする直前部分の流路変遷を見たわけで、巨視的に概観すれば、低地帯に向けやや広くなった谷は約20,000年前のEn-a降下後、台地端低平地(最下段段丘)を削り込むように西北西に流れ、台地急斜面との接点付近で西南西に流路を振って流れ続けた。浸食土砂や台地崩落の影響で小規模～大規模の屈曲を繰り返しながら変遷し、1739年まで流れていた。樽前山の大規模噴火により降下したTa-aが直接流路の変換に力を及ぼし、1739年以降は現在の河道を流れているものと見られる。

(三浦)

## 5. 遺構・遺物の概要(表Ⅲ-1・2)

## (1) 遺構(表Ⅲ-1)

当報告書に掲載したキウス5遺跡低位部扱いの遺構を、時期の新しいものからあげると、まず当地域開拓期のものに昭和前半期の炭窯跡2基がある。次に台地上のⅢ層(第Ⅰ黒色腐植土層)に相当する層で、近世アイヌ文化期の畑跡6面と付随すると思われる杭穴群、畑跡よりは古い平地住居跡1軒(UH-6)、擦文文化期の溝状遺構2条、縄文晩期の土坑15基(UP-1~15)、黒曜石フレイク・チップの集中1ヵ所がある。台地上のⅤ層(第Ⅱ黒色腐植土層)に相当する層では、縄文中期・晩期の集石が各1基あり、古いものでは旧河道に堆積した層から縄文早期の炭化物集中を検出した。

近世アイヌ文化期の畑跡は、平坦な河川堆積層上に発達したⅡ層面に、数列の畝が河川流路に沿って耕起されたもので、これを取り巻くように杭穴が存在する。溝状遺構の1条は、旧河道の河岸の一部を区画する細い溝である。縄文晩期の土坑は、UP-2~5の4基が台地の下縁部に、UP-1と

表Ⅲ-1 キウス5遺跡低位部遺構一覧

遺構	遺構名	調査区	時期	備考
集石	LS-1	19-78	縄文時代中期	台地下縁
	LS-2	10・11-59・60	縄文時代晩期	低平地(河川堆積)
炭化物集中	LC-1a	9-61・62, 10-61~63, 11-62	縄文時代早期	河川堆積層中
	LC-1b	9-62	縄文時代早期	河川堆積層中
	LC-2	10-62	縄文時代早期	河川堆積層中
	LC-3	10-61	縄文時代早期	河川堆積層中
土坑	UP-1	13-68	縄文時代晩期	河川堆積層中
	UP-2	19-75	縄文時代晩期	台地下縁
	UP-3	19-76	縄文時代晩期	台地下縁
	UP-4	19-76	縄文時代晩期	台地下縁
	UP-5	19-76	縄文時代晩期	台地下縁
	UP-6	17-75	縄文時代晩期	低平地
	UP-7	15-75	縄文時代晩期	低平地
	UP-8	15-75	縄文時代晩期	低平地
	UP-9	15-63・64	縄文時代晩期	低平地(河川堆積)
	UP-10	10・11-63・64	縄文時代晩期	低平地(河川堆積)
	UP-11	10-64	縄文時代晩期	低平地(河川堆積)
	UP-12	11-61	縄文時代晩期	低平地(河川堆積)
	UP-13	11-59	縄文時代晩期	低平地(河川堆積)
	UP-14	10・11-59・60	縄文時代晩期	低平地(河川堆積)
	UP-15	7-52	縄文時代晩期	低平地(河川堆積)
フレイク集中	UFC-1	15-65・66	縄文時代晩期	低平地(河川堆積)
溝状遺構	溝状遺構 1	8-64~67, 9-63~67, 10-63	擦文文化期	低平地(河川堆積)
	溝状遺構 2	2-60, 3-80・61, 4-61~63	擦文文化期	低平地(河川堆積)
建物跡	UH-6	7-58~60, 8-59・60	近世アイヌ文化期	低平地(河川堆積)
畑跡	畑跡 1	8-64~66, 9-63~65, 10-64・65	近世アイヌ文化期	畝6列
	畑跡 2	7-62~64, 8-62~65, 9-63	近世アイヌ文化期	畝5列
	畑跡 3	6~9-62, 10-61・62	近世アイヌ文化期	畝9列・4列2面か
	畑跡 4	7-58・59, 8・9-58~60	近世アイヌ文化期	畝4列
	畑跡 5	6~8-56・57, 7-58	近世アイヌ文化期	畝4列
	畑跡 6	6-56・60, 7-58~61	近世アイヌ文化期	畝3列
杭穴群	USP-1~39	5-60・61, 6-61~66, 7-61・66, 8-66~67, 9-61・66, 10-63	近世アイヌ文化期	39穴・畑に付随
炭窯跡	炭窯 1	3-60・61	昭和前半	現河道に面す
	炭窯 2	3~5-63~65	昭和前半	現河道に面す

6～15の11基が低平地にある。UP-10・11以外は、円形の小型土坑である。各遺構の詳細は第IV章で述べる。

## (2) 遺物 (表Ⅲ-2)

当報告書で扱うキウス5遺跡低位部の遺物は、土器・土製品9,607点、石器・石製品6,550点、鉄製品1点、木製品304点、総計16,462点である。低平地出土のものは、キウス川を利用した往時の人々の遺物や台地からの脱落物と考えられ、旧河道とその堆積層中では、上流や台地からの流入・脱落物と低平地利用の遺物が混在するものと捉えられる。

土器では縄文晩期・中期のものが多く、後期・早期と続き、擦文土器も183点みられる。当報告の遺構ではLS-1しかない縄文中期の土器が多く見られるのは、台地上が当該期の集落を擁する一大遺跡であることが一因である。不明品が5,159点と多いのは、河川堆積層中から出土するため摩耗や剥落・小破片化といった破損が進んでいるからである。

石器はそのほとんどが土器に対応する縄文各期のものであるが、礫石器や礫の中には擦文期やアイヌ期に使われたものもあると思われる。また5点と少ないが、後期旧石器が出土しているのは、台地上や上流部に後期旧石器時代の遺跡が存在することを示している。石製品では、旧河道部から緑泥石岩製の大理石が1点出土している。

鉄製品は旧河道部からの内耳鉄鍋片で、アイヌ期のものと思われる。

木製品は河川堆積層中の数多の自然木中から検出したもので、層位・摩耗度・形状などから縄文期のもの48点を見出し、残りの256点を擦文～近世アイヌ期のものと捉えた。縄文期のものにはキウス遺跡群の縄文後期・晩期相当層から数多く出土している槌状木製品の破片が1点ある。近世アイヌ期でも、大半が加工材や廃材であるが、炉鉤・鉞・杵・箕未製品・桶・曲物などの道具類や建材類・杭も見つかっている。

(三浦)

表Ⅲ-2 キウス5遺跡低位部出土遺物

遺物		点数	遺物		点数
土 器	I群 縄文早期	458	石 器	旧石器	5
	II群 縄文前期	69		石鏃	83
	III群 縄文中期	1422		石槍またはナイフ	7
	IV群 縄文後期	667		両面調整石器	7
	V群 縄文晩期	1638		石鏃	10
	VI群 続縄文	7		つまみ付きナイフ	32
	VII群 擦文	183		スクレイパー	63
	不明 未分類	5159		ピエス・エスキュー	1
土器合計		9603		U・Rフレイク	82
土製品		4		石核	27
石製品		2		フレイク	5256
鉄製品		1		石斧	130
木製品	縄文時代	48		たたき石	31
	擦文～アイヌ文化期	256		すり石	13
	木製品合計	304		石鏃	1
				台石・石皿	138
			砥石	21	
			棒状礫	18	
			礫	623	
			石器合計	6548	

## Ⅳ 低位部の遺構とその遺物

前章の表Ⅲ-1に掲載したとおり、低位部には縄文時代早期～擦文文化期の小規模遺構と、近世アイン文化期の畑跡・建物跡、昭和前半期の炭窯跡が存在した。その分布と位置関係は図Ⅳ-1と2に示した。本章では、畑跡とそれに付随するものとみられる杭穴群を1節、それに先行する建物跡を2節、擦文文化期の溝状遺構を3節、縄文時代晩期の土坑を4節、集石などの集積系遺構を5節、炭窯跡を6節で扱い、各遺構から出土した遺物はまとめて7節で説明する。(三浦)

### 1. 畑跡 付. 杭穴群 (図Ⅳ-3～8)

#### 立地

畑跡は、キウス川の蛇行浸食によってできた谷底平野の洪水堆積層に形成された低平地に立地し、標高は約18.3m～19.0mである。低位部の調査区中央よりやや西側の6～9-56～66区、平成15年度と18年度の調査区を分ける鋼矢板を境にして東西に広がり、調査区を東西に貫いて流れる旧キウス川左岸にある低平地の張り出し部分の端において耕起されていた。畝のまとまりから、全部で6面の畑跡と認識した。

#### 検出状況

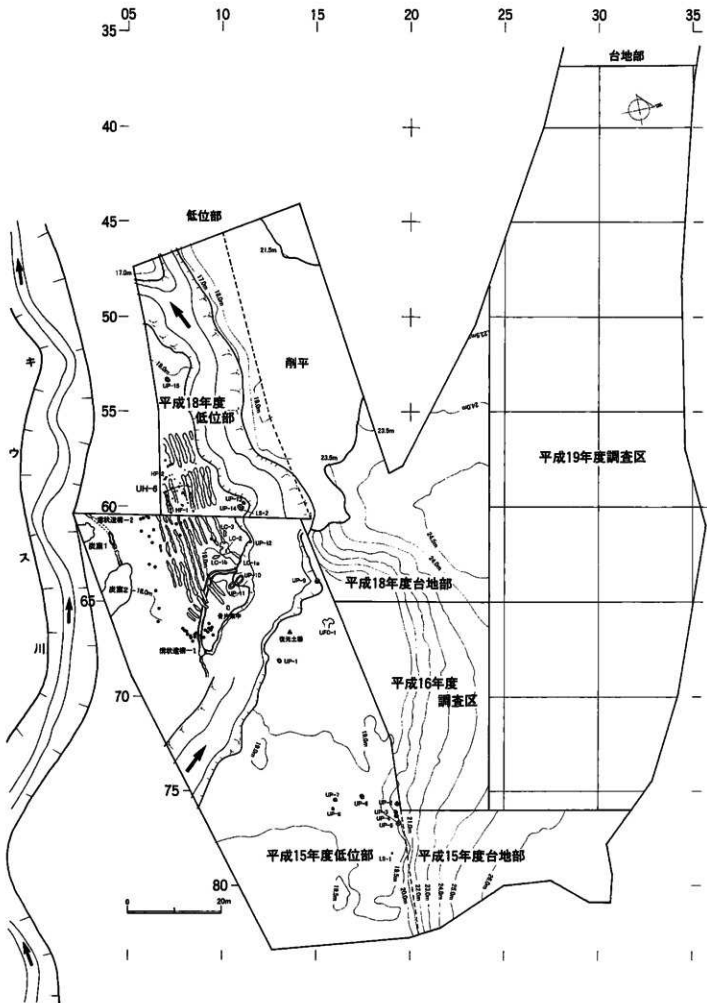
畑跡はキウス川の洪水堆積物である白色シルト質粘土の薄い層と、1739年降下のTa-a軽石層に全体を覆われていた。平成15年度の調査において、表土とTa-aを重機によって除去した後、白色シルト質粘土をジョレンを用いて人力で除去した。その際、筋状に黒色土が露出したため、畑跡の畝であろうと想定し、残りの白色シルト質粘土を、移植ゴテを用いて慎重に取り除いた。畑跡は調査区西側の6～10-60～65区に及んで検出した。畝のまとまりごとに畑跡1・2・3として、次年度以降の調査区に広がることを確認した。18年度の調査においては、15年度の続きが検出されると想定される部分の白色シルト質粘土を慎重に除去していった結果、旧キウス川左岸の低平地のほぼ半分、7・8-56・57区、7～9-58～60区に及ぶことを確認した。新たに検出した畝のまとまりを畑跡4・5とし、15年度に一部検出していた畝を畑跡6とした。

畝や畝間の重複はみられず、また再耕作した痕もみられないことから、最初に畝立てされてからそれほど長い期間は営まれず、キウス川の氾濫による洪水堆積の白色シルト質粘土に覆われ、その後Ta-aに埋まったものであろう。

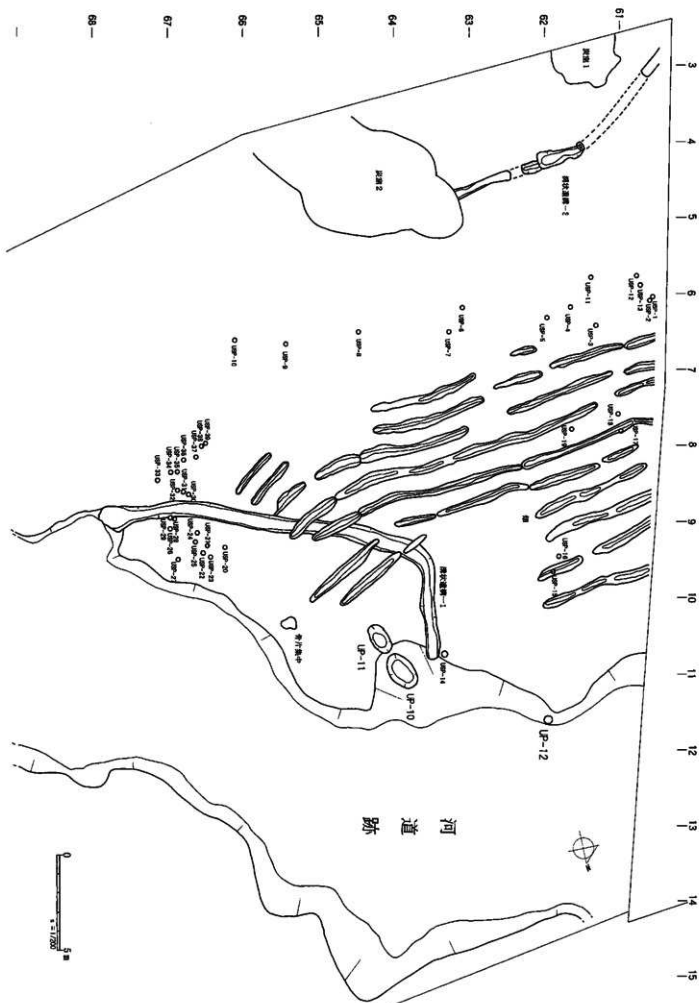
#### 規模と構造

確認された6面の畑跡の総面積は約350㎡であり、調査区外に広がっている面積を合わせると、約500㎡程度であると推定される。畝の数は、いずれも両端の畝間の外にも作付けすると想定すると、畑跡1は8本、畑跡2は7本、畑跡3は10本、畑跡4は6本、畑跡5は5本、畑跡6は4本が畝立てされている。畑跡5は南側の調査区外にさらに広がっている可能性があり、また北端が川による侵食を受けて削られた可能性もある。

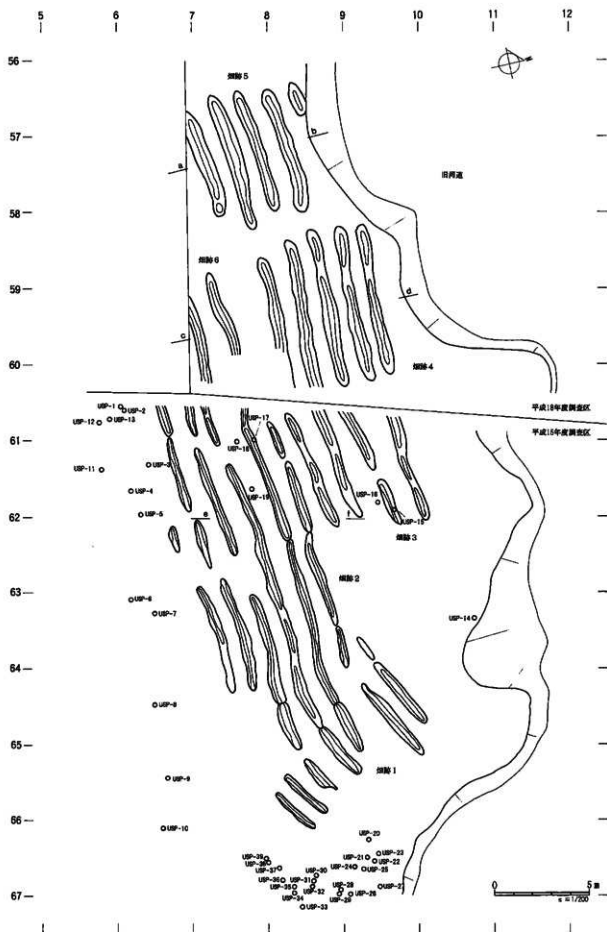
畝の構造は、幅がほぼ60～100cm前後であり、高さ(畝頂部と畝間底部との差)は約5～10cm、間隔は約150cm(心間)、長さは約3～15mである。高さについては、洪水によって畝立て土が流出したことが考えられ、畝立てが行われた当時においては、畝間との高低差がさらにあったと推定される。畝と畝間の方向はほぼ北東-西南西である。畝や畝間の重複はみられず、切り返しは行われていない。



図Ⅳ-1 キウス5遺跡低位部遺構位置図

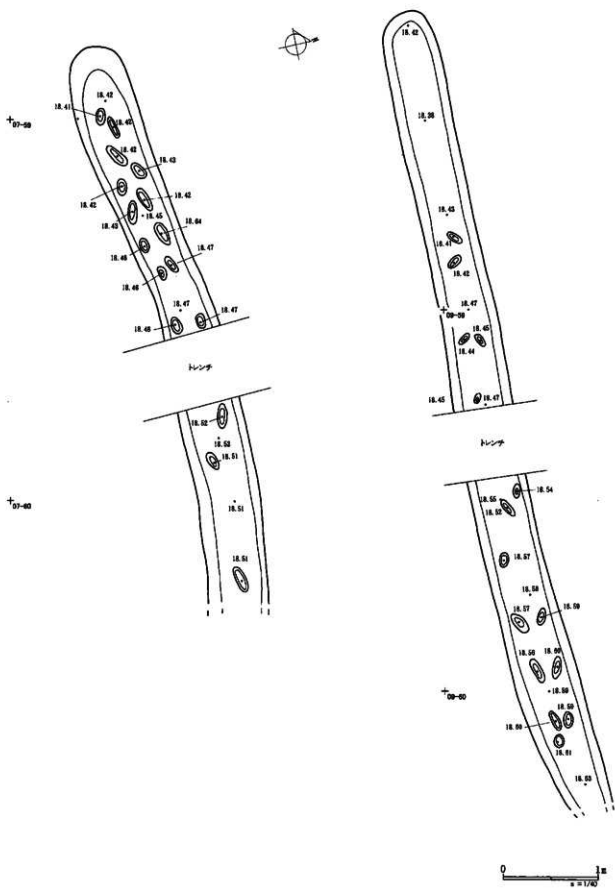


図IV-2 キウス5遺跡低位部遺構位置 平成15年度部分拡大図



図IV-3 竪堀と杭穴群





図IV-4 畑跡畝間の耕起痕

## 土層断面

土層断面は畑跡5(a-b)、畑跡4・6(c-d)、畑跡3(e-f)の3面を土層観察面とし図示したが(図Ⅳ-5)、畑跡3(e-f)は畝と畝間の形状のみ図示した。いずれの土層断面におけるⅢ層の堆積は、Ⅲ草の土層区分で示した55ライン(図Ⅲ-4 低位部土層図(1))、70ライン(図Ⅲ-9 低位部土層図(6))、75ライン(図Ⅲ-10 低位部土層図(7))における低平地の堆積とほぼ同様である。畑跡4・6(c-d)の断面においては、最上層の黒色土(1層)以下は、Ta-cまで主に黒色シルト質土、灰黄褐砂質土、褐灰シルト質土の互層(2~14層)であり、1~14層までがⅢ層相当であるが、畑が耕起されたのは、最上層の層厚約5~15cmの黒色土(1層)においてのみである。

## 耕起痕

調査を進めて黒色土を掘り下げていったところ、数ヶ所の畝間において長さ約10~30cm、幅約10~20cmの長楕円形の黒い染みを、黒色土直下の褐灰色砂質土上面においてハの字状に検出した。これは耕作時の鋤や鍬の痕と考えられた。耕起痕は畑全面においては確認することはできず、最上層の黒色土の堆積が薄いところにおいてのみ確認できた。痕が最も明瞭に確認できた畝間2箇所を図示した(図Ⅳ-4)。図右は畑跡4、図左は畑跡6である。

## 杭穴群(櫛列)

平成15年度に調査した畑跡1・2・3周辺より、柱穴群のUSP-1~38を検出した(図Ⅳ-6・7・8)。このうちUSP-1~12は畑跡の南側において約23mの列をなしており、西側の調査区外にも広がるのが想定された。USP-20~38は畑跡1の東側、8・9-66区に密集して列をなしている。杭穴の径は約10~20cm、深さは約30~50cmである。調査当初、東側のUSP-20~38は、溝状遺構-1に付随するものと考えた。しかし調査が進むにつれ、杭穴跡が畑を区切るようにして周りに配列されていることが判明したため、畑跡に付随するものであると判断した。遺跡周辺においては、現在でもエゾシカが数多く生息しており、調査中にも度々出没しているのを目撃されている。また台地上において、シカの追い込み欄と推定される縄文時代の杭穴列が検出されていることから(北埋調報第116集)、シカの侵入を防ぐための櫛列ではないかと推定した。

南側列のUSP-3~11においての間隔は、約2m~5mと広いのに対し、西端の東側に密集するUSP-20~38は、概ね2本の対になって隣接していることから、出入口などの施設であった可能性が考えられる。また南側の列の西端にあるUSP-1・2・12・13は調査区外に続くため不明であるが、やはり2本対になっていることから、同様の可能性がある。畑跡3の中にあるUSP-15~19は耕起する以前の櫛列であろう。

## UH-6との関係

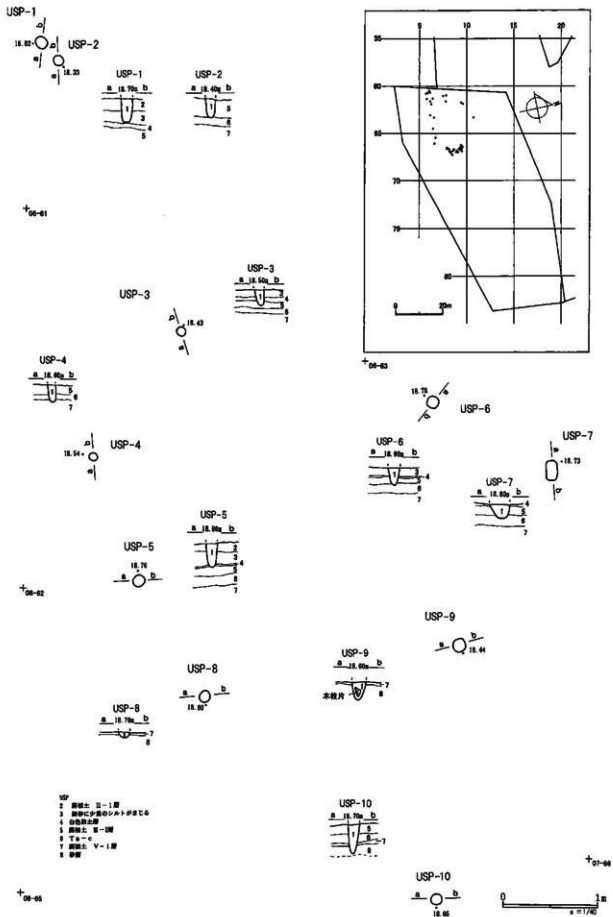
平成18年度の畑跡4・5・6の調査で、約5~10cmの棒状の礫25点が、畑跡全体に点在してほぼ上面より出土した。形状からアイヌ文化期の遺物で、ゴザなどを編むときに使用される鯉石の「ピツ」と考えられた。そのため近隣にアイヌ文化期の遺構がある可能性が高いと考え、畑跡の調査を終了した後もピツを残して、全体を掘り下げたところ、焼土と柱穴を検出したため、形態より近世アイヌ文化期の平地式住居跡であると判断した。ピツはUH-6の屋内、あるいは近辺に本来は集中してあったものであろうが、住居を廃棄した後には洪水によって流されたり、また畑が耕起された際に拡散したものであろう。

## 時期

畑が営まれた時期は、近世アイヌ文化期の平地式住居跡であるUH-6が廃棄された後に耕起されていること、旧河道から出土した鋸・杵・箕・桶・曲物・炉鉤・建築材などの木製品から、また川に

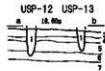


キウス5遺跡



図IV-6 杭穴群(1)

USP-12 USP-13



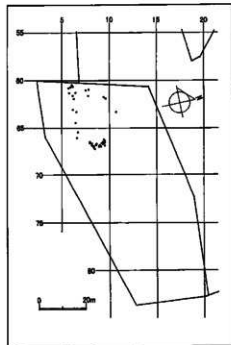
+09-01



USP-11



- USP  
 1 掘跡土 Ⅱ-1層  
 2 掘跡に少量のシルトが混じる  
 3 黄色粘土層  
 4 黄色粘土層  
 5 掘跡土 Ⅱ-2層  
 6 TⅡ-c  
 7 掘跡土 V-1層  
 8 砂層



+11-05



USP-14



USP-16



USP-15

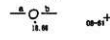


+10-02

USP-18



USP-17



+09-01



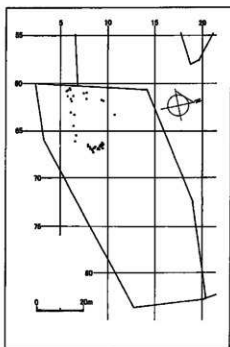
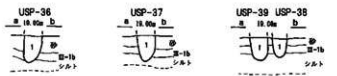
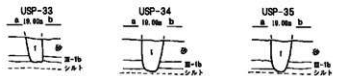
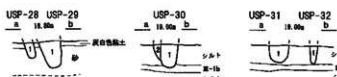
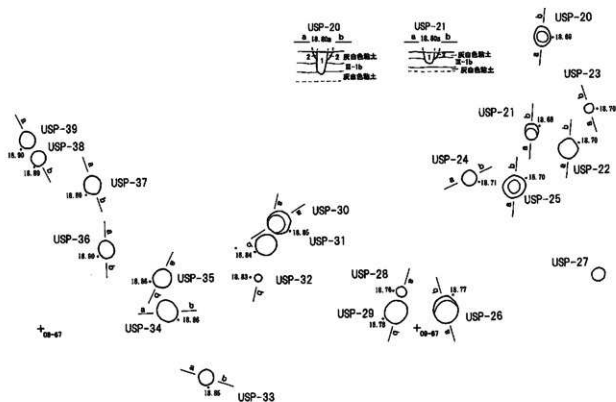
USP-19



USP-19



図 IV-7 杭穴群(2)



図IV-8 杭穴群(3)

よる浸食をほぼ受けていないことなどから、Ta-aが降下する1739年よりはそう大きくは遡らない18世紀前葉と想定される。

#### 土壌・花粉分析

畑で栽培された作物の種類を特定するために、フローテーション法による土壌分析をおこなった。北海道における畑跡の検出は、道南地方を主体として数例あるが、道央部（石狩低地帯）での検出は初めてであった。そのため平成15年度の調査においては、より多くのデータを得るために、出来る限り多くの土壌を採取することとし、畑跡3の土層断面(e-f)から銅矢板までの畝の土壌を採取した。平成18年度の調査では、横山英介氏の指導のもと畑跡5(a-b)、畑跡4・6(c-d)の断面に沿って、畝と畝間23ヵ所から土壌を採取して分析をおこなった。しかしながら作物を特定できるような栽培種の種子や花粉の検出はなく、また焼畑の可能性を示すに十分な量の炭化物も検出しなかった。またパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した花粉分析と植物珪酸体分析においては、キビ属やキビ属の植物珪酸体の検出がわずかに認められたが、その形態からは栽培種に由来するものか否かの判別が困難であるとの結果に留まった。

以下が詳細な結果である。採取した土壌の乾燥体積は畑跡1は168.0ℓ、畑跡2は384.0ℓ、畑跡3は336.0ℓ、畑跡4は7.8ℓ、畑跡5は6.4ℓ、畑跡6は3.0ℓである。

#### フローテーション法による土壌分析・同定結果

	アカザ	カヤツリグサ	タラノキ	ニワトコ	ブドウ	クルミ	冬芽	不明種子	不明堅果	炭化材
	点数	点数	粒	点数	粒	g	点数	点数	点数	g
畑跡1		1					1	6		0.32
畑跡2	3	10			2	0.72	1	8	3	0.03
畑跡3	2	1	1	1		0.06		26	1	0.97
畑跡4	1							5	2	
畑跡5									1	
畑跡6			1							

(菊池 慈人)

なお、Ⅳ章に北海道における畑跡調査・研究の成果や課題をまとめてある。

## 2. 建物跡 (図Ⅳ-9・18)

UH-6

位置：7-57~60、8-57~60区

規模：〔全体〕(6.0)×5.2m 長軸方向：N-87°-E

調査・確認：平成18年度の烟跡の調査の際にⅢ層上面において、棒状の礫が25点出土した。この礫は形状からアイヌ文化期のゴザ編みの時に使用する錘石の「ピツ」である可能性を考慮して、烟跡の調査を終了した後、この礫を残して全体を少し掘り下げたところ、8-60区の杭付近において炉と想定される焼土を2ヵ所検出した。また柱穴と考えられる周囲と比較して非常に軟らかい土壌を数ヵ所確認したため、焼土の検出と合わせて平地式住居跡であることを想定した。柱穴は黒色土中より検出するために、確認作業にあたっては炉を中心として、すでに確認した柱穴をもとに方形に列をなす位置を推定し、ピンボールを刺して確認した。その後、それぞれを半載した結果、断面の形状などから16基を柱穴と判断した。住居跡の東側の柱穴列は鋼鉄板の打設に伴って、幅約1mを掘削した際に破壊されたのであろう。

付属遺構：焼土2ヵ所および柱穴16基を確認した。

〔炉〕HF-1：規模 0.52×0.40/0.03m 被熱層 Ⅲ層上面

平地式住居跡の中央よりやや東側に位置する。平面形は不整形円形である。断面はほぼレンズ状を呈し、赤褐色に被熱している。洪水を受けたせいか、形状と色があまり明瞭ではない。

HF-2：規模 0.76×0.48/0.05m 被熱層 Ⅲ層上面

平地式住居跡の外、西側約3mに位置する。平面形は不整形である。断面はほぼレンズ状を呈し、明赤褐色に被熱している。HF-1より形状と色が明瞭である。検出した当初は、UH-6とは別の平地式住居跡の炉と考えて調査を進めたが、これに伴う柱穴列を検出しなかったため、UH-6の屋外炉と判断した。

〔柱穴〕HP-1~16

全部で16基検出した。検出面での径は7~12cm、深さは約10~50cmである。HP-1~12はHF-1を囲むようにコの字状に検出した。HP-14・15・16はHF-2より北西約2.5mの位置に並んで検出し、HP-13はさらに南西約1.5m離れて検出した。HP-13~16はUH-6の付属施設の柱穴と判断したが、調査区外に広がる別遺構の可能性もある。

遺物出土状況：ピツと考えられる棒状の礫が17点とそれに類する礫8点が出土した。本来集中していたものが、洪水と畑の耕起で散在したと想定される。

時期：検出層位と遺構の構成から、1739年以前の近世アイヌ文化期とみられる。

(菊池)

## 3. 溝状遺構

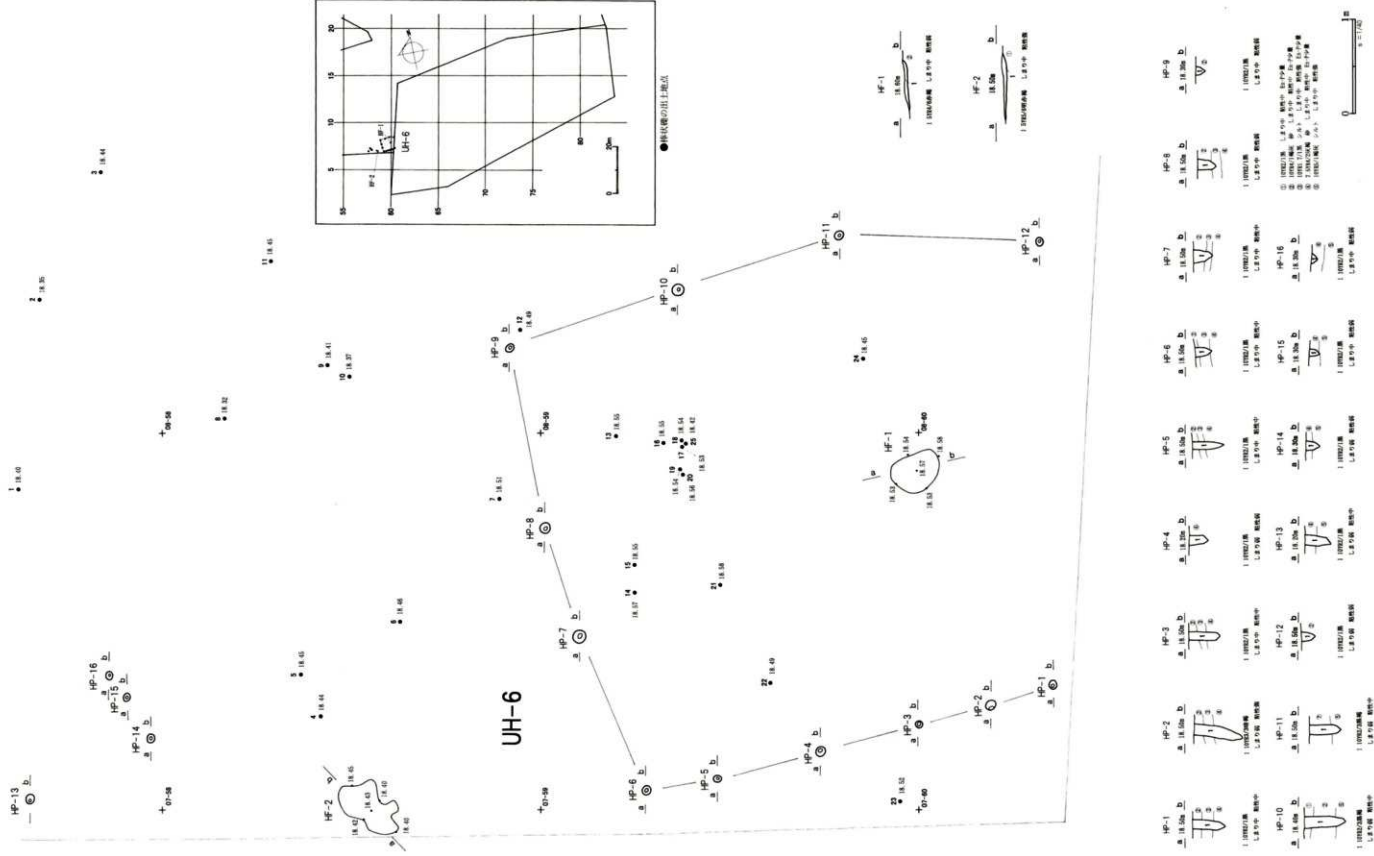
溝状遺構1 (図Ⅳ-10・16)

位置：8-64~67、9-63~67、10-63区

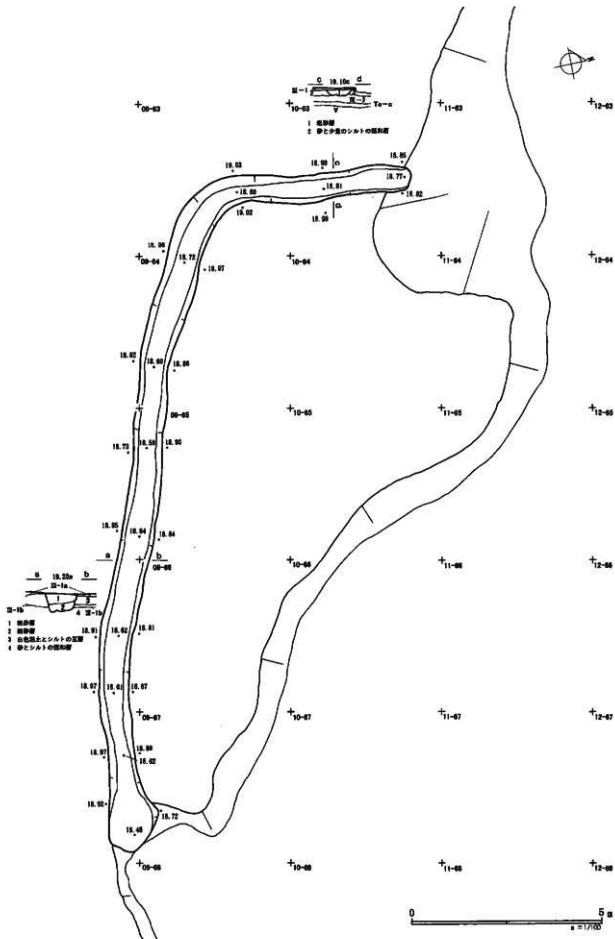
溝の規模：幅0.70~0.98/0.33~0.62×深さ0.48~0.15m

調査：河川堆積の低位平坦面に堆積したⅢ層面に筋状に残る砂を検出した。断片的に掘削したところ、断面逆台形の溝状に掘れ、繋げると両端を川岸に開口させた1条の溝になった。掘り込みはⅢ層相当層で止まっている。底面全体には、棒状の道具で掘られたらしい掘削痕がみられた。平面的には川岸部を直角に区画するものであるが、区画された内部からは施設等は確認できなかった。廃絶は、川水をかぶり砂で埋まってしまったためとみられる。南西にある屈曲点から北へ5m強で川

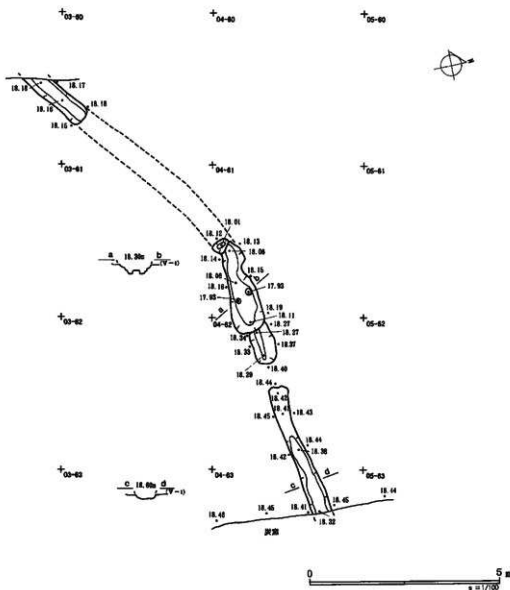




図Ⅱ-9 UH-6



図IV-10 溝状遺構 1



図Ⅳ-11 溝状遺構2

岸、ほぼ東へ約18mで川岸に至る。溝の底レベルは屈曲部が最も高く川に向かってきわめて緩く傾斜する。

遺物出土状況：冑群土器38点が溝を中心に内外周辺で出土した。妻の胴部片がほとんどで、内面に炭化物の付着がみられる。

時期：土器から據文文化中～後期と判断する。溝状遺構2よりも新しい。

溝状遺構2 (図Ⅳ-11・16)

位置：2-60、3-60・61、4-61～63区

溝の規模：幅0.40～0.85/0.10～0.52×深さ(0.15)m

調査：河川堆積の低位平坦面のV層相当層を掘削するうち、溝状遺構1のような砂溜りを発見した。

断面は丸楕状で、中央部の溝中に内外に向かい合う柱穴様の一対の凹みがある。西側は鋼矢板で切

断され、東側は炭窯跡 2 に壊されている。底面全体には、棒状の道具で掘られたらしい掘削痕がみられた。残存全長は約14mだが、東寄りに1ヵ所70cmほどの途切れる部分がある。また西側の2/3ほどは浅いようで、底部の痕跡のみが確認できた。残存部の中央に掘り込みの重複があり、掘り直されたものとみられる。底面は西が高く、東が低い。

遺物出土状況：Ⅴ群土器45点が溝を中心に内外周辺で出土した。坏や甕の胴部片である。

時期：土器から捺文文化期後期と判断する。溝状遺構 1 よりも古い。(三浦)

#### 4. 土坑

UP-1 (図Ⅳ-12・16)

位置：12・13-68区

規模：0.74×0.66/0.38×0.40/0.28m

平面形：不整形

調査：13-68区において、Ⅴ層調査中にやや大型の礫を検出した。遺構の存在を想定し、周辺を丁寧に掘り下げたところ、礫の下部で黒褐色土の円形の広がりを検出した。半裁し、土層の観察を行った結果、底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：二層からなり、共に黒色土(Ⅲ層ないしⅤ層)を主体とし、Ta-cを含む土層である。2層は1層中に入り込んでおり、土中の鉄分が赤化した土層である。

坑底・壁：坑底はやや丸みをおび、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：覆土から大型の礫1点、坑底から土器が1点出土している。

時期：坑底出土の遺物及び、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。(広田)

UP-2 (図Ⅳ-12)

位置：19-75区 UP-3・4・5と近接する

規模：0.67×0.65/0.58×0.65/0.29m

平面形：ほぼ円形

調査：19-75区の台地下縁部において、Ⅴ層調査終了後に黒色土の円形の広がりを検出した。半裁したところ、明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：三層からなり、黒色土を主体として、Ta-cを含む。

坑底・壁：坑底は南側に緩く上がり、壁は北側で急に立ち上がる。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。

UP-3 (図Ⅳ-12・16)

位置：19-76区 UP-2・4・5と近接する

規模：(0.81×0.71)/0.55×0.57/0.25m

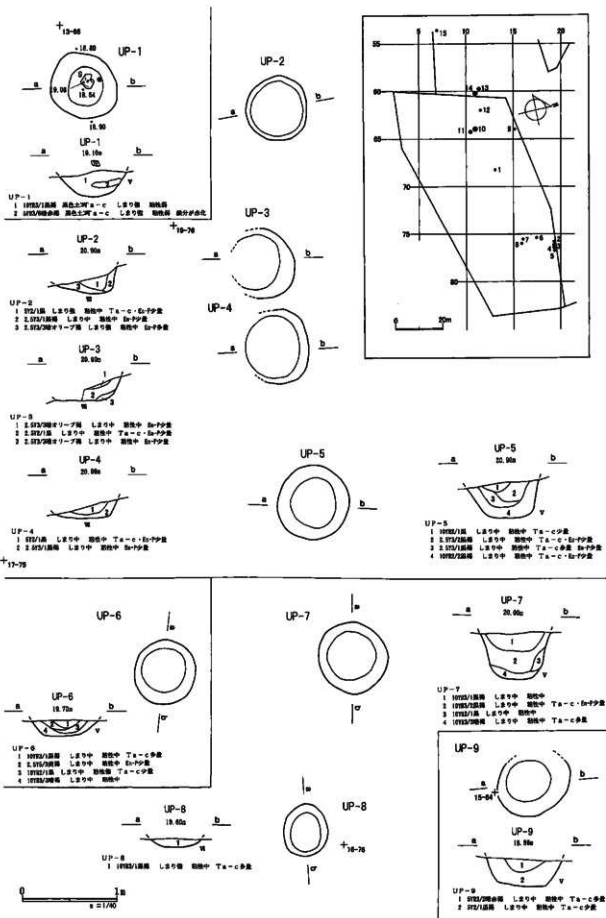
平面形：ほぼ円形

調査：19-76区の台地下縁部において、Ⅴ層調査終了後に黒色土の円形の広がりを検出した。半裁したところ、明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：三層からなり、2層の黒色土を主体として、Ta-cを含む。

坑底・壁：坑底は平坦であり、壁は北側で急に立ち上がる。

キウス5遺跡



図IV-12 UP-1~9

遺物出土状況：覆土から土器片1点が出土している。

時期：周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。

#### UP-4 (図IV-12)

位置：19-76区 UP-2・3・5と近接する

規模：0.80×0.71/0.66×0.59/0.19m

平面形：ほぼ円形

調査：19-76区の台地下縁部において、V層調査終了後に黒色土の円形の広がりを検出した。半裁したところ、明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：黒色土と黒褐色土の二層であり、Ta-cを含む。

坑底・壁：坑底は平坦であり、壁は北側で急に立ち上がる。

遺物出土状況：覆土から土器小片2点が出土している。

時期：周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。

#### UP-5 (図IV-12)

位置：19-76区 UP-2・3・4と近接する

規模：0.78×0.75/0.51×0.49/0.39m

平面形：ほぼ円形

調査：19-76区の台地下縁部において、V層調査終了後に黒色土の円形の広がりを検出した。半裁したところ、明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：四層からなり、黒褐色土が主体で全層にTa-cを含む。

坑底・壁：坑底は平坦であり、壁は北側で急に立ち上がり、南側でやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。

#### UP-6 (図IV-12)

位置：17-75区

規模：0.68×0.65/0.47×0.46/0.17m

平面形：ほぼ円形

調査：17-75区において、V層調査中に中心が黒褐色土の円形の落ち込みを検出した。半裁したところ、明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：四層からなり、黒色土、暗褐色土が主体でTa-cを含む。

坑底・壁：坑底は平坦であり、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。

#### UP-7 (図IV-12)

位置：15・16-75区 UP-8と近接

規模：0.75×0.71/0.50×0.51/0.50m

平面形：ほぼ円形

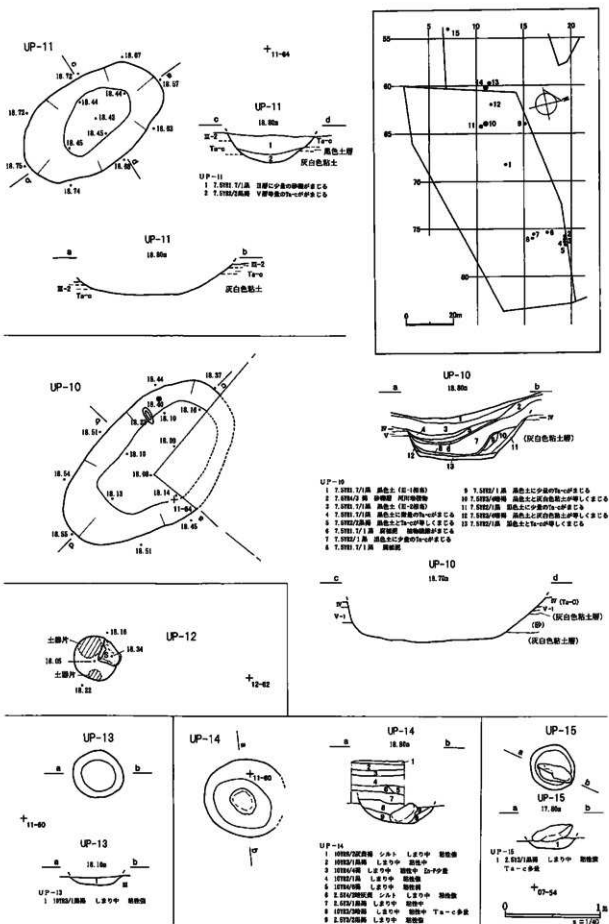


図 IV-13 UP-10~15

調査：15・16-75区において、Ⅴ層調査中に黒褐色土の円形の落ち込みを検出した。半裁したところ、

明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：四層からなり、黒褐色土が主体でTa-cを含む。

坑底・壁：坑底は平坦であり、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。

#### UP-8 (図Ⅳ-12)

位置：15-75、16-76区 UP-7と近接

規模：0.56×0.47/0.41×0.31/0.08m

平面形：やや楕円形 長軸方向：N-78°-W

調査：15-75区において、Ⅴ層調査終了後に黒褐色土の円形の広がりを検出した。半裁したところ、

明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：Ta-cを含む黒褐色土一層である。

坑底・壁：坑底はほぼ平坦であり、壁は浅皿状に開いて立ち上がる。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。

#### UP-9 (図Ⅳ-12)

位置：15-63・64区

規模：0.80×0.67/0.48×0.44/0.31m

平面形：やや楕円形 長軸方向：N-30°-W

調査：15-63・64区において、Ⅴ層調査中に黒褐色土の円形の落ち込みを検出した。半裁したところ、

明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：二層からなり、黒褐色土が主体でTa-cを含む。

坑底・壁：坑底はほぼ平坦であり、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。

#### UP-10 (図Ⅳ-13)

位置：10・11-63・64区

規模：2.12×1.24/1.40×0.67/0.44m

平面形：楕円形 長軸方向：N-35°-W

調査：10・11-63・64区において、Ⅲ層調査中に攪乱の断面で明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：4～13層が覆土ですべて流れ込みである。黒色土が主体でTa-cを含む。

坑底・壁：坑底は平坦であり、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況：坑底から黒曜石のフレイクチップ1点と自然礫2点が出土した。

時期：周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。



UP-11 (図Ⅳ-13)

位置: 10-64区

規模: 1.63×0.94/0.84×0.49/0.29m

平面形: 楕円形 長軸方向: N-22°-W

調査: 10-64区において、Ⅱ層調査中に東側のTa-c上面で、黒色土の落ち込みを検出した。半裁したところ、明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土: 黒色土と黒褐色土の二層からなりTa-cを含む。

坑底・壁: 坑底はやや丸く、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況: 出土していない。

時期: 周囲の遺構、覆土にTa-cを含むことから、縄文時代晩期の可能性がある。

UP-12 (図Ⅳ-13・16)

位置: 11-61・62区

規模: (0.48)×(0.43)m

平面形: ほぼ円形と推定される

調査: 11-61・62区において、V層調査中に坑底の遺物を検出し、土坑と判断した。

遺物出土状況: V群c類の土器小片多数と台石片2点が出土している。

時期: 出土遺物から縄文時代晩期と考えられる。

UP-13 (図Ⅳ-13)

位置: 11-59区

規模: 0.51×0.50/0.34×0.33/0.11m

平面形: ほぼ円形

調査: 11-59区において、Ⅲ層調査中に黒褐色土の広がりを検出した。半裁したところ、明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土: 黒褐色土の一層である。

坑底・壁: 坑底は平坦で、壁は浅皿状に開いて立ち上がる。

遺物出土状況: 出土していない。

時期: 周囲の遺構から、縄文時代晩期の可能性がある。

UP-14 (図Ⅳ-13)

位置: 10・11-59・60区

規模: 0.88×0.82/0.62×0.51/0.19m

平面形: ほぼ円形

調査: 11-60区において、Ⅲ層調査中に暗黒褐色土の落ち込みと大型の礫を検出した。半裁したところ、明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土: 8層の暗褐色土と9層の黒褐色土の二層が覆土である。

坑底・壁: 坑底はほぼ平坦で、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況: 坑底から大型の自然礫が1点出土した。

時期: 周囲の遺構と、覆土にTa-cが含まれることから縄文時代晩期の可能性がある。

## UP-15 (図Ⅳ-13)

位置：6・7-53区

規模：0.52×0.46/(0.41×0.36)/(0.24)m

平面形：ほぼ円形

調査：6・7-53区において、Ⅲ層調査中に黒褐色土の落ち込みと大型の礫を検出した。半裁したところ、明確な底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

覆土：Ta-cを多量を含む黒褐色土の一層である。

坑底・壁：坑底はほぼ平坦で、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況：覆土から大型の自然礫が1点出土した。

時期：周囲の遺構と、覆土にTa-cが含まれることから縄文時代晩期の可能性がある。(菊池)

## 5. フレイク集中・集石・炭化物集中・その他

## フレイク集中

## UFC-1 (図Ⅳ-14・16・17)

位置：15-65・66区

規模：2.22×(1.46)m

調査：15-66区においてⅢ層調査中に南北約2.5m、東西約1.1mの範囲でフレイク・チップの集中を検出した。南西側は部分的に範囲確認前に遺物を取り上げてしまったため、一部範囲は不明である。

細かい石器が多かったため、土ごと上げて土壌水洗で遺物を回収した。

遺物出土状況：分布範囲は広いが、密度はやや薄い。V群土器が2点、小破片3点、石器は、スクレイパー1点、Rフレイク1点、フレイクは2,241点出土している。

時期：Ⅲ層で確認され、V群土器が出土しているため、縄文時代晩期の可能性が高い。

## 集石

## LS-1 (図Ⅳ-14・17)

位置：19-78区

規模：0.46×0.38m

調査：19-78区において、V層調査中にやや大型の礫のまとまりを検出した。下部に掘り込みは認められなかった。礫は折り重なった状態で検出されている。

遺物出土状況：礫は全て台石である。現場段階では7点確認したが、もろい礫は取り上げ時に細かくわけてしまったため、総点数は58点である。他にはⅢ群土器が1点、不明土器が4点、石斧が1点出土している。

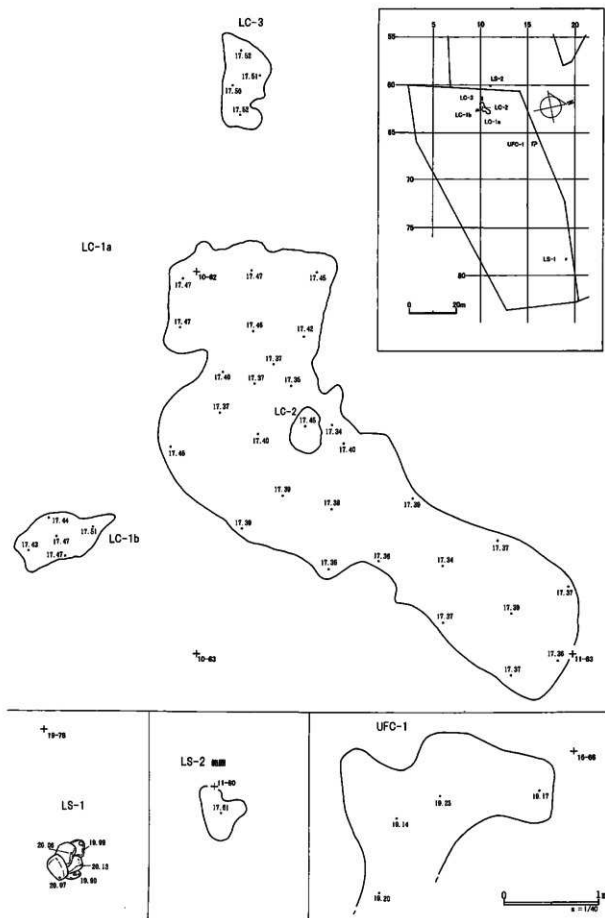
時期：伴出した土器から縄文時代中期の可能性が高い。(広田)

## LS-2 (図Ⅳ-14)

位置：10-59・60、11-60区

規模：0.59×0.48m

調査：11-60区において、V層調査中に礫のまとまりを検出した。下部に掘り込みが認められなかつ



ため集石とした。

遺物出土状況：すべて自然曝で98点出土した。

時期：周囲の遺構から縄文時代晩期の可能性がある。

(菊池)

#### 炭化物集中

LC-1 (図IV-14・16・17)

位置：a：9-61・62、10-61～63、11-62区      b：9-62区

規模：a：5.96×2.80m      b：1.13×0.51m

調査：旧河道に堆積するシルト質粘土層を調査する中で、炭化物が集中して広がる厚さ3cm未満の層を検出した。50cmほど東側にも飛び地状に広がりがあった

遺物出土状況：炭化物層中から土器片111点、黒曜石フレイク・チップ18点などととも、つまみ付きナイフ2点が出土している。分類できた土器は26点ですべてI群b類である。

時期：遺物と層位から縄文時代早期と判断できる。

LC-2 (図IV-14)

位置：10-62区

規模：0.48×0.32m

調査：LC-1aの調査中に、これより5～10cm程高いレベルに小規模の炭化物の集中層があった。レベルだけで見ると、LC-1bと一連のものかも知れない。

時期：周囲の状況から縄文時代早期と判断できる。

LC-3 (図IV-14)

位置：10-61区

規模：0.98×0.48m

調査：やはりLC-1aの調査中、西側に近接して5cm程高いレベルに小規模の炭化物の集中層があった。

時期：同じく周囲の状況から縄文時代早期と判断できる。

#### その他

骨片集中 (図IV-15)

位置：10-65区

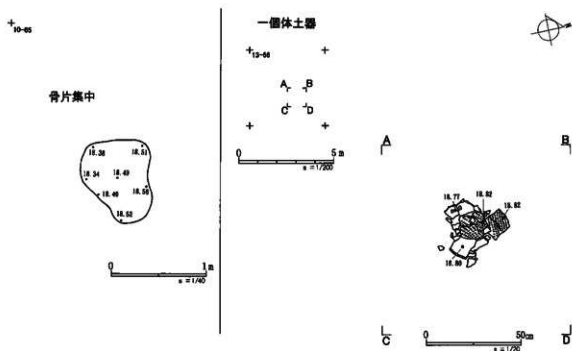
規模：0.96×0.78m

調査：V群土器の点在するⅢ層相当の河川堆積層中に、白色骨片のまとまりがみられた。骨の同定が不能で、量も少なかったため、積極的に人為的な遺構とは判断できなかった。

時期：周辺の土器と層位から縄文時代晩期と思われる。

一器体土器 (図IV-15・図V-15)

位置：13-66区



図IV-15 骨片集中・一體体土器出土状況

規模：0.38×0.35m

調査：河川堆積の低位平坦面に堆積したⅢ層黒色土中に、底部が失われた状態で潰れたV群土器があった。第V章で報告する復原土器9の出土状況である。

時期：縄文時代晩期

(三浦)

## 6. 炭窯跡

炭窯1

位置：3-60・61区

規模：(3.05)×3.65m

炭窯2

位置：3~5-63~65区

規模：(7.45)×6.85m

調査：調査区の南辺、現河道に面して2カ所並ぶように表土からの落ち込みがみられた。表土除去段階ですでに焼土や炭・軟石材などが確認され、炭窯跡と判断できた。河川堆積の低位平坦面上に構築されている。上半部は表土除去で取り去った。現河道に面した焚き口側半分は、ともに鋼矢板で仕切られた調査区範囲外にある。

西側の炭窯1は、隅に外壁用の柱穴をもつ平面方形の窯で、煙出しの基部に軟石材が残っていた。東隣の炭窯2は、3回ほど作り替えがなされたようで底面に掘り込まれた段差がある。外壁用の柱穴も確認でき、一番外側の窯は煙出しの部に向かって外壁が開く形状である。

時期：第Ⅱ章3節で述べた如く、昭和20~30年代の所産とみられる。

(三浦)

## 7. 遺構出土の遺物

### (1) 遺構出土の土器 (図IV-16、表IV-1~3、図版24)

#### 概要

遺構出土の土器をまとめて掲載する。

遺構ごとの出土点数については、表IV-3にまとめた。UP-1・3からは、未分類とした破片が1点ずつ出土し、UP-4からはⅢ群土器の小破片が出土した。UP-12からは、同一個体と考えられるV群土器が400点以上出土したが、脆いため、剥離・小破片のものが多く、復原には至らなかった。UFC-1でもV群土器の出土がある。溝状遺構1・2からはⅣ群土器が多く出土し、胴部の良好な破片が目立つ。LC-1ではI群土器の出土が多く、LS-1からはⅢ群土器の出土が認められる。なお図版中の注記は、「遺構名・出土層位・遺物番号」である。

#### Ⅲ層の遺構出土土器

##### \*破片土器

##### 土坑出土の土器

##### UP-1・坑底 [1]

1はLR斜行縄文が施される。磨耗しており、Ⅲ群b類、あるいはV群c類と推測される。

##### UP-3・覆土 [2]

2は胴部の破片で、内外面ともにミガキ調整である。Ⅳ群と判断される。

##### UP-12・層位不明 [3~5]

3~5は同一個体で、V群c類と考えられるものである。3は口縁部破片で、口唇部にLR縄文を施した後、外面にかけて燃紐による刻みが施される。外面には幅広く浅い沈線文が複数観察される。4は、LR原体による縦走気味の縄文が認められる。5は底部で、外面にはLR斜行縄文が施され、底面は無文である。

##### フレイク・チップ集中出土の土器

##### UFC-1・Ⅲ層 [6]

6は、口唇部にLR縄文が施され、外面には沈線文と地文が認められる。V群c類と考えられる。

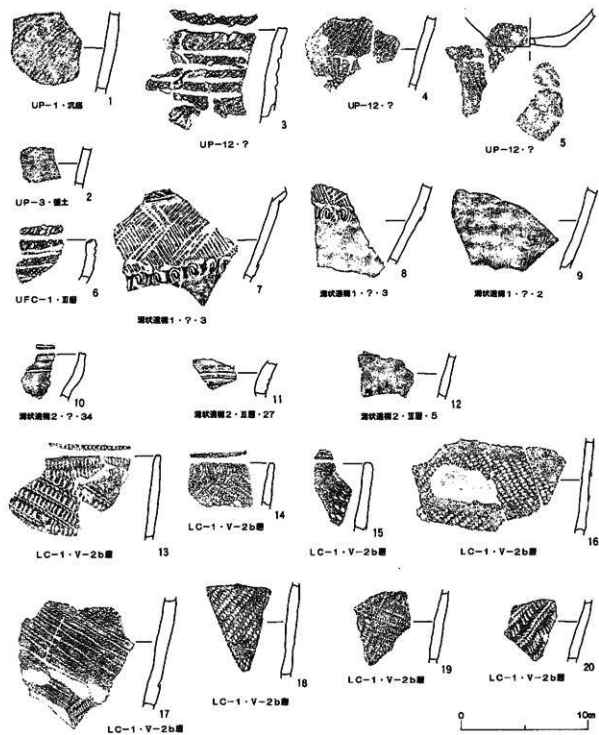
##### 溝状遺構出土の土器

##### 溝状遺構1・層位不明 [7~9]

7~9は同一個体と考えられる。7・8は、同心円状の圧痕文が施される貼付圓綯帯を有し、器面には矢羽根状の刻文が密に認められる。9は縦方向のヘラミガキ調整である。7~9はⅣ群で、據文文化期の中~後期(11世紀代)と判断される。

##### 溝状遺構2・Ⅲ層 [10~12]

10は坏の口縁部で、口唇部は調整により中央が沈線文状に若干凹む。器形には明確に屈曲する変化点が認められ、ロクロ使用による整形の可能性が考えられる。11は、外面に平行する沈線文が施され、外反の程度から壺の頸~肩部付近の破片と推測される。12は器壁が比較的薄い。10~12はⅣ群で、さらに10・11は、據文文化期中期(9世紀後半頃)と推測される。



図N-16 低位部遺構出土の破片土器

## Ⅴ層の遺構出土土器

## \*破片土器

## 炭化物集中出土の土器

## LC-1・Ⅴ-2b層 [13~20]

13と20、14と19、16と18は、それぞれ同一個体であると判断される。

13は、口縁部直下の器面に、1段Rを用いた絡条体圧痕文が施され、その下位には、矢羽根状の節を有する並列する条と絡条体圧痕文が、交互かつ斜めに認められる。文様の切り合いを観察すると、絡条体圧痕文が、条を切っていると認められる。すなわち、施工順序は、左右擦りの異なる燃紐を接して、右方向に巻き付けた絡条体による燃糸文を施した後、この条間を充填するように、絡条体圧痕文を施したと考えられる。14は、1段左擦りの燃紐を用いた絡条体圧痕文と、LR、RL原体による羽状縄文が施される。破片中央付近の条の傾きが変わる部分では、比較的大きくて深い節状の凹みが、縦方向に連続して認められる。これは回転施文の開始時に、原体を器面に強く押し当てた結果、付随的に生じたと推測される。

15は、口縁部直下の器面が無文で、2段の擦りの異なる燃紐を用いた二本の絡条体により、羽状の燃糸文が施される。破片左側部分と比べ、右側部分は施文が浅く不明瞭である。

16・18は、左右別擦りの原体による羽状縄文が観察され、横位に無文部分が認められる。17は、1段Rの右巻きの絡条体を用いた燃糸文と、LR縄文が羽状を呈するように施される。19は、別原体による羽状縄文が施され、口縁部破片(14)同様に、連続する節状を呈する、原体の深い押捺痕が認められる。20は、矢羽根状を呈する条と絡条体圧痕文が交互に観察されるが、文様の切り合いは認められない。

以上、13~20は、すべてⅠ群b類に相当すると判断され、16・18はコックロ式、両者以外はすべて、東銅路Ⅳ式と判断される。(末光 正卓)

表Ⅳ-1 低位部遺構出土破片土器観察表(1)

図	番号	形状	出土地点	層位	遺物			破片部位			重量 (g)	分類	備考(器種・型式)	
					番号	小計	合計	外	内	(部位)			外	内
胎土(混和材)					文様・調整			色調			使用の痕跡			
繊維	粒径	種類			外面	内面	(部位)	外面	内面	外面	内面	外面	内面	
IV16	1	24	UP-1	坑底	*	1	1	胴部	27.4	Ⅴ群? V群?				
少~中量	中	岩石鉱物 ともにあり	LR縄文	?	*				淡棕色 (5YR8/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	非色化 褐色 (2.5YR7/8)	炭化物付着		
IV16	2	24	UP-3	覆土	*	1	1	胴部	7.0	V群				
無	細	岩石鉱物 ともにあり	ミガキ	タテミガキ	*				にぶい黄褐色 (10YR6/4)	(褐灰色)	*~*	黒色化		
IV16	3	24	UP-12	?	*	6	6	口縁部	48.2	V群c類	図IV-16-4・5と同一個体			
少量	中	岩石鉱物 ともにあり	LR縄文 燃紐刻み 沈線文	ヨコナデ	*				(口唇部) 淡棕色 (10YR7/4)	(黒褐色) ~(褐灰色)	*	黒色化 炭化物付着		
IV16	4	24	UP-12	?	*	2	2	胴部	20.6	V群c類	図IV-16-3・5と同一個体			
無	細	鉱物主体	LR縄文	ヨコナデ	*				灰白色 (10YR8/2)	(黒褐色)	非色化 褐色 (2.5YR7/8)	黒色化 炭化物付着		
IV16	5	24	UP-12	?	*	3	3	底部	24.8	V群c類	図IV-16-3・4と同一個体			
少量	細	鉱物主体	LR縄文	ヨコナデ	*				(底面) 淡黄褐色 (10YR8/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	非色化 褐色 (5YR7/8)	黒色化		
IV16	6	24	UF-C-1	Ⅲ層	*	2	2	口縁部	7.4	V群c類				
無	細	岩石鉱物 ともにあり	LR縄文 沈線文	ヨコナデ	*				(口唇部) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	*	*		



表Ⅳ-2 低位部遺構出土破片土器観察表(2)

図	番号	時期	出土地点	層位	遺物番号		破片数		破片部位	重量(g)	分類	備考(器種・型式)		
					小計	合計	外	内				外	内	
胎土(混和材)													使用の痕跡	
繊維			粒径	種類	文様・調整				色調		外		内	
IV16	7	24	溝状遺構1	?	3	3	3		胴部	45.4	V群	Ⅱ・ⅢIV-16-8-9と同一個体		
			細	鉱物主体	貼付団練帯 刻文		ヨコナデ		(貼付帯上) 同心円状の 圧痕文	灰白色 (10YR8/2)	(黒褐色)	*	炭化物付着	
IV16	8	24	溝状遺構1	?	3	1	1		胴部	23.6	V群	Ⅱ・ⅢIV-16-7-9と同一個体		
			細	鉱物主体	貼付団練帯 刻文		タテミガキ ヨコナデ		(貼付帯上) 同心円状の 圧痕文	灰白～にぶい 黄褐色 (10YR8/1～ 7.5YR7/4)	(黒褐色)	*	黒色化 炭化物付着	
IV16	9	24	溝状遺構1	?	2	1	1		胴部	34.6	V群	Ⅱ・ⅢIV-16-7-8と同一個体		
			細	鉱物主体	タテ ヘラミガキ		タテ ヘラミガキ		*	灰白色 (10YR8/1)	(黒褐色)	*	黒色化 炭化物付着	
IV16	10	24	溝状遺構2	?	34	1	1		口縁部	6.6	V群	環・回転盤形?		
			粗	岩石主体	ヨコナデ		ヨコナデ		(口唇部) ヨコナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	浅橙～橙色 (5YR8/4～ 2.5YR7/6)	*	*	
IV16	11	24	溝状遺構2	Ⅲ層	27	1	1		頸～肩部?	7.4	V群	壺		
			粗	岩石主体	沈原文 ヨコナデ ヘラミガキ		ヨコナデ		*	黄褐色 (10YR8/6)	浅黄褐色 (10YR8/3)	*	*	
IV16	12	24	溝状遺構2	Ⅲ層	5	1	1		胴部	9.6	V群	壺		
			中	岩石鉱物 ともにあり	タテヘラミガキ		ナデ?		*	橙色 (7.5YR7/6)	浅黄褐色 (10YR8/4)	*	*	
IV16	13	24	LC-1	V-2 b層	*	2	5		口縁部	38.4	I群b類	ⅢIV-16-20と同一個体 東館路IV式		
			少～中量	細	岩石鉱物 ともにあり	0段Rの 絡糸体圧痕文 LとRの 列列並き磨痕文		ヨコナデ		(口唇部) 刻み	灰黄褐色 (10YR6/2)	(黒褐色)	黒色化	黒色化 炭化物付着
IV16	14	24	LC-1	V-2 b層	*	1	1		口縁部	14.5	I群b類	東館路IV式		
			無	細	鉱物主体	Lの絡糸体圧痕文 L・R・L羽状磨文		ヨコナデ		(口唇部) ヨコナデ	灰黄褐色 (10YR7/2)	(黒褐色)	黒色化	黒色化 炭化物付着
IV16	15	24	LC-1	V-2 b層	*	1	1		口縁部	9.7	I群b類	東館路IV式		
			少量	細	岩石鉱物 ともにあり	羽状磨痕文 (L・R右書きとR・L 左書きの絡糸体) ヨコナデ		ナデ?		(口唇部) Rの 磨紐圧痕文	浅黄褐色 (10YR8/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	黒色化 炭化物付着	黒色化
IV16	16	24	LC-1	V-2 b層	*	4	4		胴部	64.1	I群b類	ⅢIV-16-10と同一個体・コックロ式		
			少	中	岩石主体	L・R・L羽状磨文		ヨコナデ		*	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	黒色化 炭化物付着
IV16	17	24	LC-1	V-2 b層	*	3	3		胴部	76.8	I群b類	東館路IV式		
			少	細	岩石主体	L・R縄文 R右書き磨痕に上 る磨痕文		ヨコナデ		*	灰黄褐色 (10YR6/2)	灰黄褐色 (10YR6/2)	黒色化 炭化物付着	黒色化 炭化物付着
IV16	18	24	LC-1	V-2 b層	*	1	1		胴部	23.6	I群b類	ⅢIV-16-10と同一個体・コックロ式		
			少量	細	鉱物主体	L・R・L羽状磨文		ナデ?		*	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	(黒褐色)	黒色化	黒色化 炭化物付着
IV16	19	24	LC-1	V-2 b層	*	1	1		胴部	19.0	I群b類	ⅢIV-16-11と同一個体・東館路IV式		
			無	細	鉱物主体	L・R・L羽状磨文		ナデ?		*	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	(黒褐色)	*	黒色化 炭化物付着
IV16	20	24	LC-1	V-2 b層	*	1	1		胴部	12.4	I群b類	ⅢIV-16-12と同一個体・東館路IV式		
			少量	細	鉱物主体	0段Rの 絡糸体圧痕文 LとRの 並列並き磨痕文		ナデ		*	(褐灰色)	(黒褐色) ～(褐灰色)	*	黒色化 炭化物付着

表IV-3 低位部遺構出土土器点数

遺物種別/層位			UP-1	UP-3	UP-4	UP-12	UFC-1	溝状遺構1	溝状遺構2	LC-1	LS-1	表裏2号	合計					
時期	部位	形状呼称	底	小計	蓋土	小計	?	小計	蓋土	小計	?	小計	蓋土	小計	?	小計	合計	
I群	口縁部 (a)	瓦片											5				5	
		瓦片																
		瓦片																
	底面 (ba)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	胴部 (bo)	瓦片												19				19
		瓦片																
		瓦片																
	不明その他	瓦片																
瓦片																		
瓦片																		
小計												2				2		
II群	口縁部 (a)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	底面 (ba)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	胴部 (bo)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	不明その他	瓦片																
瓦片																		
瓦片																		
小計																		
III群	口縁部 (a)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	底面 (ba)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	胴部 (bo)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	不明その他	瓦片																
瓦片																		
瓦片																		
小計																		
IV群	口縁部 (a)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	底面 (ba)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	胴部 (bo)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	不明その他	瓦片																
瓦片																		
瓦片																		
小計																		
V群	口縁部 (a)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	底面 (ba)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	胴部 (bo)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	不明その他	瓦片																
瓦片																		
瓦片																		
小計																		
VI群	口縁部 (a)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	底面 (ba)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	胴部 (bo)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	不明その他	瓦片																
瓦片																		
瓦片																		
小計																		
未分類	口縁部 (a)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	底面 (ba)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	胴部 (bo)	瓦片																
		瓦片																
		瓦片																
	不明その他	瓦片																
瓦片																		
瓦片																		
小計																		
土器品																		
合計																		

## (2) 遺構出土の石器 (図Ⅳ-17・18、表Ⅳ-4・5、図版25)

平成15年度・18年度調査の各遺構から、表Ⅳ-4に示した石器等が出土している。

## UFC-1出土の石器等

2,000点を超える黒曜石のフレイク・チップと、剥片石器2点が出土している。1はラウンドスクレイパー。剥片背面のほぼ全周に調整を施し急角度の刃部がつくられている。黒曜石製。

## LC-1出土の石器等

炭化物の集中した層位中から、黒曜石フレイク・チップや剥片石器・石製品などが出土。2・3は、つまみ付きナイフ。共に剥片背面に片面調整を施しているもの。2は両面の側縁に調整が加えられ刃部になっている。破損している。頁岩製。3は長軸上の端部に急角度の刃部が作られている。黒曜石製。

## LS-1出土の石器

遺構は台石・石皿片の集積である。4・5は台石。共に安山岩製。

## UP-10出土の石器等

坑底から黒曜石のフレイク・チップ1点と自然礫2点が出土。

## UP-12出土の石器

台石片2点が出土している。

## UH-6出土の石器等

UH-6から出土した長幅比1.5~3.3までの礫17点を棒状礫とし、他の8点の礫と共にグラフ化した(図Ⅳ-18)。長さは5~7cm、幅3~5cm、厚さ2~3cm、重量は40~60gのものが多い。棒状礫はピットと呼ばれるゴザ編みなどに使用される錘石と思われる。石材は砂岩と凝灰岩が各8点、安山岩5点、泥岩3点、チャート1点である。うち棒状礫は砂岩8点すべてと凝灰岩5点、安山岩4点である。

## UP-14出土の石器等

坑底から大型の自然礫1点が出土。

## UP-15出土の石器等

覆土から自然礫1点が出土。

## LS-2出土の石器等

自然礫94点を集積した遺構である。

(袖岡 淳子)

表Ⅳ-4 低部位遺構出土石器点数

平成15年度

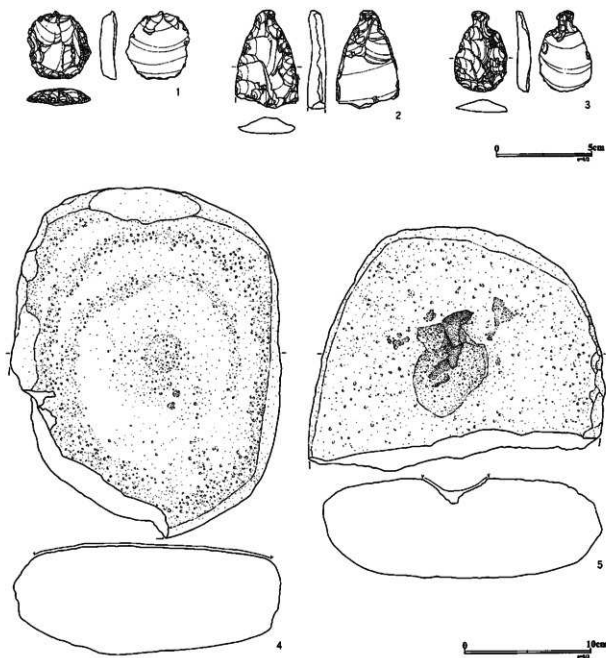
遺構名	UFC-1	LC-1	LS-1	UP-10	UP-12	合計
層位	Ⅲ層	V-2b層	V層	坑底	—	
つまみ付きナイフ		2				2
スクレイパー	1					1
Rフレイク	1	1				2
フレイク	2,241	17		1		2,259
石製品		1				1
石斧			1			1
台石・石皿			58		2	60
礫				2		2
合計	2,243	21	59	3	2	2,328

平成18年度

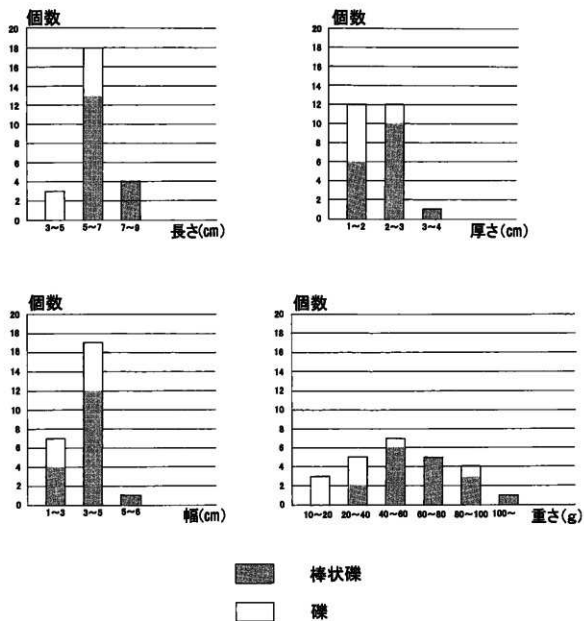
遺構名	UH-6	UP-14	UP-15	LS-2	合計
層位	Ⅲ層	坑底	覆土	V層	
礫	25	1	1	94	121

表Ⅳ-5 低位部遺構出土土撿載石器一覧

発掘番号	遺構名	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	形状
図Ⅳ-17 1	UFC-1	Ⅲ		スクレイパー	黒曜石	3.57	3.18	0.73	10.40	
図Ⅳ-17 2	LC-1	V-2 b		つまみ付きナイフ	頁岩	(5.16)	3.30	0.99	(14.90)	破損品
図Ⅳ-17 3	LC-1	V-2 b		つまみ付きナイフ	黒曜石	4.27	2.67	0.60	7.40	
図Ⅳ-17 4	LS-1	V	2	台石	安山岩	(27.65)	19.13	8.64	(7,000)	欠損品
図Ⅳ-17 5	LS-1	V	7	台石	安山岩	(19.10)	21.90	7.93	(4,600)	破損品



図Ⅳ-17 低位部遺構出土の石器



図IV-18 UH-6出土礫の測定値比較

## V 低位部の遺物

### 1. 土器等 (図V-1~13、表V-8~11、図版26~32)

#### (1) 概要

本遺跡低位部調査区は、キウス川の旧河道に立地するため、遺物包含層は水成堆積層である。そのため、出土土器は磨耗しているものが多いが、Ⅰ群~Ⅶ群まで各時期のものがみられ、さらに、復原土器は10個体立ち上げることができた。掲載した復原土器及び、破片土器(土製品を含む)の破片点数合計の、総出土点数に対する割合(掲載率)は、次のとおりである。復原土器約1.9%、破片土器約2.2%である。遺物登録台帳(一次整理のデータ)を用い、出土点数表(表V-16~19)と、時期、層位、残存状態ごとの出土分布図(図V-1~13)を作成した。これらから土器の出土のあり方についておおまかに述べる。

#### \*出土点数表(表V-8~11)

平成15年度調査で6,002点、18年度調査で2,980点が出土し、合計で8,982点(土製品4点含む)を数える。Ⅰ群が432点(229+203点)、Ⅱ群が69点(39+30点)、Ⅲ群が1,415点(1,059+356点)、Ⅳ群が665点(448+217点)、Ⅴ群が1,221点(575+646点)、Ⅵ群が7点(3+4点)、Ⅶ群が100点(18+82点)で、Ⅲ・Ⅴ群が多く、ついでⅣ・Ⅰ群である。未分類は5,069点(3,629+1,440点)で、総出土点数の過半数を占める。さらに未分類の磨耗破片について注目すると、15年度は858点(21+7+713+117点)、18年度は627点(18+17+591+1点)で、未分類土器総点数の約29%を占める。このことは、台地等に立地する一般的な遺跡では、小破片であるために、時期が判断できず未分類とする場合が多いのに対し、本遺跡の低位部では、磨耗により時期判断ができないものが、一般的な遺跡よりも多いことを示している。

出土層位をみると、出土点数が100点を超えるものは、03年度ではⅢ層、Ⅲ層河道、Ⅴ層、Ⅴ-2層、Ⅴ-2b層、Ⅴ-河道層、Ⅴ-3層があり、Ⅲ層出土のものが最も多い。18年度ではⅢ層、Ⅴ層、旧河道Ⅴ層、旧河道砂層、旧河道互層で、旧河道砂層出土のものが最も多い。

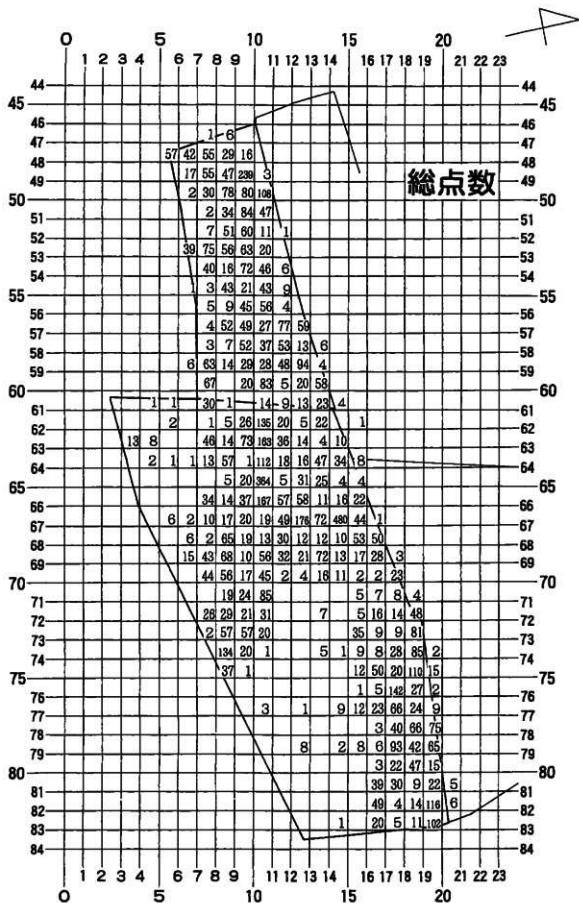
各群の層位的な出土の傾向は、Ⅰ群はⅤ-2b層及び旧河道砂層、Ⅱ群はⅢ層及び旧河道砂層、Ⅲ群はⅤ層、Ⅴ-3層及び旧河道砂層、Ⅳ群はⅤ層及び旧河道砂層、Ⅴ群はⅢ層、Ⅵ群はⅢ層相当河道及び旧河道砂層、Ⅶ群はⅢ層からの出土がそれぞれ最も多い。

#### \*出土分布図(図V-1~13)

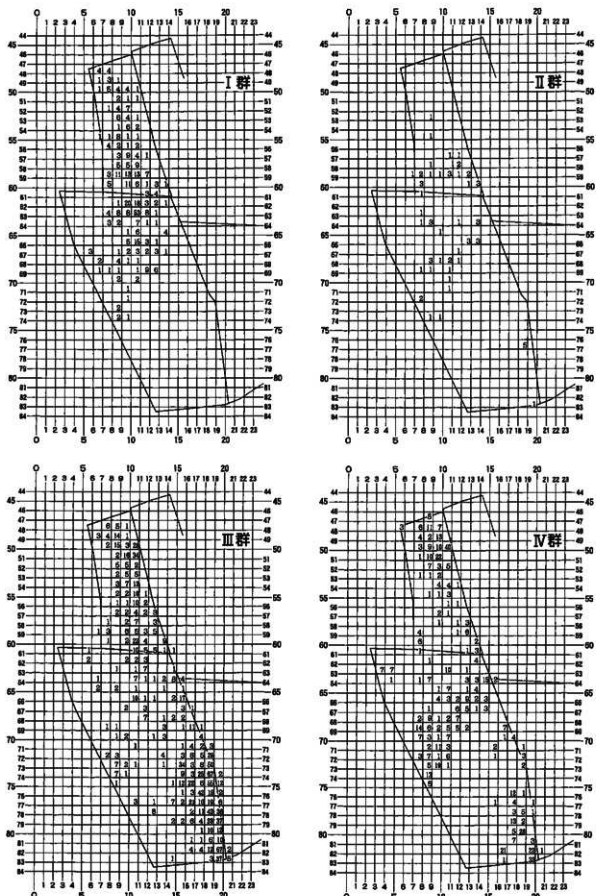
##### 総出土点数・時期分類(図V-1~3)

「総点数」では、概ね調査区全体から出土が認められる。遺跡の地形等から、遺物が集中する部分は、大まかに二つに分けられる。一つは、8-73区・10-61~65区・12-66区等で、これらのグリッドには旧河川の流路が位置しており、河川の流れにより運搬されたものが多いためと考えられる。もう一つは、台地際に位置するグリッド、17-76区・18-75区・19-82・83区等で、これらは台地からの遺物の崩落が要因と考えられる。さらに、9-48区・10-49区・14-67区付近は、旧河川の作用と台地からの崩落と両方によるものと考えられる。また、出土点数は、旧河川の分布を除けば、現キウス川の流れる南側へと少なくなる。

「Ⅰ群」は、東側に分布が認められず、8~11ラインと58~63ラインの範囲付近に集中する。「Ⅱ



図V-1 低位部包含層土器出土分布図



図V-2 低位部包含層土器時期別分布図(1)



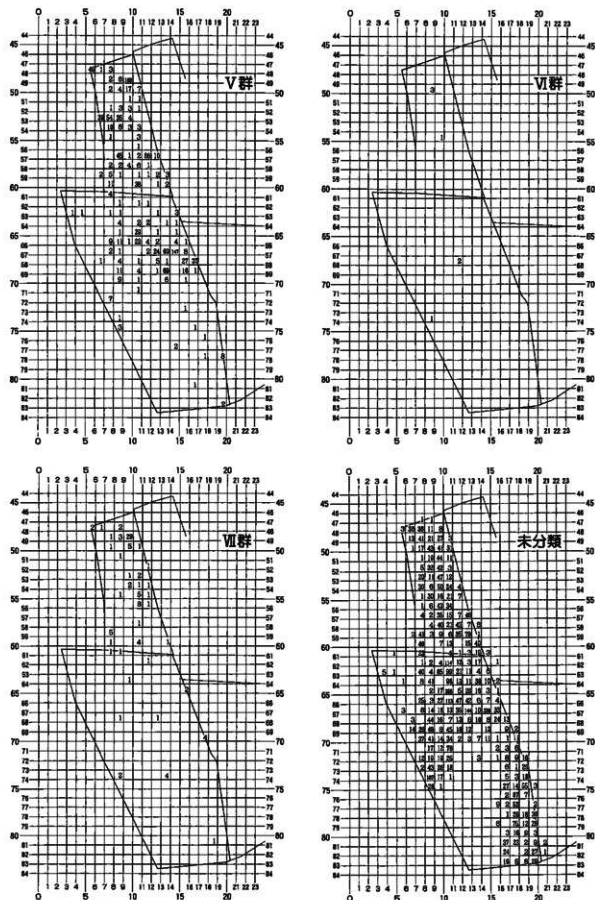


図 V-3 低位部包含層土器時期別分布(2)

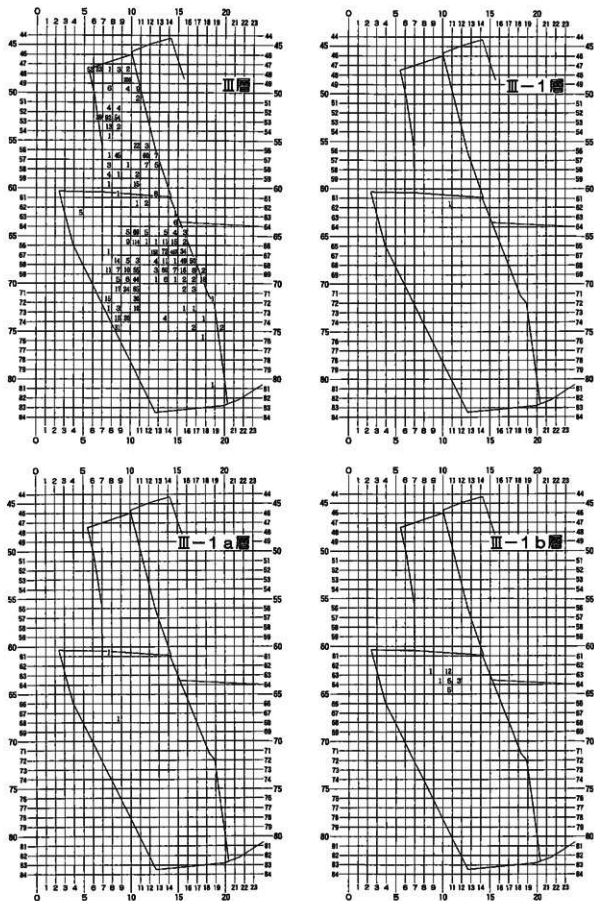
群」は、散在的な出土状況であり、際だつて集中するグリッドは認められない。「Ⅲ群」は、ほぼ全体からの出土が認められるが、集中する部分は、15～20ラインの71～83ラインの範囲付近に顕著である。この部分に接する台地上には、Ⅲ群b類の時期の遺構が密集している。「Ⅳ群」は、集中するグリッドが、9-50区・10-49区と、18～20ラインと79～83ラインの範囲の2カ所、すなわち、調査区の東西両側部分に認められる。「Ⅴ群」は9-48区、14-66区が際だつ。調査区中央から西側付近の範囲で、比較的出土の多いグリッドが散在的に認められる。「Ⅵ群」は少数で、すべて旧河川の流路が位置するグリッドからの出土である。「Ⅶ群」は、西側のグリッドに多く認められ、9-48区が最も多い。この付近に接する台地上は、大きく攪乱されているが、擦文文化期の住居跡が確認されているので、そこからの崩落である可能性が高い。「未分類」は、概ね総破片数の分布と同様に、流路が位置するグリッドと、東側の台地に接するグリッドに出土が多く認められる。

#### 出土層位 (図V-4～12)

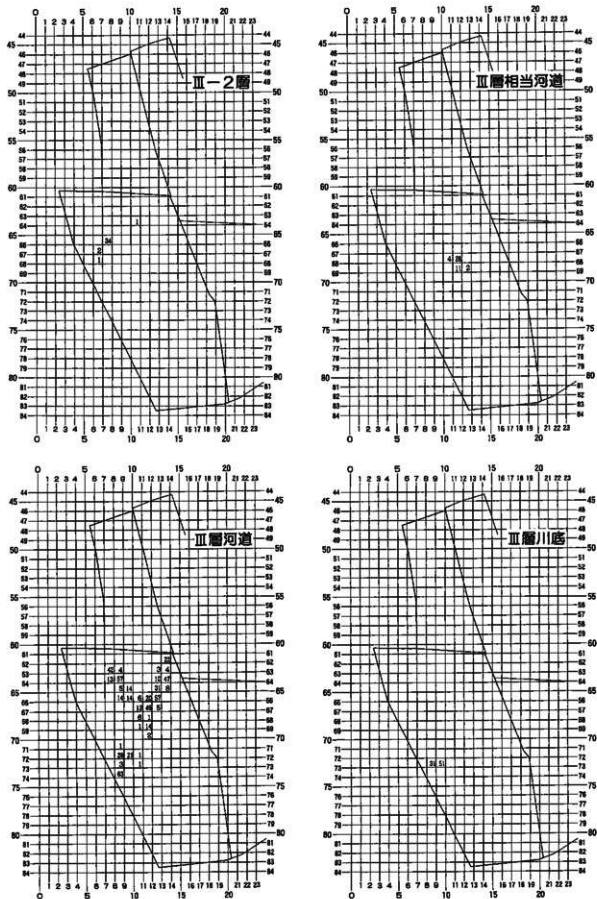
「Ⅲ層」は、調査区中央付近と西側に多く出土が認められる。「Ⅲ-1層」・「Ⅲ-1a層」は、少数の出土である。「Ⅲ-1b層」・「Ⅲ-2層」・「Ⅲ層相当河道」・「Ⅲ層川底」は、局所的な出土のあり方を示す。「Ⅲ層河道」は、調査区中央付近に認められる。「Ⅳ層」・「Ⅳ-2層」は調査区東側、台地に接する付近に多い。「Ⅳ-1層」は台地と接する部分に認められる。「Ⅳ-2a層」は、調査区中央付近に少数認められる。「Ⅳ-2b層」は、10-61～64区に極めて多い。「Ⅳ-2b河道層」は、7～12と61～63ラインの範囲に出土が限られる。「Ⅳ-河道層」は調査区中央付近に認められる。「Ⅳ-川底層」は局所的な出土のあり方を示す。「Ⅳ-3層」は、調査区中央から東側の台地よりのグリッドからの出土が顕著である。「Ⅳ-4層」は、調査区中央から東側に散在的に認められる。「Ⅴ層」は14-78区のみからの出土である。「河道層」・「河床層」は、調査区中央付近に出土が限られる。「砂層」・「旧河道Ⅲ層」・「旧河道Ⅳ層」は、調査区西側部分で散在的に出土がみられる。「互層」は少数の出土である。「旧河道砂層」は、調査区西側部分のグリッドから、多数出土が認められる。「旧河道互層」は、調査区西側部分で散在的な出土のあり方を示す。「旧河道砂層底部」・「旧河道川底砂層」・「旧河道(Ⅳ層)砂層」は、局所的に少数の分布が認められる。「旧河道層位無し」・「旧河道上部砂層」・「旧河道下層砂層」・「河道砂」は、調査区西側部分で散在的に出土がみられる。「河道互層」・「旧河川砂層」は、局所的に少数の分布が認められる。

#### 残存状態 (図V-13)

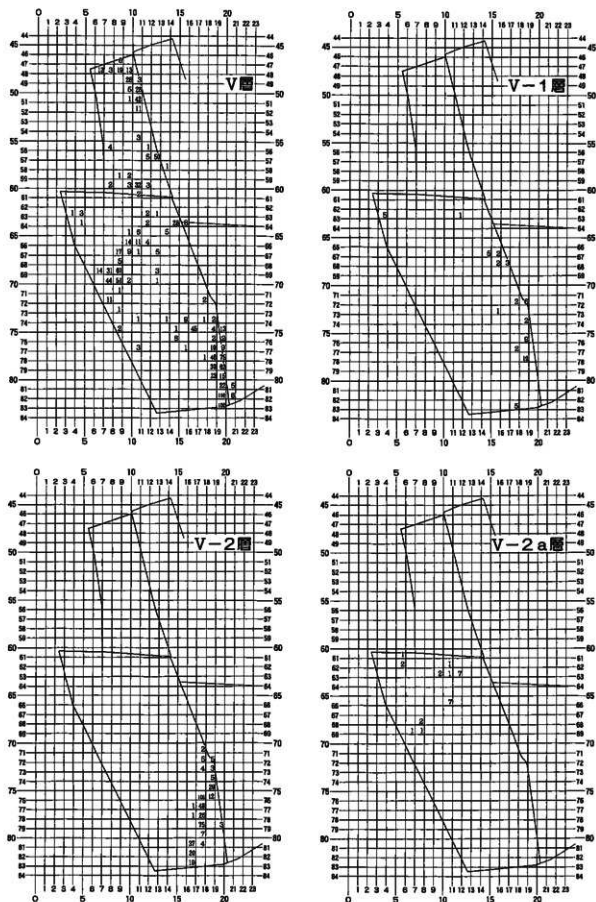
「良好」は、調査区中央付近の10-65・14-66区と、東側の19-82区が際だつが、総出土点数が多い、流路上や台地に接するグリッドに多数認められる。「剥離」は14-66区が際だち、ついで9-48・64区で、東側部分の台地に接する付近にも比較的多く認められる。「磨耗」は、概ね旧河川の位置するグリッドに多く認められる。「小破片」は、調査区西側と中央付近に、点数が極端に際だつグリッドが認められる。



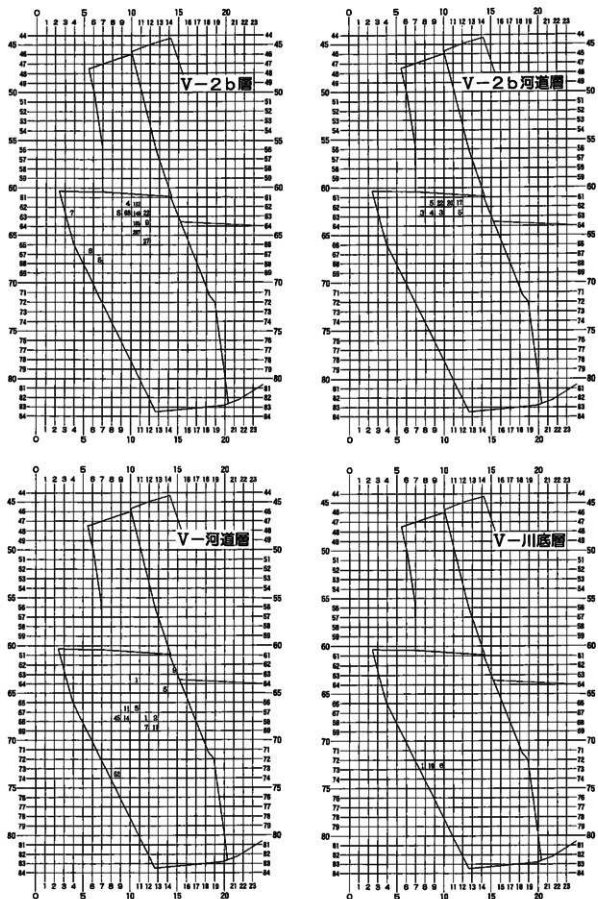
図V-4 低位部包含層土器層別分布図(1)



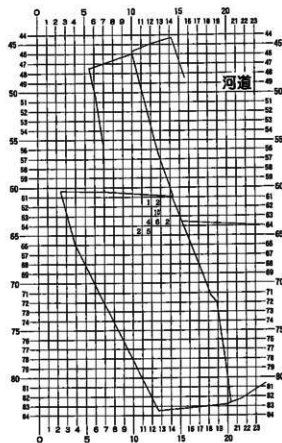
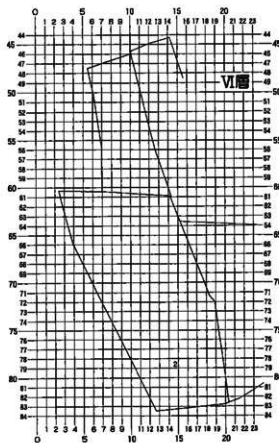
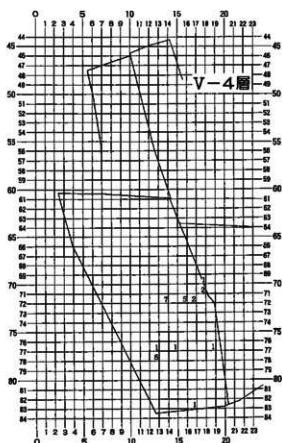
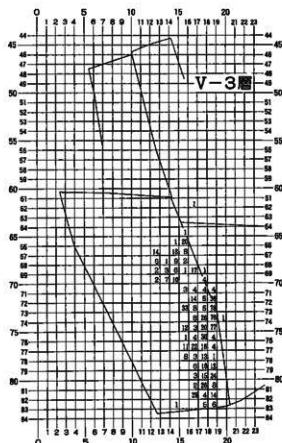
図V-5 低位部包含層土器層位別分布図(2)



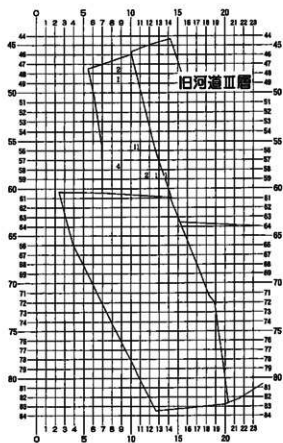
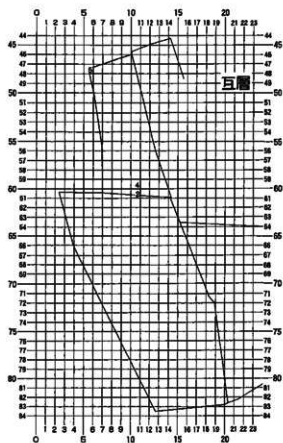
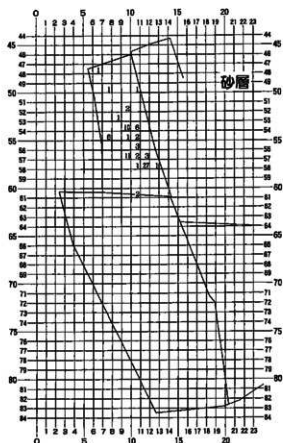
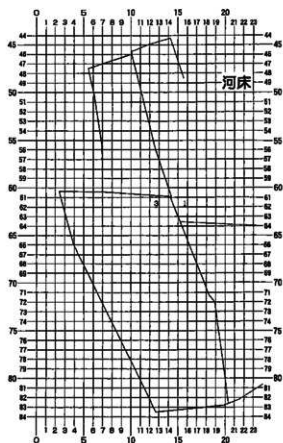
図V-6 低位部包含層土層層位別分布(3)



図V-7 低位部包含層土器層位別分布図(4)

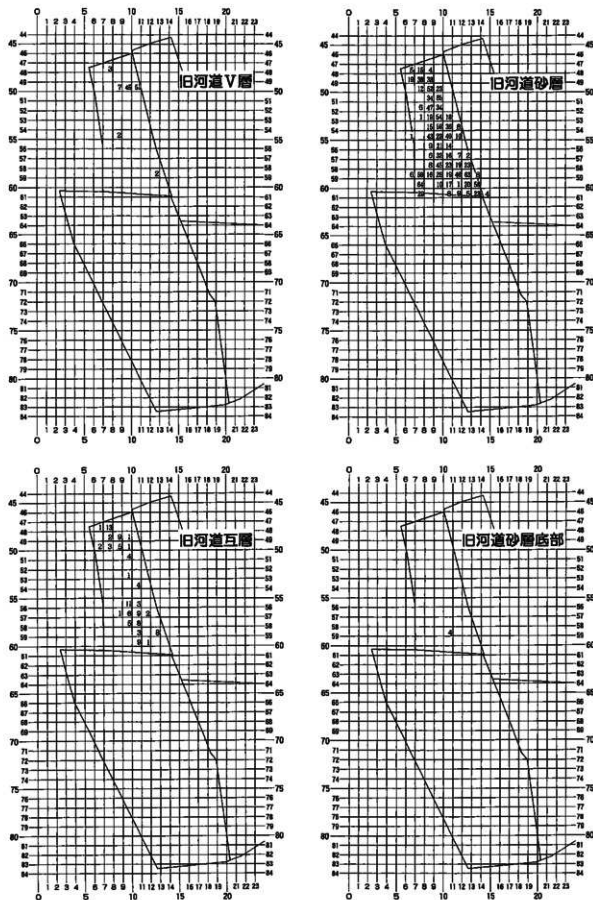


図V-8 低位部包含層土器層位別分布図(5)



図V-9 低位部包含層土器層位別分布図(6)





図V-10 低位部包含層土器層位別分布(7)

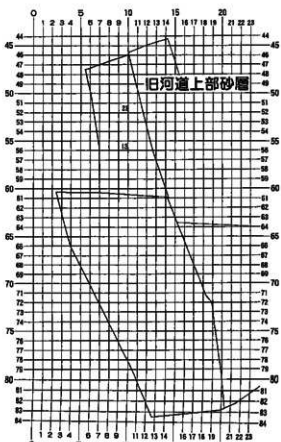
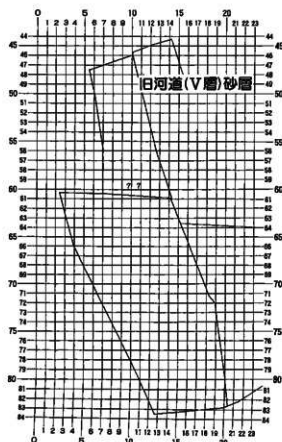
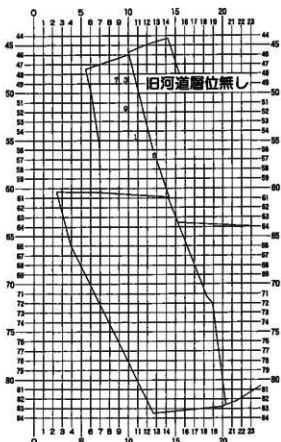
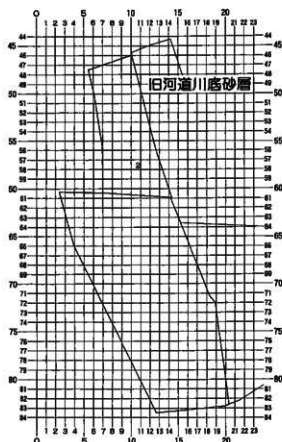
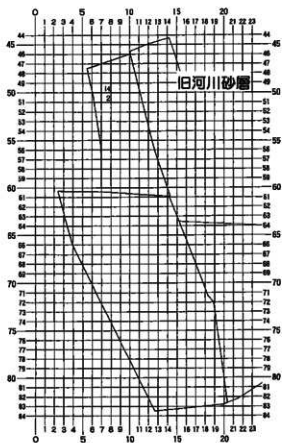
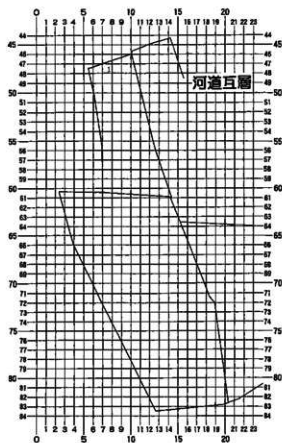
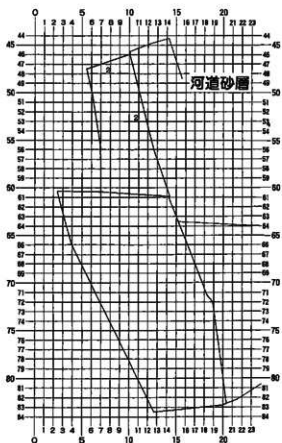
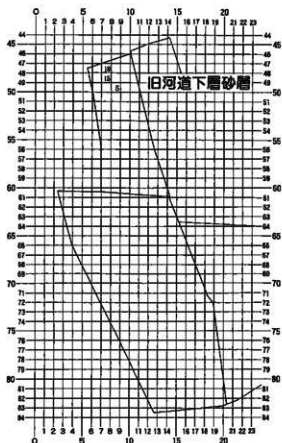


図 V-11 低位部包含層土層層位別分布図(8)



図V-12 低位部包含層土器層別分布図(9)



## (2) 復原土器 (図V-14~15、表V-1・2、図版26・27)

## I群b類【1】

1は緩やかな波状口縁の鉢形土器である。わずかに外反する口縁部から、曲線的に胴・底部へとつながる器形を呈する。平底で器壁の薄いものである。外面の文様は、1段R右巻きとL左巻きの別原体による羽状沈線文と考えられるが、一部、波状を呈する曲線的な条や、横走気味のものも認められる。内面はナデ調整である。胴部に補修孔が1カ所認められる。東銅路IV式に相当すると考えられる。

## II群b類【2】

2は平口縁でやや小型で、直立気味の口縁部から直線的に胴部へとすばまる器形を呈する。口唇部は角形で、ナデ調整が施される。口縁部より下位は無文部分が広く、横方向及び斜めにLR縄線文が施される。斜めの縄線文は、交差して「V」あるいは「X」字状を呈する部分もあるが、全く施さない部分もみられる。その下位は、2本の横環する縄線文を境に、LR斜行縄文が整然と施される。内面は比較的平滑である。柏木川式に相当すると考えられる。

## III群b類【3~6】

3は波状口縁の深鉢で、大きく外反する口縁部から、胴部中位付近まで曲線的にすばまり、そこから底部へは、比較的直線的につながる器形を呈する。波頂部は丸みを帯びた形態で、6カ所有すると推測される。口唇部断面は丸形を呈し、無文帯である口縁部や胴部下半部、内面とともに、丹念なミガキ調整が施される。胴部上半は、LR斜行縄文地に複数の水平沈線文がみられ、隣り合う文様を上下につなぐように、左右横「U」字状の沈線文を描き加えている。最上及び最下位のもの、これが施されない。手稲式に相当するものである。

4は波状口縁で、大型の深鉢である。外反する口縁部から頸部ですばまり、さらに胴部上位でふくらんで胴部下位へとつながる曲線的な器形を呈する。波頂部は6カ所みられ、角のとれた三角形を呈する。口唇部断面は角のとれた角形で、口縁部に無文帯をもつ。口縁に対応する曲線的な沈線文で縄文帯と区画される。それより下位はLR斜行縄文と頸部に水平横環する沈線文が施される。

5は底部で、曲線的に胴部へとつながる器形である。横走・左上がりの条が観察される。磨耗のためやや判然としないが、節の観察から0段は左撚り(r)であると判断される。

4と5は、胎土に粗粒の岩石を多量に含む特徴が類似し、同一個体である可能性が考えられる。ともに手稲式に相当しよう。

6は小型で、器の形状を保ったまま出土したものである。底部から曲線的胴部へとふくらむ器形を呈する。刻み目列と水平沈線文、撚りの異なる別原体による羽状縄文が施される。ホッケマ式に相当すると考えられる。

## V群c類【7~10】

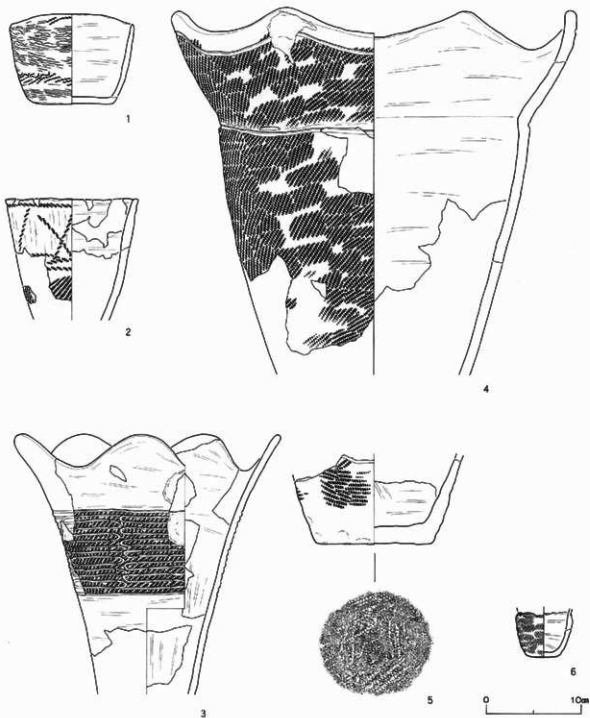
7は中型の深鉢で、1カ所以上の突起部を有する。直立気味の口縁部から胴部中位へとつながり、そこから底部へとすばまる器形を呈する。口唇部は内傾し、切り出し形の断面形態を呈する。口唇部から底部までの外面には、LR斜行縄文が施される。底面にも地文がみられ、やや丸底で不安定である。内面は比較的平滑である。

8は浅鉢で、2あるいは4カ所の突起部を有すると考えられる。大きく外反する口縁部から胴部へと曲線的にすばまり、さらに胴部下位から底面へも曲線的につながり、顕著な丸底を呈する。突起部は若干肥厚し、口唇部と連続してRL縄文と沈線文が施される。外面は斜めの沈線文と2カ所の穿孔が観察される。口縁部はRL斜行縄文地に、横環する沈線文が複数認められる。沈線文は胴部下位と底面との境にも施される。底面の縄文は回転方向を変えているため、羽状を構成する部分もある。内面

は丹念な横方向の調整である。

9はやや大型の深鉢で、直立気味の口縁部から胴部上位へつながり、そこから直線的にすぼまる器形を呈する。口唇部は内傾し断面は切り出し形を呈する。口唇部には摺紐刻み、外面には斜行縄文が施され、原体はともにLRである。口縁部と胴部上位に、補修孔がそれぞれ一対観察される。

10は深鉢の底部と考えられるもので、大きく胴部へと開くような器形を呈する。外面には斜行縄文が施され、内面はナデ調整により生じる、横筋が顕著である。底面には葉脈痕が観察される。



図V-14 低位部包含層出土の復原土器(1)







## (3) 破片土器 (図V-16~22、表V-3~6、図版28~32)

## \*口縁部の破片 [1~62]

## I群a類 [1]

1は、口唇部の内外面にかけて、貝殻腹縁文が観察される。外面には波状、水平、斜めの沈線文と貝殻腹縁文、さらに、突起部下位には刺突文が施される。いずれも貝殻による施文と判断される。虎杖浜式に相当すると考えられる。

## I群b類 [2~15]

2は、器面に矢羽根状に節が並ぶ文様がみられ、その下位には、撚紐の閉端部を押捺した縄端圧痕文とLR斜行縄文が施される。口唇部は、縄端圧痕文により外面に粘土が張り出す。3は、口唇部には撚紐による刻みが観察され、器面には縦位の撚紐圧痕文と横位の組紐圧痕文が施される。4・5は、撚りの異なる原体による羽状縄文が施される。6の地文は、ともにRLを用いた左右巻きの別原体を用いた撚糸文と判断され、口唇部付近と微隆起線文上には、LR撚紐による刻みが施される。7は、微隆起線文間の器面に、左撚り原体を用いた短縄文が施され、8はRL斜行縄文が施される。9は口唇部がわずかに残存する口縁部である。破片中央より下位部分には、「D」の字状の連続する刺突文がみられ、それより上位部分には、2段LとRを用いた矢羽根状の撚糸文と、縦に間延びした「3」の字状を呈する押引文が施され、下位部分に1段LとRをそれぞれ正方向に巻いた絡糸体による撚糸文が観察される。10は外面に、1段R右巻きの絡糸体による横位の圧痕文がみられ、その下位には、R右巻きとR左巻きの別原体による羽状撚糸文が施される。口唇部直下の内面にも撚紐刻み様の文様が認められる。11は、外面にはLR原体による撚紐圧痕文と斜行縄文が、内面にはRL斜行縄文が施される。12は、LとRを並列して左方向に巻き付けた絡糸体による撚糸文が施される。13はRをそれぞれ左右に方向に巻いた絡糸体による施文で、横走気味であるが、羽状を呈する撚糸文が施される。内面は、横方向の条痕文が観察される。14は、口唇部直下の器面に無文部分を有し、L右巻きの絡糸体により横走気味の撚糸文が施される。15は、Lを用いた絡糸体による撚糸文が施され、横走及び右上がりの条が観察される。

2・3は東銅路Ⅲ式、4・5は東銅路Ⅲ式かコッタロ式、6はコッタロ式、7・8は中茶路式、9~15は東銅路Ⅳ式にそれぞれ相当すると考えられる。

## II群a類 [16・17]

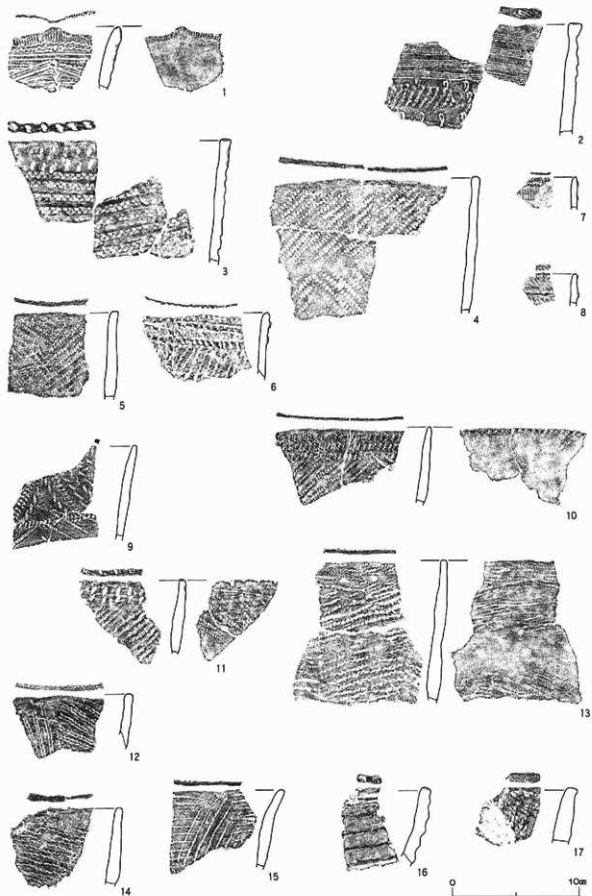
16は横走する幅広い条がみられ、節は観察されない。胎土には多量に繊維を含む。17は、LRによる縦走気味の斜行縄文が施されるが、節は若干不明瞭である。口唇部断面は平坦に整形され、外面側に粘土がみ出す。16は網文式、17は静内中野式に相当すると推測される。

## III群a類 [18]

18は、口唇部直下の肥厚し、8の字状の粘土紐が横位に貼り付けられる。円筒土器上層aあるいはb式と判断される。

## III群b類 [19~28]

19は肥厚する突起部で、口唇部には、半截竹管状工具の曲線部分を用いた、幅広い沈線文が観察される。突起部下の外面には粘土塊が貼り付けられ、同工具による刺突文が施される。20は、口唇部直下の外面に貼付の剥落痕が観察される。口唇部に残る節から、貼付により肥厚させた口唇部には、LR縄文が施されたと推測される。内外面には、LR縄文と突起部から垂下する、同原体による撚紐圧痕文が観察される。21は、横位に3本、縦位に1本の貼付が施され、その上は、爪による施文が認められる。地文は、LRとRLの結束第1種羽状縄文である。22は突起部で、粘土塊を貼り付けた後、半



図V-16 低位部包含層出土の口縁部破片土器(1)

截竹管状工具による平行沈線文が施される。23は、突起口唇部が、指による施文により顕著に凹む。外面には半截竹管状工具による平行沈線文が縦横位に施される。24の口唇部は、半截竹管状工具による施文と判断される。外面には、同工具による刺突文が施された貼付と、地文のLR斜行縄文が観察される。25は、無文地に横位の押引文が複数列施される。工具は二股状であると判断される。26と28は同一個体で、地文施文後、口唇部直下の器面に粘土を貼り付けて、その上に縄線文と捻紐刻みが施される。原体はすべてLRである。27は、口唇部と外面に刺突文が施される。内面には横走る条が観察される。

19は、椀形式と萩ヶ岡2・3式の文様要素が認められるものである。20は見晴町式、21は萩ヶ岡1式、22～24は萩ヶ岡2・3式、25～28は柏木川式に、それぞれ相当すると考えられる。

#### IV群 a 類 [29～31]

29は、LR地文施文後に、外面に縦横位に貼付がなされ、その後、貼付部分にLR斜行縄文が施される。30は擬口縁の可能性のあるものである。口唇部直下の器面は、貼付の剥落痕が認められ、その部分の器面にはLR斜行縄文が施される。貼付上は縄線文が観察される。31は器壁が厚く、胎土には粒径の大きな岩石を含む。器面には、無文部分とLR斜行縄文が施され、円形刺突文も観察される。

29・30は余市式、31はタブコブ式に相当すると考えられる。

#### IV群 b 類 [32～36]

32は波状口縁で、横位の沈線文の下位は、鋸歯状の沈線文が施される。また、補修孔も観察される。33は波状口縁で、破片の上下部分は無文帯である。これらの中央にはLR斜行縄文地に複数の横走る沈線文と、刺突文が縦位に施される。34は、LR・RLの別原体による羽状縄文が施される。35は、口唇部が内外面に張り出し、幅広くなる形態を呈する。口唇部直下の外面には、刻み目列と沈線文が施され、それより下位は無文帯である。36は、口唇部が内面側に張り出すものである。胎土には比較的大きな粒径の岩石が認められる。外面はLR斜行縄文である。

32はウサクマイC式、33は手箱式、35・36はホッケマ式に、それぞれ相当すると考えられる。

#### IV群 c 類 [37]

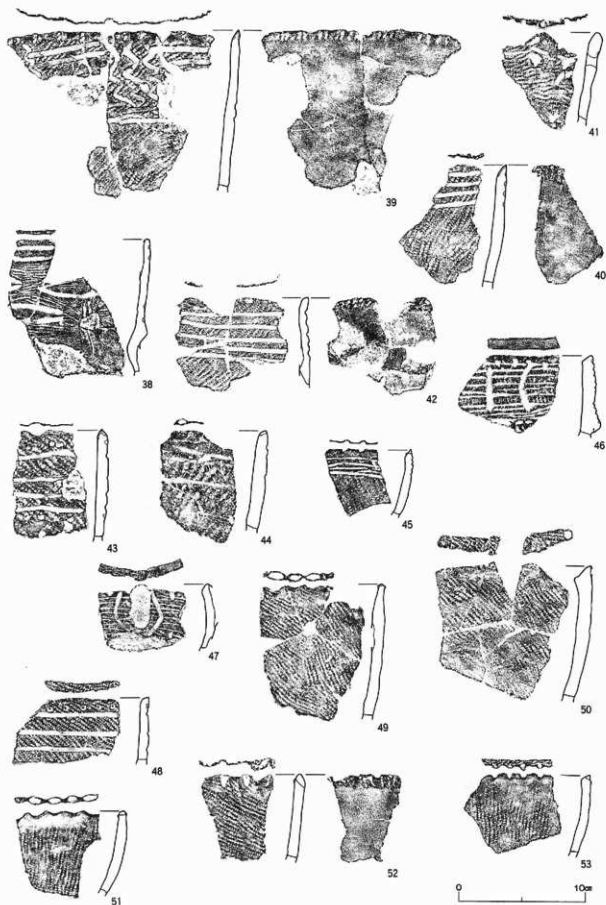
37はLR斜行縄文地に、沈線文、突瘤文、貼瘤文が施されるもので、堂林式に相当すると判断される。

#### V群 c 類 [38～57]

38は、広口壺あるいは特殊な深鉢形と推測したものである。櫛齒状工具によると考えられる条痕文(調整痕?)と曲線的な沈線文が施され、粘土貼り付けによる突起も認められる。沈線文等、器面より低い部分には、赤色顔料が残存する部分もわずかに認められる。39は、口唇部直下の内外面に、縦位に捻紐刻みが施される。外面はLR斜行縄文地に、横位の沈線文と縦位の蛇行沈線文が施される。40は口唇部直下の内面に1段Rの刻みが施され、外面にはLR縄文と沈線文が観察される。41は突起部で、器面には横走るLR縄文、沈線文、穿孔が観察される。42は外面にLR斜行縄文と複数の水平沈線文が施される。43の口唇部断面は切り出し形を呈し、外面は、RL斜行縄文地に沈線文と刺突文が施される。44は地文及び沈線文が浅く施される。45は浅鉢と考えられるもので、縦走気味の縄文地に、工字文風の沈線文が観察される。46は、地文は縦走気味の縄文で、複数の平行沈線文を切るように、曲線的な沈線文が施される。破片の下位には貼付帯が観察される。47は突起部で、貼付の剥落痕が観察される。複数の平行する沈線文と曲線的な沈線文が施される。48は、口唇部にもRL斜行縄文がみられるもので、外面には円形刺突文と沈線文が観察される。49は、RL縄文が施され、口唇部の施文により内面側に粘土がはみ出す。50は口唇部が若干肥厚し、切り出し形を呈するもので、口唇部と外



図 V-17 低位部包含層出土の口縁部破片土器(2)



図V-18 低位部包含層出土の口縁部破片土器(3)

面に斜行縄文が施される。51は口唇部が施文により、小さな波頂部が連続する口縁部にみえるもので、外面は縦走気味の縄文である。52の口唇部は、内面にかけて1段Rの燃紐刻みと外面にかけて棒状工具による刻みが施される。53は、口唇部に縄線文を施した後、外面にかけて燃紐による刻みが施文される。外面は縦走気味の縄文である。54は口唇部にはRL燃紐圧痕文、棒状工具による刺突文、刻みが施される。また、断面図には図示していないが、破片左側下位付近に、穿孔が認められる。55は口唇部に棒状工具による施文により、外面側に粘土がはみ出す。器面にはRL縄文と1段Lによる縄線文が観察される。56は口唇部が内面に顕著に肥厚するもので、1段Lによる曲線の燃紐圧痕文と、棒状工具による刺突文が施される。外面は無文で、器面の凹凸が認められる。穿孔は内面から施したと推測される。57は壺形土器と判断されるものである二叉に分かれる突起部の下位には、A突起状の粘土が貼り付けられ、穿孔が認められる。内外面は、丹念なミガキ調整により器面に明確な段差をつけることで、沈線文状あるいは浮き彫り状に文様が表出される。頸部は無文帯である。

38・45・57は大洞AあるいはA'式に関連すると推測されるもので、55はママチ1類、39・46・47・48・54はママチ2類、43はママチ2～3類、40・41・42・44はママチ3類、56はママチ3・4類に相当すると考えられる。

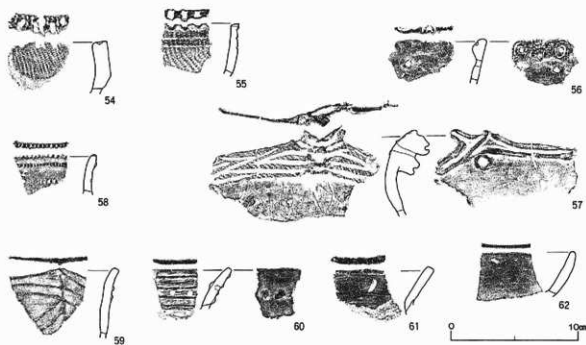
#### VI群 [58・59]

58は口唇部直下の器面に微隆起線文がみられ、そこに、刻みあるいは連続列点文が施される。器面には爪形列点文が観察される。59は磨耗が著しい。波状口縁で、微隆起線文が縦横斜めに展開する。

58は江別太式～後北式、59は後北式に相当すると考えられる。

#### VII群 [60～62]

60は、口頸部に複数の微隆起線文と円形刺突文が施される。内面は明瞭な突瘤が形成される。北大1式と考えられる。61は、甕の口縁部で、横方向の調整が認められる。62は、いわゆる「内黒」と呼ばれる坏である。



図V-19 低位部包含層出土の口縁部破片土器(4)

\*底部の破片 [63~71]

I 群b類 [63・64]

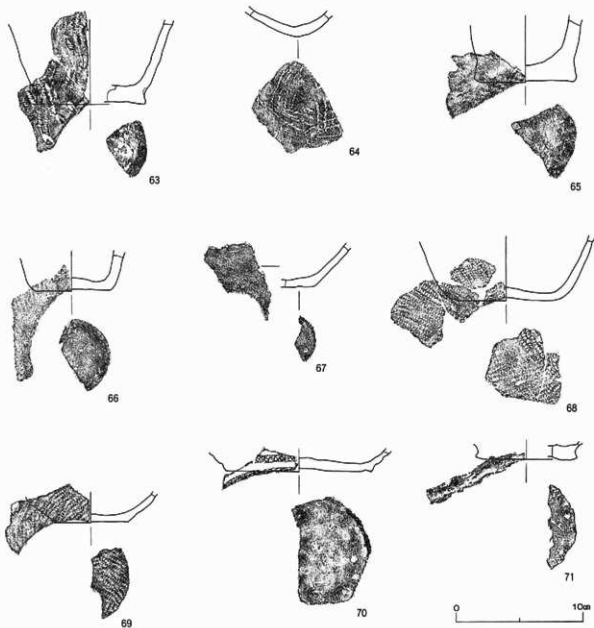
63はLR斜行縄文が施され、底面近くでは縄端圧痕文が施される。64は尖底で、別原体による羽状撫糸文が施される。施文は横方向であるとする、原体は、1段L左巻きと1段R右巻きのものであると判断される。東銅路Ⅳ式と考えられる。

Ⅲ群b類 [65]

65は外面に若干張り出す底部から、胴部へと直立気味につながる器形を呈する。

Ⅳ群b類 [66・67]

66は、底内面の中央付近が緩やかに高まるもので、胴部への角が比較的丸みを帯びる。外面はLR斜行縄文が観察される。67は胴部下位が無文帯で、胴部へと大きく広がる器形を呈する。



図V-20 低位部包含層出土の底部破片土器

## V群c類 [68~70]

68は胴部及び底面にRL縄文が施される。69も胴部及び底面にLR縄文が観察され、内面は調整工具によると考えられる、筋状の痕跡が多数認められる。70は、外面にRL縄文と沈線文が観察される。条は右上がりであるが、節の観察により0段はrと考えられ、RL原体による縦位回転施文と判断される。

## Ⅵ群 [71]

71は底面に葉脈痕が観察される。

## \*胴部等の破片 [72~94]

## I群a類 [72・73]

72は、外面に貝殻腹縁文を施した後、刺突文と沈線文が施文される。73は、外面に、貝殻の腹縁部分を直線的に加工した工具で、貝殻腹縁文と連続する刺突文を施したと判断される。内面は、条痕文らしき横位の筋が、かすかに観察される。

## I群b類 [74~80]

74は、LとRを並列して巻いた絡条体による矢羽根状の捺糸文を施した後、条間に絡条体圧痕文が施される。75は、LR・RL別原体による羽状縄文と、RLによる短縄文が施され、これの上下の器面には、無文部分を有する。76は、微隆起線文が縦横位にみられ、これらの間の器面には、Lの右巻き絡条体圧痕文が施される。77は、曲線的な微隆起線文をもつもので、器面には右巻りの原体による、捺糸文あるいは短縄文が施される。78は、LRを用いた絡条体圧痕文と、Rの左右巻き別原体による、羽状捺糸文が観察される。形状から再生土製品である可能性が考えられる。79は曲線的な条が施されるもので、横走する条は右巻き、左上がりの条は左巻りの捺紐をそれぞれ用いた絡条体による施文である。80は、尖底部に近い部分の破片で、Rを用いた左右別巻きの絡条体による捺糸文が、羽状を呈するように施される。

75は東銅路Ⅲ式~コッタロ式、76・77はコッタロ式~中茶路式、74・78~80は、東銅路Ⅳ式にそれぞれ相当すると考えられる。

## II群a類 [81~84]

81は横走する幅広の条が観察され、条内には節も認められる。82は、尖底近くの部位と考えられる。横走する条が認められ、節の傾きからRL原体と推測される。83は、RL・LR原体による羽状縄文が施される。84はLR原体による横走気味の縄文が施される。

81・82・83は網文式、84は美々7式あるいは美沢3式に相当すると考えられる。

## III群b類 [85]

85はLR斜行縄文地と貼付上に、半截竹管状工具による平行沈線文が施されるもので、萩ヶ岡2・3式に相当するものと考えられる。

## IV群a類 [86]

86は、器面に羽状縄文を施文後、貼付帯が施されるもので、余市式に相当すると考えられる。

## IV群b類 [87~89]

87は注口で、無文部分と縄文部分が認められる。左右巻りの異なる原体による羽状縄文を施文後、曲線的な沈線文で区画している。88も注口で、無文地に曲線的な沈線文が施される。内面は輪積みの痕跡が明瞭に観察される。89は外面が大きく剥離する破片で、沈線文にはさまれた刻み目列が観察される。胎土にはⅥ層のEn-a軽石（粒径7mm程度）が認められる。

88は手稲式、89はホッケマ式に相当すると考えられる。87はⅣ群c類であるかもしれない。



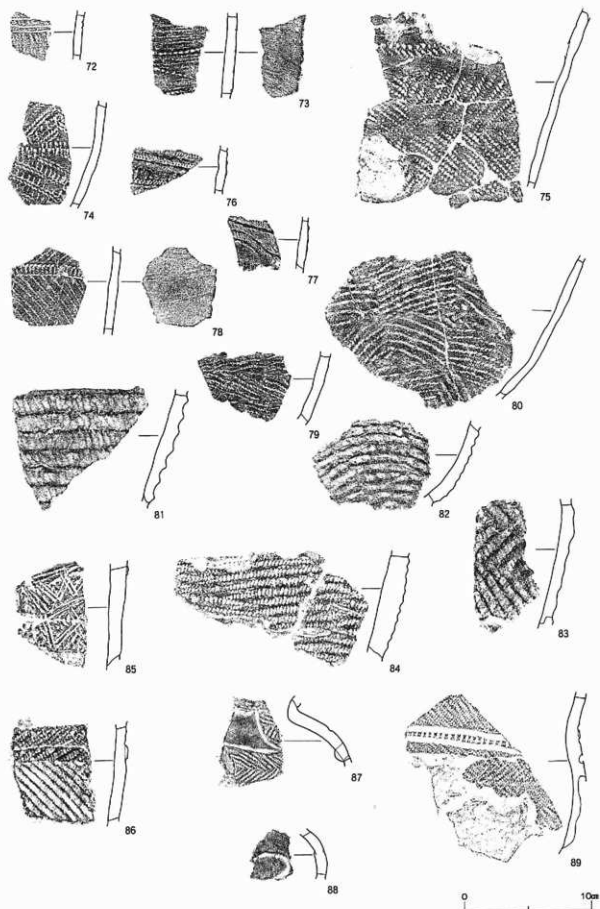


図 V-21 低位部包含層出土の胴部破片土器(1)

## IV群c類 [90]

90は、LR・RL原体を用いた羽状縄文施後、曲線的な沈線文と貼瘤文が施される。

## V群c類 [91]

91はLR原体による施文で、破片の上位は斜行、中央は縦走、下位は横走する縄文が観察される。

## VI群 [92]

92は内面が剥離するもので、微隆起線文と特殊縄文が施される。隆起線上は連続列点文である。後北式に相当すると考えられる。

## VII群 [93~95]

93は、微隆起線文と円形刺突文が施される。94は小型の甕と考えられるもので、円形刺突文は、完全な円形を呈さず、半截竹管状工具を回転させて施文したと判断される。95は横走する複数の沈線文がみられるもので、胴部はハケ目を残す。

93は北大Ⅰ式、94は北大Ⅱ式に相当すると考えられる。

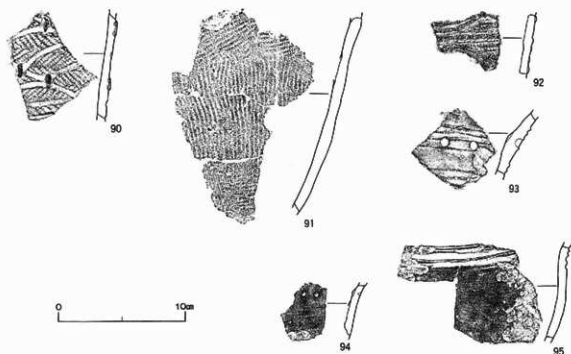


図 V-22 低位部包含層出土の胴部破片土器(2)





## (4) 土製品 (図V-23、表V-7、図版32)

## 耳栓 [96]

96は耳栓と考えられるもので、円柱に見立てると、底面に相当する上下の部分は、円形を呈し中央が凹む。側面は中央が細くなり、2本の沈線文が施される。

## スタンプ状土製品 [97]

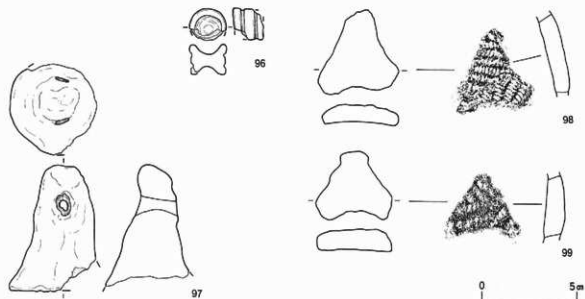
97は、スタンプ状土製品と呼ばれるものである。円錐に見立てると、底面に相当する部分を大きく破損する。側面は、整形による指頭の痕跡が顕著にみられ、頂点寄りには、孔が観察される。

## 再生土製品 [98・99]

再生土製品と考えられる破片は、ある程度認められたが、通常の破片と厳密には区別できない。そんな条件において、人為的な要因無しでは生じにくい形態として三角形が考えられたので、特徴的な例として、この2点を掲載した。

98・99は、土器破片を再利用し製作されたと考えられる再生土製品である。胴部の破片の周縁を打ち欠く等をして、三角形に成形したものと推測される。主に道南地方で知られている、凝灰岩等の軟質な岩石を用いた三脚器に関連するものかもしれない。98は二等辺三角形、99は正三角形で、時期はともにⅢ群b類と判断される。

(末光 正卓)



図V-23 低位部包含層出土の土製品

表V-7 低位部包含層出土土製品観察表

器名	発見地	出土品名	形状	底面形状		側面形状		材質	分類	備考 (説明・図式)	
				形状	寸法	形状	寸法			形状	寸法
96	キウス5遺跡	耳栓	円柱状	1.5cm	1.5cm	中央凹み	2本の沈線文	再生土	Ⅲ群b類		
97	キウス5遺跡	スタンプ状土製品	円錐状	1.5cm	1.5cm	中央凹み	指頭の痕跡	再生土	Ⅲ群b類		
98	キウス5遺跡	再生土製品	二等辺三角形	1.5cm	1.5cm	中央凹み	指頭の痕跡	再生土	Ⅲ群b類		
99	キウス5遺跡	再生土製品	正三角形	1.5cm	1.5cm	中央凹み	指頭の痕跡	再生土	Ⅲ群b類		



表V-9 平成15年度低位部包含層出土土器点数(2)

器名	第一~四層		第一~六層		第七~八層		第九~十層		第十一層		第十二層		第十三層		第十四層		第十五層		第十六層		計
	第一層	第二層	第三層	第四層	第五層	第六層	第七層	第八層	第九層	第十層	第十一層	第十二層	第十三層	第十四層	第十五層	第十六層	第十七層	第十八層	第十九層	第二十層	
1. 土器																					
縄文土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
古墳時代土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平安時代土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
室町時代土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
江戸時代土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2. 土器(破片)																					
縄文土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
古墳時代土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平安時代土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
室町時代土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
江戸時代土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0







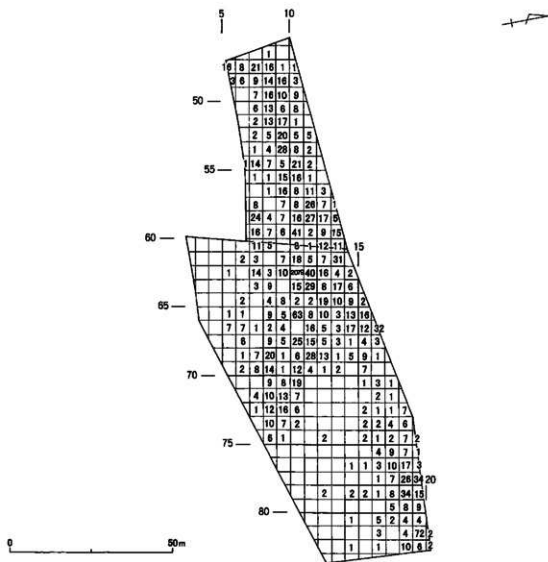
## 2. 石器・石製品 (図V-24~34、表V-12~14、図版33~36)

包含層出土の石器等は平成15年度調査で3,374点、平成18年度の調査では727点、合計4,101点を数える(旧石器を含む)。内訳については一覧表(表V-12・13)に記載してある。

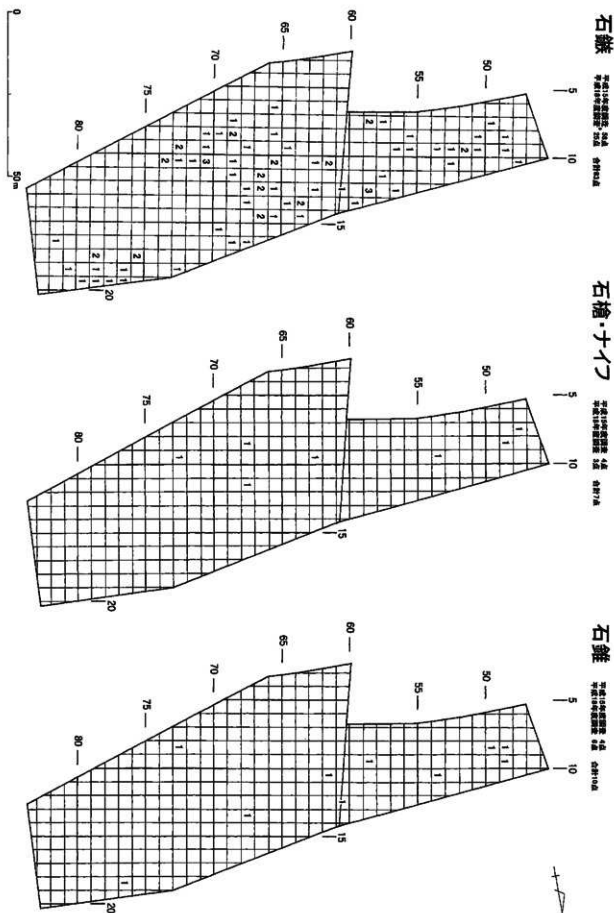
旧河道の河川堆積物が主体の包含層であるため攪乱を受けており、掲載した石器については層位別の抽出はおこなわず、形態的特徴を捉えやすいものにした。分布図(図V-24~29)は出土石器等全体及び器種ごとに作成した。定形石器における破損品の占める割合と破損状況は示していない。破損については人為的なことのほか、洪水攪乱や斜面・河床での回転による自然営力が考えられる。

## 包含層出土石器等全体

平成15年度調査 3,374点  
平成18年度調査 727点 合計4,101点



図V-24 低位部包含層石器 出土分布図



図V-25 低位部包含層石器 器種別出土分布図(1)

両面調整石器

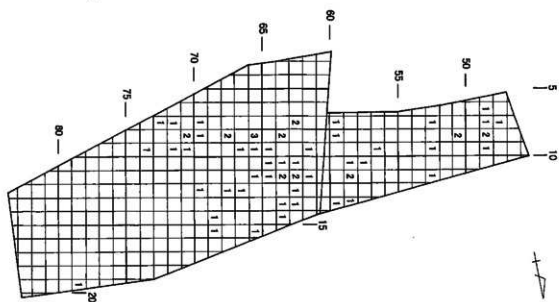
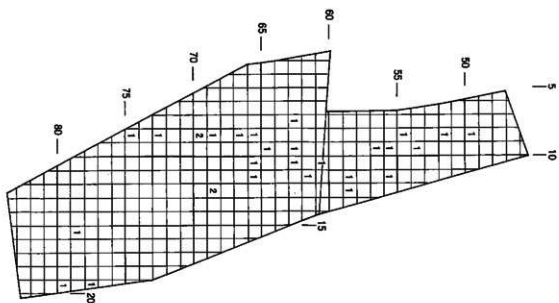
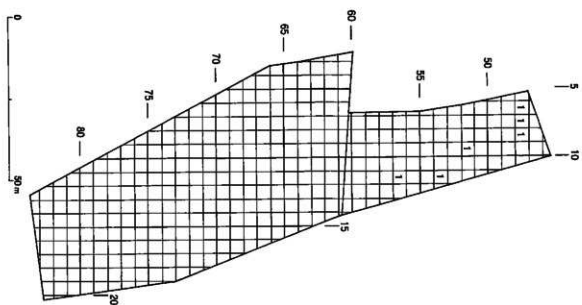
平成16年度調査 4区 全体図

つまみ付きナイフ

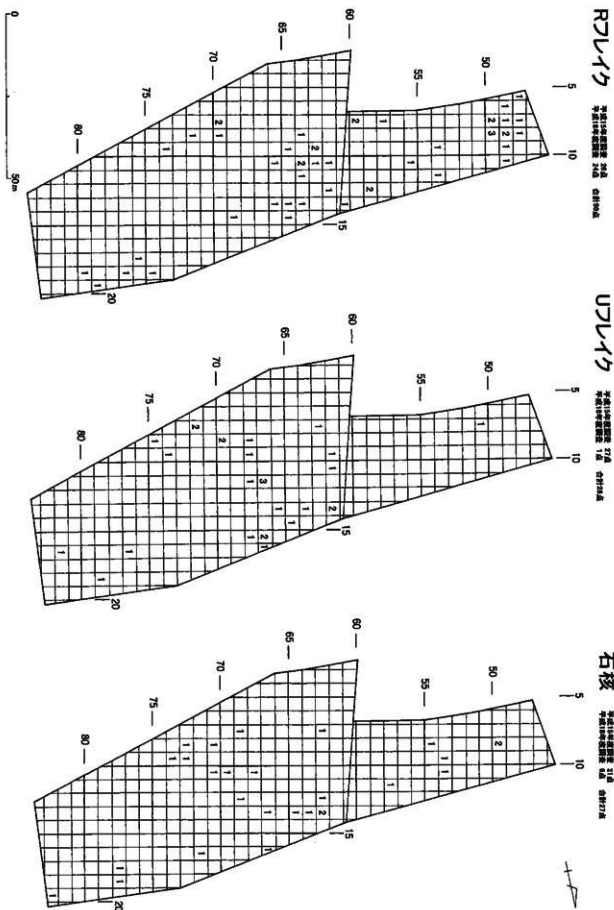
平成16年度調査 20区 全体図

スケイパー

平成16年度調査 20区 全体図



図V-26 低位部包含層石器 器種別出土分布図(2)



図V-27 低位部包含層石器 器種別出土分布図(3)

コレイク

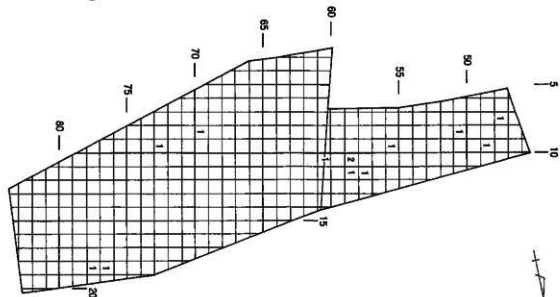
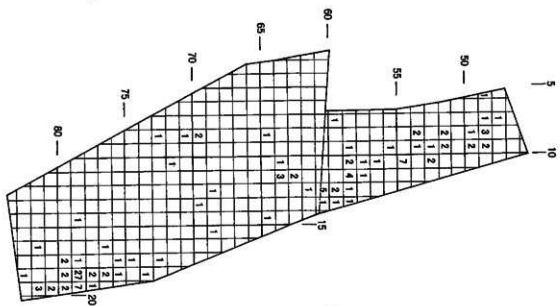
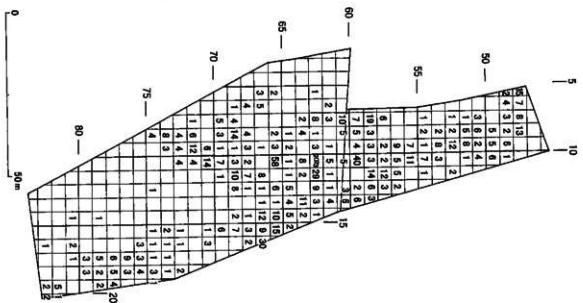
平均100gあたり 200個  
 平均100gあたり 17個  
 合計217個

石斧

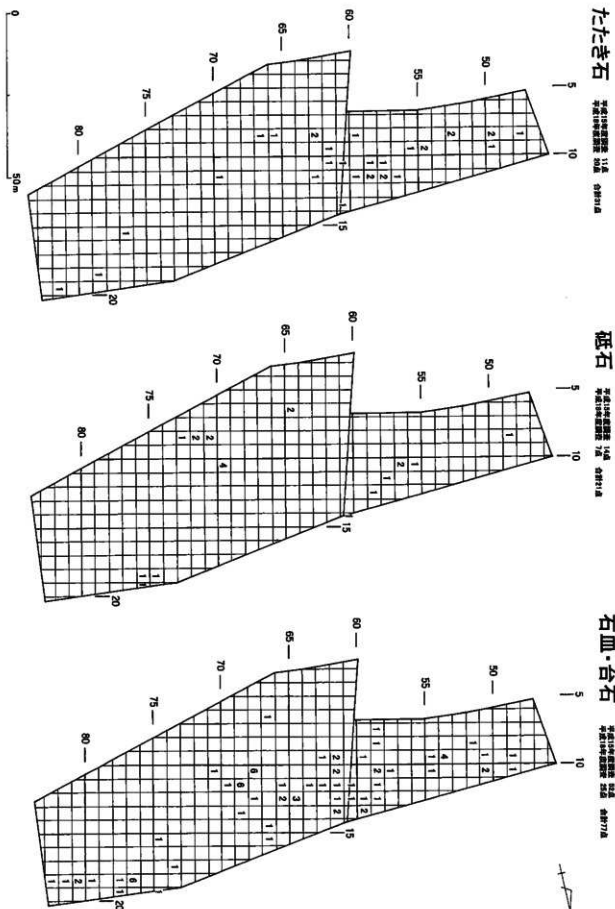
平均100gあたり 7個  
 平均100gあたり 0個  
 合計7個

すり石

平均100gあたり 4個  
 平均100gあたり 0個  
 合計4個



図V-28 低位部包含層石器 器種別出土分布図(4)



図V-29 低位部包含層石器 器種別出土分布図(5)

## 石鏃 (図V-30 1~31)

平成15年度の調査で58点、平成18年度の調査で25点、合計83点出土した。石材は全て黒曜石である。31点を図示した。分布を見てみると調査区南東端の台地斜面下、旧河道とその付近に多い。

1・2は柳葉形のもので、1は平基、2は凹基。

3~14・31は有茎のもの。3は茎が欠損している。4は側縁が二等辺三角形を呈している。先端部はやや内湾している。基部が直線的であり、茎との境が明瞭である。5・6・12は側縁が外湾し、基部と茎の境が明瞭なもの。5は剥片の周縁に両面から調整し成形されている。6は側縁が先端部~茎にかけて左右非対称である。7~14は基部と茎の境がやや不明瞭なもの。7は階段状剥離をもつ粗雑な剥片の周縁に両面から粗い調整で成形されている。9・10は両側縁と基部から茎にかけて左右非対称である。11は菱形に近く、茎が短いもの。調整は丁寧である。13は剥片両面の周縁に調整されている。31は比較的大型のもの。先端部は中心軸からずれており、両側縁がわずかに内湾する。基部との境は比較的明瞭である。表面には原石面が残る。

15は円基のもの。

16~23は無茎平基のもの。長幅比1.3~1.8の二等辺三角形を呈している。16・18~20は素材剥片の剥離面が残る。18は先端をわずかに欠く。19・20は背面に片面調整、腹面は先端から側縁(19)、先端と基部のみ(20)に調整が加えられている。21は先端が中心軸からわずかにずれている。

24~30は無茎凹基のもの。長幅比1.8~2.6の二等辺三角形を呈している。24は先端と基部の一端を欠損する。先端部の角度は鋭角で、側縁が直線的になっている。25・30は背面が片面調整で、腹面は周縁の調整によるもの。26は両側縁がわずかに左右非対称、27・28は両側縁が外湾している。共に先端が中心軸からずれている。29は側縁がわずかに左右非対称である。先端は鋭角である。

## 石槍・ナイフ (図V-30 32・33)

平成15年度の調査で4点、18年度の調査で3点、合計7点出土した。石材は黒曜石が6点、頁岩が1点である。分布を見てみると、旧河道跡に点在していた。2点を図示した。

32は先端部と茎を欠損する。基部と茎の境は明瞭である。両側縁は非対称で内湾している。頁岩製。33は片面に両側縁の急角度の調整により先端から茎にかけて明瞭な稜をもつ。裏面は平坦である。黒曜石製。

## 石鏃 (図V-30 34~38)

平成15年の調査で4点、18年度の調査で6点、合計10点出土している。石材は全て黒曜石である。分布を見てみると、旧河道とその周辺から多くみられた。5点を図示した。

34・35の頭部は背面に片面調整、腹面は周縁に調整が加えられている。機能部は両面からの調整である。36~38は剥片の一端に調整を施し機能部としている。

## 両面調整石器 (図V-30 39)

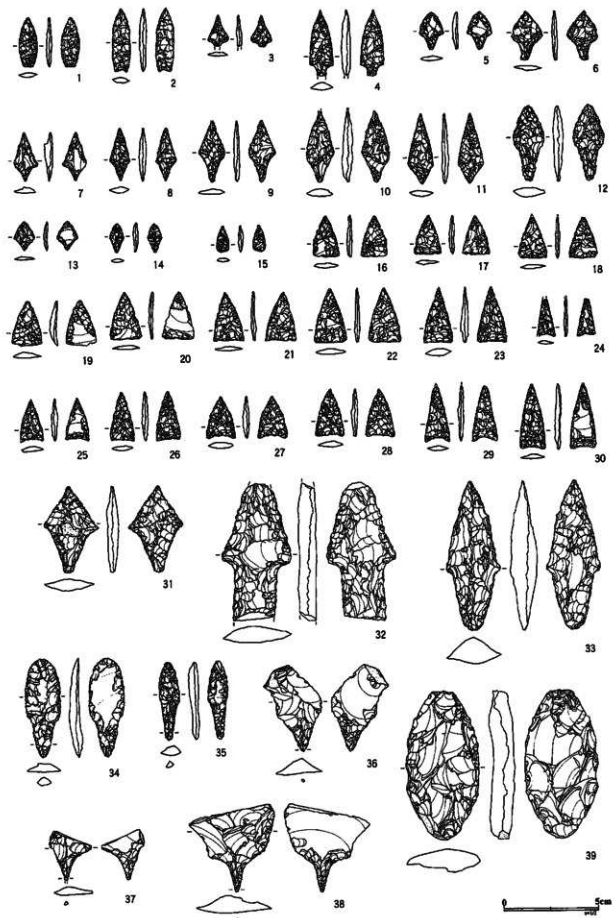
平成18年に6点出土している。分布を見てみると、旧河道に点在している。全て黒曜石製である。1点を図示した。

39は長軸の両端に原石面を残している。さほど大きくない原石から素材をとり、両面調整体を作り出してから背面側の両側縁に刃部が作られている。

## つまみ付きナイフ (図V-31 40~53)

平成15年の調査で20点、18年の調査で10点、合計30点出土した。石材は頁岩18点、黒曜石10点、チャート2点である。分布を見てみると、旧河道とその周辺に多く、調査区南東端の台地斜面下に点在する。14点を図示する。石材は41がチャート、53が黒曜石でそのほかはすべて頁岩である。





図V-30 低位部包含層出土の石器(1)

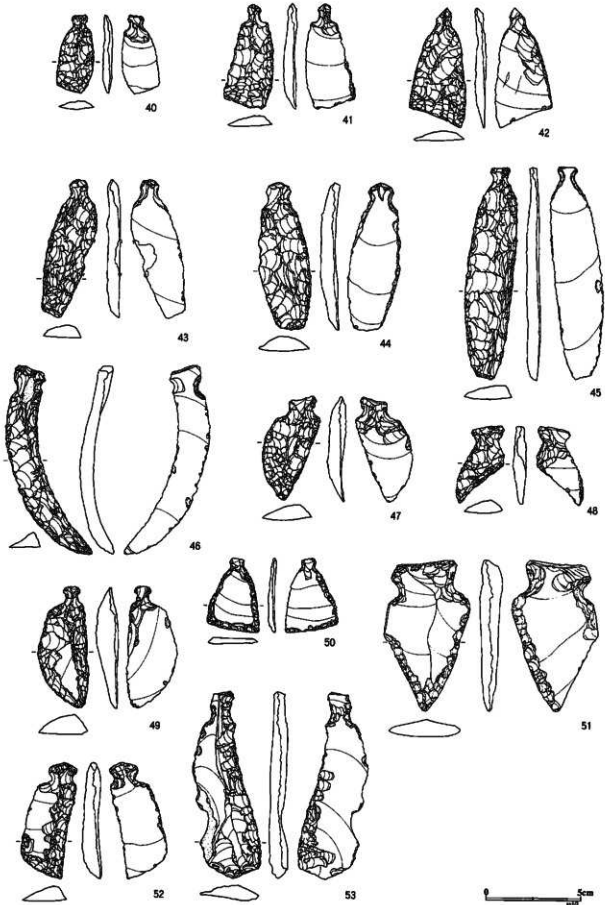


図 V-31 低位部包含層出土の石器(2)

40～48まで背面に片面調整されているもの。40～42は両側縁と下端に幅広の刃部がある。3点共に薄手で、刃部は鋭角になる平行調整によるものである。43～45は両側縁と下端に幅の狭い刃部があるもの。刃部の調整は先のものに比べ急角度である。44～48の刃部は図を正面とし、左側は鋭角、右側は急角度である。46は三日月形を呈している。

49～51は剥片の縁辺に調整が加えられ刃部としているもの。49は刃部がやや急角度になる。50の刃部はやや鋭角で、剥片背面の両側縁と下端に調整が加えられている。51は下端が尖る。刃部は背面の両側縁と右側縁の裏面に作られている。

52・53は剥片背面の片縁を刃部としているもの。52の刃部は急角度で、下端にもやや幅の広い刃部がある。53は素材となる剥片の打面側を下にし、遠端部につまみ部が作られている。腹面の片縁にも調整が施されている。

#### スクレイパー（図V-32 54～64）

平成15年度に42点、18年度20点、合計62点出土している。分布を見てみると、旧河道とその周辺に多くみられる。石材は黒曜石が最も多く56点、頁岩6点の出土である。11点図示した。63は頁岩製、それ以外は黒曜石製である。

54・55は片面調整のものに刃部があるもの。54は剥片の腹面に片面調整が施され、左側縁と右側縁の中央から下端にかけて両面から調整が加えられ刃部としている。上端には原石面が残る。55の刃部は剥片の周縁にあり、急角度である。

56はエンドスクレイパー。原石面が残る厚みがある剥片の下端に急角度の刃部がつけられている。背面の左側縁にも調整が加えられている。

57はナイフ形のもの。背面に2本の稜を持つ縦長剥片の両側縁に、急角度の平行調整が施されている。右側縁は片縁すべてに、左側縁は中央より下に調整が施されている。腹面からは基部調整が施されている。

58～60は剥片の周縁に調整が施され刃部が作られているもの。58は剥片腹面の片面周縁に急角度の刃部が作られている。59は両面から調整が加えられている。60は原石面が残る剥片の両面から調整が施されている。

61～64まで縦長剥片の片縁もしくは両側縁に刃部が作られているもの。61は背面の両側縁、62・63は背面の左側縁に調整が施されている。64は腹面からも調整が加えられている。いずれも刃部は鋭角である。

#### 石斧（図V-33 65～69）

平成15年度の調査で67点、18年度調査で49点、合計116点出土している。未製品、石斧原石、擦切り残片等を含むと129点出土した。石材は泥岩が最も多く42点、次いで緑色泥岩24点、片岩17点、砂岩5点、蛇紋岩2点、粘板岩2点、チャート1点、不明23点である。分布を見てみると、縄文時代の遺構が多く検出された台地部の斜面下に多くみられる。5点図示した。

65～69まで磨製石斧。65はのみ状のもの。使用により、刃縁をわずかに欠いている。66・67は短冊状で、68は撥形のもの。69は刃部にたたき痕がある。

#### すり石（図V-33 70～73・図V-34 74・75）

平成15年度調査で4点、18年度調査で9点、合計13点出土した。石材は砂岩が最も多く6点、次いで泥岩2点、安山岩1点、不明3点である。分布を見てみると、旧河道からの出土が多い。

70・71は断面三角形のすり石。歪角礫の弦を擦り面としている。

72・73は北海道式石冠。ほぼ全体的に敲打調整により成形されている。72は擦り面のエッジ部分を

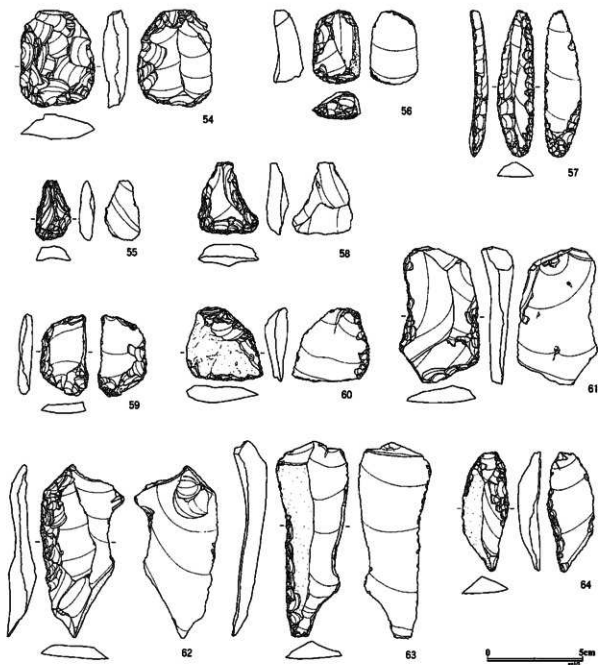


図 V-32 低位部包含層出土の石器(3)

打ち欠いた後に使用されている。機能面の一定幅を確保するための調整かと推測する。73は破損品。

74・75はやや不整な球形をしているもの。敲打後に擦っている。

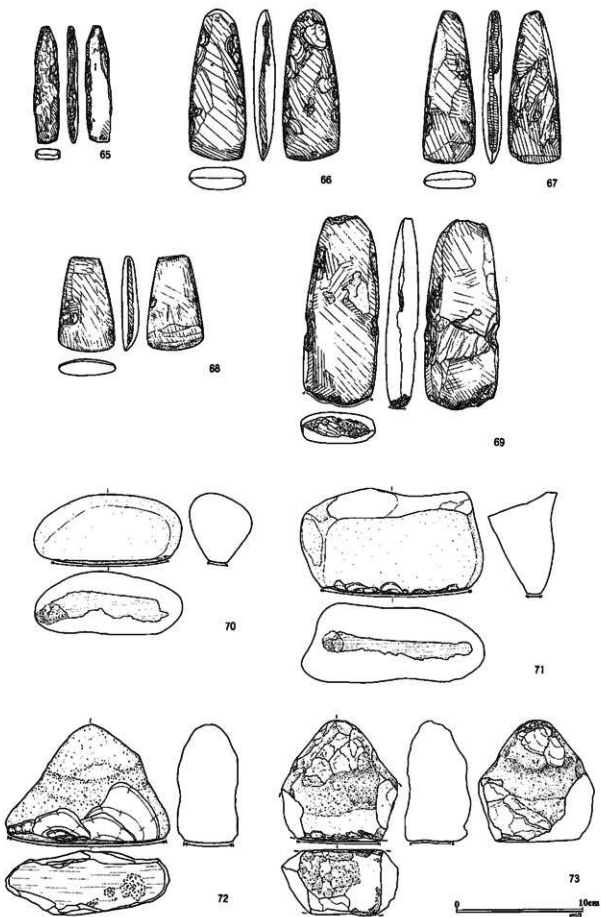
たつき石 (図 V-34 76)

平成15年度の調査で11点、18年度の調査で20点、合計31点出土している。石材は砂岩が最も多く14点、次いで安山岩10点、泥岩5点、凝灰岩1点、緑色泥岩1点である。分布を見てみると、平成18年度調査の旧河道から多く出土している。1点を図示した。

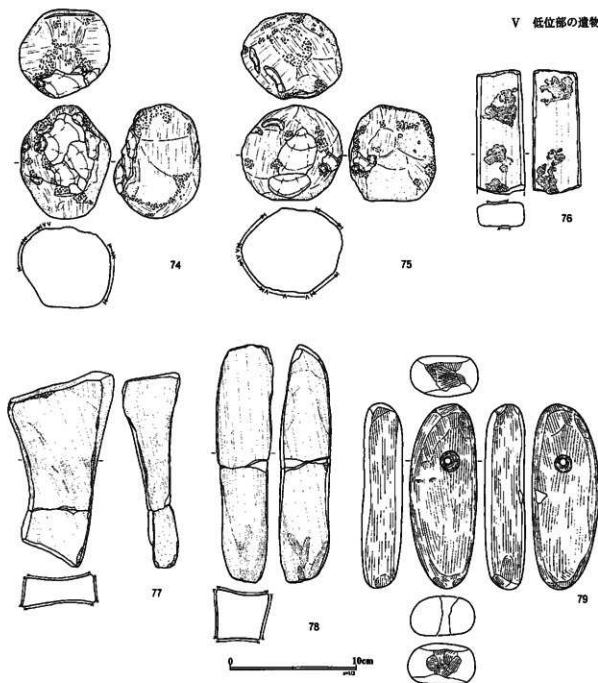
76は砂岩で棒状の礫に蔽き痕があるもの。

砥石 (図 V-34 77・78)

平成15年度の調査で14点、18年度の調査で7点、合計21点出土している。石材は砂岩が最も多く14点、



図V-33 低位部包含層出土の石器(4)



図V-34 低位部包含層出土の石器(5)・石製品

泥岩7点である。分布を見てみると、調査区内に点在していた。2点を図示した。

77・78は四面砥石。共に砂岩製。78は端に浅い溝状の擦痕が数条観察できる。

石製品(図V-34 79)

平成18年調査で79の大珠が1点出土した。長さは14.5cm、重さは430gを測る。敲打調整後、研磨により成形されている。長軸上の中央よりやや上に、両面から穿孔されており、貫通している。石材は駒アースサイエンス加藤孝幸氏の内眼観察により緑泥石岩であることが考えられることをご教示頂いた。出土状況は旧河道の河床堆積物である川砂からであり、層位的に認められないことに加え、本遺跡の過年度の調査や周辺の遺跡でも類例がみられないことから、この大珠の時期を特定することは難しい。道内及び東北地方の類例から縄文時代中期～後期後葉に属するものと思われる。

(袖岡 淳子)







### 3. 後期旧石器 (図V-35、表V-13・15、図版36)

旧石器時代の遺物は、旧河道の砂層などから5点出土している。出土地点と同じグリッドでは縄文時代以降の土器や石器と混在した状況で出土しているが、石器の形状、素材や調整のあり方などから旧石器と判断した。5点出土で内訳は、細石刃核1点、細石刃核剥片1点、彫器1点、搔器1点、削器1点である。出土区は7-47区と9-47・48区に限られており、平面分布では近接している。ただし、出土層位が異なるものが多い。時期に関しては、忍路子型細石刃核が1点(80)出土しているため、少なくとも細石刃石器群の時期は含まれている。また、細石刃核の石器も出土している。ただし、多くが旧河道の堆積層からの出土のため、同一の石器群を形成していたかどうかは不明である。なお、平成18・19年度の調査時に、キウス5台地部において、忍路子型細石刃核を伴う石器集中(SB-1~3)が検出されている(未報告)ため、これらと関連している可能性もある。

80~84は旧石器である。石材は80~83が黒曜石で、84のみ頁岩である。黒曜石は全体的に表面がやや風化し、透明度が低い。

80は細石刃核である。小型で、長さは約2.5cm、細石刃剥離作業面の長さは約1.4cmである。左右両面共に細かい平坦剥離で構成されている。打面には4回削片を剥離した痕跡がある。作業面には細石刃の剥離痕が8本見られる。一番右側の細石刃の剥離を行った時に、打面側にも剥離が及び、そこで細石刃の剥離を終了している。細石刃核の大きさ、両面調整体が母型と考えられることや打面がほぼ石核長軸に沿っている点などから、忍路子型細石刃核と考えられる。

81は細石刃核剥片である。1点のみの出土であり、細石刃と断定しがたいため、細石刃核剥片とした。下部を欠失し、左側縁には連続した微細な剥離痕がみられる。幅が約7mmあり、80の細石刃核の剥離痕とは一致しない。82は彫器。素材は縦長剥片で、背面に原礫面を一部残している。素材の打点側に左刃の彫刀面を作り出している。彫刀面は腹面側に傾く。

83は搔器である。石刃を素材とし、末端部側に刃部がある。刃部は背面右側縁下部から末端部側にかけてやや粗い加工により作り出され、左右非対称である。また、背面の周縁部には細かい2次加工が施される。84は削器である。石刃を素材とし、下部をわずかに欠失する。背面右側縁には急角度の2次加工が施され、刃部を作り出している。背面左側縁には細かい2次加工が施されている。

(広田 良成)

表V-15 低位部包含層出土旧石器一覧

種別	No.	器種名	発掘区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
図V-35	80	細石刃核	7-47	砂層	1.35	2.50	0.65	2.55	黒曜石	忍路子型細石刃核
図V-35	81	細石刃核剥片	9-47	Ⅲ	(1.80)	0.70	0.30	0.22	黒曜石	
図V-35	82	彫器	9-48	互層	(3.65)	1.90	0.70	4.49	黒曜石	旧河道出土
図V-35	83	搔器	7-47	砂層	5.35	2.10	1.00	5.50	黒曜石	旧河道出土
図V-35	84	削器	9-48	互層	(5.65)	1.45	1.20	7.82	頁岩	旧河道出土

## 旧石器

平成10年度調査 5区 合計6点

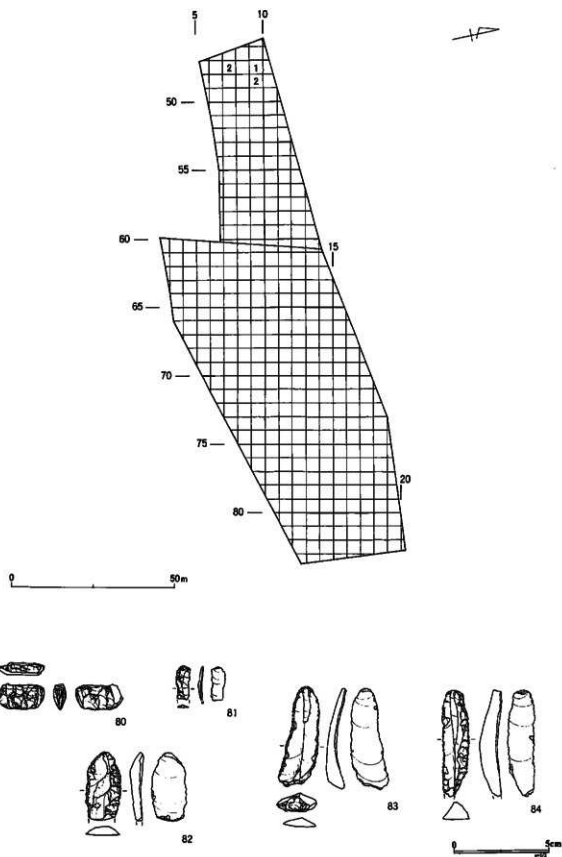


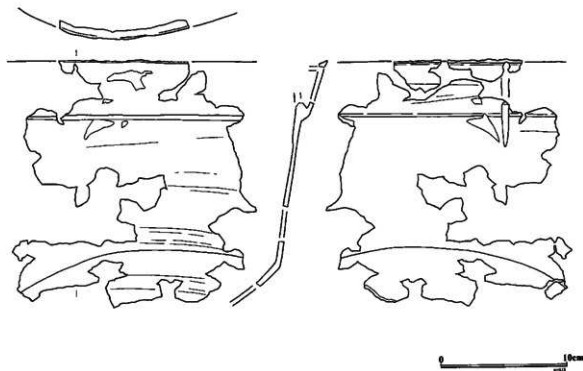
図 V-35 低位部包含層出土の旧石器

## 4. 鉄製品 (図V-36、図版36)

キウス5遺跡低位部から出土した鉄製品には、平成18年度に旧河道河床付近から数片に割れて発見された、内耳鉄鍋破片1点がある。水漬きの砂層中に埋藏されていたために劣化は著しく、多孔質化し非常に軽量になっている。本来あったカーブも伸び広がった状態である。

保存処理を施し復元すると、口縁から胴部～底部の変換点まで、全体から見れば一削弱の破片であった。段で区画された口縁部内側に吊り用の耳がかろうじて残存しており、内耳鉄鍋と判断できた。耳は上端から肩部が欠損しているが、その下部が段を越えて胴部にまで長めにかかるのが特徴的である。底部の大半は欠損しており、湯口も残っていない。

前述の状況で径の復元は難しいが、胴部の高さや口縁部の幅からみると径35cm前後と推定でき、容量5升炊きの鍋と捉えておく。15～17世紀の所産と思われ、対岸のキウス9遺跡のアイヌ文化期平地住居との関連が想定される。(財北海道埋蔵文化財センター2008『千歳市キウス9遺跡』北埋報252を参照) (三浦)



図V-36 低位部包含層出土の鉄鍋

## 5. 木製品

### (1) 出土状況

キウス5遺跡低位部から出土した木製品は、平成15年度に196点、18年度に108点の総計304点である。これらは出土した位置（旧河道や層）、特徴から、縄文時代に属すると思われるもの48点と、擦文文化期以降（主としてアイヌ文化期）のもの256点に分けられた（表V-18~23）。

ほとんどがキウス川に流され浮遊していたものと思われ、旧河道中やそれを覆う河川堆積物層から出土している。浮遊状態から水が引き土砂堆積で埋もれるか、洪水などで土砂とともに流されて埋もれた状態とみられ、砂層や砂と粘土の互層から出土するものが多い。このような状況では、層の上下による時期判定は困難であり、実際縄文土器や石器の出土する層でもアイヌ文化期と思われる木製品が出土することがしばしばであった。

時期的な出土状況の概略をみると、縄文時代でも当該期の河道に沿った出土がみられる（図IV-37）。数は多くないが、縄文時代早期の河道を覆う層ではキウス型木槌が出土した8-69区周辺に、前期以降の河道では9-73区河道周辺に、それぞれまとまった出土がみられる。

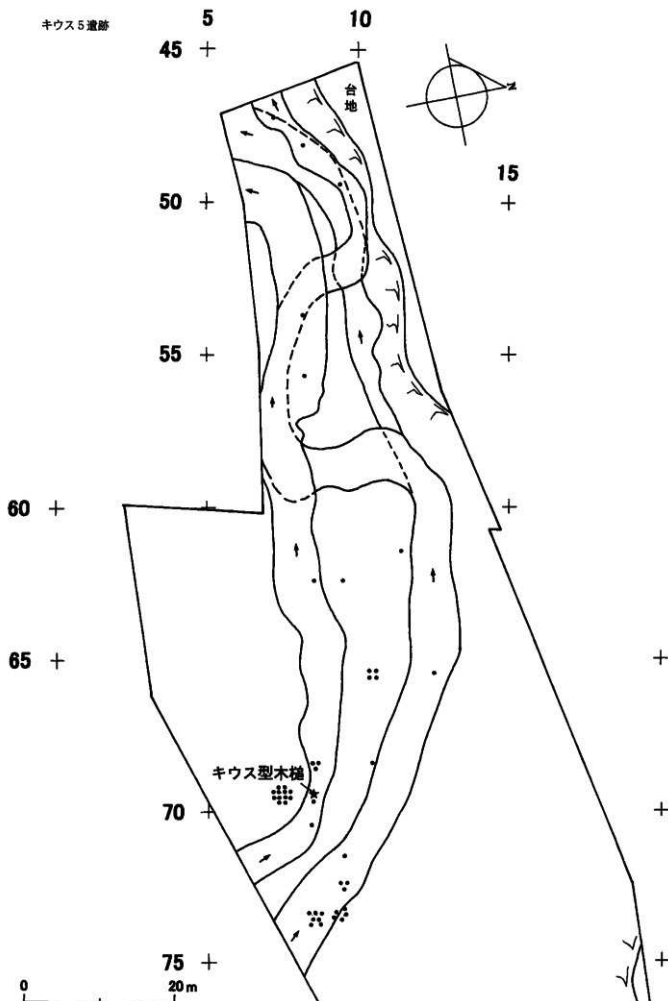
擦文文化期からアイヌ文化期・近世（図V-38）では、両期の河道が分かれる西半分の状態から見て、ほぼ同一の河道であった中央部から東半の出土木製品も、ほとんどが近世アイヌ文化期の所産とみて差し支えないだろう。おおよそ万遍なく河道に沿って出土するが、点々と集中区があることもわかる。おそらく水流の溜りが長年のうちに点々と存在し、そこに木製品が溜って埋まったものと思われる。図V-38のうち主要な製品を記号化して示したのが図V-39である。少し上流部にあったと推定される当該期の集落や当遺跡の畑・建物跡を出自とする木製品群であろう（Ⅵ章2節参照）。また、一部は当遺跡の擦文期集落や、キウス9遺跡の擦文・アイヌ期集落（跡北海道埋蔵文化財センター2008『千歳市キウス9遺跡』北埋調報252を参照）からの木製品とも考えられよう。

図V-40は09-56区の木製品出土状況図である。大小長短の木製品（大型は建築部材等）が、自然木と混在して検出される状況がわかる。川岸近くに材が溜った状態であろうか。もしくは267・268のように川縁に張り付いた状況を見ると、この図中にある製品が、川岸上の畑や建物跡（UH-6）から脱落したか、川縁に送られた可能性も見いだせる。

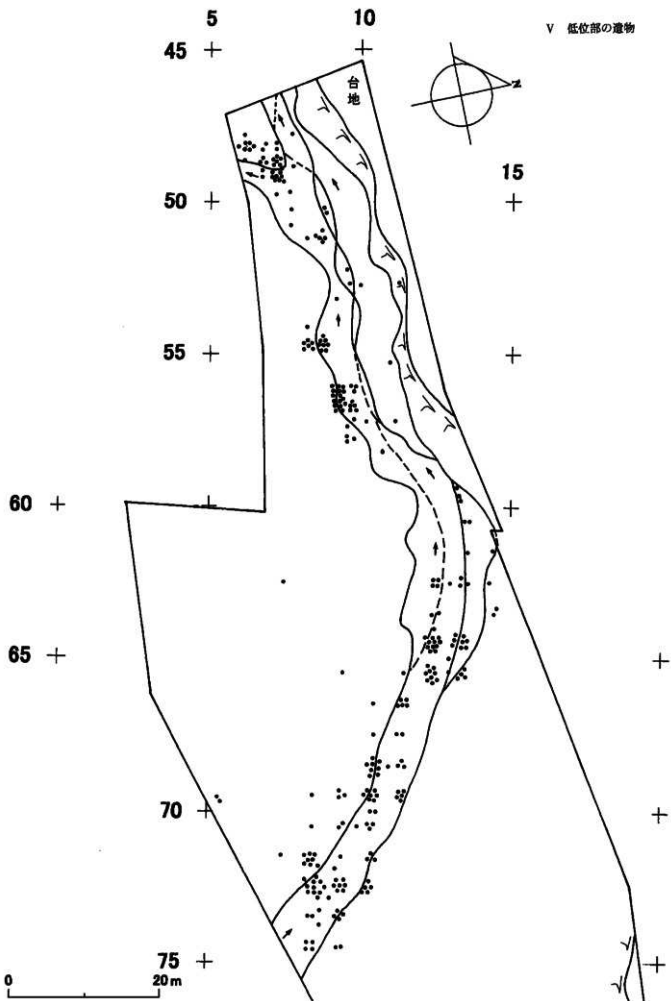
### (2) 木製品分類と一覧表について

木製品の器種分類は、基本的に現在進行中のプロジェクト「遺跡出土木製品データベースの構築」（代表：伊東隆夫・山田昌久）における「日本列島出土木製品分類案」を使用した。ただし、日本列島他地域と北海道では時期区分や木製品の器種に明らかな相違や多様性がみられるため、北海道独自案として、（跡北海道埋蔵文化財センターが調査・報告した小樽市忍路土場遺跡（『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北埋調報53）・千歳市美々8遺跡（『美沢川流域の遺跡群XV・XV・XVI・XVII・XX』北埋調報69・77・83・102・114）・千歳市ユカンボシC15遺跡（『千歳市ユカンボシC15遺跡1』(3)~(6)北埋調報128・146・159・176・192）の器種分類を参考に加筆し、これをプロジェクトに報告済みである。今後、出土木製品の分類は、この分類案を基軸に進められるものと考えことから、今回の報告ではデータベース発表と軌を一にして新分類案を使い報告する。表V-18~23の出土木製品一覧表のうち【分類群】【器種名】【器種細分名】の3項目が、これにあたる。なお、表V-16・17には新分類案のうち北海道に関係ある部分を抜粋して示してある。

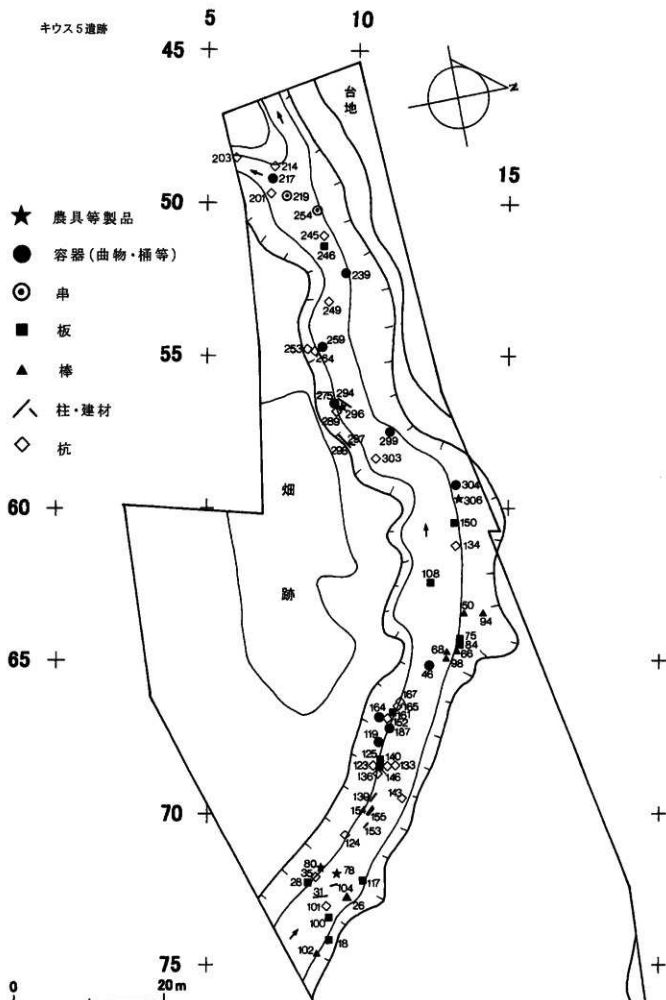
キウス5遺跡



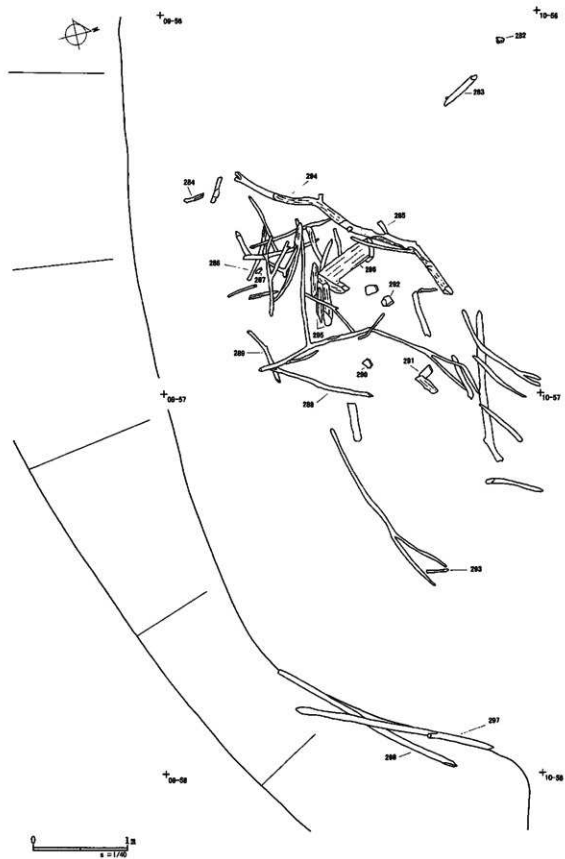
図V-37 低位部包含層出土 木製品分布図(縄文時代)



図V-38 低位部包含層出土 木製品分布図(縄文~アイヌ文化期)



図V-39 低位部包含層出土 主要木製品分布図(縄文~アイヌ文化期)



図V-40 低位部包含層09-56区 木製品集中出土状況図





表 V-17 日本列島出土土製品分類 北海道関係(2)

分類部	品名	器種別名1	器種別名2	分類部	品名	器種別名1	器種別名2
食器具	釜			陶器・磁器	丹戸	割置き	
	盆				丹戸飯	割置き	
	鉢	土製				割置き	
	鉢	土製				割置き	
	鉢	土製				割置き	
	鉢	土製				割置き	
	鉢	土製				割置き	
	鉢	土製				割置き	
	鉢	土製				割置き	
	鉢	土製				割置き	
茶道具	茶碗			木製	茶碗(楕)		
	茶碗				茶碗		
	茶碗				茶碗		
	茶碗				茶碗		
酒器	酒呑			【器種あり】			
	酒呑						
	酒呑						
	酒呑						
祭祀具	香炉			磁器	香炉		
	香炉				香炉		
	香炉				香炉		
	香炉				香炉		
	香炉				香炉		
	香炉				香炉		
	香炉				香炉		
	香炉				香炉		
	香炉				香炉		
	香炉				香炉		
高脚	高脚			土製	高脚		
	高脚				高脚		
	高脚				高脚		
	高脚				高脚		
	高脚				高脚		
	高脚				高脚		
	高脚				高脚		
	高脚				高脚		
	高脚				高脚		
	高脚				高脚		
磁器具・日用品	磁器			磁器・漆器	磁器		
	磁器				磁器		
	磁器				磁器		
	磁器				磁器		
	磁器				磁器		
	磁器				磁器		
	磁器				磁器		
	磁器				磁器		
	磁器				磁器		
	磁器				磁器		
陶器類	陶器			用途不明品	陶器		
	陶器				陶器		
	陶器				陶器		
	陶器				陶器		
	陶器				陶器		
	陶器				陶器		
	陶器				陶器		
	陶器				陶器		
	陶器				陶器		
	陶器				陶器		
その他	その他			その他	その他		
	その他				その他		
	その他				その他		
	その他				その他		
	その他				その他		
	その他				その他		
	その他				その他		
	その他				その他		
	その他				その他		
	その他				その他		

出土木製品一覧表は表V-18の1葉が縄文時代の48点、表V-19~23の5葉が擦文文化期からアイヌ文化期・近世の256点対応である。一覧表項目の説明は以下のとおり。

【遺物番号】：取り上げ時の個体番号で、平成15年度1~197、18年度201~308である。198~200は使っていない。106は欠番。実測図・写真№も同一番号である。

【分類群】：主に機能別の大分類。「日本列島出土木製品分類案」による。

【器種名】：「日本列島出土木製品分類案」と北海道独自案によるが、当報告では前者のみ。

【器種細分名】：同上。「分類案」での器種細分名1と2を兼ねる。一般的木製品名称。名称が器種名で済んだ場合は特徴を示す。

【形状名称】：取り上げ時とその後の観察で命名した用途や形状からみた個別名称。空欄の場合は前項目が当てはまる。用途不明だが製品化したものには材料名を付して〇〇加工製品・〇〇加工品とした。器種名で板・棒以外は材料品として枝材・丸木材・割材・偏割材等とした。削りかすのうち切片は製品製作や材料加工時の割削片、木端は製品や材料の割削片、剥離樹皮は幹から剥ぎ取ったものそれ以上の使用痕が確認できない樹皮である。

【調査区】：平成15年度は4×4mグリッド、18年度は2×2mグリッドで取り上げた。小グリッドabcdは杭位置から反時計回りで呼称。

【出土層】：取り上げ時の観察層。セクション図等での層の照合はできない。

【樹種】：生物顕微鏡観察で属までの同定であるが、種名まで識別できたものもある。同定285点中トネリコ属が55点・約20%と多数を占める。用材傾向の項で詳述するが、近辺では自生せず持ち込まれた樹種もある。

【木取り】：板材やそれを利用した製品では〔柃目・板目・追柃〕に分けている。分割材やその利用製品で樹芯を穿って割っているものは〔半割・1/4割・1/6割・1/8割・1/12割・1/16割〕、樹芯をはずして割っているものは〔偏〇割・芯持〕と分類してある。1/16割からさらに小さく割っているものは〔小割〕である。削り物には〔横木取り・縦木取り〕がある。建材・杭や枝材・丸木材など棒状の材で割り加工のないものは〔丸木〕と表現している。枝分かかれのある材は〔股木〕とした。切片は木取りをみる意味合いが低いので観察していない。

【樹皮】：肉眼観察でごく一部にでも樹皮（外皮）が残存していれば、〇印を付す。

【焼痕】：ほんの一部にでも焼け焦げがあれば〇印を付す。全面炭化しているものは炭化材なので、焼け痕とはしていない。

【長さ】〔幅〕〔厚さ〕：基本的に本体部の規模を計測している。（ ）付きは破損。丸木では幅と厚さを直径で示したものもある。

【重量】：水漬け状態の計測なので、10g以上のものは小数点以下を四捨五入した。大重量のもので概略計測したものもある。（ ）付きは破損。

【図番】：実測図を掲載した図V-〇の番号。

【図縮尺】：基本的には1/3だが、やや大型の品や建材・丸木材など長尺物は1/6や1/8・1/12・1/24で掲載している。各図にスケールを付してある。

【備考】：切痕や集中出土など、分類や名称に表現できない情報や特記事項などを記す。

表 V-18 出土木製品一覧(1) V層相当層：縄文時代(1/1)

調査番号	分類群	遺物名	原産地	用途	材質	出土層	形状	長さ	幅	厚さ	重量	直径	径差	底径	底厚	底径差	備考
(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)
51	縄文時代前期	カエデ	08-09	09	09	09	カエデ	210.5	7.1	6.3							
54	縄文時代前期	トネリコ	08-09	09	09	トネリコ	21.4	3.4	0.8								
55	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	11.0	6.7	0.9								
56	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	20.3	5.8	0.6								
57	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	20.3	5.8	0.6								
58	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	5.7	4.6	2.0								
59	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	12.1	5.7	3.6								
60	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	3.4	1.9	1.7								
61	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	12.2	3.3	1.0								
62	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.9	3.3	1.0								
63	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
64	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
65	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
66	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
67	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
68	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
69	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
70	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
71	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
72	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
73	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
74	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
75	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
76	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
77	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
78	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
79	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
80	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
81	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
82	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
83	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
84	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
85	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
86	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
87	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
88	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
89	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
90	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
91	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
92	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
93	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
94	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
95	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
96	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
97	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
98	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
99	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								
100	縄文時代前期	カマツク	08-09	09	09	カマツク	10.2	3.3	1.0								













### (3) 種別木製品

製品名の見出しには一覧表の「器種名」か「器種細分名」を使い分類してある。

縄文時代（図V-41～46、表V-18、図版37～40）

槌（図V-41）

60は、片側面が凹面になっている横型の木槌の破片。凹面と逆側の半分と柄部を欠損する。皮や繊維のなめし叩きに使用した砥様の道具と考えられ、凹面はその結果の形状と思われる。

キウス遺跡群の過去の調査で計16点（キウス4遺跡：縄文後期4点・晩期3点、キウス5遺跡：後期2点・晩期7点）<sup>(1)</sup>出土し槌状木製品とされているものと同形で、17点を総称して「キウス型木槌」と呼びたい。また、余市町安芸遺跡でも1点出土<sup>(2)</sup>し、小樽市忍路土場遺跡の杵様木製品<sup>(3)</sup>がこの槌の未成品の可能性があることがわかってきた。道央部の縄文時代後～晩期の低湿度作業場では一般的に用いられた道具とみてよいだろう。次項でも触れるが、キウス4遺跡の後期の2点を除くと全てがカエデ属の材を素材としており、用材選択に限定性がみられる。前述の忍路土場遺跡の杵様木製品も含め、キウス遺跡群や千歳市美々4遺跡にも槌の未成品や破片とみられるカエデ属材の加工素材が何点か残されている。

木取りでみると、キウス遺跡群の後期6点は全て股木部を利用しているのに対し、晩期の10点は半割～偏半割による板目取りである。本品も半割（偏半割か）材で、木取りや形態から縄文時代晩期の所産と考えられる。

- |                  |                        |          |
|------------------|------------------------|----------|
| (1) 北海道埋蔵文化財センター | 1995 『千歳市キウス5遺跡ほか』     | 北埋調報92集  |
|                  | 1997 『千歳市キウス5遺跡(3)』    | 北埋調報115集 |
|                  | 1998 『千歳市キウス5遺跡(6)』    | 北埋調報125集 |
|                  | 1999 『千歳市キウス4遺跡(3)』    | 北埋調報134集 |
|                  | 2002 『千歳市キウス4遺跡(9)』    | 北埋調報180集 |
| (2) 余市町教育委員会     | 2003 『余市町安芸遺跡』         |          |
| (3) 北海道埋蔵文化財センター | 1989 『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡』 | 北埋調報53集  |

柱（図V-43）

76一本。木元端部に削り加工があり、直径が7cm以上、長さも2mを超えるため柱と判断した。枝が丁寧な落とされた滑らかな肌肌で、上端部付近の節上部が桁・梁材との結合部とみられる。

板（図V-41）

均一の厚みが意識して削り出され、直線辺があるとみられる材9点を板とした。いずれも板目材である。60・54・172は幅の割に厚さが1cm以下と薄い板材であり、54と77は細身である。174は厚板の破片、173・181・194・196は板を素材とした加工製品であろう。

棒（図V-42）

加工が入った棒状の製品5点をまとめた。93・185・182は丸木や枝材の端部に削りがあるもので、93は槌状、192は楔状である。151は、枝材のほぼ半周分の側面を樹芯を残して削り落とし、両端をさらに細化させ弧状に曲げたもの。308は1/4割材を素材とした角材である。

芯持材（図V-43・44）

4点とも丸木材。直径10cm前後で、87・92・176は製材されたものとみられる。238は木元端部に数多い削り加工があり、柱状であるが、枝落としがまばらなため丸木材とした。

分割材（図V-43～46）

全20点で、幅11.4～2.1cmと大小様々であり、長さが50cm近い大型品もある。樹芯を割る意識の見

える「割材」が13点、樹芯を通らない偏った割り方の「偏割材」が7点ある。割材のうち2点は半割材で、193はさらに1/4割段階の途中である。1/4割→1/8割（1/4割系）は6点（偏1/4割を含めると8点）、1/6割→1/12割（1/6割系）が5点ある。41は割面の仕上げが丁寧で、製品の破片と思われる。177は棒で取り扱った151に近い形状を持つ。

#### 削りかす（図V-46）

製品製作や材料切断などの作業時に出る割削片が「切片」。製品や材料の割削片が「木端」。55・61・88は小型の切片、170は大型の割取り材である。307は割材加工製品の断片か。

#### 股本（図V-43）

148一本。幹側が折損で成長が止まり、枝側に太くなった部分の丸木材。幹と枝なので股本材として扱った。柱など建築材の可能性はある。

#### 炭化材

小片に割れた炭化材が2点出土。もとの形状は分割材と思われる。

#### 撥文～アイヌ文化期（図V-47～80、表V-19～23、図版41～66）

##### 鋳（図V-47）

306は、枝分かれ材の幹を割りとり削りて鋳に加工した製品。枝部を柄にしている。鋳の体部は平面形・断面形とも長楕円形であり、外向き面がやや平坦でわずかに内反りしている。鉄製の鋳を装着した痕跡はない。

##### 杵（図V-51）

78は、丸木材から握り部と掻き部を削り出した両頭の堅杵。長い両頭部の端部に当たる掻き面は両方とも平坦である。やや長めの頭部の先端が反対側よりも細く作られている。アイヌの農耕文化を調査した林善茂によれば、細くて長い頭部で掻き面が平坦なものは脱穀用であるという。また林が調査した寸法は、最長で約118cm、ほとんどが1m前後に集中するとした<sup>(4)</sup>。本品は110cmを測り大型品の部類に属する。

(4) 林 善茂 1961「アイヌの脱穀調査技術」『北方文化研究報告8』北海道大学北方文化研究室

##### 箕（図V-48）

296は形状や規模から、箕の未成品とみられる。太径の半割材を素材とし、割面を底の平坦面に利用して削り出したもの。三方の側面部分の削りが未了と思われる。後方の半分近くを欠損している。模式図にあるように民俗例では側面部に耳を作り出してあり、耳の張り出しを含めた厚みが残っているのであろう。林善茂の調査によれば、箕の平均的寸法は幅55cm（最大78cm）、奥行33cm（同41cm）、高さ8.5cm（同13cm）であった<sup>(5)</sup>。本品は幅70cm・奥行推定38cm・深さ10cmと、大型の箕の寸法に合致している。脱穀した穀物の実と殻を選別するための道具で、発掘調査で箕が出土した例は今までなく、未成品とはいえ、初の出土例となった。

(5) 林 善茂 前掲書

##### 曲物（図V-51）

119と259は、幅8cmほどの曲げ輪用の柁目の薄板である。119の片面には斜め方向の毛引き線があり、259の短辺中央には結合の痕跡とみられる小孔が残る。

187は曲物の円形底板の半分。柁目板で中心部に多数の刃物傷がある側が外面である。木目に沿う1箇所曲げ輪留めの樹皮が残っているカキソコである。

239は未破損で出土した小振りの曲物。柁蓋の可能性が高い。蓋板・曲げ輪とも柁目で、蓋板の木

目に沿う部分と直交する部分の向かい合う計4箇所曲げ輪と樹皮留めされているカキソコである。187ともども板と曲げ輪の接合部に段差は設けられていない。蓋の外面には多数の刃物傷や焼け焦げがあり、作業台として使用されていた様子が窺える。曲げ輪は全周の1/6ほどが重なるだけの1枚板で、端部は幅を減じて樹皮で縫い留めされている。

#### 刺物 (図V-49)

282は丸木を縦に置いて刺り込んだ大型容器の小破片。槽か臼の口縁付近か。164は半割材を横に置き樹表側から刺り込んだ鉢形容器の破片。

#### 結物 (図V-50)

桶の側板が4枚出土している。高さが同じで形状が酷似しており、他に当該品の出土がないことからひとつの桶を構成する側板と判断した。4枚とも上辺が内に向けて削られ、下方の幅がやや狭く薄く整形された板目取りの短冊形の湾曲板である。46を除く275・299・304の3枚の内側には、上から4.5～6cmと下から3.8～4.2cmの部分に横走する痕跡が残る。内容物が上板・底板の痕跡であろう。上板があれば樽である。簞の痕跡は残っていない。幅は275がやや狭く、299が広い。4枚が隣り合って結われた痕跡はないが、組み合わせからの桶推定内径は25cm前後で、14枚ほどの側板で構成されていた計算になる。板目材の桶は水分が浸透しにくく、樽や水桶に用いられた可能性が高い。

299の外側には左寄りに3本の横線と1本の縦線で構成された彫りが施されている。右隣の側板に続くため全貌は不明。文字か略号・意匠の類であろう。桶が結われてから彫られたものであるが、彫りの磨耗度からすると、当地にもたらされる以前に製作地か販売地で付けられたものではなく、入手後キウスで付けられた彫りとみられる。

#### 自在鉤 (炉鉤) (図V-49)

80は、囲炉裏に鍋などを吊り下げる際の高さ調整機能付きの鉤、いわゆる自在鉤である。厚めに板目取りした角棒状の板の片端に掛け鉤を削り出している。鉤の向きとは逆の側面に5段の削り込みを入れ、高さ調整段を作り出す。この側面が一部欠落している。鉤と反対の端部付近には横長の角孔を開け、炉上部にある梁材や炉棚からの吊り下げ材に接続する水平材を通してある。この水平材はほぼ孔中にしか残存していないが、両側に円孔部が残っており、吊り材を通したものとみられる(孔の間隔が狭く違う目的かも知れない)。

この形状の自在鉤はアイヌ独特のものとして、民俗や建築関係の事典などにも紹介<sup>(9)</sup>されており、家屋(チセ)やその内部を復元する際の炉鉤には、ほとんどこの形式が採用されている。また、江戸後期から明治～昭和初期に収集されたアイヌ民族資料中にも炉鉤として多数残されている。江戸時代寛政期(1800年ころ)に記された谷文晁画・谷元旦著の『蝦夷器具図説』<sup>(7)</sup>や『蝦夷山水器物図巻』<sup>(8)</sup>には釣鑪として掲載されている。しかしながら、出土品としては本品が初の例で、1739年降下のTa-a火山灰に覆われた旧河道層にあったが故に18世紀前半の年代を与えられるものであり、今のところこの形式の最古の例といえる。出土品の類例としては、千歳市美々8遺跡の0B層(1667～1739年の層)に3段切りの炉鉤がある<sup>(9)</sup>。これは鉤部にある焼け焦げと反対の角孔の位置から鉤を下端にみているが、そうすると段が逆反りで高さ調整ができず、自在鉤とするため逆転させると鍋吊り部が鉤ではなく角孔になるといった不可解な形状である。また、宮城県多賀城市山王遺跡からは、2段の突起を持った自在鉤(高さ調整部のみ)とされる中世の製品が出土している<sup>(10)</sup>。本品と山王遺跡例や収集された自在鉤との相違点は、梁や炉棚からの吊り下げ材に接続する水平材の部分で、他例は水平材に孔を穿ち自在鉤本体をこれに差し込む仕組みになっているのに対し、本品は炉鉤本体に孔を開け材を通してある点である。

このような鋸歯形（波形）の段を持つ自在鉤には、東北の南部地方特有のガッタン鉤・ダンダン鉤がある。鉄を用いず木材と縄だけの組み合わせで製作・使用できるもので、この形態・形式が交易や人々の移動で蝦夷地にもたらされ、アイヌの人々に普及したものと考えられる。

- (6) 日本民俗建築学会編 2001『図説 民俗建築大事典』柏書房
- (7) 大塚和範監修 1991『蝦夷風俗図式 蝦夷器具図式』安通美術
- (8) 北海道立旭川美術館・北海道立近代美術館 1992『「蝦夷の風俗画」展図録』
- (9) 財団法人北海道文化財センター 1997『美沢川流域の遺跡群XX 千歳市美々8遺跡低埋部』北理調報114集
- (10) 多賀城市教育委員会・建設省東北地方建設局 1997『山王遺跡1』

#### 串（図V-49）

219は両端をカットした直線的な細枝を利用した串。254は板状の製品を小割した再利用品と思われる。

#### 柱（図V-52・53）

31と294は木元端部に削り加工があり、股木部を材受け状に残す。長さも2mを超えるため柱と判断した。203は端部が鋭く削りだされた太い柱だが、中間の股木部で切断されている。

#### 建材（図V-52～54）

104は端部の削りのほか端部付近に材を受けた窪みがみられる。139・153・154・155の4本はほぼまとまって出土しており、1軒の建物か施設の建材群とみられる。154には材受け部の削り込みや凹みがみられる。270・297・298も端部加工がある2m超の長尺建材。後2者は同一集中からの出土でこれも1軒の建物か施設の建材であろう。

#### 板（図V-55）

均一の厚みが意識して削り出され、直線辺があるとみられる材17点を板とした。桁目材が5点、板目材が12点ある。75・112・217は薄い板材、125と150は厚板材である。75・112・246は片方の端部に斜辺を削り出し製品化している。

#### 棒（図V-56・57）

加工が入った棒状の製品8点をまとめた。21・68・94は樹皮を残したまま両端をカットした長さ50cm以上ある加工品で、68の胴部には2条の緊縛痕が残る。柵や櫓のような施設材だろう。26は建材の一部か。102は刻み彫りの入った細枝材で祭祀具としてもよいかもしれない。50・66・98は分割材から作られた角材で、50・66は側面への細かい削りで形状加工がなされている。

#### 杭（図V-58～60）

先端部の削り加工が2面以上ある棒状品20本を杭に分類した。すべて丸木材で枝落しもなされている。太さ5～7cm前後で、基本的に木元側を杭先にしている。杭先には全周削るものと樹表面を残すものがあり、削り面の数も多様である。133は柱の転用の可能性がある。

#### 芯持材（図V-61～68）

端部に削りなどの加工があり、枝落しや表面加工なども見られる素材。素材の太さにより細枝材（径2.5cm以下）・枝材（径5cm未満）・丸木材（径5cm以上・形態により例外あり）にわけられ、偏削を経て芯持の材として分化したものも5点ある。中には残材ともいえそうなものもあるが、表面や端部への加工入り度合いや形状から芯持材に分類した。

細枝材8点の中には71・147・251など杭状のものもあるが、細いのと端部が1面切断であるため杭に分類はしていない。枝材14点には棒としてもよさそうなものや、40・137・156・285のような杭状のもの、131のような建築材断片の可能性のあるものなどがある。丸木材29点には29・49の大型材、30・37・158のような建築材断片の可能性のあるもの、79・265・267・272のように短材に加工されたもの

などがある。13は元が鋸で切断されたように観察される。

#### 分割材 (図V-69~72)

全37点で中型品が多いが、幅3.5cm以下の小型品も5点ある。長さ50cmを超え幅7.5cm以上(129・130・301)や、幅10cm以上(122・166)の大型品もある。樹芯を割る意識の見える「割材」が25点、樹芯を通らない偏った割り方の「偏割材」が12点ある。

割材のうち3点は半割材で、偏半割材5点を含めた8点は分割の途上材と思われる。1/4割→1/8割→1/16割→1/32割〔1/4割系〕は15点(偏1/4割を含めると20点)、(1/3割)→1/6割→1/12割〔1/6割系〕が7点で、〔1/4割系〕が主流である。25は槌状の製品、73は柄状の製品である。118は角材、188・204は板に分類されてもよい。

#### 残材 (図V-72~76)

端部の大きな切痕以外に加工が見られず、廃棄されたような丸木材・枝材。あるいは加工の途上で放棄された材17点。樹皮の残るものが多い。262・279の股木材や62・63などのように枝を長めに残したままか枝折れの状態が多くみられる。1や243のような巨木材もある。芯持材に分類した中には残材ともいえるものがあり、逆もまたありえる。

#### 削りかす (図V-76~80)

製品製作や材料切断などの作業時に出る割削片である「切片」38点。樹皮近くを剥くように割った偏割材の極端なあり方で、次段階の加工に回らなかったとみられる「剥材」5点。製品や材料の割削片が「木端」5点。この3種のほか「剥離樹皮」として、人為的に剥がされたと思われるものの以後の利用の痕跡がない樹皮を22点取り上げた。

切片は長さ10cm前後のものが多いが、12・44・113・168・295のような長さ20cm超か幅10cm超の大型品や、5cm以下の小片もある。2と3は割材の木端、218は板材の、258は芯持材、261は偏割材のそれぞれ木端である。剥離樹皮には小片もあるが、ほとんどが巻きか振れてまとまった樹皮の塊となって出土する。

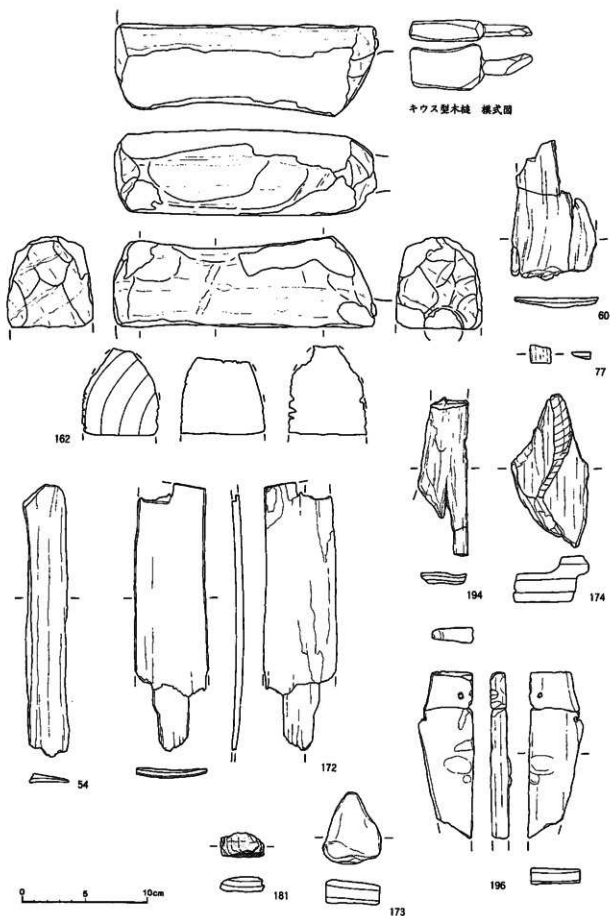
#### 股木 (図V-80)

10と19は木元側端部に1面の切痕があるY字形の太枝材。86は太い丸木材の股木で股の付け根部片側が削り加工で斜面をなす。97は股の付け根部と枝部両端の三端部すべてに鉋での著しい切断痕が残るV字形の材である。

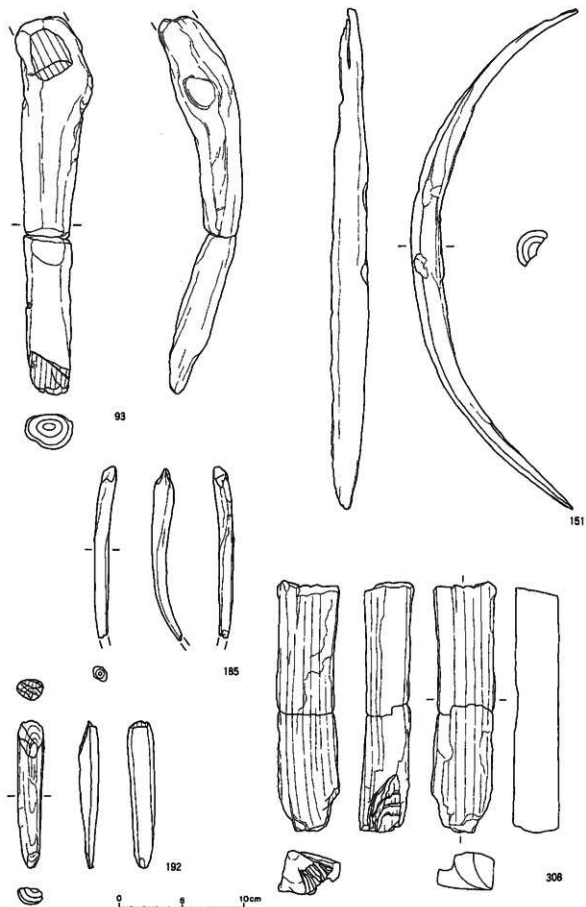
#### 炭化材

小片に割れた炭化材が1点出土。もとの形状は不明。

(三浦)



図V-41 木製品(1) 縄文時代



図V-42 木製品(2) 縄文時代



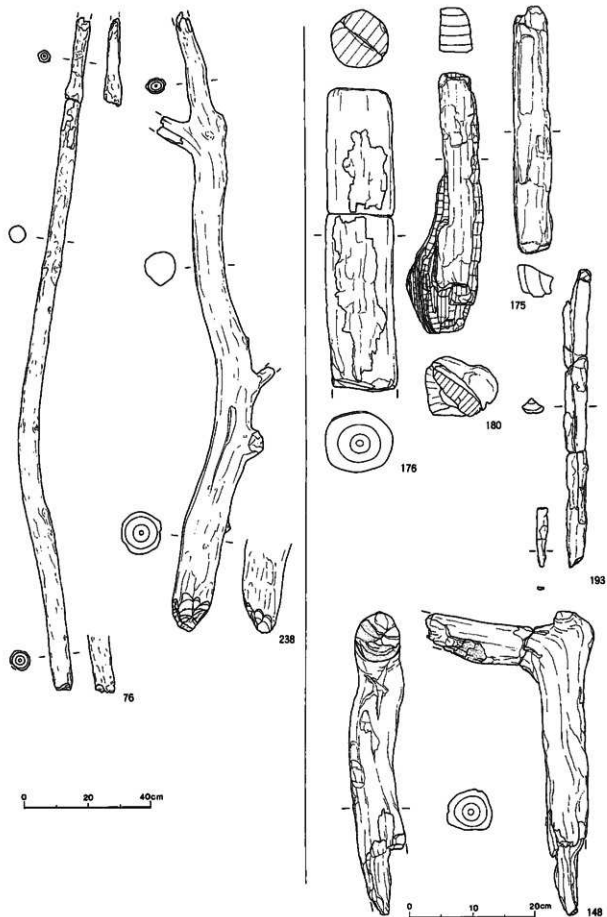


図 V-43 木製品(3) 縄文時代

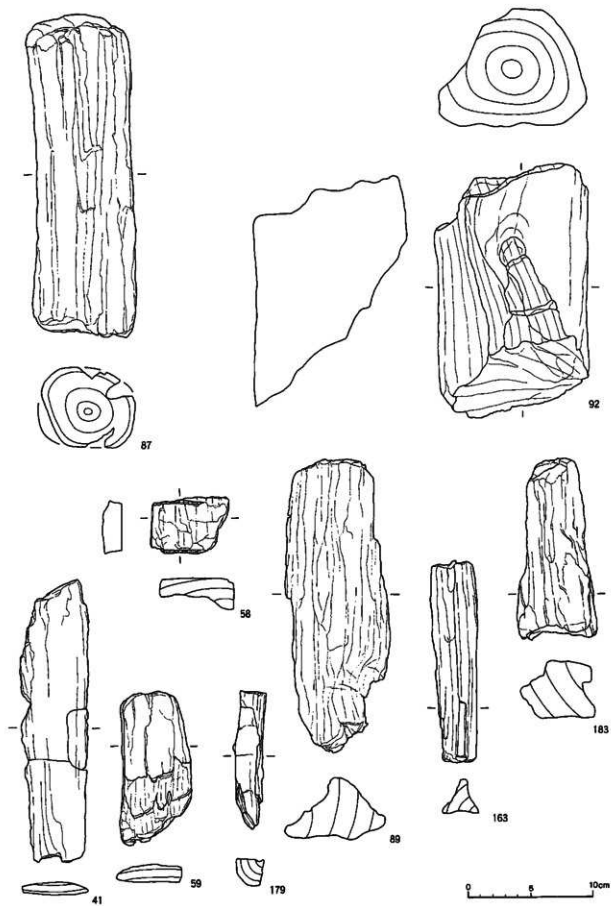


図 V-44 木製品(4) 縄文時代

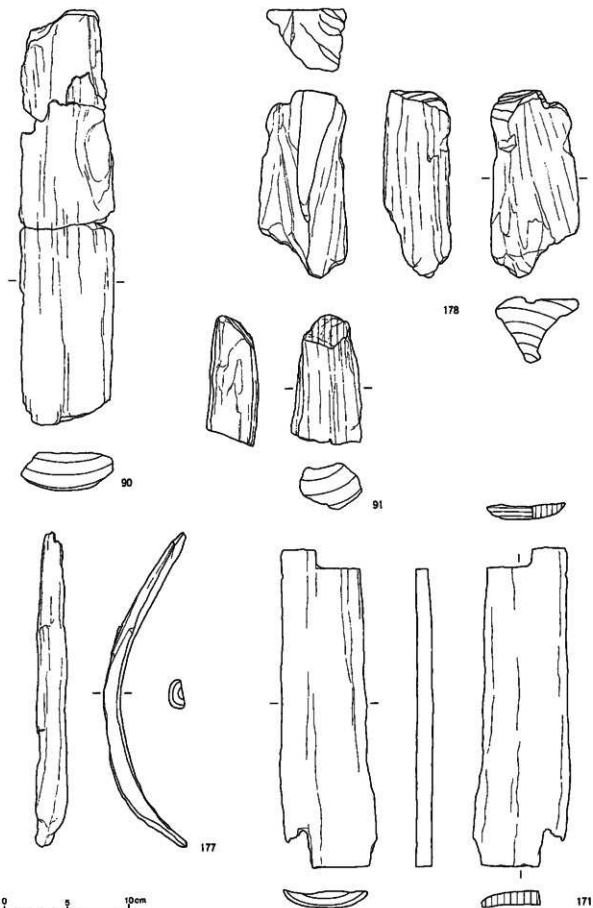


図 V-45 木製品(5) 縄文時代

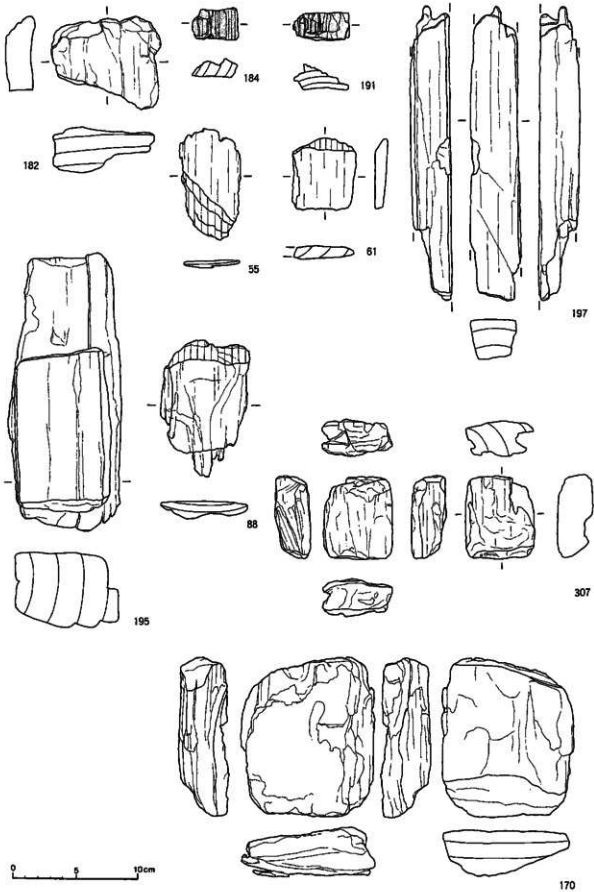
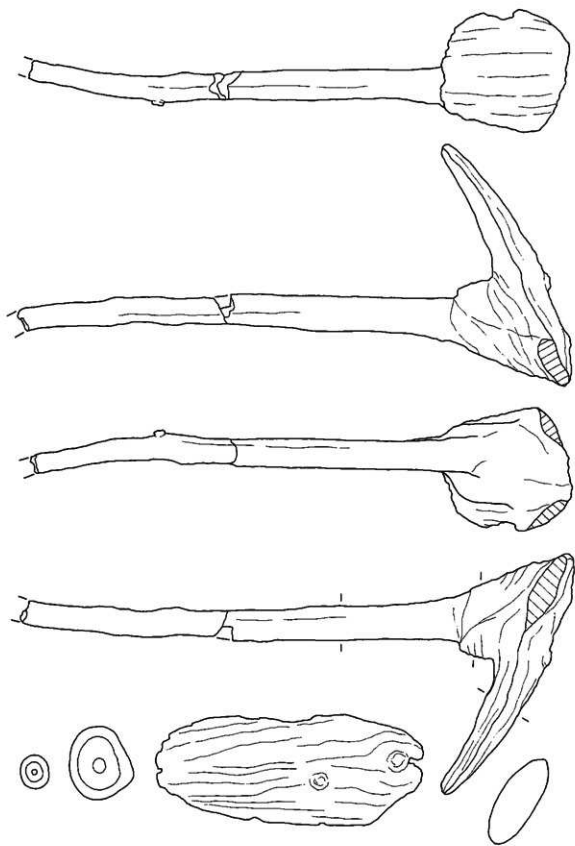


図 V-46 木製品(6) 縄文時代



0 5 10cm

306

図V-47 木製品(7) アイヌ文化期

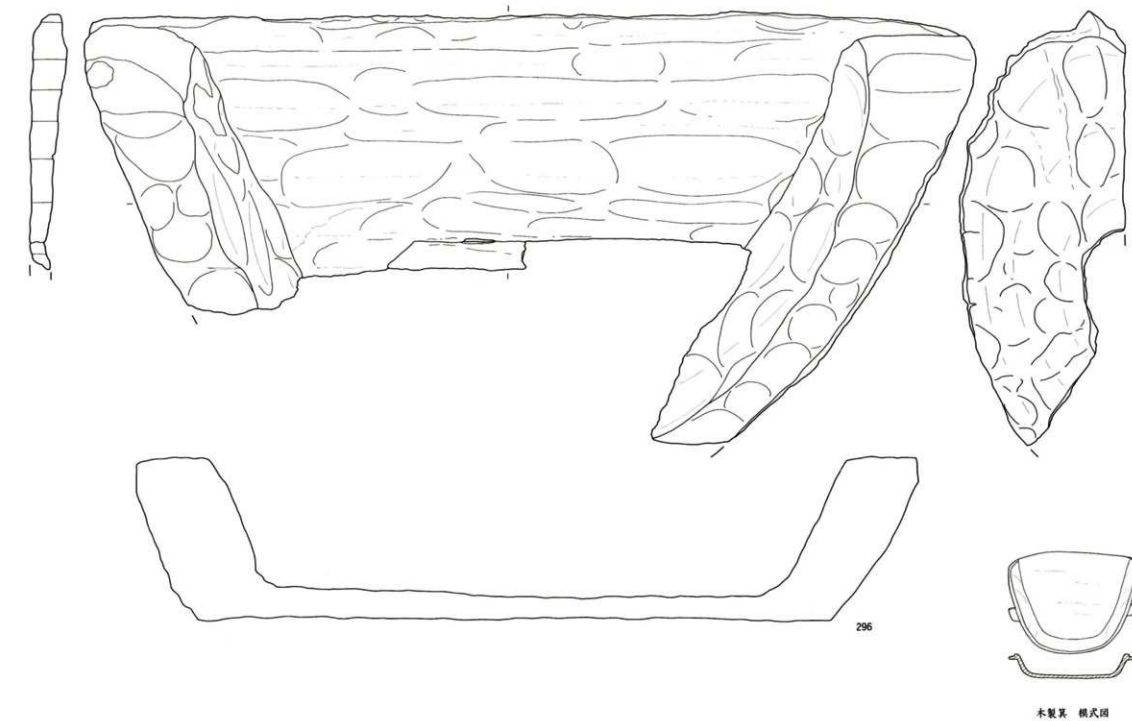
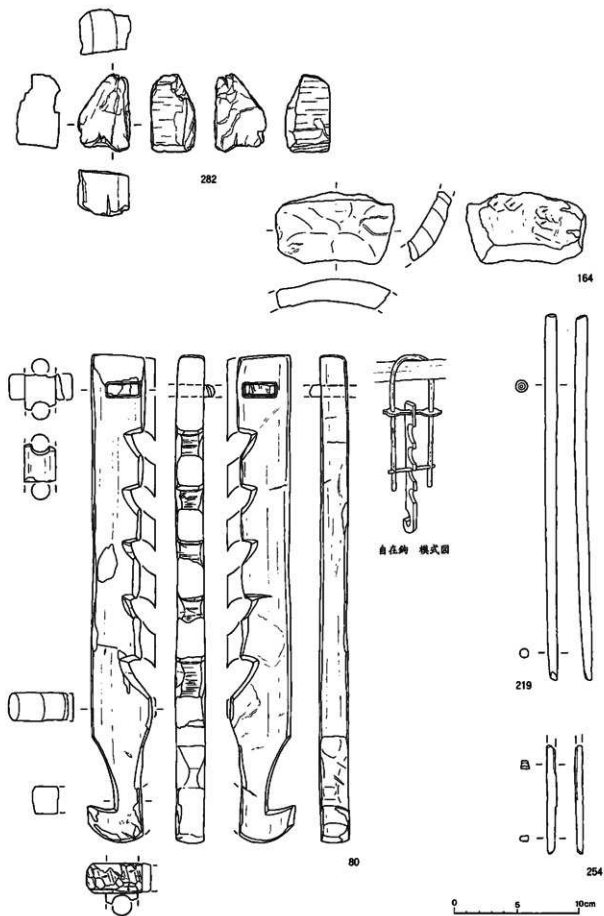


図 V-48 木製品(8) アイヌ文化期

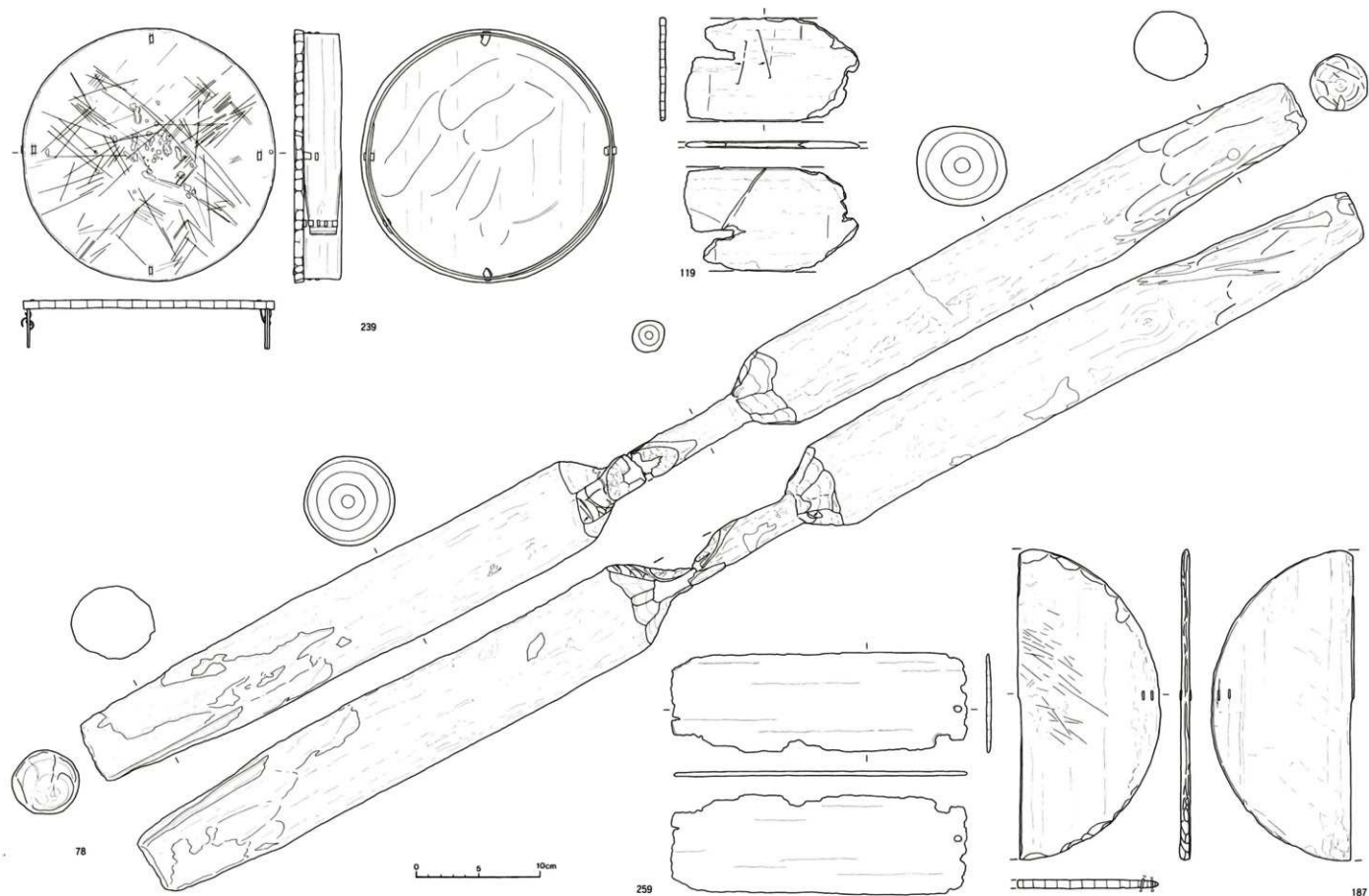


図V-49 木製品(9) アイヌ文化期



図V-50 木製品(14) アイヌ文化期





図V-51 木製品(1) アイヌ文化期

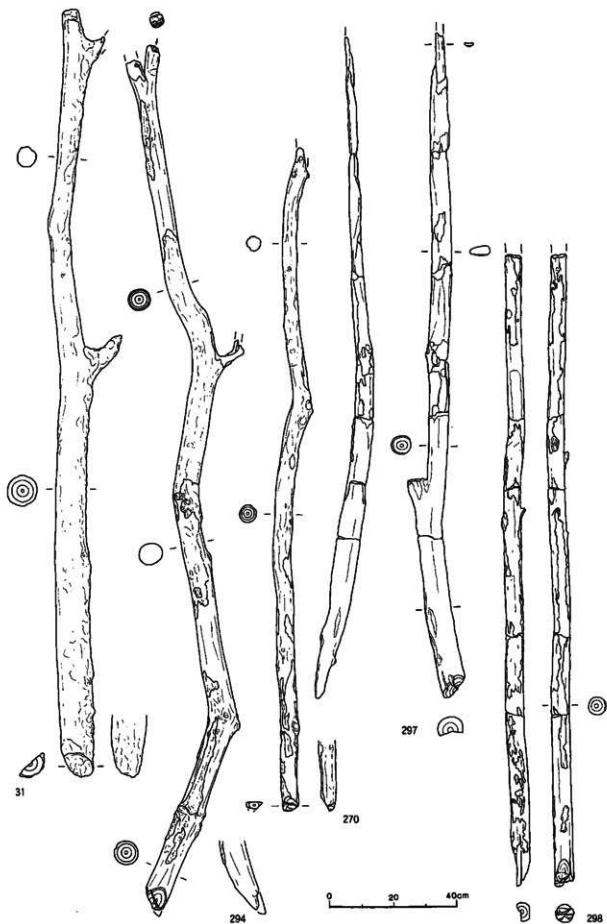


図 V-52 木製品(12) 縄文~アイヌ文化期

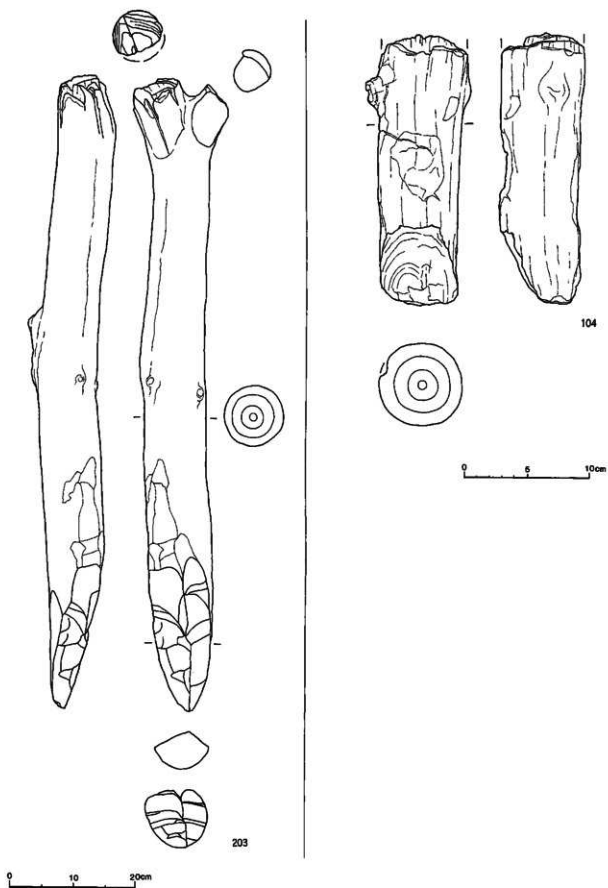


図 V-53 木製品(14) 線文~アイヌ文化期

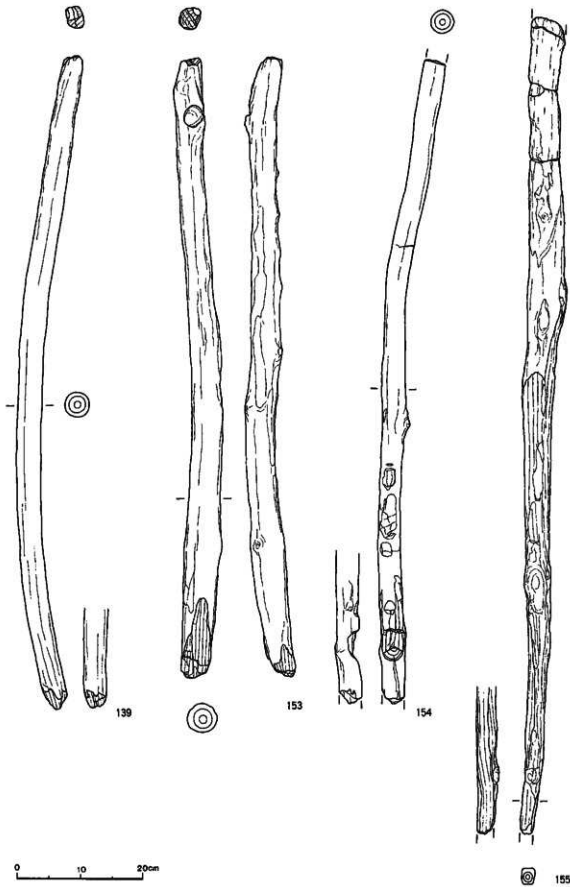


図 V-54 木製品(14) 縄文~アイヌ文化期

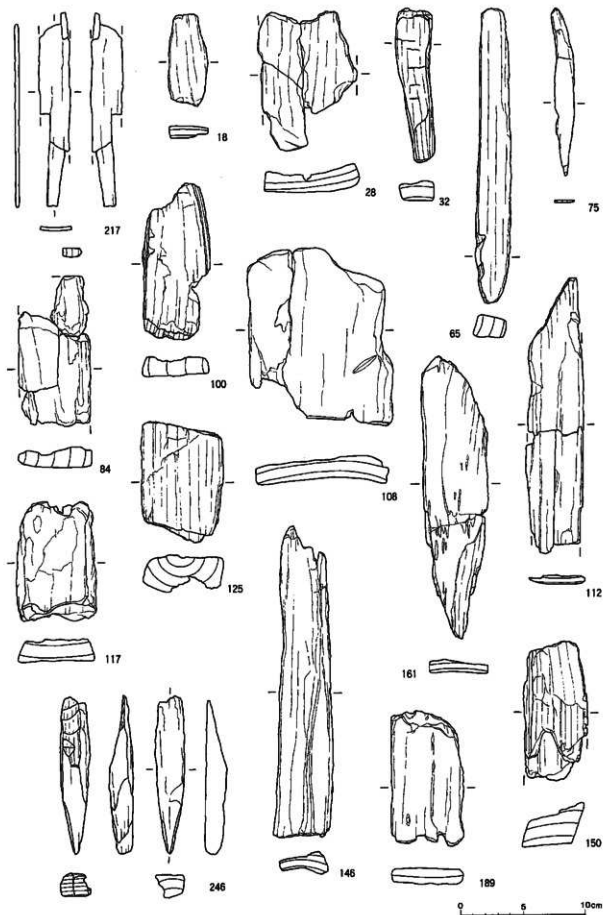
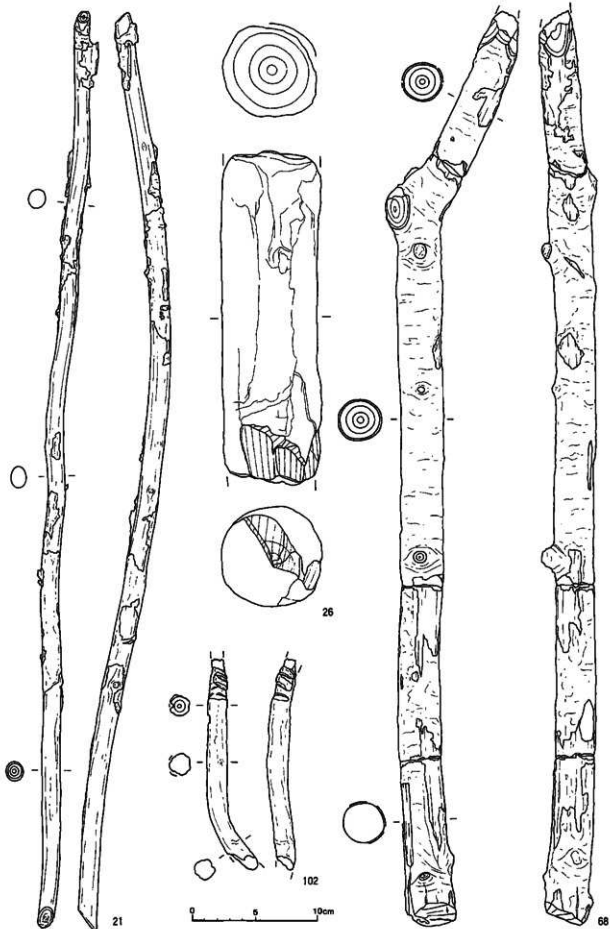


図 V-55 木製品(19) 縄文~アイヌ文化期



図V-56 木製品(14) 縄文~アイヌ文化期

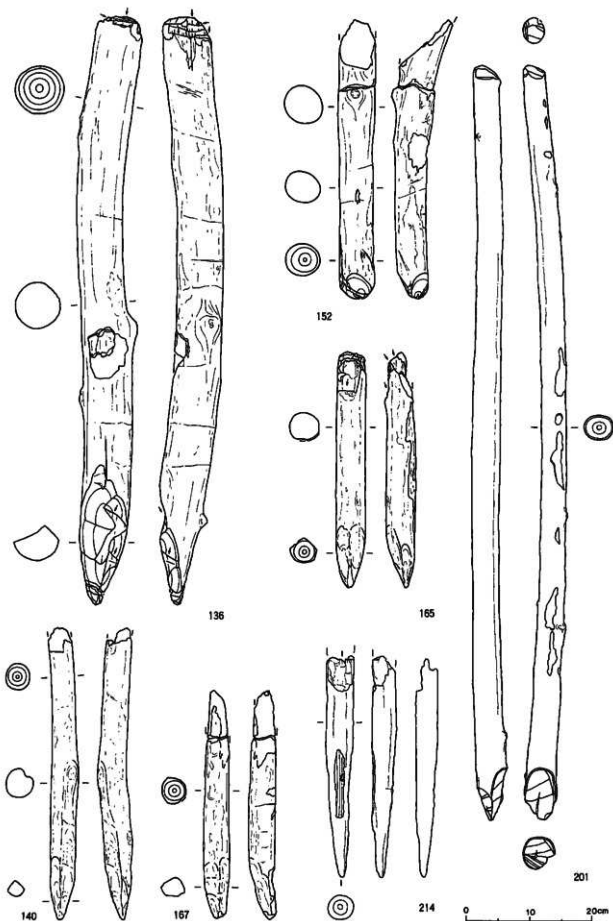


図 V-57 木製品(7) 縄文~アイヌ文化期



図V-58 木製品(14) 縄文~アイヌ文化期





図V-59 木製品(14) 推文~アイヌ文化期

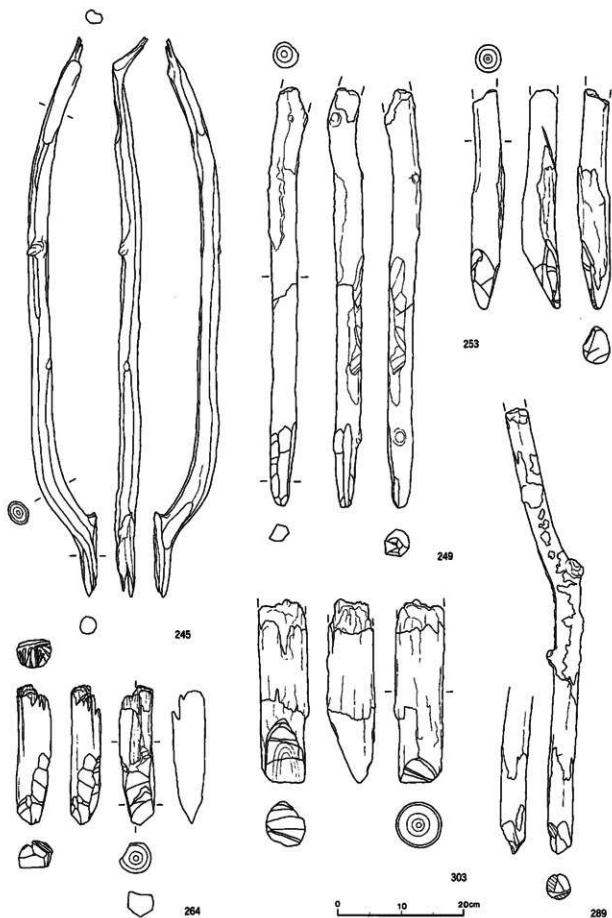
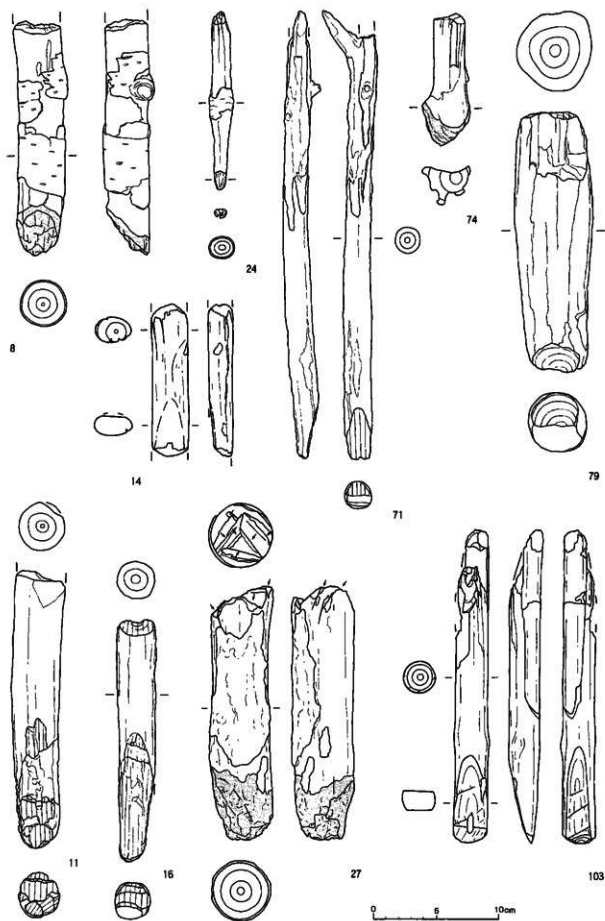
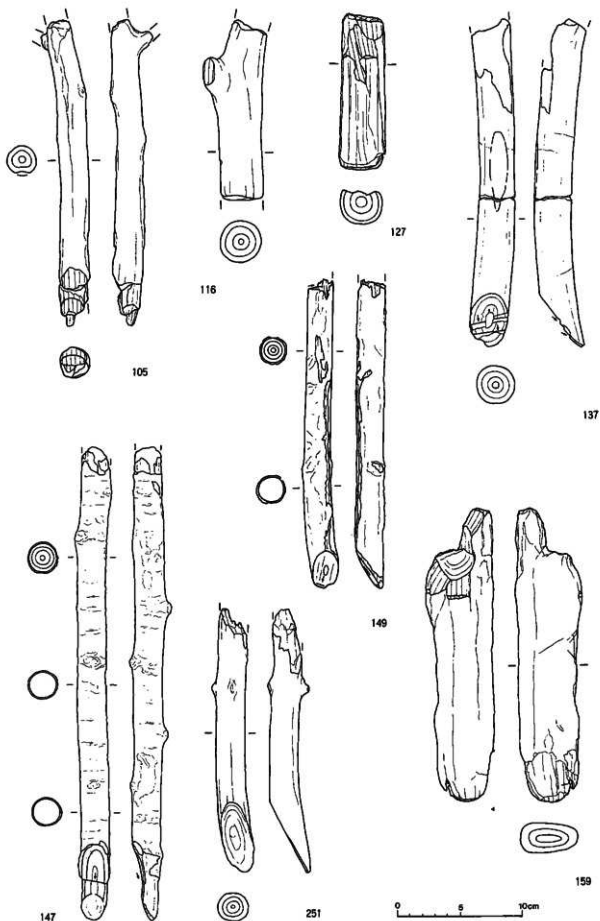


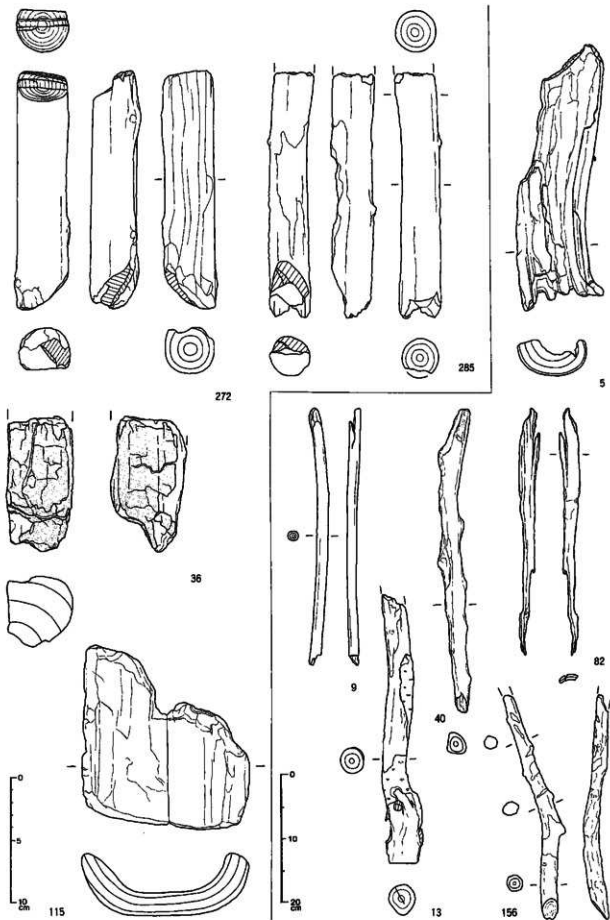
図 V-60 木製品(4) 縄文~アイヌ文化期

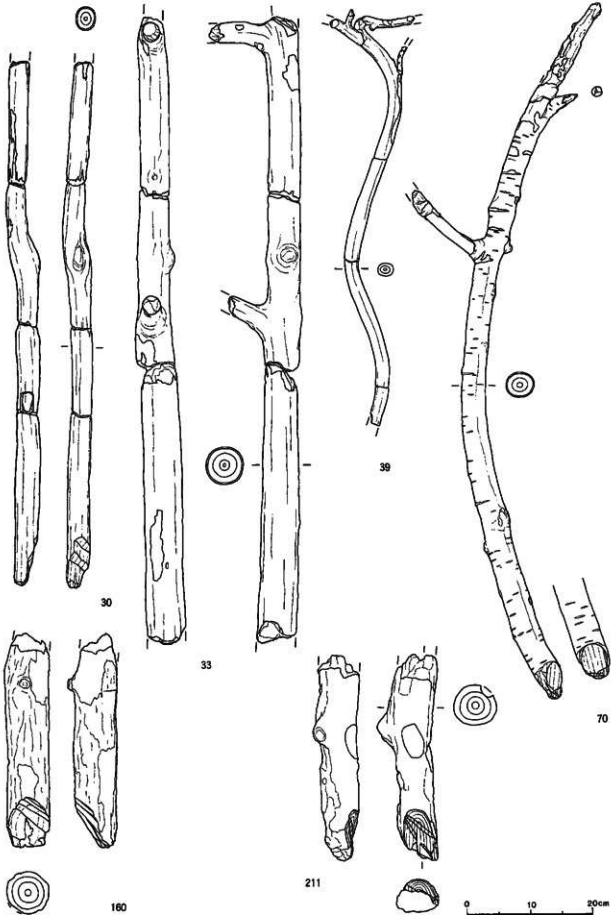


図V-61 木製品(2) 縄文~アイヌ文化期



図V-62 木製品(2) 縄文~アイヌ文化期





図V-64 木製品④ 縄文～アイヌ文化期

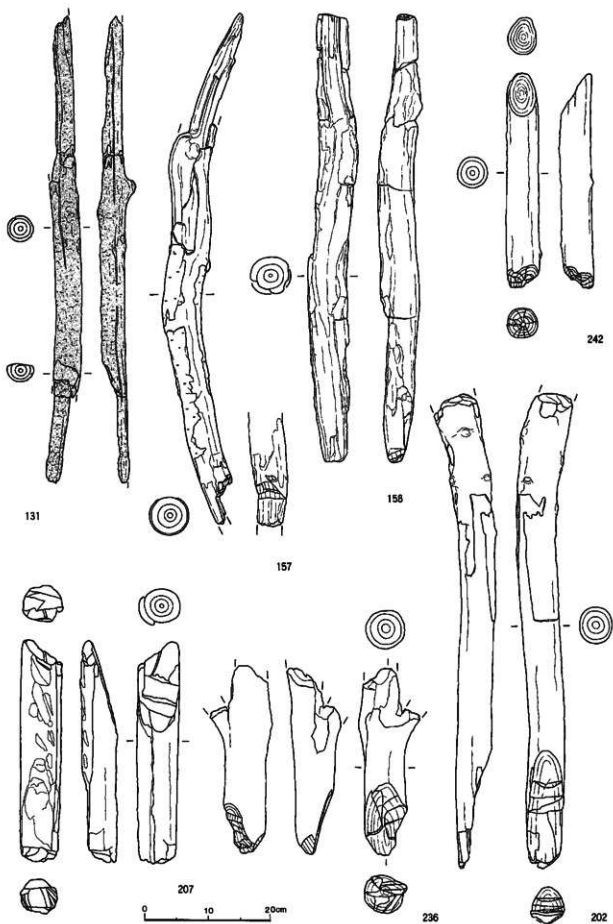
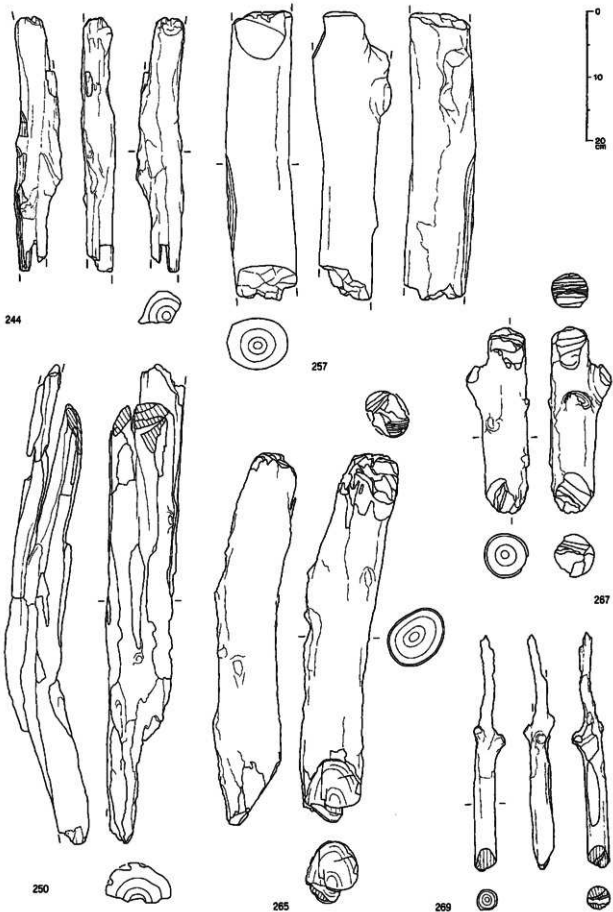
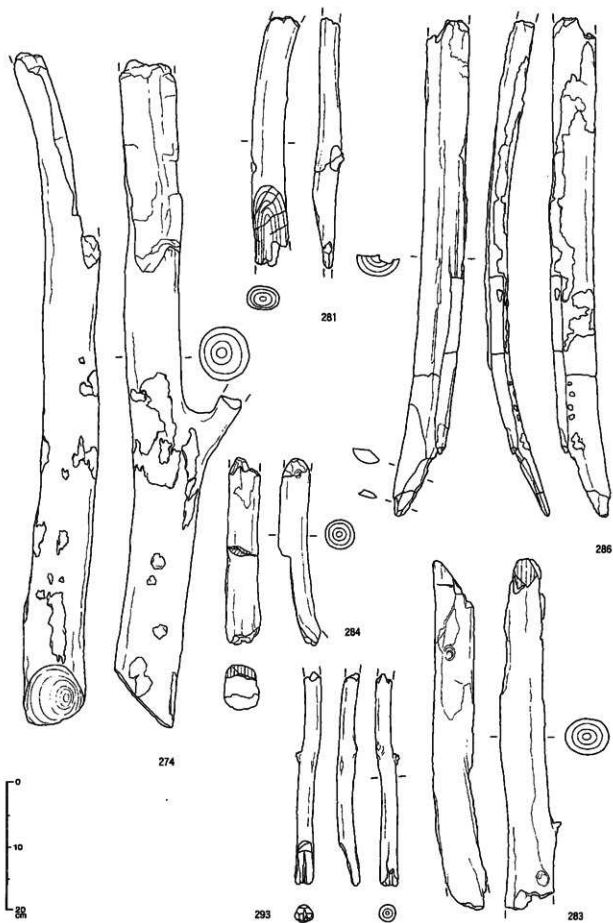


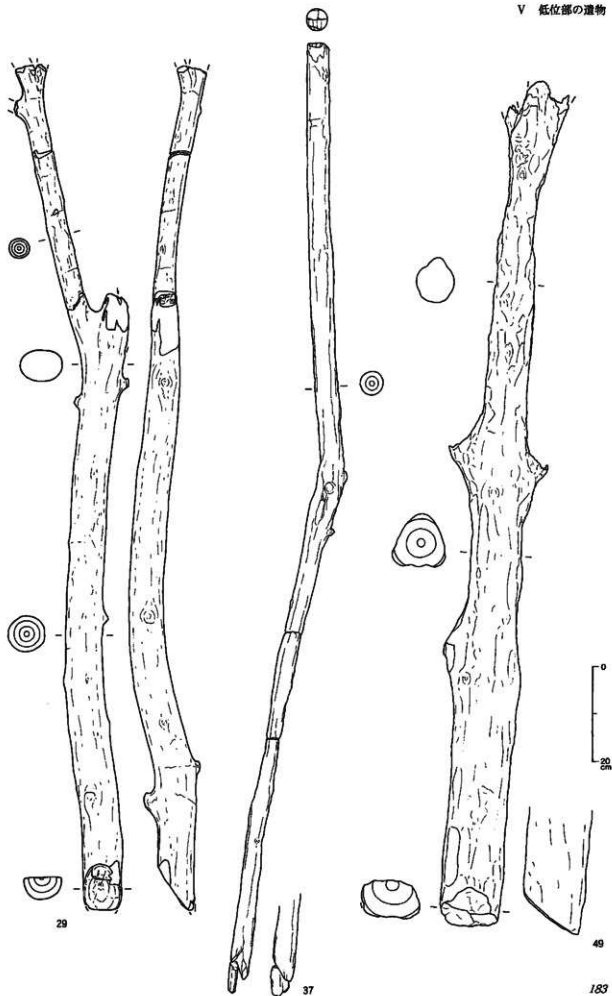
図 V-65 木製品(4) 縄文~アイヌ文化期



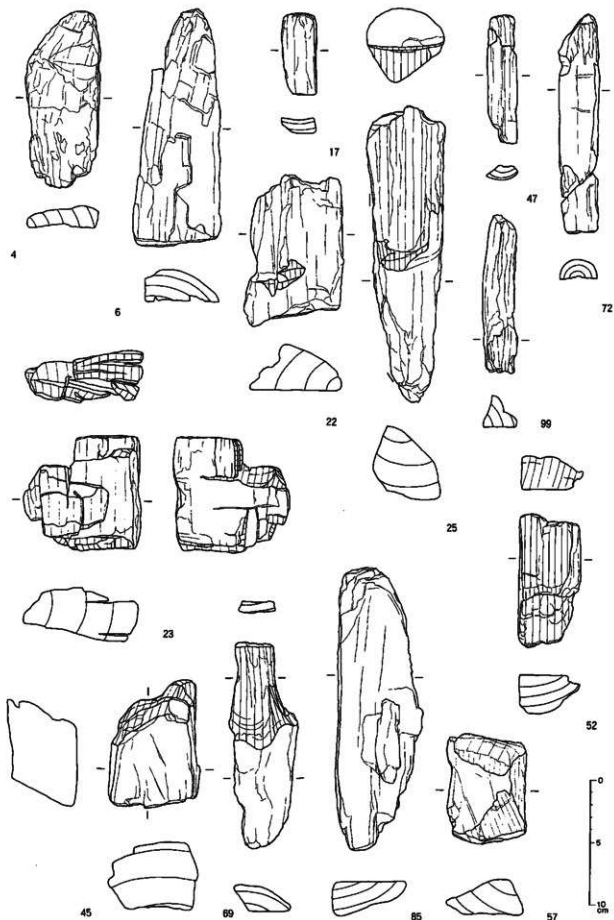
図V-66 木製品(燻) 縄文~アイヌ文化期

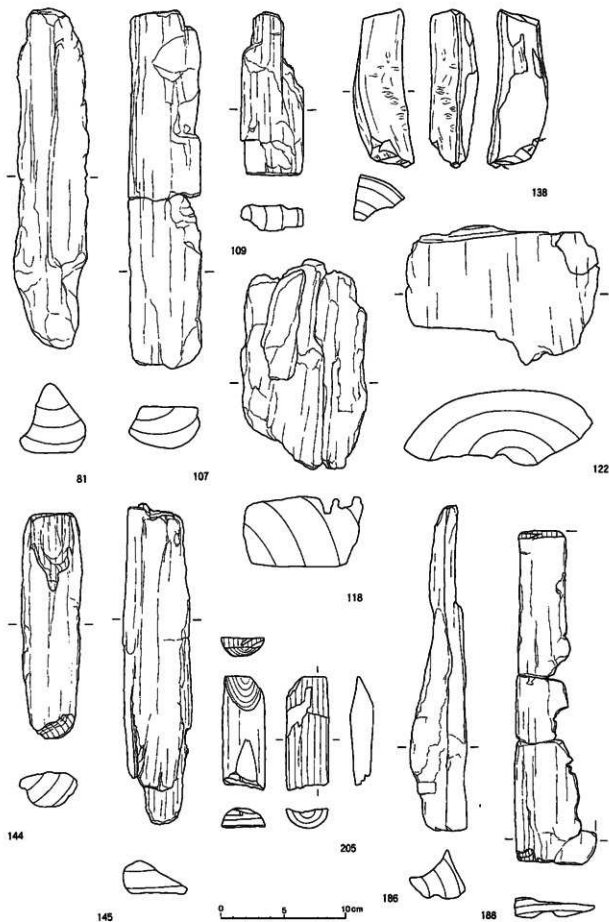




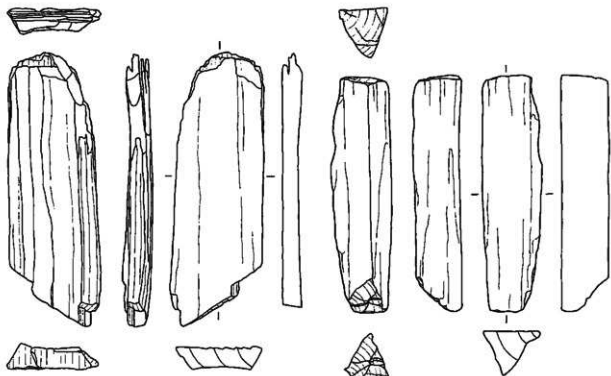


図V-68 木製品(2) 縄文~アイヌ文化期



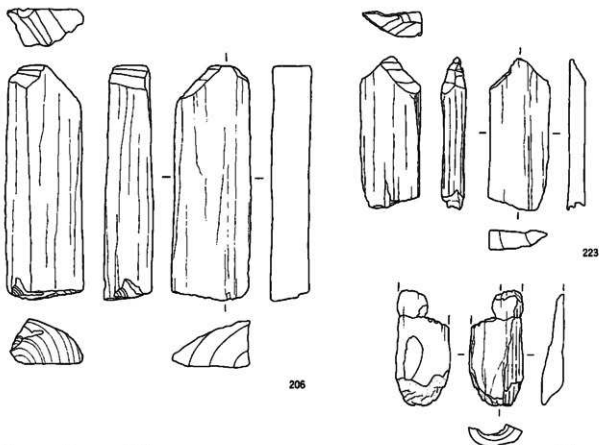


図V-70 木製品(約) 縄文~アイヌ文化期



204

240



206

223

276

0 6 10cm

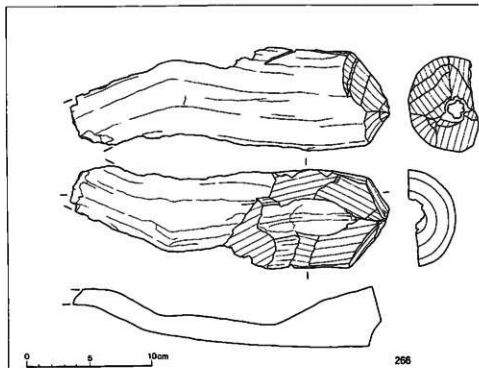
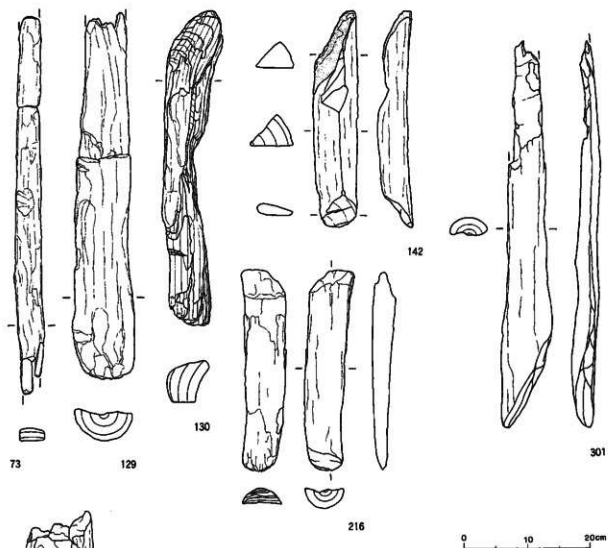
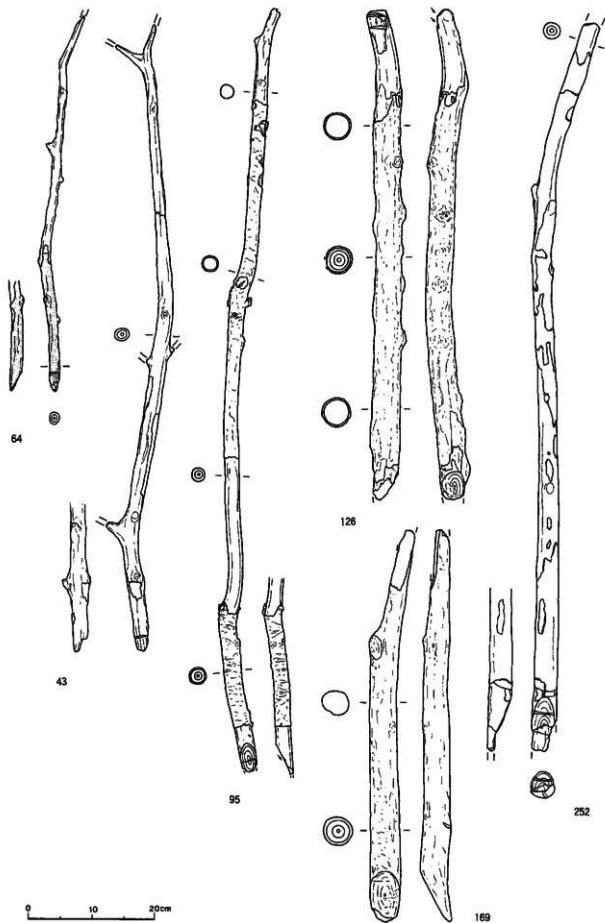
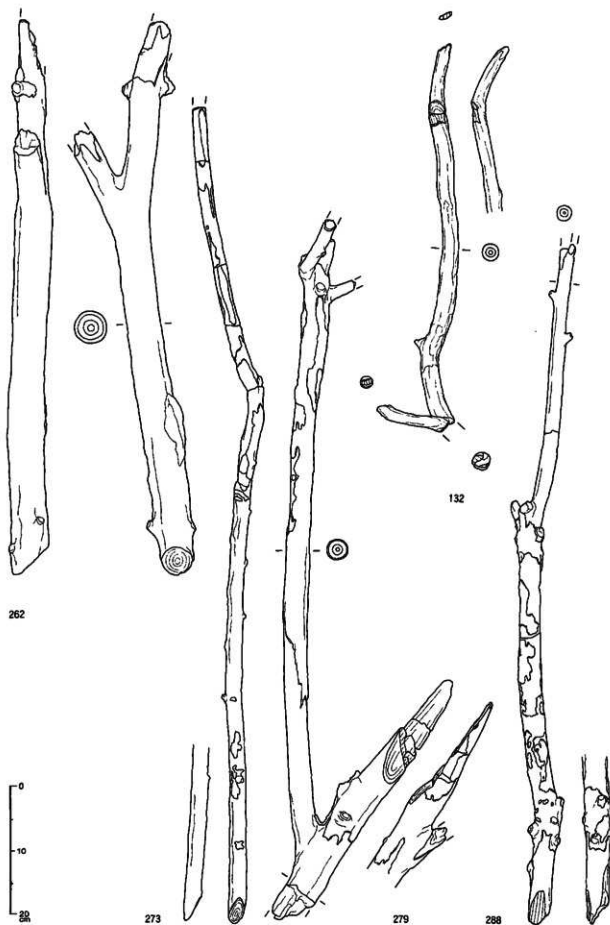


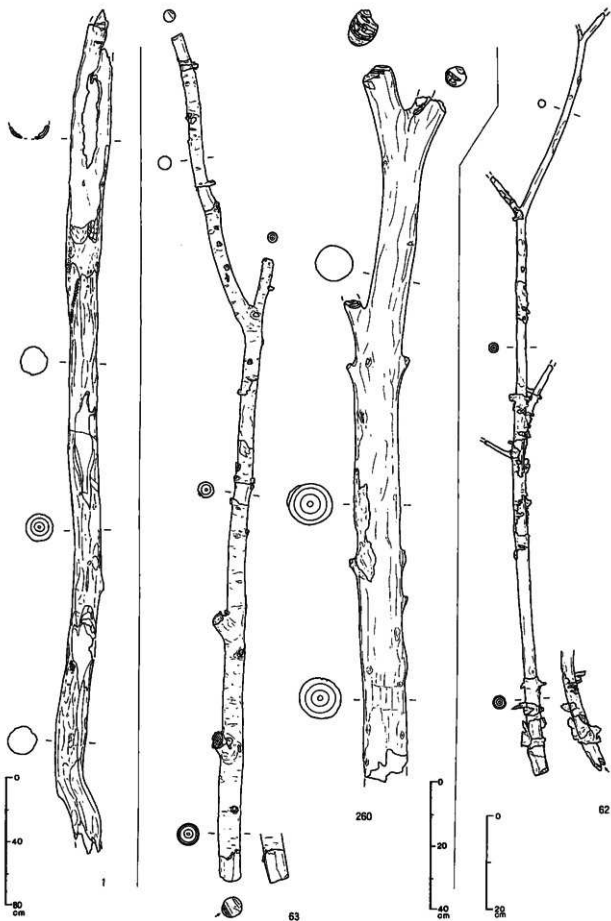
図 V-72 木製品④ 縄文~アイヌ文化期





図V-74 木製品④ 縄文~アイヌ文化期





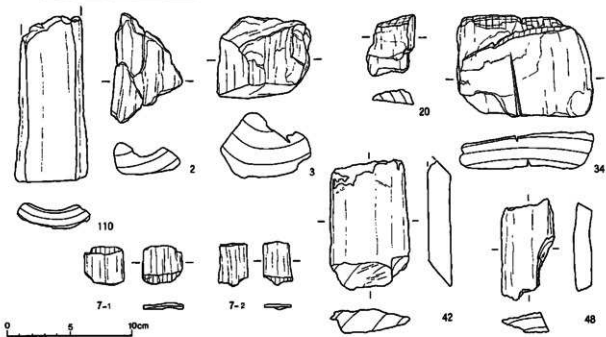
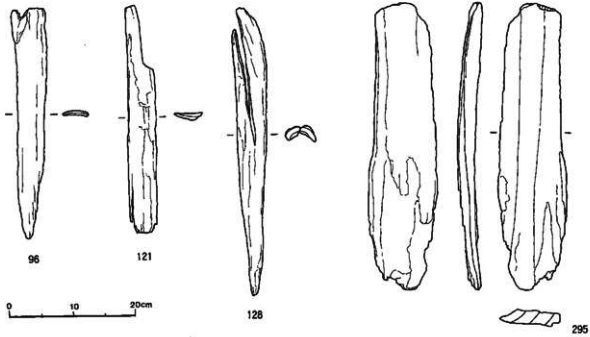
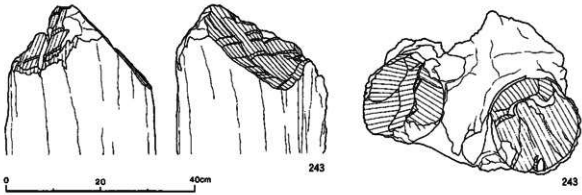
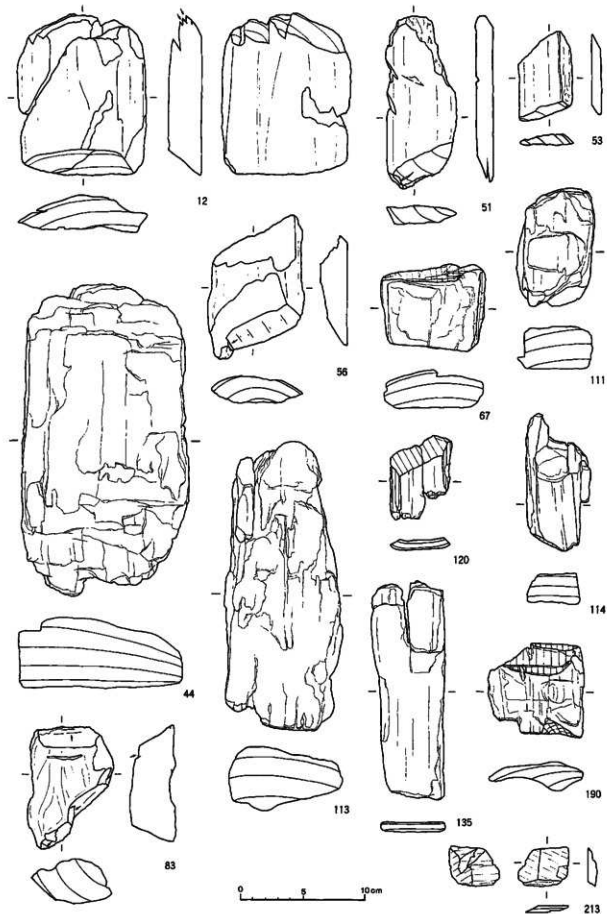
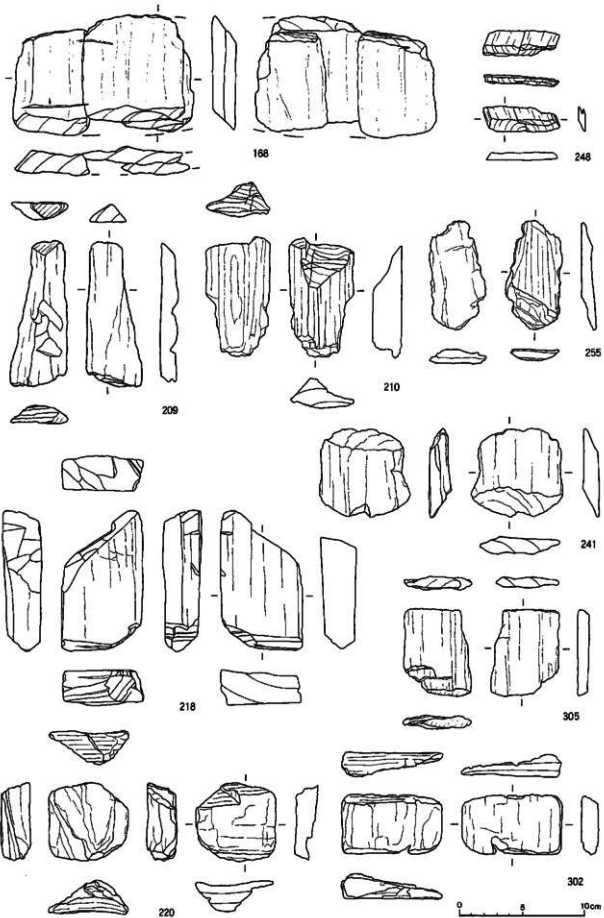


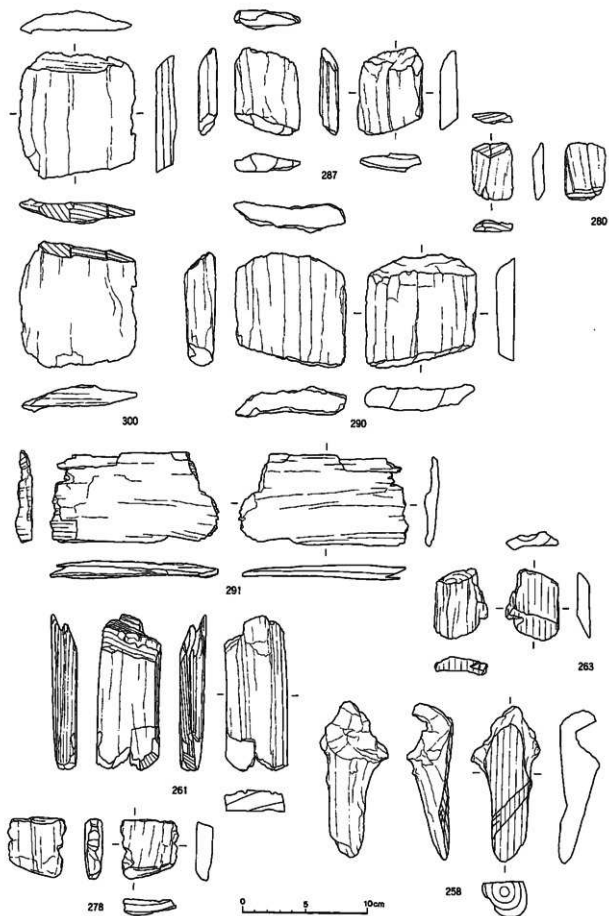
図 V-76 木製品(6) 縄文~アイヌ文化期



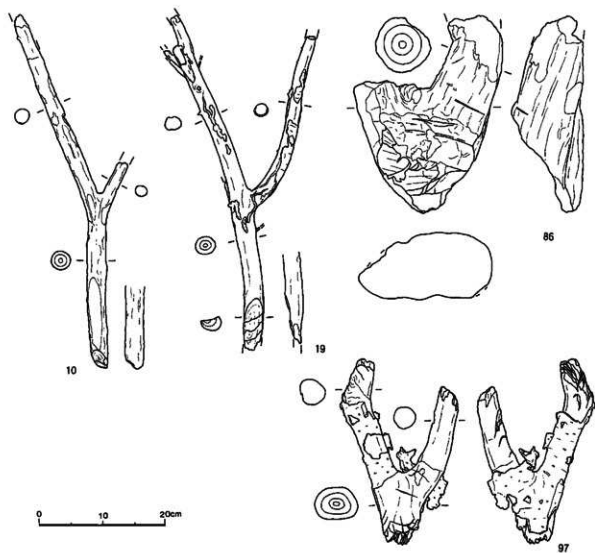
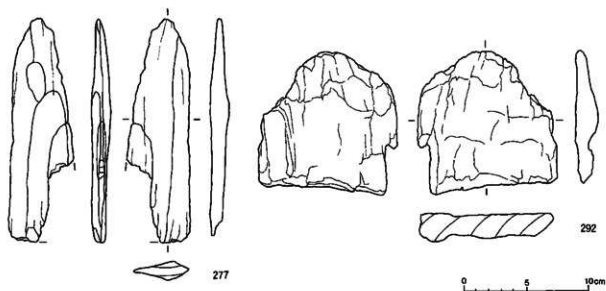
図V-77 木製品(切) 縄文~アイヌ文化期



図V-78 木製品(澁 縄文~アイヌ文化期)



図V-79 木製品(例) 縄文~アイヌ文化期



図V-80 木製品(4) 縄文~アイヌ文化期

#### (4) 用材傾向

樹種の同定は、試料の生物顕微鏡観察を行い、当センター所有の出土木材試料（美々8遺跡・ユカンプシC15遺跡など）や現生標本と比較し認定した。観察試料は、出土材から直接両刃剃刀を用いて採集した厚さ10～20ミクロンの切片で木口・板目・柀目の3断面1セットのプレパラートを作成した。各製品の同定結果は表V-18～23の一覧表に、集計と樹種の科・属・種名は表V-24に示した。

基本的に属レベルまでの同定であるが、種名まで同定できたものもある。以下に推定される種名をあげておく。針葉樹ではイチイ・スギは種名まで同定できた。モミ属はトドマツ、カラマツ属はカラマツ・グイマツ、トウヒ属はエゾマツ・アカエゾマツ、ヒノキ属はアスナロ・ヒノキアスナロ・サワラ・ヒノキなどが推定できるが、ヒノキ属？はスギ属・トウヒ属への変更もありえる。

広葉樹では、オニグルミ・アサダ・クリ・カツラ・イヌエンジュ・トチノキ・ハリギリは種名まで同定できた。ヤナギ属はエゾノカワヤナギ・オノエヤナギ・バッコヤナギ・エゾノバッコヤナギなど、ハコヤナギ属はドロノキ・ヤマナラシ、クマシデ属はアカシデ・サワシバ、ハシバミ属はハシバミ・ツノハシバミ、カバノキ属はシラカンバ・ウダイカンバなど、ハンノキ属はハンノキ・ケヤマハンノキなど、ブナ属はブナ・イヌブナ、コナラ属はミズナラ・コナラ・カシワなど、ニレ属はハルニレ・オヒョウ、クワ属はヤマグワ、モクレン属はホオノキ・キタコブシ・コブシ、サクラ属はエゾヤマザクラ・ミヤマザクラ・シウリザクラ・エゾノウミズザクラなど、リング属はズミ・エゾノコリンゴ、キハダ属はキハダ・ヒロハノキハダなど、ウルシ属はヌルデ・ヤマウルシ、ニシキギ属はニシキギ・マユミ・ツリバナなど、カエデ属はイタヤカエデ・ヤマモミジ・ハウチワカエデなど、シナノキ属はシナノキ・オオバボダイジュ、サルナシ属はサルナシ・マタタビ・ミヤママタタビ、タラノキ属はタラノキ、ハイノキ属はハイノキ、トネリコ属はヤチダモ・アオダモ、ハシドイ属はハシドイ、ニワトコ属はエゾニワトコが各々推定される。

カラマツ属・スギ・ヒノキ属やブナ属・トチノキ・ハイノキ属以外のほとんどの樹種は遺跡周辺部でも用意できる材である。スギ等の樹種は、交易などで製品として入手したものであろう。

全体では同定を試みた285点のうち属名以上同定できたものは283点で、針葉樹6属、広葉樹31属であった。表V-25と図V-81に全体の樹種構成を示しておく。縄文時代では、針葉樹やトネリコ属・コナラ属・ニレ属・カエデ属が多く利用されている。擦文～アイヌ期では、トネリコ属・ヤナギ属・コナラ属・ニレ属が利用度の高い汎用材といえる。また、交易によってもたらされたのであろうスギやヒノキ属の出現も特徴的である。以下、時期ごとに製品別および木取り形態や樹種別の用材傾向を検討してみる。

#### 縄文時代

試料は48点、針葉樹計12点で25%、トネリコ属13点27%・ニレ属5点・カエデ属5点・コナラ属4点が利用上位材。広葉樹の上位4属で6割近くを占める。

162のキウス型木榧は、これまで出土していた21点（未製品を含む）のうちカエデ属が19例と、極めて限定した樹種選択が為されている製品である。今回の例もやはりカエデ属であった。

76の柱は、汎用材のトネリコ属である。

板9点のうちカラマツ属の2点（54・172）はいずれも薄板材である。他はトネリコ属材3点が目立つ。

榑のうち93の錠状製品はやはりカエデ属、308の角材はコナラ属であった。

分割材（炭化材2点含む）では、全22点中トネリコ属材6点・針葉樹材計10点が高い利用度を示す。

表V-24 木製品の樹種同定結果

針葉樹					
科名	属名	種名	縄文期	縄文~アイヌ期	計
いちい	イチイ	イチイ	3		3
まつ	モミ		1	2	3
	カラマツ		5	2	7
	トウヒ		2	6	8
すぎ	スギ	スギ	1	7	8
ひのき	ヒノキ			4	4
4科 6属			12	21	33
広葉樹					
やなぎ	ヤナギ		1	32	33
	ハコヤナギ			4	4
くるみ	オニグルミ	オニグルミ	1	7	8
かばのき	アサダ	アサダ	1		1
	クマシデ			3	3
	ハシバミ		1		1
	カバノキ		1	2	3
	ハンノキ		1	2	3
ぶな	ブナ		1	1	2
	コナラ		4	27	31
	クリ	クリ		6	6
にれ	ニレ		5	25	30
くわ	クワ			2	2
かつら	カツラ	カツラ	2	1	3
もくれん	モクレン			3	3
ばら	サクラ			1	1
	リンゴ			1	1
まめ	イヌエンジュ	イヌエンジュ		14	14
みかん	キハダ			1	1
うるし	ウルシ			5	5
にしきぎ	ニシキギ			4	4
かえで	カエデ		5	3	8
とちのき	トチノキ	トチノキ		3	3
しなのき	シナノキ		1	7	8
またたび	サルナシ			2	2
うこぎ	ハリギリ	ハリギリ		10	10
	タラノキ	タラノキ		1	1
はいのき	ハイノキ			1	1
もくせい	トネリコ		13	42	55
	ハシドイ			2	2
すいかずら	ニワトコ			1	1
広葉樹穿孔材				2	2
21科 31属			36	216	252
針葉樹と広葉樹の合計					
25科 37属			48	237	285
樹皮				21	21
同定不能			小破片あり	小破片あり	
樹種同定総数			48	237	285



木取りの系統からいうと、トネリコ属材は丸木系・割材系・板材系のすべてにみられ、総合的な汎用材である。これに準ずるのがカエデ属材やコナラ属材といえよう。カラマツ属材も加工によく利用されている。

樹種の出現度からみると、汎用材とできるトネリコ属材が3割近くを占める。後世との比較でいえるのは、イチイ・カラマツ属等の針葉樹やカエデ属の利用度は高く、ヤナギ属・ニレ属や出現していないオニグルミやイヌエンジュの材としての利用度は低かったことである。

#### 本文～アイヌ文化期

試料数は237点、針葉樹は計21点で9%以下と少ない。トネリコ属42点18%、ヤナギ属32点14%、コナラ属27点11%、ニレ属25点11%が利用上位材。広葉樹の上位4属で5割以上を占め、10点以上のイヌエンジュとハリギリを加えると3分の2近くを占める。

306の鍬はクマシデ属の材である。アカシデ・サワシバなどは木材では堅く重い部類に入るといえる。鉞や鉤鉞にクマシデ属が使われた類例はなく、本州での出土農具の大半もアカガシ亜属材で作られている。関係品では美々8遺跡からクマシデ属の土掘棒が1点出土しているのみである。

78の杵はトネリコ属の材である。林善茂の調査（前掲書）によれば、杵の材質はアサダ・イタヤが多くクワ・クリ・ナラ・アカガモが使われたという。出土例では美々8遺跡2点中1点、ユカンボシC15遺跡7点中4点がトネリコ属材である。林の調査とはアカガモしか一致しないが、出土例からみると汎用材とはいえ、ある程度の選択意識を持ってトネリコ属材が使われたものとみられる。

296の箕はニレ属の材である。林善茂の調査（前掲書）によれば、箕の材質は軟らかくて軽く製作できる太さがあるもので、ハリギリ・トチ・カツラ・イチイ・シウリザクラ・シナノキなどが使われたという。当例は太さが確保できたニレ属材を使用したということであろう。

119・259の曲げ輪用の柁目の薄板はヒノキ属とスギ材、187の曲物底板はスギ材。239は桶蓋で蓋板・曲げ輪ともヒノキ属材である。いずれも本州産の材と技術とみられ、交易等でこの地に持ち込まれたものである。また239を縫い留めた樹皮はサクラ属のものともみられる。

282の大型刺物容器の小破片はクマシデ属材。類例はみられない。164の鉢形容器はトネリコ属材。出土例はあるが多くはない。萱野茂は刺物容器の多くをヤチダモ材で再現した<sup>11)</sup>。

11) 萱野茂 1978『アイヌの民具』アイヌの民具刊行運動委員会編 すずさわ書店

桶の側板の4枚(46・275・299・304)のうち、3点はスギ材、275はヒノキ属?である。大きさから4枚を同一桶(樽)の側板とみたが、材質からは275のみは別個体の可能性もある。いずれにしても本州産の材と技術であり、交易等でこの地に持ち込まれた製品である。

80の自在鉤(炉鉤)は、カエデ属?である。出土品でみられる掛け鉤タイプの炉鉤は、ヤナギ属材が多く使われている。萱野茂は前掲書で、この波型の鉤棒をイタヤカエデ材で再現したが、意識された選択であれば、自在鉤の用材選択はカエデ属の材といった伝承があったのかもしれない。

219の串はウルシ属材の細枝を利用。254の串はトウヒ属材の板状の製品を小割した再利用品。

柱3本はシナノキ属・ヤナギ属・トネリコ属。建材8本はトネリコ属・ニレ属・ヤナギ属各2本、サルナシ属・コナラ属1本である。汎用材として建築にもトネリコ属・ヤナギ属材が多く使用されるということだろうか。

板は17点。75・112・217の薄板材は3点とも針葉樹材、125と150の厚板材は2点ともトネリコ属材である。全体では6点のトネリコ属のほか、3点のコナラ属や合計4点の針葉樹材が目立つ。

棒状製品の8点はすべて材質が異なる。形状で一括りに「棒」としたもので、用途や大きさ・形態

がそれぞれ違うため、樹種の一致がより少ないものと思われる。

杭は20本中ニレ属材が7本と高い利用率を示す。杭には他材よりはニレ属材を選んだ結果であろう。トネリコ属3点は汎用材の範疇で捉えられる。

芯持材のうち細枝材と枝材の22点は17もの属に分散しているが、丸木材29点は12属におさまり、ヤナギ属9点・トネリコ属6点と高い利用率を示す。両者とも汎用材とはいえ、ヤナギ属の多さは特記できる。

分割材では全37点中コナラ属10点・トネリコ属10点と高い利用率を示す。両者とも汎用材とはいえ、コナラ属の多さは芯持材との違いもあり特記できる。またクリ材が2点と大型品であることや、ハリギリ材3点の出土も目を引く。

残材や切片・剥材・木端は、加工の体系からはずされたり廃棄された材で65点ある。製品外から用材選択を展望する資料となる。特徴的なのはイヌエンジュで14% 9点と多く、ハリギリ・クリ・ハコヤナギ属も出現率の割に目立っている。また、汎用材であるヤナギ属・コナラ属・ニレ属材が総体の出現率と差のない数値を示すのに対し、最たる汎用材のトネリコ属材が5点と少ない。

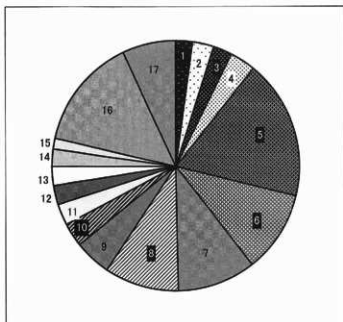
製品別の樹種選択傾向を検討するには資料数が少ないため、木取りの系統から利用材を概観してみたい。製品を概略で丸木系118点・割材系89点・板材系28点の3体系に分け、傾向を示してみる。

丸木系ではトネリコ属・ヤナギ属が各21点18%、ニレ属17点14%と多く、イヌエンジュ8点、コナラ属7点、オニグルミ6点と続く。針葉樹材は合計でも3点と極めて少ない。トネリコ属やイヌエンジュは出現率と同程度にあるが、ニレ属・ヤナギ属・オニグルミが出現率よりも高い比率で利用度が高く、コナラ属は低い。目立たないが、クリも1点しかない。逆にクマシデ属などは数は少ないが丸木系でしか利用されていない。

割材系ではコナラ属17点19%、トネリコ属15点17%、ヤナギ属11点12%と多く、ハリギリ8点、イヌエンジュ・ニレ属各6点、クリが5点と続く。針葉樹材は合計でも5点と少ない。トネリコ属やヤナギ属・イヌエンジュは出現率と同程度にあるが、コナラ属・ハリギリ・クリが出現率よりも高い比率で利用度が高く、ニレ属は低い。

表V-25 木製品の樹種構成

樹種	点数	構成比 %
1 カラマツ属	7	2.3
2 トウヒ属	8	2.6
3 スギ	8	2.6
4 その他の針葉樹	10	3.3
5 トネリコ属	55	18.0
6 ヤナギ属	33	10.8
7 コナラ属	31	10.1
8 ニレ属	30	9.8
9 イヌエンジュ	14	4.6
10 ハリギリ	10	3.3
11 オニグルミ	8	2.6
12 カエデ属	8	2.6
13 シナノキ属	8	2.6
14 クリ	6	2.0
15 ウルシ属	5	1.6
16 その他の広葉樹	44	14.4
17 樹皮	21	6.9
計	306	100.0



図V-81 木製品の樹種構成グラフ

板材系ではヒノキ属・スギなどの針葉樹が合計13点46%と半数近く、トネリコ属6点21%も多い。コナラ属やニレ属は出現率と同程度にあるが、トネリコ属・スギ・ヒノキ属が出現率よりも高い比率で利用度が高く、ヤナギ属やイヌエンジュなどは出現しない。針葉樹材は製品として入手したものが多く、自家製の板材はトネリコ属材が主流である。

樹種の全体の用材傾向をみると、針葉樹材は板物の製品として入手するか、板材を作るもので、丸木・割での利用度は極めて低い。トネリコ属・コナラ属・ニレ属は木取り体系において全般的な汎用材であり、ヤナギ属とイヌエンジュは丸木系と割材系に限定された汎用材である。中では、トネリコ属材は板材系へ、コナラ属材は割材系へ、ニレ属材とヤナギ属材は丸木系という傾向を4大汎用材に見ることができる。その他の樹種で特徴的なのは、8割以上が割材系のハリギリ材とクリ材、8割以上が丸木系のオニグルミ材である。シナノキ属材は全般にみられる。

近隣の同時期の遺跡であるユカンボシC15遺跡のデータ<sup>12)</sup>と木取り系統の比較をすると、トネリコ属とニレ属では三系がほぼ同じバランスであった。割材系率の高いコナラ属ではキウス5遺跡の方がさらに割材系・板材系の率が高く、ユカンボシC15遺跡で丸木系率の高いヤナギ属やイヌエンジュではキウス5遺跡の方が割材系でも比率が高い状況である。

12) 三浦正人 2003「木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容」  
『千歳市ユカンボシC15遺跡(6) 北地調査182』財北海道埋蔵文化財センター

(三浦)

## VI 成果と課題

### 1. 千歳川水系における低湿部の遺跡調査とその意義

昭和50年代から現在まで、千歳川水系では木製品等の有機質遺物が検出された低湿部の調査が、数多く実施されている。ここでは、当報告のキウス5遺跡低位部の調査を含むこれらの調査を概観して、低湿部調査の意義を再認識してみる。

千歳川は、北海道一の長流石狩川の下流部における支流のひとつで、第1章4節(1)項で略記した石狩低地帯中央部を形成する主要河川である。支笏湖(支笏カルデラ)に源を発して東流、千歳市街で北に向きを変え、恵庭市・北広島市・長沼町・南幌町の停滞水域を蛇行しつつ、江別市江別太で石狩川に合流する全長約72kmの主流に、内別川(苗別川)・ママチ川・祝梅川・長都川・ユカンボシ川・ケヌフチ川・漁川・茂漁川(漁川支流)・柏木川(島松川支流)・島松川・音江別川(島松川支流)・輪厚川(旧島松川支流)・早苗別川などの大小の支流が流れ込む。干拓や河川改修以前は、長都沼などの大小の沼が天然の遊水池として流れに属し、馬追丘陵から流れ出る小河川もこの低湿部を形成する水系の構成要素である。夕張川も千歳川の支流であった。昔も今もサケの遡上する豊かな川である。

流域低湿地における遺跡調査は、江別市江別太遺跡の調査を嚆矢とする。この調査は、北海道縦貫自動車道建設に伴う緊急発掘調査で、高橋正勝氏を担当者として1978年に実施された。以後1990年代に入り、北海道横断自動車道建設に伴う発掘調査など当センターの大規模な調査で確認されたものが多い。以下、下流域から順に各低湿性遺跡の概要を記す(図VI-1)。

#### 江別市江別太遺跡

石狩川合流点から上流3kmの千歳川右岸、標高1～1mに立地。統縄文期中葉(2～3世紀)の低湿性遺跡。河川堆積層から築のような漁獲施設状に立杭や木材が検出され、その数は約2,000点に上る。そのなかにあかみや樺といった舟関係製品や、銚・魚叩き棒・釣り竿などの漁具、籠・串・匙柄・ナイフ柄・石斧柄・柄などの調理・加工具、舟形・木胎漆器などの容器類、管や機織り具部材?など漁労を中心とした生活用具が土器・石器とともに出土している。中でも木柄に石ナイフが装着されたままの道具が特徴的で、これら20点の木製品を含む59点が1993年、重要文化財に指定された。

文献：『江別太遺跡』1979 江別市教育委員会・高橋正勝「木製品」『縄文文化の研究7』1982 雄山閣・『江別文化の道具』1994 江別市郷土資料館

#### 長沼町東2線南5号丸木舟出土地

千歳川中流域・旧夕張川下流域の氾濫原の沼地から、水田の暗渠掘削中に丸木舟が発見された。明治後期のものとみられる。両河川と流域の大小の沼は、交通路や漁労の場として少なくともアイヌ文化期から利用されていると考えられ、その延長線上にある丸木舟の出土であろう。

文献：由良 勇 1995『北海道の丸木舟』

#### 恵庭市柏木川4遺跡

島松川の支流、柏木川の上流部右岸、標高44mほどの河岸段丘と氾濫原旧河道に広がる遺跡。氾濫原の本格的調査は2006年に実施された。縄文後期中～後葉とみられる旧河道から、自然木を含む木材類のほか舟形容器や槽状刳物・砵椀などの木製品や赤色漆塗胎輪、多種の編み布の重なり・土器補

修孔に残る紐といった繊維製品が出土している。周辺部に限らず、全国的な比較資料として重要な遺物・遺跡といえる。

低位部文献：報告書作成中。『調査年報19』2006 釧北海道埋蔵文化財センター

#### 恵庭市カリンバ遺跡（旧カリンバ3遺跡）

小支流カリンバ川右岸の標高25mほどの低位段丘面にある遺跡。縄文～アイヌ期の複合遺跡だが1999年の調査で、縄文後期末（約3,000年前）の土坑墓群から100点を超す漆工品や数多くの玉類が検出されたことで話題となった。低位部の調査は、史跡指定に向けた、遺跡の全貌を捉えるためのトレンチ調査で、2002・2003年に実施された。木製品の出土はなかったが、縄文後期末～続縄文初頭の土坑・礫群などの遺構や土器・石器・玉類・自然木が検出され、赤色漆塗胸輪の漆膜部分も確認されている。赤色顔料の広がりやそれを磨り潰した板状礫も検出されており、漆工に関わる場所の可能性もある。遺跡は2005年、国指定史跡となった。

低位部文献：『カリンバ3遺跡3』2004 恵庭市教育委員会

#### 千歳市ユカンボシC15遺跡

長都沼の停滞水域に流れ込むユカンボシ川かその分流の最下流域低位段丘と低位部に広がる遺跡。旧石器～アイヌ文化期の複合遺跡で、低湿部は標高7.5m以下に発達する泥炭層になる。1996～1998年に北海道横断自動車道建設を原因として発掘調査された。泥炭層から主として擦文・アイヌ文化期の木製品や加工材が12,000点近く出土し、下層部の約13,000年前の恵庭降下軽石層（En-P）より下位から埋没林と旧石器が発見されている。主な木製品は、舟敷・舟縁材・舷板・櫂・櫂受台・魚叩き棒・やす・矢・矢中柄・掛矢・斧柄・槌・柄類・作業台・楔・発火具・鉤・かんじき・下駄・編台・曲物・桶・漆桶・筥・箸・串・杵・イクバスイ・イナウ・建材類・樹皮製品などである。自家製品と交易品が混ざり合い、当時の生活と社会構成や変動を語る貴重な資料である。

文献：『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)～(6)』北埋調報128・133・146・159・176・192 1998～2003 釧北海道埋蔵文化財センター

#### 千歳市ユカンボシC2遺跡

長都川の左岸、合流が併流するユカンボシ川の最下流域低位段丘に広がる、縄文～アイヌ文化期の複合遺跡。標高8～9m付近に擦文・アイヌ文化期の遺構が密集する。河川改修や道路改良等が主原因で1969・1988・1989・1994・2000年と度々発掘調査が実施されている。低位部は2000年に調査された旧河道の縁部で、アイヌ文化期の所産とみられる数点の木製品が出土している。

低位部文献：『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報XXX 2002 千歳市教育委員会

#### 千歳市オサツ2遺跡

長都川下流域右岸の標高6～9mの低位段丘上に立地し、対岸にユカンボシC2遺跡が存在する。旧石器～アイヌ文化期の複合遺跡で、縄文～アイヌ文化期の遺構が密集する。1992～1994・1997～1999年に道路改良工事に伴い発掘調査が実施されている。低位部は1992・1994・1999年に調査された長都川旧河道部で、擦文・アイヌ文化期の木製品や加工材が多数検出された。主な木製品は、舟敷・舷板・櫂・櫂受台・矢中柄・木鉾・槌・串・編台・曲物・桶・漆桶などで、縄の出土もある。



(この図は、国土地理院発行 6色刷 20万分の1地勢図「札幌」(平成8年修正)に加筆したものである。)

図Ⅳ-1 千歳川流域の低湿性遺跡分布図

低位部文献：『千歳市オサツ2遺跡(2)』北埋調報103 1996 北海道埋蔵文化財センター・「オサツ2遺跡」『市町村における発掘調査の概要(平成11年度)』2000 北海道教育庁文化課・『ユカンシロシ2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報XXII 2002 千歳市教育委員会

#### 千歳市オサツ14遺跡

長都川とその支流エアニトマム川に挟まれた標高約8mの低位段丘上に立地する縄文中期と擦文期主体の遺跡。1994年の調査で、長都川の旧河道の一部を調査し、アイヌ文化期の串・杭等の木製品や割材など加工木材が53点出土した。

文献：『千歳市オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡』北埋調報96 1995 北海道埋蔵文化財センター

#### 千歳市オサツ5遺跡

長都川左岸の標高10mほどの低位段丘縁辺にあり、長都チャシを含んでいる。縄文中期と擦文期・アイヌ期の遺跡として知られ、鍋・兜・刀子・斧・鐮など金属製品も出土している。道教委の埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、湿地部に丸木舟が埋まっているという。

#### 千歳市キウス4遺跡

キウス川が馬追丘陵を出て長都沼の広がる停滞水域に流れ込む地点周辺、右岸の低位段丘に立地。旧石器～アイヌ文化期の複合遺跡で、縄文後期後葉の周堤墓や盛土遺構を含んでいる。北海道横断自動車道建設地のインターチェンジ工区にあたり、1993・1995～1998年に計約50,000㎡の大規模な発掘調査が実施された。低位部は旧河道とその縁辺にあたり、標高4～5mにある縄文早期～前期の旧河道では杭や加工材、標高7m以下のアイヌ文化期旧河道では、樽側板・漆塗容器・笠・杭・建材類や加工材などが出土している。主体となる縄文後期後半の木製品・加工材には、脚付盆状容器・取手付大型槽・石斧柄・砵椀(キウス型木椀)・串・赤色漆塗鉢・赤色漆塗弓・杭・建材類が、繊維製品には釜状・籠状の製品があった。当時の生活や周堤墓との関係が深いものである。

低位部文献：『千歳市キウス4遺跡(2)』北埋調報124 1998・『千歳市キウス4遺跡(3)』北埋調報134 1999・『千歳市キウス4遺跡(4)』北埋調報135 1999・『千歳市キウス4遺跡(9)』北埋調報180 2003・『千歳市キウス4遺跡(10)』北埋調報187 2003・『テエタ12号』2004 すべて北海道埋蔵文化財センター

#### 千歳市キウス5遺跡

当報告の遺跡。キウス4遺跡の上流部、馬追丘陵の端部に位置し、キウス川の右岸段丘面と旧河道低位部からなる旧石器～アイヌ文化期の複合遺跡。前述したように1994～1998年北海道横断自動車道建設を原因として発掘調査され、1km以上にわたる緩斜面調査の結果、計約55,000㎡以上に手が付けられた。さらに国道337号の新ルート建設に伴い、これに交差・平行する部分の発掘調査が2003年から進行中である。低位部は旧河道とその縁辺にあたり、1994～1996年に上流部が調査された。2003・2006年には中流域にかかる部分を調査し、当報告に内容を示した。出土した木製品等は、上流域では主に縄文後期～晩期の砵椀(キウス型木椀)・舟形容器・鉢形容器・柄・杭・加工材や籠状製品・赤色漆塗器などで、段丘上の集落や低位部の焼土群のあり方から、その近辺で製作・使用中されたものとみられる。中流域では、上記の型や縄文早期の加工材・アイヌ文化期の罎・杵・炉鉤・曲物・桶・大型刳物(箕の未製品)・建材類・加工材などが河川堆積層中から発見された。また、平坦面から石狩低地帯で初めて近世アイヌ期の畑跡を検出した。

低位部文献：『千歳市キウス5遺跡 キウス4遺跡(2) ケネフチ8遺跡』北埋調報92 1995・『千歳市キウス5遺跡(3)』北埋調報115 1997・『千歳市キウス5遺跡(5)』北埋調報125 1998・『千歳市キウス5遺跡(8)』北埋調報251(当報告) 2008 すべて釧北海道埋蔵文化財センター

#### 千歳市チブニー1遺跡

チブニー川が馬追丘陵を出て長都沼の広がる停滞水域に流れ込む地点周辺、左岸の低位段丘に立地。旧河道からアイヌ文化期のものと思われる杭が出土。

文献：『千歳市チブニー1遺跡・チブニー2遺跡』北埋調報173 2002 釧北海道埋蔵文化財センター

#### 千歳市梅川1遺跡

2005年の部分的な試掘調査で、水漬き状態の試掘穴からアイヌ文化期と思われる木製品・加工材を検出。祝梅川とその支流梅川の流域にある遺跡群を構成する。2008年調査予定。

#### 千歳市トメト川3遺跡

2001・2002年に千歳市教育委員会によって調査された縄文～アイヌ文化期の複合遺跡。小支流トメト川左岸の低位段丘(標高約8m)部にあり、長都沼のあった低湿地が眼前に広がっている。2006年には低位部が調査され、純縄文北大期の焼土検出や、その上層で擦文～アイヌ文化期の木製品が出土した。現在整理中である。

#### 千歳市根志越3遺跡

1983年、日本海～太平洋の内陸交通路再現のため川下りをしていく帆船の乗員により、千歳川中流の左岸河川堆積物層で丸木舟の一部が発見され調査された。調査前後にも1kmほど下流の2地点で舟端部が発見された。いずれも上流から流され埋まったものが、流水により露出したとみられる。現地や周辺の状況から、1739年の樽前a降下軽石層に覆われた砂層から出土したと判断できる。樹種はヤチダモ・カツラと同定されている。

文献：田村俊之「千歳市根志越3遺跡調査概報」『北海道考古学20』1984・『北海道の丸木舟』1995 由良 勇

#### 千歳市朝日町8丁目丸木舟出土地

1970年、下水道マンホール工事の掘削中、ママチ川氾濫原の泥炭層・河川堆積物層から一艘の丸木舟が発見された。河川堆積層を覆って1667年噴火の樽前b降下軽石層がみられ、350年ほど前の丸木舟と判断できる。長さ7.28m・巾57.5cmで樹種はセン(ハリギリ)であるという。

文献：佐藤一夫「ママチ川丸木舟遺跡発掘調査概要報告」『純千歳遺跡』1979 千歳市教育委員会・田村俊之「千歳市根志越3遺跡調査概報」『北海道考古学20』1984・「埋まっていた舟」『広報ちとせNo761』1993 千歳市企画部広報広聴課・『北海道の丸木舟』1995 由良 勇

#### 千歳市ウサクマイン遺跡

千歳市街地から約5km上流、内別川合流点の両河川に挟まれた氾濫原(沖積地)に立地する擦文～アイヌ文化期主体の遺跡。標高は25mほどである。1976・1994・1995・1999年と道路拡幅等により部分的に調査された。1999年の調査では、富寿神宝とオホーツク式土器の出土で話題となった。内別川の旧河道部も1999年に調査され、立杭11本で構成された擦文期の杭列が検出され、柄・矢・矢中柄・



小刀柄・容器底板・掛矢・杭等の木製品や割材・股木材など加工木材が出土した。

低位部文献：『千歳市ウサクマイN遺跡』北理調報156 2001 函北海道埋蔵文化財センター

上記の遺跡では各々自然木の出土も見られたが、他に低位部や旧河道を調査したものの自然木しか出土していない遺跡には、ユカンボシ川河岸の恵庭市ユカンボシE3・E5・E7・E8遺跡や、千歳市チブニー2遺跡（チブニー1遺跡対岸）、同オレイカ1・2遺跡（オレイカ川旧河道）、同祝梅川小野遺跡（試掘）や梅川2・4遺跡（祝梅・梅川流域遺跡群）などがある。河川改修に伴う調査が多いため、自然木等の調査報告が無くても、恵庭市柏木川の河岸に当たる柏木川・南島松・西島松・中島松や恵庭・千歳両市のユカンボシ川河岸の各遺跡群の調査では、ほぼ全遺跡で低地部や旧河道の水漬き部調査を実施している。また恵庭市中島松7遺跡や茂漁5遺跡では、據文文化期整穴の柱穴から残存した柱材根部を検出している。

以上の調査例から導かれる千歳川水系、惹いては石狩川水系や北海道全域における低湿性遺跡の調査意義と課題を列記してみる。

#### ① 漁獲施設

サケの遡上する千歳川の最下流部、江別太遺跡からは統縄文期の漁獲施設が発見されている。これは石狩川水系における漁獲施設の発掘調査で、據文期の札幌市サクシュコトニ川遺跡やK39遺跡北18条地点、旭川市錦町5遺跡、縄文中期の石狩市紅葉山49号遺跡に先行する調査であった。これ以降旧河道の調査では漁獲施設や堰岸施設を意識して調査することが必要となったわけで、極めて重要な発見であった。

また、もともと千歳川は中下流域では長都沼・馬追沼・鶴沼などの大小の沼を繋げた停滞水域の川であった。その沼地を含む停滞水域には、キジ・ガン・カモ・ハクチョウ・ツルといった水鳥の飛来があり、水生生物にはスジエビ・モクスガニ・イシガイ・カワシンジュガイ・ヌマガイのほか食糧となるヒシが採集できプランクトンも豊富であった。魚類ではイトウ・ヤチウグイ・フナ・イトウオ・ゴリ・カジカ・ドジョウ・ワカサギ・コイなどが生息していた（元田 茂 1950「北海道湖沼誌」『水産孵化場試験報告5-1』など）。さらに千歳川の在来種にはサケ・サクラマス・ヤマメ・イトウ・ウグイ・エゾウグイ・エゾイワナ・アメマス・オショロコマ・カワヤツメ・ナマズ・コイ・ギンブナ・ドジョウ・フクドジョウ・エゾホトケドジョウ・エゾトミヨ・キタノトミヨ・トミヨ・イトヨ・ハナカジカ・アユ・ワカサギ・ヤチウグイがいたという（山本道也 1978「サケの来る川 千歳川の変遷とサケ文化史」『苗別川流域における鳥・魚類・植生調査』千歳市文化財報告Ⅱ）。豊富な魚類資源は鳥や他の水生生物ともども人々の生活を潤すに十分の価値があった。それを捕獲する施設は当然縄文時代から現代に至るまで設けられていたわけで、これらの内陸漁業に関わる遺構調査が今後とも千歳川流域で展開することを期待したい。また、出土する個別漁具（ヤス・釜・手網など）との関連も見逃せない。

#### ② 漆作業場

1986・87年小樽市忍路土場遺跡の調査で証明された北海道における縄文時代後期の漆工品自家生産は、その後数々の発見で確固たる地位を築いた。なかでも恵庭市カリンバ遺跡の縄文後晩期の墓に副葬されていた100点を超える漆塗櫛・腕輪・帯状品などは北海道漆文化の粋と言えるもので開花のピ

ークを思わせる。この漆工品の製作址を求めて追加調査した指定範囲調査では確たる証拠は出なかったが、対応する遺構は必ず存在する。忍路土場遺跡と忍路環状列石や、余市町安芸遺跡と八幡山環状列石など、漆工品製作址と副葬する墓が近隣でセットになっているとみれば、カリンバ遺跡はもちろん同市柏木東遺跡周堤墓や西島松2遺跡・同5遺跡の墓に入っていた漆工品製作址は柏木川流域の何処かにあり、数種の編み布類を検出した柏木川4遺跡などが候補にあげられよう。千歳市周辺でもキウスや美沢川兩岸の周堤墓に対応する漆工品製作址があるはずで、低湿性遺跡調査が実施される際には重要な留意点となる。とともに出土漆工品の精緻な分析も必要となる。

### ③ キウス型木槌

漆工品と並んで縄文時代後晩期で注目されるのは、所謂キウス型木槌である。V章の木製品の節でも述べたが、現在のところキウス4・5遺跡と忍路土場遺跡・安芸遺跡でしか発見されていない。キウスで19例中17例が出土していることと、ほぼカエデ材に限定された樹種選択が特徴的である。皮鞣しや繊維を蔽って軟化させる用途とみられている。「周堤墓・環状列石」や「繊維製品・漆工品」がキーワードになるように思われる。集団の系譜や集団間の繋がりを検討する上でひとつの要素となる。今後どの低湿性遺跡で出土するのか注目したい。

### ④ 擦文～アイヌ文化期の木製品

低湿性遺跡といえば木製品のイメージが強く、事実多数の木製品が出土している。残されていた木材は自然木も含めて、当時の人々が生活を営むにあたって最も身近で利用度の高い材質である。木製品を個別・種別・遺跡・遺跡間で分析し比較検討することが、その遺跡の性格と変容を探る重要な手がかりとなる。特に千歳地域ではその大半が擦文～アイヌ文化期の所産である。スギやヒノキなどの本州産樹種の製品が混在し、漆塗柄が豊富なのも特徴的である。

千歳川は古来より交易の川であり、千歳地域は日本海側と太平洋側、道南・道央と道東部を相まみえさす交通の要衝である。千歳の背後には、太平洋側に開けて交易・漁労を行った港町で和人の出入りも多い美々8遺跡が控えており、近世には千歳川に会所が設けられ商業も発展した。その和産品の豊富さと再利用度の高さと自家製品の精巧さなどは、千歳川流域の先に挙げた諸低湿性遺跡を含め、今後の調査での比較試料が極めて豊富である。特に長都沼に面したユカンボシC15遺跡は、擦文人～アイヌが交易を交えた日常生活を営んだ遺跡で、出土した舟とその部材や漆塗柄はもっと広く世に知らされるべき木製品である。

### ⑤ 木製品の樹種同定

前項に示した木製品の比較検討を行う上で最も重要な分析が樹種の同定である。樹種の判明は、製品が地場産か交易品か、製品ごとの樹種選定の度合いや有無がわかり、総合的に集落・地域・時間での変容とその事由を知る指針となりえる。自然木の樹種同定が進めば、自然環境復原や材質別利用頻度のより詳細なデータ収集ができる。

千歳川流域の調査では、低湿性遺跡や遺構炭化材の樹種同定が進展しており、ユカンボシC15遺跡の11,000件強をはじめとして約15,000件近い同定結果が得られている。さらに美々8遺跡などの美沢川流域の遺跡群や札幌市など道央圏のデータを加えると20,000件を超える。これらは全道分を含めて、「日本列島出土木製品データベース」として蓄積されている。今後ともデータの集積に努めたい。

## ⑥ 河川に残存する丸木舟

ユカンボシC15遺跡・オサツ2遺跡からは擦文～アイヌ文化期の舟敷が出土しているが、舷側板も同時に出土しており、板艇舟の船底とみられる。これより小型で河川や沼での漁労や近隣の集落を移動連絡する丸木舟も存在する。千歳川流域では先に挙げた如く、明治期のものも含めて6艘の丸木舟が発見されている。すべて工事などで偶然見つかったものもある。今後もこのような発見が多いものと思われるが、未発見の丸木舟が朽ちてしまわぬうちに早急に川岸などを探索する調査が必要である。

当国道337号建設工事も今後は長沼町・南幌町方面の石狩低地帯滞水域へ進んでいく予定であり、千歳川洪水対策事業としての遊水池建設計画も進展していることから、発掘調査範囲外でも丸木舟が発見される可能性は高い。各方面で十分注意する必要がある。

## ⑦ 畑跡の検出

キウス5遺跡低位部の河川堆積上の平坦面で、畝をもつ近世アイヌ期の畑跡を検出した。洪水で薄く粘土を被りその上に1739年降下のTa-aが堆積したのと、河道が現流路に変わったため後の洪水や浸食からも守られ、発掘調査で姿を現わした。しかしⅥ章次節でも述べるとおりアイヌ期の畑には、畝建てをせず川岸近くの肥沃な土地に不規則な浅い穴を掘るだけの粗い農法も存在するようで、今後は畝の有無も含めて、低位部での畑の検出に留意しなければならない。また、擦文文化期の畑も未発見であるので、こちらの発見・調査も考慮が必要である。低平地に限ったことではないが、発掘調査に伴う表土・火山灰除去や調査区外の工事進行では、掘削の仕方によって畑跡が破壊される可能性もあるので慎重な重機操作や指示が求められる。

## ⑧ 埋没林と旧石器

ユカンボシC15遺跡では、恵庭a降下軽石堆積物の未風化軽石礫層(En-P)の下位まで深掘りをかけ、旧石器の試掘調査を行った。砂礫層・腐植土層・粘土層・シルト層が互層をなす中、腐植土層でグイマツとみられる埋没林を検出した。炭化物集中や黒曜石の石器類も出土し、1点は24,000～18,000年前と年代測定結果が出た。

この周辺では柏台1遺跡・祝梅三角山遺跡D地点・丸子山遺跡など古砂丘列下のEn-a層下位から同時期の旧石器の出土が知られている。地山面を浸食した河道壁や河床部の調査では、埋没林や旧石器にも留意が必要である。また、河川堆積層ではEn-a層上位の旧石器の混在もみられ、周囲の当該期遺跡の存在を示す指標にもなっている。

## ⑨ 土壌分析

層に大きな乱れのない低湿度においては、土壌分析を行うことにより、珪素分析・花粉分析・植物珪酸体分析・種実遺体同定・昆虫遺体同定・年代測定などが進展し、樹種同定ともども遺跡の自然環境や当時の環境変化が捉えられる。低湿度性遺跡調査の自然科学的側面として重要である。

上記の①～⑨は相互にリンクし合い、遺跡内と周囲や遺跡間の比較検討が生む成果は大きい。それは低湿度性遺跡に限らず、総合体系として遺跡内の台地部や近隣遺跡、流域の遺跡、道央部、北海道、本州、大陸…と展開する膨大で深いデータを秘めている。

(三浦 正人)

## 2. アイヌ文化期の畑 -コタンからのアプローチ-

キウス5遺跡では、Ⅳ章第1節で報告したように18世紀の畑跡が検出された。北海道では以前から、アワ・キビ・ヒエ・オオムギ・コムギ・シソ・アサなどの栽培種子が接文・アイヌ文化期の遺跡から検出されており<sup>(1)</sup>、農具も出土する<sup>(2)</sup>ことから、雑穀農耕が確実にされている<sup>(3)</sup>が、接文文化期の畑跡は発見されていない。また、畑跡の発見は噴火湾沿岸～渡島半島地域における17世紀所産のものが主体だが、何が栽培されていたのか明確ではないものがほとんどである。これら近世アイヌ文化期の畑跡については、横山英介・坂本尚史・谷島由貴らの集成・論考がある<sup>(4)</sup>。

また、2007年2月函館市を会場に開催されたシンポジウム「えぞ地の畑作農業を探る」には、当シンポの主宰である横山英介氏や全国および世界の民族の農業の習俗や歴史研究の大家である佐々木高明氏・大塚和義氏・佐川正敏氏のほか、畑跡の調査報告に従事した道内や青森の市町村や埋蔵文化財センターの調査員が一同に集い、多岐にわたる蝦夷地の畑作に関する問題の討論・情報交換を行った。キウス5遺跡の畑跡も事例発表や討論で重要な一資料として研究者間に認識され、意義深い集会となった。従ってこの成果報告にも、シンポジウムにおける討論や教示に準拠するものがある。

ここでは、畑跡発見の空白地であった道央部—石狩低地帯—における初の検出となったキウス5遺跡の畑跡と、そこから連鎖する事項について、集落との関わりを中心に覚悟的に取り上げてみたい。

### (1) キウス5遺跡の畑跡の状況 (図Ⅳ-3～5)

この畑は、キウス川が切り開いた谷底平野の洪水堆積平坦面に立地する。標高約18.3～19.0mで、現在のキウス川の至近の河床標高が約16mであるから、河川氾濫の被害を受けそうな低位部に作られた畑としてよいだろう。確認できただけで6あるいは7面の広がりがあり、調査範囲外の広がりも想定すると、約500㎡(5a・約0.5段)の耕作規模である。1面は4～10本の畝で構成され、畝の上端幅は0.6～1m、畝と畝の間隔はおよそ1.5mである。畝間には耕作の跡・鋤痕とみられる小凹が検出された部分もある。土壌分析等を行ったが、栽培種とみられる種子や花粉の検出はなく、何を栽培していたかは不明である。また、炭化物の出土もかなり少なく、焼畑の可能性も低い。

畑全面を含む一帯は、洪水に起因すると思われる白色のシルト質粘土の薄層と、1739年降下のTa-a軽石層に覆われている。また、畑の広がり北側を面するのはキウス川の当時の河道である。大量のTa-a降下軽石によって当時のキウス川が塞ぎ止められ、南側の現流路に移ったため浸食をまねがれたものと考えられる。これらのことからこの畑が営まれた時期は、1739年をそう大きく遡らない18世紀の前葉と捉えることができよう。畝や畝間の重なりがみられず、各面の新古や同時耕作の積極的証拠はない。同じ面を再度耕作した痕もなく、一度畝建てをしたままの状態で埋まったものであるためか、筋状のラインが細らしさを強調している。石狩低地帯では初めて検出されたアイヌ文化期の畑であることと、低平地に作られた焼畑ではない畑であることが特に重要な意味をもつ。

この状況は七飯町・森町・八雲町などで発見されている山の斜面に縦畝が並ぶ17世紀の畑とはまるで違った様相である。横山英介によれば、これら道南の畑跡の土壌からは大量の炭化物が検出されることがあり、焼畑と捉えられるものもあるらしい。柳田國男『地名の研究』などを引用した木村茂光『ハタケと日本人』<sup>(5)</sup>を読むと、焼畑は山を3～5年間畑にし、再びもとの樹林に戻すものらしい。さらに後掲の史料『蝦夷生計図説』<sup>(6)</sup>では、アイヌの畑作の際、畑にする場所の草は刈って集めて焼くが、これは肥料にするのではなく耕作の邪魔になるからである(史料№9-4)といい、焼畑ではないことが間接的に示されており、古い畑=焼畑と考える必要もない。ただしこの史料は、畝建てのない畑の記述で、焼畑否定の決定的証拠にはならない。

他地域の各畑跡の分析や紹介は、先に挙げた論考や集成に譲るが、総合的にみると現時点での蝦夷地の畑研究における認識では、道南の例は和人の手による公算大、胆振地方に和人の耕作とアイヌの耕作が混在し、キウスの畑はアイヌの手になるものと捉えられている。

このキウス5遺跡の畑0.5段が同時期に耕作されたものと仮定し、それなりの収穫があったとすれば、どの程度の手入を必要としたのであろうか。誤謬を怖れずに概算してみる。905年発令の『延喜式』の「内膳司耕種園圃条」に麦一段を栽培するには、耕作で犁使い1人・牛の口取り1人・整地1人・畝建て2人・種蒔き0.5人が必要とされている<sup>17)</sup>。牛と犁を使った耕作との比較が難しいが、人力の場合を10分の1とすると、 $10+10+1+2+0.5=23.5$ 人。0.5段なので約12人、1日3~4人で3~4日となる。また、収穫には刈り取り2人・脱穀5人・杵搗き2人<sup>18)</sup>、0.5段なので4~5人、3~4人で1~2日と大雑把に考えられる。18世紀当時の集落が3~4軒ほどで構成されているとみれば、1軒から1~2人の労働力を提供すれば、1集落の畑地として成立すると捉えることも可能であろう。

さて、その収穫量であるが、これも大胆に想定するしかない。林善茂が1959年に日高地方で調査したところ<sup>19)</sup>によると、当時は一反歩(=一段・約10a)あたりヒエ・アワの搗精したもので二石五斗(約450kg)、キビで約250kgと古老から聞き取りしている。これは収穫時のポロサラニップ(樹皮製の大編袋)数を搗精量に換算したもので、穂刈り収穫した穀類の量からすれば実際の収穫量はこれよりかなり少なくなるものと思われる。また、木俣美樹男らの1980年代前半の沙流川流域での調査<sup>20)</sup>によれば、1950年頃の収穫量は10aあたりヒエ・アワの精白粒で約180kg、キビの穎が付いたもので約240kgという。これらの資料などから当キウス5遺跡の畑5aの収穫量は、ヒエ・アワ・キビといった雑穀で豊作であって100kg前後と推定できる。

## (2) キウス5遺跡の畑と集落

現キウス川の対岸の台地上、キウス9遺跡でアイヌ期の集落(コタン)を検出・調査した<sup>21)</sup>。キウス川に北面する台地上端部に平地住居跡2軒・建物跡3棟と杭列・焼土群・灰送り場などからなるコタンがあり、台地下端部にも平地住居跡1軒があった。住居の炉や灰送り場からは、イネ(1)・アワ(5)・ヒエ属(541)・キビ(80)・シソ属(8)などの種子を検出。ヒエ属と次いでキビが多い。放射性炭素年代測定の結果14~15世紀と捉えられており、キウス5遺跡の畑に即座に対応するものではないが、前項で想定した畑に携わる労働力供給に見合う集落規模である。

キウス5遺跡の低位部でもⅣ章2節で報告した近世アイヌ期の平地住居跡1軒(UH-6)があり、切り合い関係からわずかに畑跡に先行する。また、次項でみる炉鉤・杵・箕・曲物・桶などの木製品の出土もコタンの存在を示唆している。畑を営んでいた18世紀コタンが近くにあとすれば、これらの状況から、ここよりやや奥のキウス川上流部にあったものと推定できる。畑跡はキウス川旧河道の南岸に立地する。この位置はコタンがキウス9遺跡側にあれば、畑と同じ岸側にあたり(図Ⅳ-2)、コタンから川を渡らずに行き来できる。

畑の立地に関して林善茂は、文献から「農業が主として山間のアイヌによって営まれていた」とし、史料№1のユーカラを引用しさらに、農業関係の地名が山間の川筋や沢にみられることから、「畑は多く山間の川岸に開かれた」と考察した。そして畑の最適地として「春先の大水が引いたあとの川べりの泥の堆積した部分」が、耕しやすく肥沃なため選ばれているとした<sup>22)</sup>。まるでキウス5遺跡の畑跡発見を予見したような内容である<sup>23)</sup>。

〔史料№1〕『虎杖丸の曲 第6段』英雄のユーカラ〔金田一京助採集・訳『アイヌ叙事詩ユーカラ』1936年 岩波文庫〕

「(略) 山路の大みち、行くへさやかに、 罌もて起せるところは、くろぐると、 罌もて刈りたるところは、しらじらと。 大みちの上、われと我身を、高くあげて、川づたい登り、(略)」

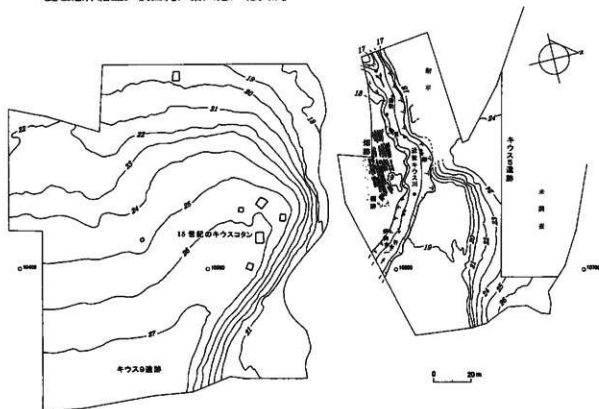
また、畑跡の北側・東側(上流側)や畑跡3の中には約40の杭穴が検出された。ほぼ20cm以下の径で深さは推定で30~50cmである。特に北側の杭穴は確認されただけで13本が約23mの列をなし、畑跡1の上流側の一帯は20本が密集して列をなしている。これは畑との位置関係からして、史料№2にあるような「鹿垣」ではないだろうか。当遺跡付近は現在でもエゾシカの出没が多く、足跡や糞が多く確認される。台地上では縄文時代の鹿捕獲槽も検出されている。当時の畑も後出の史料№13のように鹿の食害にあっていたと思われ、そのための鹿防柵が必要であったと考えられる。畑跡3の中に検出された杭穴も畑跡3の耕起前か作物を栽培していない時点の柵跡とみられる。穿った考えをすれば、畑作は鹿をおびき寄せ鹿糞をするための一助になっていたかもしれない。

林善茂も作物管理のうえで鹿侵入防止のために畑の周囲に木柵を設けることについて、「鹿の侵害防除に対しては極めて熱心」<sup>100</sup>だと紹介している。

青森県朝日山遺跡の調査では、10世紀の畑跡の周囲に柵列がめぐる例があり<sup>100</sup>、下北半島の神社に奉納された19世紀の絵馬に、アイヌ集落と柵に囲まれた畑が描かれているものがある<sup>100</sup>など、畑と柵列・集落のあり方の検討も今後重要になる。

〔史料№2〕『開墾方諸書付』モンベツ御用所 1858年〔山本正『近世蝦夷地農作物年表』1996年 北海道大学図書刊行会 による〕

「鹿垣惣体結立。坂田縄、拾八把、(後略)」



図Ⅷ-2 畑をめぐる周辺状況

### (3) 木製品と畑

キウス5遺跡低位部の旧河道からはV章で示した如く、近世アイヌ文化期の木製品が出土している。少し上流部にあったと推定される当該期のコタンや当遺跡の畑・建物跡を出自とする木製品群である。主要な木製品を記号化して示したのがV章の図V-39である。このうち鍬・杵・箕・桶・曲物・炉鉤・建築材が畑やコタンに深く関わる木製品である(図VI-4)。

鍬は文字通り耕作に使われたもので、図VI-4に示した畝間の耕起痕が鍬の存在を証明している。今回出土した平鍬のような例は、鉄製の鍬先を装着する形式に見られるが、本品に装着痕はなかった。土を掘り起こす道具は、近隣ではユカンボシC15遺跡や美々8遺跡で股木を利用した鉤鍬や土掘棒が出土している。民俗例では鹿角製の鉤鍬もみられる。美々8遺跡では鉄製鍬先が装着された鍬が出土している。

杵・箕については、1798年以降の記録である『蝦夷生計図説』に脱穀と選別を描いた「ユウタの図」・「イト、イの図」が参考になる(図VI-3)。「ユウタの図」は臼と杵で乾燥させた穂を搗く姿が描かれており、家屋(チセ)の入口部の小屋セムで行われる作業との説明がある。臼と杵のほか、傍らには木製の箕と筵が置かれてある。次の「イト、イの図」には、搗き終えた穀物を筵の上で箕で篩う作業が描かれている。出土した杵は長さ110cmと大型で、両頭部とも平らな脱穀用のものである。箕の未製品とみられる木製品は持ち手になる耳部が削り出されていないが、幅・奥行き・高さの各計測値とバランスが林善茂が調査した<sup>10)</sup>ものの大型品に酷似しており、先の杵との繋がりが深さが窺える。杵もやはりユカンボシC15遺跡や美々8遺跡でも出土している。

桶は畑の種蒔き・維持管理・収穫等の農作業にとって粒状体や液体を扱うのに欠かせない容器であり、曲物は食品貯蔵に関わる。また今回出土した炉鉤はV章でも詳述したように、アイヌ家屋特有の自在鉤で、出土品としては初出のものである。建築材は家屋の基本であり、棚列の杭である可能性も高い。

このように農耕文化に関係する木製品のセットのうち、耕作と脱穀調整の道具が出土しているわけで、出土木製品の内容から見ても、畑と集落が共存していることはあきらかである。

### (4) 記録にあらわれた蝦夷地の農耕

北海道の農耕を文献で整理した書に山本正編『近世蝦夷地農作物年表』・『近世蝦夷地農作物地名別集成』・『近世蝦夷地農作物誌』<sup>10)</sup>の3冊の労作がある。これをもとにして、少しく記録に残された蝦夷地の農耕を概観しておく。

〔史料№3〕ポルトガル人宣教師カルワーリユの旅行記 1620年の記録 [山本正『近世蝦夷地農作物年表』1996年 北海道大学図書刊行会 による]

「蝦夷地。英果と稗以外には米または野菜の田畑がない。」

〔史料№4〕『蝦夷筆談記』松宮観山 1710年の記録 [『日本庶民生活史料集成第4巻』高倉新一郎編 1969年 三一書房]

「一、蝦夷地の様子、(略)耕作等は不仕候事。」(註:松前では粟・稗を少々作り、近年では大豆・小豆・大角豆・瓜・茄子等も少々作っていると記されている。)

史料№3が道内の畑作の記録としては最も古い史料と思われるが、行動範囲から松前周辺か太平洋

岸の状況とみられる。18世紀初頭でも史料№4のように記録されている。但しこの記録は、近年道南  
部で発見されている畑跡と時期的に齟齬をきたしている。

〔史料№5〕『正徳五年松前志摩守差出候書付』1715年の記録〔河野常吉写「厚川会資料第五号  
正徳五年松前志摩守差出候書付」『厚川會資料』高倉新一郎編 1982年 北海道出版企画センター〕  
「(略) 粟をも所により蝦夷人少々作り申候 (略)」

〔史料№6〕『松前蝦夷記』1717年の記録【『福島町史第一巻史料編』1993年】  
「蝦夷地二而ハ粟稗計作り申よし」

〔史料№7〕『福山秘府』 松前広長 公用之部 1780年刊行 1717年の記録【『新撰北海道史第五  
巻』1936年】

「蝦夷地ニモ處々ニテ粟作申候ト申候。併漁獵之業第一ニ仕候故、粟少宛作申候。田者總々松前  
嶋中モ古ヨリ曾々作不<sub>レ</sub>申、先年少々試ニ米為<sub>レ</sub>作申候得共、秋早ク冷申候而寒ニ痛、糲計米出来  
申候。米十分ニ仕習候迄者百性取續候儀難<sub>レ</sub>仕候而、試申候儀モ仕兼、相止申候。」(同様の事が前  
出『正徳五年松前志摩守差出候書付』の「追而差出候書付」にすでにある。)

〔史料№8〕『蝦夷志』新井白石 1720年の記録【山本正編1996年『近世蝦夷地農作物年表』より  
孫引き】

「蝦夷東西地方(註:東は長万部~白老、西は瀬田内~祝津)。土を墾して粟を植えて糧食に充つる  
者あり」

上記の四史料でみると、18世紀前葉には、少なくとも道南・道中部で粟の栽培が行われていた事が  
わかる。史料№7にあるように松前では稲作が試験的に行われている。

次に少し長くなるが、19世紀初頭ころのアイヌの畑作法を記録した史料として、『蝦夷生計図説』  
の「トイタの部」を部分掲載する。

〔史料№9〕『蝦夷生計図説』秦禮丸 秦貞廉・間宮林蔵増補編纂から「二 トイタの部上」1823  
年刊行 1798年以降の記録【『蝦夷生計図説』1990年 北海道出版企画センター】

〔史料№9-1〕アユウシアマの図(図VI-2)

「(前略) 稗の一種にして鳥禾の類也 これは蝦夷のうちいつれの地にても作りて糧食の一助と  
なす事也 是をアユウシアマと称す アユとは刺をいひウシとは在るをいひアマは穀食の通  
称にして刺のある穀食といふ事也 (中略) 蝦夷稗と称す 外の穀類には似す地の肥瘦にかゝはら  
すしてよく生熟し荒凶のことなしといへり (中略) 本邦禾穀のうちに考るに今いふ田稗なるへし  
田稗といへる物は田のみに限らずして瘴濕の地には植る事をまたずして生熟するものにて今  
の世の人はたゞよのつねの野草と同じことよふにおぼへたる事也 されと上古の時禾穀の類の  
いまた豊饒ならざりしにはこれらの類をも作り用いたる事なるへし (中略) 近き頃に至りては蝦  
夷のうち極北の地にあらざるところは粟稗大根菜とふを本邦の人より伝へて作れる夷人ことに多  
し(後略)」





アユウシアママの図



ラクジの図



ムンカルの図



ムンウファイの図



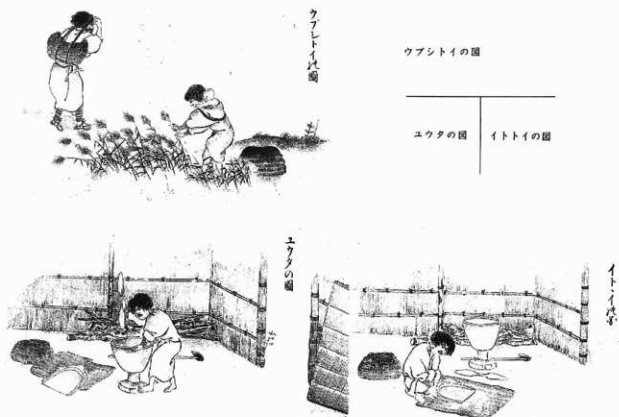
トイラッカの図



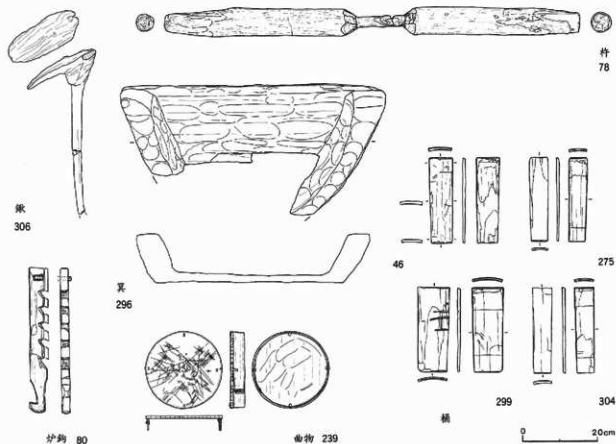
ヒチャリバの図

図Ⅵ-3 『蝦夷生計図説』より(1)

(『蝦夷生計図説』1900年 北海道出版企画センターから部分複製)



図Ⅴ-4 『蝦夷生計図説』より(2)  
 (『蝦夷生計圖説』1990年 北海道出版企画センターから部分複製)



図Ⅴ-5 キウス5遺跡出土の農耕に関する木製品

## 〔史料№9-2〕ラタ子の図(図Ⅵ-2)

「(前略)ラタ子と称する事はラタツキ子といへるを略せるの言葉也 ラとはすへて食する草の根をいひタツキ子とは短き事をいひて根短しといふ事也(中略)是を本邦菜類のうちに考ふるにすなはち蔓苺の一種なり(後略)」

## 〔史料№9-3〕ムンカルの図(図Ⅵ-2)

「右二種(註:アユウシアマ、とラタ子)のものをつくる事すへて称してトイタといふ トイは土をいひタは掘る事をいひて土を掘るといふ事也(中略)夷人のならひこれらの事をなすに地の美悪をよらふなといへる事はみえず山中に不平なる地あるは樹木の陰などもトイタとなして作れる事なり(後略)」(但し、選地していないように見えるのは外見で、彼らは物事を深く考えて行動するので、別に意味があると思われるから、後に調べて記録するとの但し書きがある。)

「(前略)すへて此トイタのことは初め草をかるより種を蒔き其外熟するに至て刈りおさむるとふの事に至るまで多くは老人の夷あるは女子の夷の業とする事也」

## 〔史料№9-4〕ムンウフィの図

「刈りたる草を是其所にあつめ置て図のこく火に焼く也 これをムンウフィと称す ムンは草をいひウフィは焼く事をいひて草を焼くといふ事也 これは草をやきて地のこやしとなすといふにもあらず唯かりたるまゝにすて置てはトイタのさまたけとなる故にかくなす事也(後略)」

## 〔史料№9-5〕トイラツツカの図(図Ⅵ-2)

「(前略)土をたいらかにならずといふ事也 夷人の境未稲といふの器もなければ地をならずといへとも本邦にて農畝など耕作するか如きの事には非ず(後略)」

## 〔史料№9-6〕ヒチャリバの図(図Ⅵ-2)

「(前略)ヒはすへての物の種をいひチャリバは蒔事をいひて種をまくといふ事也(中略)こやしなと用るといふ事もなければ(後略)」

## 〔史料№9-7〕ウブシトイの図(図Ⅵ-3)

「(前略)アユウシアマ、の穂をかるさま也 ウブシトイといへる事はウブシは穂の事をいひトイは切る事をいひて穂をきるといふ事也 もとより自然に生したる如くに作りたる事ゆへ其たけの長短もひとしからず穂の熟することもまた遅速の不同ありて残らず熟するをまちて取めんとするには早く熟したる穂は落ち散ることもあり或は鳥などのために喰ひ尽さるゝ事ありて其損失ことに多し しかるゆへに大概に熟するを待て実のりに不同ある事は論せずしてきるとる也 其きりとりしから及び根とふはそのまゝにすて置くなり(後略)」

史料№9-1・2は当時の代表的栽培物の紹介である。アユウシアマ、(蝦夷稗・田稗)は、和人からすればその辺の野草に見えるが、痩せ地でも成熟する安定した作物であったとしている。ラタ子(蕪)は野菜の代表として記録されたのであろう。当時すでに極北部以外では、粟稗大根菜等が作られていたことも記されている。№9-3は畑の記事で、適地を選ぶことなく山中や樹陰にも畑を為すこと、畑仕事は老人と女子の手で行われることの記載である。№9-4では畑にする場所の草は耕作の邪魔になるから刈り集めて焼くが、これは肥料にするのではないとされ、焼畑ではないことがわかる。施肥を行わないことは、№9-6にも書かれている。また、№9-5は耕作に当たって鋤畑の類は無く、畝建てもしないとしている。史料№9-7は稗の収穫の状況を示している。熟するのを待ち過ぎると落ち穂になり、鳥害のおそれもあるため、不均一でもある程度の成熟を見たら収穫するという。発掘調査で畑跡から種子が検出されず、栽培品がわからないのは案外、こんな事項が関係するか

もしれない。鳥や鹿・鼠などの食害から作物を守りため、収穫期の目安を落ち穂以前に設定し、落ちた穂があれば収穫と食害防止のため拾うといった行為が徹底していたのだろうか。

史料№9-3や№9-5を読むと、キウス5遺跡の畑跡を含めて17世紀から18世紀前葉の所産と見られる畑跡の様相とはかけ離れている。これは18世紀中葉当時のアイヌの農耕の荒廃を示しているように思われ、惹いては次節でも示す如く和人の横暴収奪によるアイヌコタン<sup>1</sup>の荒廃を暗示するものと言えよう。次の史料もアイヌの農耕の荒廃とも見られる状況を記している。

〔史料№10〕『日本奥地紀行』イサベラ・バード 1878年の記録【『日本奥地紀行』東洋文庫240 1973年 平凡社】

平取にてアイヌの農耕について「土は白い砂も同然で、彼らは肥料もかけずに黍、南瓜、玉葱、煙草の栽培らしきものをして、彼らにとって、黍は米の代わりである。しかしその小さな土地の様子を見ると、十年も前に耕作されたままに放置され、偶然に種の播かれた穀物や野菜が雑草の間から出てきたかのようである。何も栽培できなくなると、彼らは森の他の部分を少しばかり切り開き、こんどはそれを消費してゆく。」

「白い砂も同然」とは、1739年樽前山のTa-a降下軽石層と思われる。ここでも前出の史料9-1・3・5・6・7に通ずる状況がみえる。ただ、最後の一文は、一度の畝建てだけで再耕作しない北海道の近世畑跡の特徴と一致したあり方も捉えられる。火山灰地を開墾するにあたり、自然破壊を極力行わないアイヌとして、その口実としての畑放置と考えるのは穿ちすぎであろうか。

#### (5) 武四郎がみた千歳周辺の畑

では、千歳周辺の畑は、どのように記録されているだろうか。残念ながら、19世紀中葉の松浦武四郎の記録しかないのだが、抜粋を掲載しておく。

〔史料№11〕『再航蝦夷日誌』松浦武四郎 1846年の記録【『校訂蝦夷日誌』秋葉実編1999年 北海道出版企画センター】

「シユマツツ（略）夷人小屋三四軒有。土地肥沃にして野菜よく出来たり。黍多し」

「イサリプト（略）夷人小屋五六軒。此辺皆陽元豆、豆、稗、粟、黍、ジャガタラ芋等を多く作りたり。土地肥沃にして甚だよく豊熟せり。」

「カマカ（略）夷人小屋有。土地肥沃にし而野菜もの能出来たり」

「チトセ（略）惣而夷人十余軒。皆陽元豆・馬鈴芋・粟・黍・稗を作る。土地肥沃也」

〔史料№12〕『廻浦日記』松浦武四郎 1856年の記録【『竹四郎廻浦日記下』高倉新一郎解説1978年 北海道出版企画センター】

「チトセ（略）当時漸々二十四軒に成たり。土地肥沃にして豆・小豆・眉豆・五升豆（註：芋か？）・大根・蕪・アユウシアマ、粟等を多く作りたり。」

〔史料№13〕『丁巳東西蝦夷地理山川取調日誌』松浦武四郎 1857年の記録【『丁巳東西蝦夷地理山川取調日誌下』秋葉実解説1982年 北海道出版企画センター】

「シユママツツ（略）夷人一軒、（中略）備の出来る者丈沃え下働致させ、（中略）婆と武人残り居て、（中略）家の傍に粟・稗・瓜吧芋・大根・南瓜等を多く作りたり。」

「ツカベツト（註：馬追川筋）（略）家居して畑作を致せし事有とかや。其後鹿多く成て畑を荒し、（後略）」

〔史料No14〕『近世蝦夷人物誌』松浦武四郎 1844～57年の記録 1860年刊行 [『日本庶民生活史料集成第4巻』高倉新一郎編 1969年 三一書房 及び『アイヌ人物誌』松浦武四郎 更科源蔵・吉田豊訳 2002年 平凡社ライブラリー]

「孝女サクアン 石狩領ユウハリ川筋なるヲヒフイといへる處には當時人家二軒あり。」（以下概略：一軒の主人は漁場へ遣られ、妻は事故で腰が立たず、その母は盲目の老女である。この家の娘が妻である隣家は、主人が熊狩りの事故で腰が立たず、妻は病気でほとんど動けない。四人の子供の内長兄は漁場で病気になるに全く動けないまま歸され、次兄はその代わりに漁場へ出されたままである。姉も事故で腰が立たない。）「然るに妹に當年十四歳に成サクアンといへるあるて、此者漸家に今残り居て両親と兄と姉と、其隣の我為には祖母に相當キナルウエ婆と、曾祖母に當るマツコウト、右の六人を少も別け隔てなく孝養致し行に、未だ幼き事故漁は思ふ程出来もせざる故に、家の軒端に眉豆、又南瓜、又は粟種の様なものを蒔て是を取り」（以下概略：山中の鹿猟や薪拾い、二家族の世話をし、猟犬もいたわる孝女である。）

〔史料No15〕『東西蝦夷場所境調書』松浦武四郎 1859年頃成立 [『松浦武四郎選集一』秋葉 実編 1996年 北海道出版企画センター]

「マライ、シュクハイと申処（中略）「其処は千年川土人共二分は畑作致候場所」

すべて、1739年樽前山噴火のTa-a軽石降下から100年以上が経ち、集落の大きさや栽培物の種類など、一様に比較はできないが、雑穀を主体とした畑作が続けて行われていたことがわかる。また、上記史料と比較できる1857年の記録『入北記』には、美々から千歳会所～長都の土地状況として、

〔史料No16〕『入北記』玉蟲左太夫 1857年の記録 [『入北記』 稲葉一郎解説 1992年北海道出版企画センター]

「(前略) ユウツツヨリ渺莫タル広原且一面焼砂タリ、先年タルマイ山焼出シ如此ニナル由、只今二溝地白<sup>ク</sup>雪後ノ歩行ニサモ似タリ。(後略)」

「(前略) 大抵焼砂ニテ開墾スルニハ中々容易ナラズ、林中ハ落葉或ハ腐草ノタメ土ハ黒<sup>ク</sup>宜シキヨウ見ユレ<sup>ド</sup>地底ハ矢張皆焼砂ナリ。百年前タルマイ山焼出<sup>ク</sup>ヨリカクナリタル由ナレド、只今二鎮化セズ、カ<sup>ハ</sup>ル広地不毛ノ地トナリシハ惜ムベキニ非ズヤ。(後略)」

とある。一面火山灰地で畑もなく開墾もままならない状況が記されているが、史料No12や13にあるように千歳会所の1年前の10月や同年の島松（北広島市か？）では畑が紹介されているので、会所近辺を除く長都沼あたりまでの土地状況を示したものと見えよう。或いは同伴1人との馬上からの観察・前項史料で示した当時の畑の状況・旧9月上旬の現地状況記録などの条件を考え合わせると、小規模の放置されたような畑は、見逃されたのかもしれない。いずれにしてもTa-a軽石降下に厚く覆われた土地での規模の大きい畑作は容易で無かったことは、想像に難くない。

19世紀のアイヌコタンは、史料No14にもある如く松前藩による強制労働により、子供・老婆・病人しか残らないような悲惨な状況が続いていた。松前藩による支配は商場知行制から、享保年間（1716

～36年)には商人に経営を譲け負わせる場所請負制が一般化、利益拡大のため各場所に居住するアイヌに漁場でのイワシ・ニシン・サケ・マス・コンブ等の漁労働を強制した。樽前山の噴火で土地が荒れ、アイヌも場所での労働で生活を支えるしかなくなったことも、コタンの荒廃に追い打ちをかけた。19世紀に入ってもこの統制は強まるばかりで、内陸のアイヌにも強制労働が課せられた。従って、史料№13の「シユママツフ」(島松)の条や史料№14にあるように、子供や老婆だけで軒先の畑作し、生活を続ける状況にあった。火山灰地の大規模な開墾や畑作などできなかったのである。

キウス5遺跡の畑は18世紀前葉の所産である。まさにこの場所請負制による強制労働体制が内陸部に徐々に侵入してくる時期であった。おそらく樽前山の噴火前は、畝を持つ畑の展開から見て、安定したコタンの状況であったと思われるが、降灰後は荒廃の一途を辿ったのだろう。

また、史料№13「ツカベツト」の条や前々項の史料№2・前項の史料№9-7の「ウブシトイの図」解説は、畑の鹿や鳥類による被害を示唆している。これらも畑作が広く発展しなかった原因のひとつかもしれない。

#### (6) キウス5遺跡周辺のアイヌ文化期集落と畑

(2)項で述べたとおり、キウス5遺跡の畑の所有者はキウス9遺跡近辺のアイヌ文化期集落の人々と考えられる。では、周辺のアイヌ文化期集落と畑の関係はどうだろうか。千歳市内で発掘調査されたいくつかの集落の状況を概観してみる。なお、種子名の後の数字は出土数(粒と片の合計)である。

**チブニー2遺跡**：チブニー川が馬追丘陵を出て長都沼の広がる停滞水域に流れ込む地点周辺、右岸の低位段丘に立地。16世紀後半とみられる平地住居跡2軒・建物跡1棟と焼土群。住居の炉からアワ(6)・ヒエ属(29)・キビ(1)などの種子を検出。ヒエ属が多く、イネはない。また、近辺の據文期の墓からU字形銀先が2点出土。

文献：『千歳市チブニー2遺跡②』北埋調報207 2004 北海道埋蔵文化財センター

**オリイカ2遺跡**：オリイカ川が馬追丘陵から長都沼の広がる停滞水域に向かう右岸の低位段丘に立地。16世紀中ごろから17世紀中葉の平地住居跡9軒・建物跡5棟と杭列・焼土群・灰送り場・カワシンジュガイ殻集中など。常時3～4軒の集落とみられる。住居の炉や焼土群・灰送り場などからイネ(15)・アワ(377)・ヒエ属(2,065)・アサ(19)・シソ属(3)などの種子を検出。ヒエ属と次いでアワが多くキビがみられない。集落の全面空き地から鎌1点出土。

文献：『千歳市オリイカ2遺跡』北埋調報189 2003、『千歳市オリイカ2遺跡②』北埋調報221 2005 ともに北海道埋蔵文化財センター

**オリイカ1遺跡**：オリイカ川が馬追丘陵から長都沼の広がる停滞水域に向かう左岸の低位段丘に立地。1739年以前の平地住居跡1軒。住居の炉からイネ(3)・キビ(9)・ヒエ属(13)などの種子を検出。アワは無い。

文献：『千歳市オリイカ1遺跡』北埋調報188 2003 北海道埋蔵文化財センター

**梅川4遺跡**：祝梅川の源頭部に近接する標高15mの台地上に立地。16世紀後半～17世紀初頭の平地住居跡4軒以上・柱穴群(建物跡など)と焼土群・カワシンジュガイ殻集中など。炉などの炭化種子同定は行われていない。近辺のアイヌ期の墓から鎌が1点出土。

文献：『梅川4遺跡における考古学的調査』市文調報XXII 2002 千歳市教育委員会

**末広遺跡**：千歳川左岸の標高13mの河岸段丘上に立地。広い範囲から1739年以前の平地住居跡5軒・建物跡9棟・柱穴群と焼土群・カワシンジュガイ殻集中など。第4次調査時に炉・焼土群・貝殻集中の炭化種子同定を行い、イネ(2)・アワ(443)・ヒエ(285)・キビ(76)・シソ属(3)などの種子

を検出。アワと次いでヒエが多い。包含層から鋤先が2点、アイヌ期の墓から鎌が4点出土。

文献：『末広遺跡における考古学的調査(以下編Ⅳ)』市文調報Ⅷ・Ⅷ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ 1981・1982・1985・1986 千歳市教育委員会

祝梅川上田遺跡：祝梅川右岸の標高14mの河岸段丘上に立地。1739年以前の平地住居跡12軒・建物跡11棟・柱穴群と焼土群・灰送り場など。住居の炉や焼土群・灰送り場などから雑穀類の種子を検出しているが、同定は未了。

文献：『千歳市祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡』北埋調報238 2007 財北海道埋蔵文化財センター  
種子同定は未発表。財北海道埋蔵文化財センターが今後刊行する報告書が年報に掲載予定。

トメト川3遺跡：小支流トメト川左岸の低位段丘（標高約8m）部にあり、長都沼のあった低湿地が眼前に広がっている。17世紀中～後葉の平地住居跡5軒・建物跡1棟・掘立柱跡と杭群・焼土群・灰送り場・カワシンジュガイ殻集中など。常時3～4軒の集落とみられる。住居の炉や焼土群・灰送り場などからイネ（16）・アワ（62）・ヒエ属（484）・キビ（15）・アサ（26）・シソ属（2）などの種子を検出。ヒエ属が突出して多い。

文献：『トメト川3遺跡における考古学的調査』市文調報XXXI 2004 千歳市教育委員会

ユカンボシC15遺跡：長都沼の停滞水域に流れ込むユカンボシ川かその分流の最下流域低位段丘と低位部に分布する。①区に18世紀初頭の平地住居跡1軒と送り場など、②区に15世紀ころの建物跡1棟、17世紀前葉の平地住居跡1軒・建物跡1棟と杭列・焼土群・炭化物集中・集石・送り場などがあった。住居の炉や焼土群・炭化物集中・送り場などからイネ（17・他に稗籽片塊など）・アワ（15）・ヒエ属（167）・キビ（51）・アサ（29）などの種子等を検出。ヒエ属が比較的多い。集石に伴ってU字形鋤先が1点出土。また、低湿度の15～16世紀対応層からイネ（2）・アワ（1）・ヒエ属（23）・キビ（19）などが少量検出されている。木製鉤鉞や壱杵のほか各種建築材や炉鉤も多数出土している。

文献：『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)3(4)6』北埋調報128・146・159・192 1998・2000・2001・2003 財北海道埋蔵文化財センター

ユカンボシC2遺跡：長都川の左岸、合流が併流するユカンボシ川の最下流域、標高8～9mの低位段丘に立地。1739年以前の平地住居跡24軒・建物跡25棟と柱穴群・焼土群・灰送り場などがある大集落遺跡。常時4～5軒の集落とみられる。1988・89年度調査分は山田悟郎が下記文献でコメ（5）・アワ（1,488）・ヒエ（2,624）・キビ（24）・アサ（1）・シソ属（3）をあげている。2002年報告分の調査では、住居の炉や焼土群・灰送り場からイネ（2）・アワ（64）・ヒエ属（306）・キビ（4）・アサ（7）・アズキ（7）などの種子等を検出。ヒエ属が突出して多くアワがこれに次ぐ。

文献：『ユカンボシ2遺跡発掘調査概報』1989・『ユカンボシ2遺跡発掘調査概報報告(2)』1990・『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報XXII 2002 いずれも千歳市教育委員会  
山田悟郎 1998『近世アイヌの器』『考古学ジャーナル439』

オサツ2遺跡：長都川下流域右岸の標高6～9mの低位段丘上に立地し、対岸にユカンボシC2遺跡が存在する。1739年以前の平地住居跡8軒・建物跡1棟と柱穴群・焼土群・灰送り場・カワシンジュガイ殻集中などがある集落遺跡。常時3～5軒の集落とみられる。住居の炉や焼土群・灰送り場からイネ（156）・アワ（166）・ヒエ属（1,335）・キビ（23）・シソ属（17）・アズキ（9）等のマメ科（計15）などの種子等を検出。ヒエ属が突出して多いが、コメも目立つ。木製鉤鉞が出土している。

文献：『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報XXII 2002 千歳市教育委員会

美々8遺跡：太平洋側に注ぐ美々川水系の末端、美沢川下流部の左岸にある。標高22mの台地と沢への斜面、水没している低湿度からなる。樽前山の噴火した1667年（Ta-b降下軽石）以降、近世ア

イヌ文化期に限定してみても、低位部に舟着場・建物跡・杭列や建材の集中・灰送り場・炭化物集中などがある。交易拠点となるピビ会所の機能を持った集落である。低湿度の木製品や送り場等の金属製品などからしても、アイヌと和人が混在共存した遺跡と考えられる。灰送り場・炭化物集中からコメ(127)・オオムギ(1)・アワ(80)・ヒエ(237)・キビ(1)・アズキ(7)・アサ(1,038)・シソ属(31)などの種子を検出。アサの出土数が特異なほか、ヒエ属が多く、コメも目立っている。未脱穀のイネ科種実が多く、珪酸体分析では葉がついたままの茎の存在も認められている。低湿度で木製の鉤鉞・土掘棒やカワシンジュガイ製の穂摘具、台地部で風呂部の木質が残った罎が出土している。

文献：『美沢川流域の遺跡群Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ』北埋調報62・102・114 1989・1996・1997 朝北海道埋蔵文化財センター

このほか住居等は見つかっていないが、キウス4遺跡の旧河道からは当該期の建築材が、キウス5遺跡の当畑跡より上流部で縄文期のU字形鉤先やアイヌ期の罎が出土している。

これら周辺遺跡の状況から、傍証とはいえ畑の存在を読み取ることができるだろう。ひとつには各遺跡において住居や建物・送り場などの構成要素が集中する反面、同一平坦面に空き地が存在することである。住居や建物が建て替え等で重複し、灰・焼土・廃品の送り場が密集するコタンにおいて、その前面や後背平坦地に空き地があり、しかも川と近接している。共用空間などのあり方を考えれば、すべてを耕作地と捉えはせずとも、この空き地に調査で検出できなかった農作業の痕跡を想定することは可能であろう。

特に各住居の灰や灰・焼土等の送り場から検出されたヒエ属・アワ・キビなどの雑穀の種子(主に穎果)はその時点でのコタンの「食」の一端を示すとともに、「農」の展開を示唆している。少なくとも15世紀以降、ヒエ属を中心とした栽培が行われ、食事・保存食作り・酒造りに供されたであろうことは、各遺跡でヒエ属の出土が一般的でしかもほぼ突出して多いことから窺える。詳述していないが当キウス5遺跡やキウス9遺跡を含んで、これらのほとんどの遺跡は縄文文化期の集落との重複遺跡であり、その集落からもヒエ属・アワ・キビなどの雑穀の種子が検出されている。縄文文化期から連続と続く「農」の伝統も背景にある。各遺跡でともに検出されるイネについては後述する。

次に数は少ないが、農耕具や収穫具・脱穀調整具の出土が各地で見られることも「農」の展開の状況証拠のひとつとなろう。縄文文化期からみられる鉄製鉤先・罎先や木製鉤鉞と鉄製罎の存在は、除草・耕起・耕作を示す。各地にカワシンジュガイ殻の集積があるように、この貝殻や罎は穂・株刈り収穫に使用されよう。脱穀調整具では、ユカンボシC15遺跡と美々8遺跡でキウス5遺跡から出土した竪杵と同形のもの数点出土している。

以上に羅列した遺跡からは畝建てが確認できず、畑の存在を調査では証明しきれなかったが、少なくとも史料№9で示した如く畝のない「浅耕」の「粗放農法」「不規則農法」<sup>99</sup>が行われていたことは間違いないだろう。それらコタンで行われてきた交易・交流から18世紀初頭、キウスコタンの住人を含む人々が、畝建てという画期的農法を手に入れたものと思われる。その点で、美々8遺跡周辺にも畝を持つ畑があった可能性は十分にある。花粉分析からみた近世後半の荒れ地の拡大化を「畑地雑草の増加とともに作物栽培のための森林伐採や耕地拡大にともなうもの」<sup>100</sup>と捉えうるのも、可能性の証左となる。



## (7) コメとムギ 一途に付いたばかりの蝦夷地の畑研究一

畑存在の状況証拠として挙げた種子の検出の中で、ほとんどの遺跡からイネ（コメ）が報告されている。オルイカ2・オルイカ1・トメト川3・ユカンボシC15・ユカンボシC2・オサツ2・末広・美々8の8遺跡で確認されており、特にオサツ2遺跡の1号平地住居からは100点を超える粒（片を含む）が<sup>100</sup>、ユカンボシC15遺跡では籾の未炭化砕片塊が<sup>101</sup>発見された。少量の穎果の出土であれば交易によって得たものと従来のように考えて構わないだろうが、纏まった量或いは籾の出土は、現地栽培の可能性を一概に否定できなくするものであろう。同定を行った吉崎昌一と椿坂恭代も、「イネは千歳市、恵庭市周辺の糠文文化以降の遺跡で、出土数が増加してきている。（略）北海道でイネの栽培が実施されたのは渡島半島の江戸末期からという常識も、果たして事実かどうか、検討の時期にきているのかもしれない。」とコメントしている<sup>102</sup>。蝦夷地の畑は研究の途にたどり着いたばかりで、栽培作物すら確定できない段階で、もうイネ栽培の問題を抱え込んだことになる。プラントオパールやDNAなどの分析を行い検討を続けなければならないが、イネを主とした検討から雑穀畑作研究へのフィードバックがなされるのであれば、蝦夷地の畑研究には重要な要素となる。

吉崎と椿坂はまた、道央地域の遺跡の種子同定を多く続ける中で、千歳・恵庭周辺にオオムギ・コムギの出土がないことを重大な問題として捉えている。例は糠文文化期のものになるが、札幌市サクシュコト二川遺跡（K39遺跡北大構内）での大量の検出<sup>103</sup>など札幌市北部の諸遺跡や余市町大川遺跡でのオオムギ・コムギの出土<sup>104</sup>に対し、千歳周辺ではオサツ2遺跡のコムギ2粒<sup>105</sup>しかみられない。そして近世アイヌ文化期になると、上記の美々8遺跡のオオムギ1粒以外ムギは検出されなくなる<sup>106</sup>。この「時期、集落の立地や性格によって栽培植物の組成と品種など異なること」<sup>107</sup>が、集団の違いや食生活の違いに起因するのか、その時期や地域の変遷・変容によるものなのかを研究する意義は深いと考える。

前述したようにキウス5・9遺跡の畑とコタンの人々には、敵建ての農法を手に入れた事による作物・収穫量・生活基盤等における何らかの変容がもたらされたと思われる。そういった面では、農法の違いや変化が畑や検出される種子に反映するものと考えられる。今後の発掘調査においては困難な調査状況からでも畑跡を見つけ出し、資料の増加を図ることが肝要となろう。発見された耕作地においては栽培品目の確定が重要な課題となる。

(三浦 正人)

## 註

- (1) 山田悟郎 1998「日本列島北端で展開された雑穀農耕の実態」『北海道開拓記念館研究紀要 第26号』、山田悟郎 2000「アイヌ文化期の農耕について」『北の文化交流史研究事業』研究報告』北海道開拓記念館 など。また、(6)項の文献や註2以下の文献参照。
- (2) (1)山田文献および三浦正人 2004「金属製品」『考古資料大観11 続縄文・オホーツク・糠文文化』小学館
- (3) アイヌの農耕についての論考には、  
林 善茂 1969『アイヌの農耕文化』考古民俗叢書4 慶友社 や  
大塚和義 1993「アイヌにおける雑穀栽培とその社会的役割」『農耕の技術と文化』佐々木高明編 集英社 などがある。
- (4) 横山英介 2003「北海道における焼畑跡」『物質文化 第75号』

- 横山英介 2005「焼畑の考古学—北海道における焼畑跡の考古学的分析—」『海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会編 六一書房
- 坂本尚史 2005「畑跡について」『森町上台2遺跡』北埋調報216
- 谷島由貴 2005「畑跡について」『森町森川3遺跡』北埋調報222
- (5) 木村茂光 1996『ハタケと日本人』中公新書1338
- (6) 異本『蝦夷常用集』『蝦夷産業図説』あり。松浦武四郎も史料No11の「再航蝦夷日誌」で『蝦夷常用集』を引用している。
- (7) 木村茂光 1996『ハタケと日本人』中公新書1338
- 伊佐治康成 2003「古代における雑穀栽培とその加工」『雑穀 畑作農耕論の地平』青木書店
- (8) (7)に同じ
- (9) 林 善茂 1960「アイヌの播種技術と栽培作物」『北方文化研究報告第十五輯』北海道大学北方文化研究室
- (10) 木俣美樹男・木村幸子・河口徳明・柴田 一 1986「北海道沙流川流域における雑穀の栽培と調理」『季刊人類学』17-1 京都大学人類学研究会
- (11) 釧北海道埋蔵文化財センター 2008『千歳市キウス9遺跡』北埋調報252
- (12) 林 善茂 1958「アイヌの耕耘技術」『北方文化研究報告第十三輯』北海道大学北方文化研究室
- (13) ただし、林善茂は近世アイヌの畑を「必ずしも住居に付随して其近傍に営まれるとは限らないものとし、その畑の認識も畝建てのない「浅耕」の「粗放農法」「不規則農法」といった焼畑以前の原始的段階と捉えている。
- (14) 林 善茂 1969「作物管理」『アイヌの農耕文化』考古民俗叢書4 慶友社
- (15) 2007年12月に函館で開催されたシンポジウム『えぞ地の畑作農業を探る』で、青森県埋蔵文化財センター中島敏文、平山明寿の両氏からご教示を得た。
- (16) 前記シンポジウムの事例発表で、森町の高杉博章氏の資料に図示されていた。
- (17) 林 善茂 1961「アイヌの脱穀調整技術」『北方文化研究報告第十六輯』北海道大学北方文化研究室
- (18) 山本 正編 1996『近世蝦夷地農作物年表』・同1998『近世蝦夷地農作物地名別集成』・同2006『近世蝦夷地農作物誌』すべて北海道大学図書刊行会
- (19) (12)に同じ
- (20) 田口 尚 1997「まとめ 1 環境と作物栽培について」『美沢川流域の遺跡群XX』北埋調報114 釧北海道埋蔵文化財センター
- (21) 吉崎昌一・椿坂恭代 2002「北海道オサツ2遺跡・ユカンボシC2遺跡の擦文文化期と近世の炭化植物種子」『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報XXII 千歳市教育委員会
- (22) 吉崎昌一・椿坂恭代 2003「千歳市ユカンボシC15遺跡遺跡から出土した炭化植物種子」『千歳市ユカンボシC15遺跡(6)』北埋調報 釧北海道埋蔵文化財センター
- (23) (21)に同じ
- (24) 吉崎昌一・椿坂恭代 1990「サクシュコトニ川遺跡に見られる食糧獲得戦略」『北大構内の遺跡8』北海道大学
- (25) 吉崎昌一・椿坂恭代 2001「北海道勇払郡厚幌1遺跡の植物種子」『厚幌1遺跡』厚真町教育委員会

(26) 吉崎昌一・椿坂恭代 1995「千歳市オサツ2遺跡から出土した植物遺体(種子)」「千歳市オサツ2遺跡(2)」北埋調報103 (財)北海道埋蔵文化財センター

(27) 北海道内でみると、近世アイヌ文化期ではオオムギ・コムギとも各1例ずつある。オオムギは厚真町厚幌1遺跡で824粒がアワ・ヒエ属・キビなどととも、コムギは泊村堀株1遺跡で7粒がアワ・ヒエ属などととも検出されている。

文献：吉崎昌一・椿坂恭代 2001「北海道勇払郡厚幌1遺跡の植物種子」『厚幌1遺跡』厚真町教育委員会

吉崎昌一・椿坂恭代 2004「北海道堀株1遺跡から出土した炭化種子について」『堀株1遺跡』泊村教育委員会

(28) 吉崎昌一・椿坂恭代「オレイカ2遺跡から出土した炭化植物種子」『千歳市オレイカ2遺跡(2)』北埋調報221 (財)北海道埋蔵文化財センター

なお、両氏はオオムギ・コムギの有無だけでなく、擦文文化期・アイヌ文化期に確認される栽培植物セット(イネ・アワ・ヒエ・キビ・アズキ・アサ・シソ属)における内容や量の違いに注目しており、その上でのコメントである。

## 付 篇 放射性炭素年代測定結果

## キウス5遺跡低部位 放射性炭素年代測定試料一覧

遺跡名	試料番号	試料種類	測定法	採取地点	採取層位	測定時期(yBP)	重量(乾重)	備考
キウス5	KIUSU5-1	土器付遺物	AMS	包含層:P-85	V層	8,000	0.08	2003.10.24採取
キウス5	KIUSU5-2	土器付遺物	AMS	包含層:P-82	V-2b層	6,500	0.05	2003.10.25採取
キウス5	KIUSU5-3	炭化物	AMS	炭化物集中地点:LC-1	V-2b層	8,500	0.3	2003.08.18採取
キウス5	KIUSU5-4	炭化物	AMS	炭化物集中地点:LC-1	V-2b層	6,500	0.3	2003.08.18採取
キウス5	KIUSU5-5	炭化物	AMS	炭化物集中地点:LC-1	V-2b層	6,500	0.2	2003.08.20採取

## C14年代測定結果

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 186261 試料名 ( 23948) KIUSU5-1 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など food residue	8380 $\pm$ 40	-23.4	8410 $\pm$ 40
Beta- 186262 試料名 ( 23949) KIUSU5-2 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など food residue	6550 $\pm$ 40	-21.9	6600 $\pm$ 40
Beta- 186263 試料名 ( 23950) KIUSU5-3 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material	6070 $\pm$ 40	-27.0	6040 $\pm$ 40
Beta- 186264 試料名 ( 23951) KIUSU5-4 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material	6200 $\pm$ 40	-26.5	6180 $\pm$ 40
Beta- 186265 試料名 ( 23952) KIUSU5-5 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material	6190 $\pm$ 40	-26.7	6160 $\pm$ 40

## 件名: 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定の依頼を受けた試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

## 報告内容の説明

**未補正14C年代 (y BP)** : (同位体分別未補正) 14C年代 "measured radiocarbon age"  
試料の 14C/12C 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前 (BP) かを計算した年代。

**14C年代 (y BP)** : (同位体分別補正) 14C年代 "conventional radiocarbon age"  
試料の炭素安定同位体比 (13C/12C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り 14C/12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。  
試料の  $\delta^{13}C$  値を -25 (‰) に基準化することによって得られる年代値である。  
(Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion/Reporting of 14C data, Radiocarbon, 19 を参照のこと)  
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

**$\delta^{13}C$  (permil)** : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。  
この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表現する。

$$\delta^{13}C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)_{\text{試料}} - (13C/12C)_{\text{標準}}}{(13C/12C)_{\text{標準}}} \times 1000$$

ここで、 $13C/12C$  [標準] = 0.0112372 である。

**暦年代** : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴの U-Th 年代と 14C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース ("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)) により約 19000yBP までの換算が可能となった。\*

\*但し、10000yBP 以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。  
"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talm and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pp. 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

## 測定方法などに関するデータ

**測定方法** AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる  $\beta$ -線計数法

**処理・調整・その他** : 試料の前処理、調整などの情報

**前処理** acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄  
acid washes : 酸洗浄  
acid etch : 酸によるエッチング  
none : 未処理

**調整・その他**

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理  
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出  
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出  
Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

**分析機関** BETA ANALYTIC INC.  
4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A. 33155

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

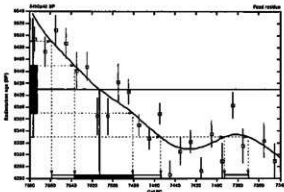
(Variable: C13C12=23.4‰,  $\omega=1$ )

Laboratory number: Beta-185341

Conventional radiocarbon age: 6406±40 BP

3 Sigma calibrated results: Cal BC 7540 to 7420 (Cal BP 9518 to 9400) and  
(95% probability) Cal BC 7390 to 7370 (Cal BP 9348 to 9320)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: Cal BC 7510 (Cal BP 9460)1 Sigma calibrated results:  
(68% probability) Cal BC 7540 to 7480 (Cal BP 9490 to 9430)

References:

Buckley et al.

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Pligk, H., 1996, Radiocarbon 49(2), p.101-102

HYPERCAL Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.191-193

Radiocarbon

A Shortcut Approach to Calibrating C14 Dates

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.177-179

Beta Analytic Inc.

4822 E. 7th Court, Miami, Florida 33133 (USA) Tel: (305) 897-3317 Fax: (305) 897-3319 E-Mail: beta@betaanalytic.com

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

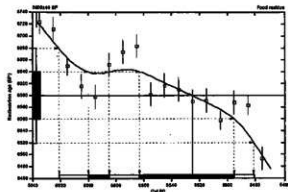
(Variable: C13C12=21.9‰,  $\omega=1$ )

Laboratory number: Beta-185343

Conventional radiocarbon age: 6606±40 BP

3 Sigma calibrated results: Cal BC 5520 to 5480 (Cal BP 7510 to 7430)  
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: Cal BC 5520 (Cal BP 7480)1 Sigma calibrated results:  
(68% probability) Cal BC 5980 to 5180 (Cal BP 7550 to 7540) and  
Cal BC 5560 to 5500 (Cal BP 7510 to 7440)

References:

Buckley et al.

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Pligk, H., 1996, Radiocarbon 49(2), p.101-102

HYPERCAL Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.191-193

Radiocarbon

A Shortcut Approach to Calibrating C14 Dates

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.177-179

Beta Analytic Inc.

4822 E. 7th Court, Miami, Florida 33133 (USA) Tel: (305) 897-3317 Fax: (305) 897-3319 E-Mail: beta@betaanalytic.com

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

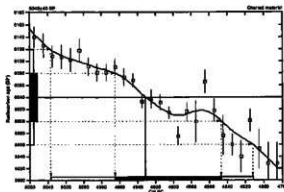
(Variable: C13C12=27.4‰,  $\omega=1$ )

Laboratory number: BETA-195263

Conventional radiocarbon age: 6503±40 BP

3 Sigma calibrated results: Cal BC 4940 to 4810 (Cal BP 6990 to 6760)  
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: Cal BC 4910 (Cal BP 6880)1 Sigma calibrated results:  
(68% probability) Cal BC 4960 to 4830 (Cal BP 6920 to 6890)

References:

Buckley et al.

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Pligk, H., 1996, Radiocarbon 49(2), p.101-102

HYPERCAL Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.191-193

Radiocarbon

A Shortcut Approach to Calibrating C14 Dates

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.177-179

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4822 E. 7th Court, Miami, Florida 33133 (USA) Tel: (305) 897-3317 Fax: (305) 897-3319 E-Mail: beta@betaanalytic.com

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

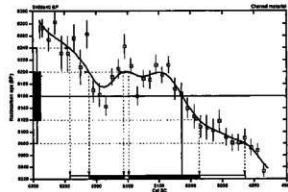
(Variable: C13C12=26.7‰,  $\omega=1$ )

Laboratory number: BETA-195265

Conventional radiocarbon age: 6160±40 BP

3 Sigma calibrated results: Cal BC 5540 to 4940 (Cal BP 7190 to 6920)  
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: Cal BC 5560 (Cal BP 7010)1 Sigma calibrated results:  
(68% probability) Cal BC 5910 to 5140 (Cal BP 7160 to 7110) and  
Cal BC 5150 to 5040 (Cal BP 7160 to 6990)

References:

Buckley et al.

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Pligk, H., 1996, Radiocarbon 49(2), p.101-102

HYPERCAL Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.191-193

Radiocarbon

A Shortcut Approach to Calibrating C14 Dates

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.177-179

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4822 E. 7th Court, Miami, Florida 33133 (USA) Tel: (305) 897-3317 Fax: (305) 897-3319 E-Mail: beta@betaanalytic.com

**CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS**

(Variable: C13C12=24.3‰,  $\sigma_{13}^{13} = 1$ )

Laboratory number: **BETA-180264**

Conventional radiocarbon age: **6180±40 BP**

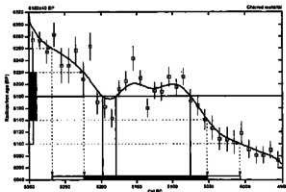
3 Sigma calibrated result: **Cal BC 6270 to 5910 (Cal BP 7230 to 6960)**  
(95% probability)

Interscept date

Interscept of radiocarbon age

with calibration curve: **Cal BC 5280 (Cal BP 7150) and**  
**Cal BC 5180 (Cal BP 7130) and**  
**Cal BC 5080 (Cal BP 7020)**

1 Sigma calibrated result: **Cal BC 5220 to 5050 (Cal BP 7170 to 7000)**  
(68% probability)



**References:**

*Reimer et al.*

- Calibration Database
- Radio-Carbon
- Edinburgh University, UK, 1998, Authorisation: RSL, private
- Stuiver, M., Reimer, P., 1993, Authorisation: RSL, private
- INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
- Stuiver, M., et al., 1998, Authorisation: RSL, private
- Authorisation
- A Detailed Approach to Calibrating C14 Data
- Stuiver, M., Reimer, P., 1993, Authorisation: RSL, private

**Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory**

4852 S. Redwood Street, Suite 100 • Torrance, CA 90503 • Tel: (310) 572-1577 • Fax: (310) 572-0999 • E-mail: beta@betaanalytic.com

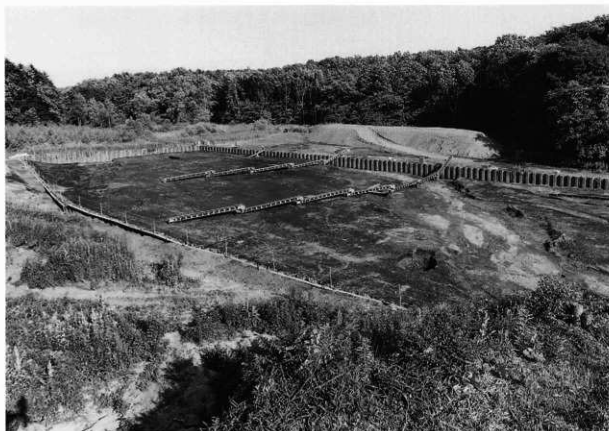
**暦年代較正結果(2)**

# 写真図版





鋼矢板設置工事



準備工事完了

平成15年度の調査（1）



調査状況



調査状況

平成15年度の調査（2）



鋼矢板設置工事



準備工事完了

平成18年度の調査（1）



調査状況



調査状況

平成18年度の調査（2）



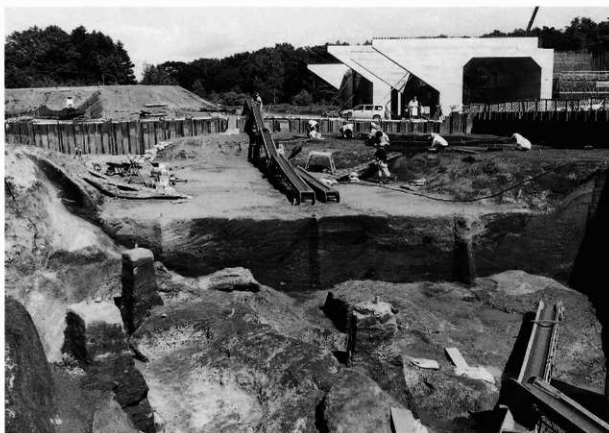
70ラインセクション



75ラインセクション  
土層断面 (1)



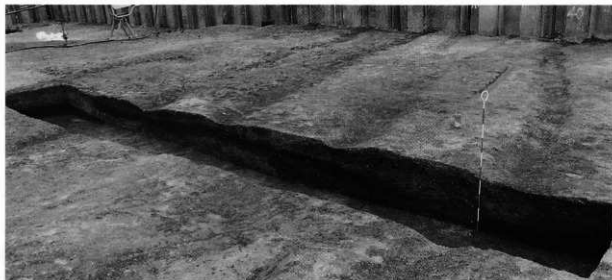
62ラインセクション



55ラインセクション  
土層断面 (2)



畑跡 1・2・3 検出状況



畑跡 2 断面  
畑跡 (1)



畑跡 4・5・6 検出状況 北東から



畑跡 4・5・6 検出状況 北西から  
畑跡 (2)





畑跡 2 畝間耕作痕



畑跡 4 畝間耕作痕



杭穴 (USP) 群検出状況



USP-12断面



USP-13断面

畑跡 (3)



検出状況



HF-1 断面



HP-5 断面



HF-2 断面



HP-6 断面



溝状遺構 1



溝状遺構 1 掘削痕



溝状遺構 2

溝状遺構



UP-1 完掘



UP-6 土層断面



UP-2~5 完掘



UP-7 土層断面



UP-8 土層断面

UP (1)



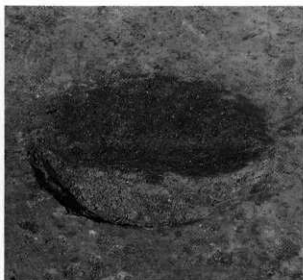
UP-9完掘



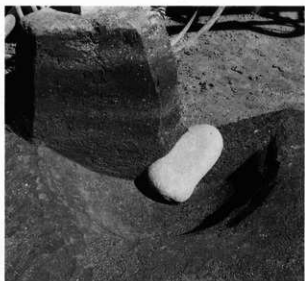
UP-10土層断面



UP-11完掘



UP-13土層断面



UP-14完掘



UP-15土層断面



UFC-1



骨片集中



LS-1



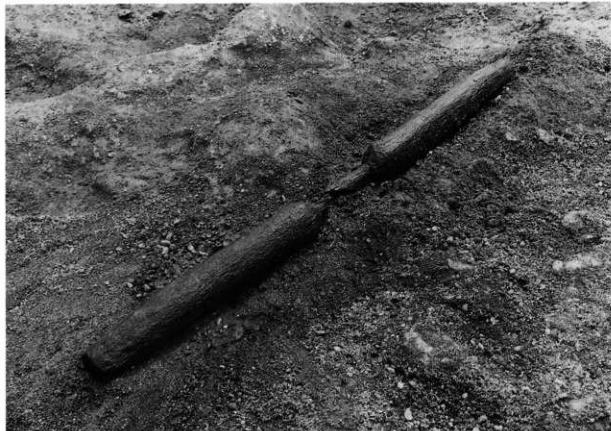
LS-2



炭窯跡 1



炭窯跡 2



杵



自在鉤

木製品出土状況(1)



曲物



桶側板



桶側板





箕・建材ほか 09-56木製品集中区  
木製品出土状況(3)



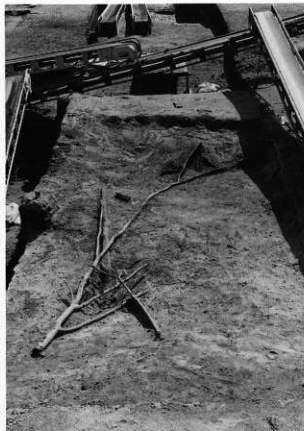
残材



建材ほか  
木製品出土状況（4）



建材ほか



建材ほか



建材ほか



芯持材ほか



杭ほか



杭ほか



柱



土器



土器



土器



土器・炭化物



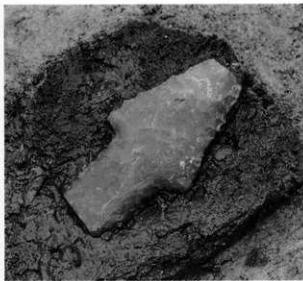
土器



土器ほか



大珠



石槍

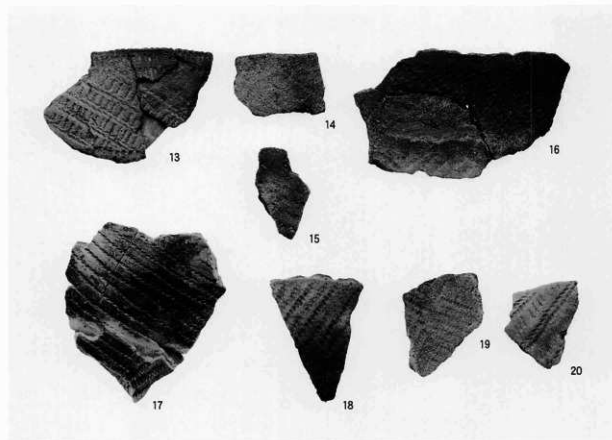
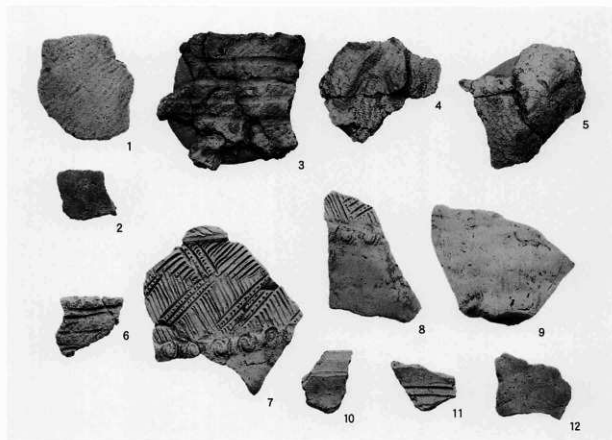
遺物出土状況(2)



平成15年度調査区

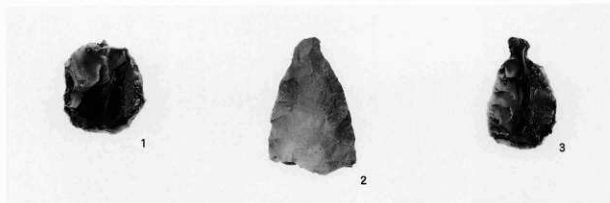


平成18年度調査区  
旧河道完掘状況

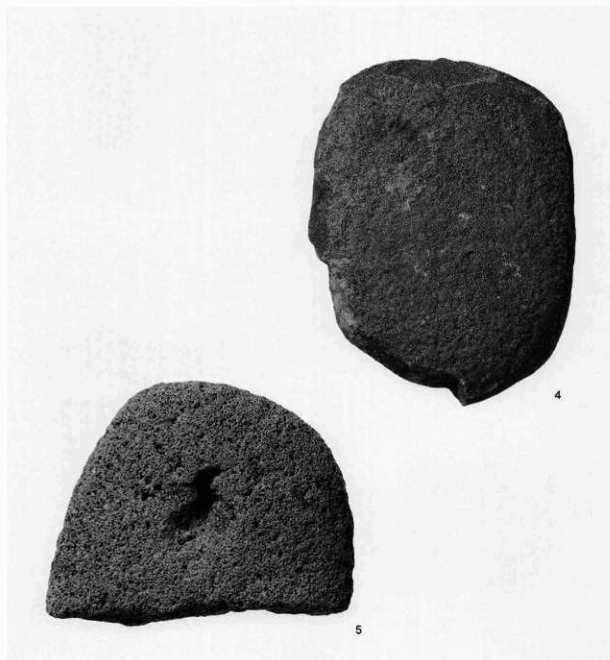


遺構出土の土器





遺構出土の剥片石器



遺構出土の礫石器



1



2



5



3



4



6



7



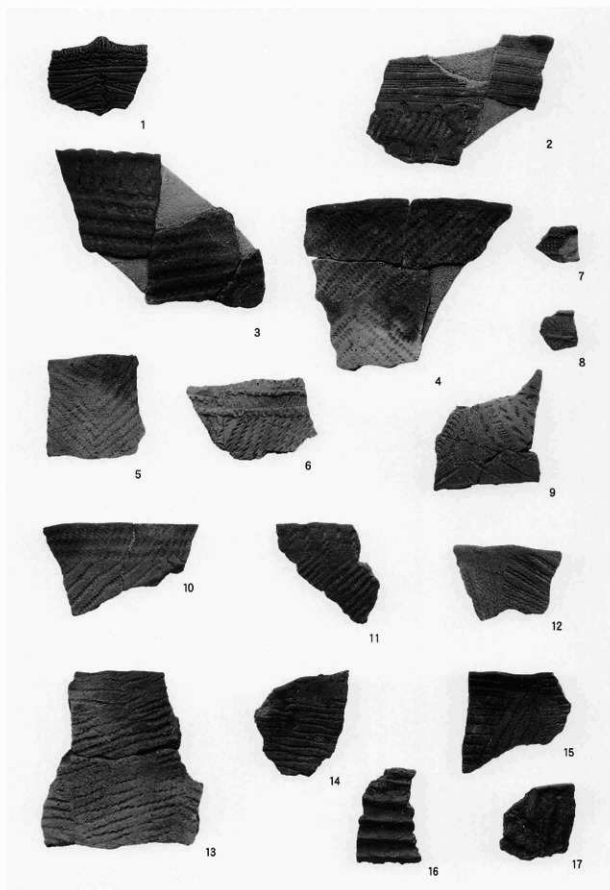
8



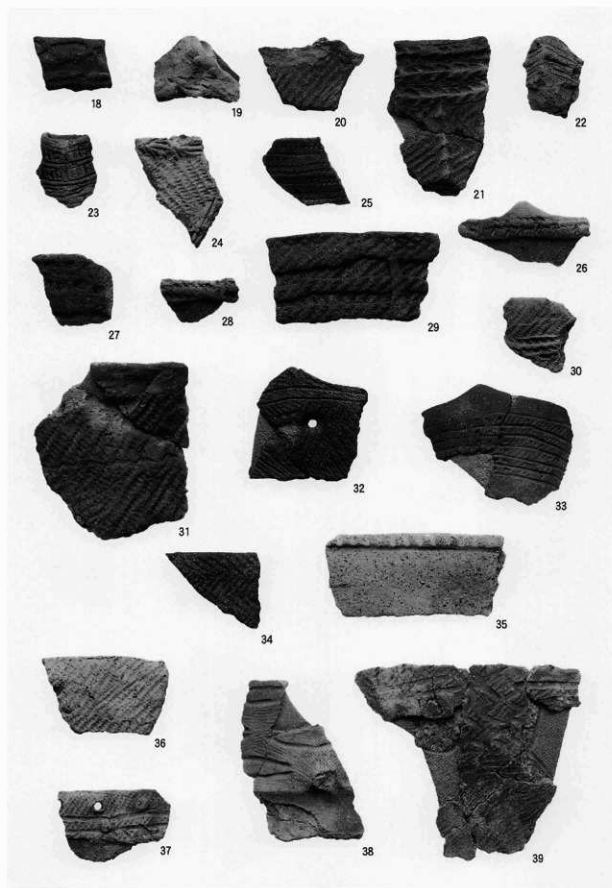
9



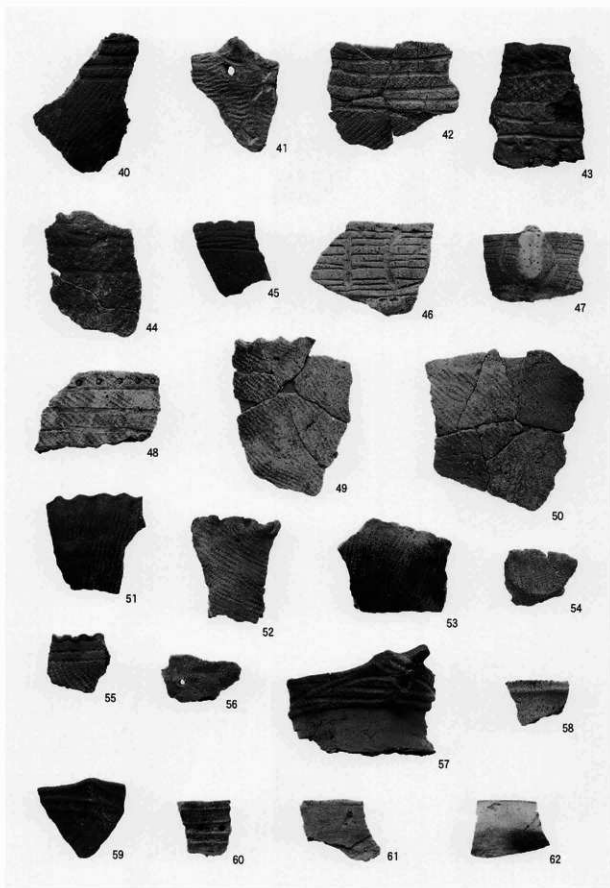
10



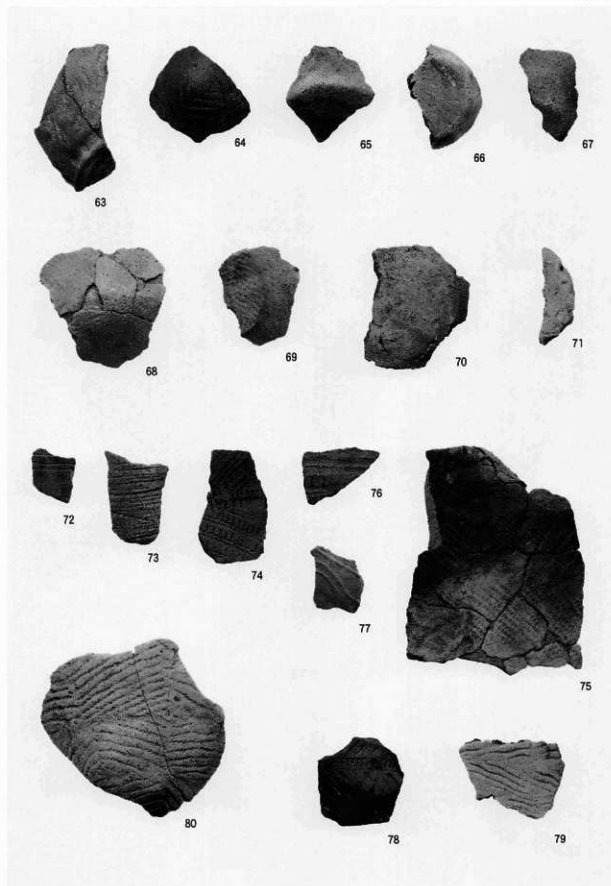
包含層出土の口縁部破片土器



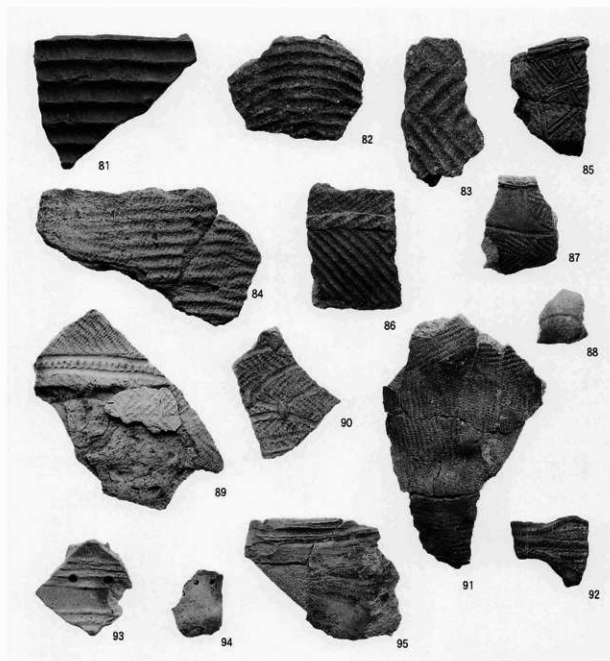
包含層出土の口縁部破片土器



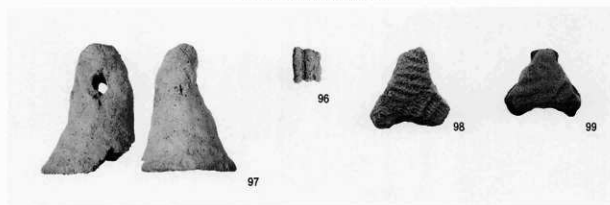
包含層出土の口縁部破片土器



包含層出土の底部・胴部破片土器

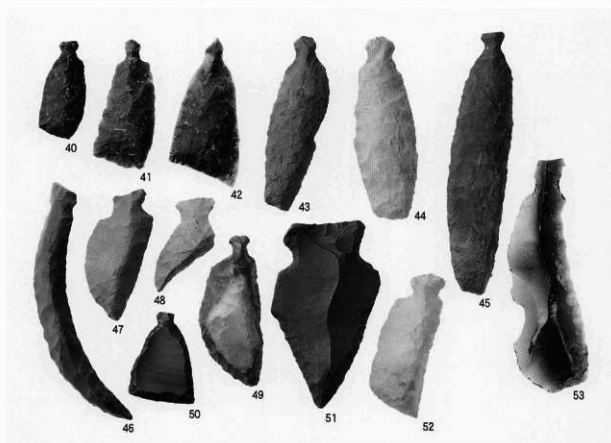
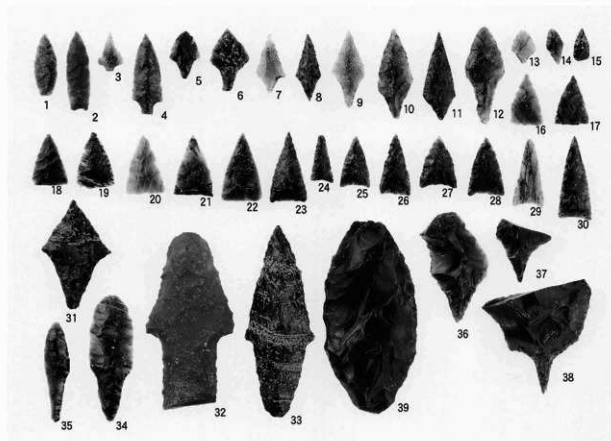


包含層出土の胴部破片土器

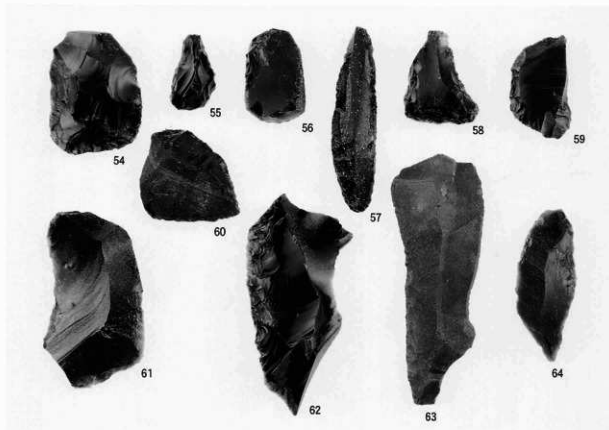


包含層出土の土製品

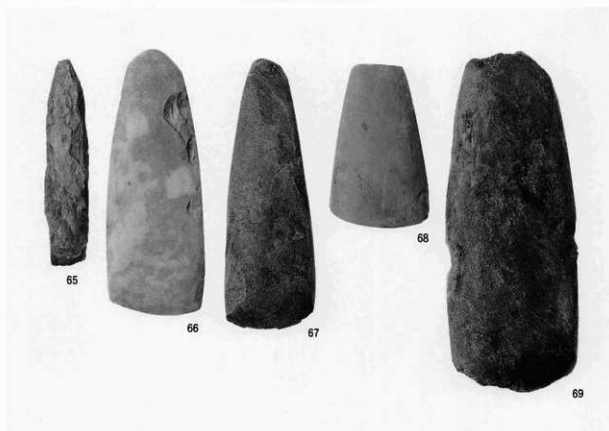




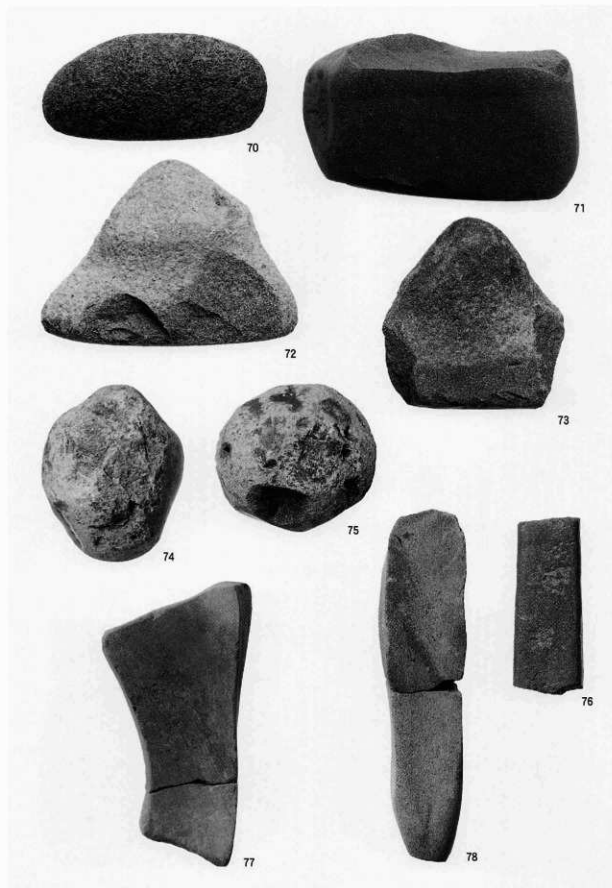
包含層出土の剥片石器



包含層出土の剥片石器



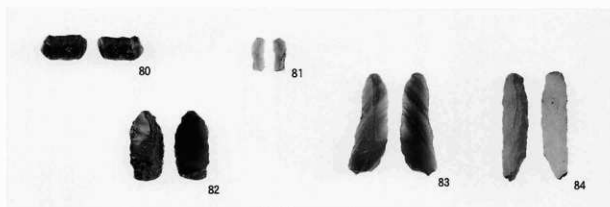
包含層出土の石斧



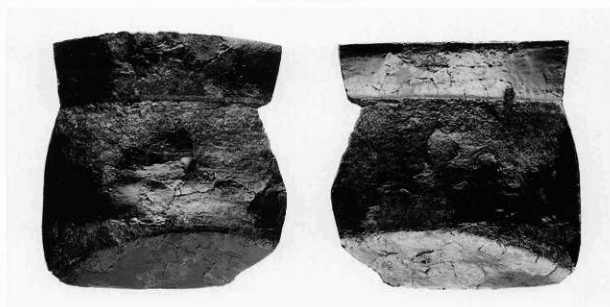
包含層出土の礫石器



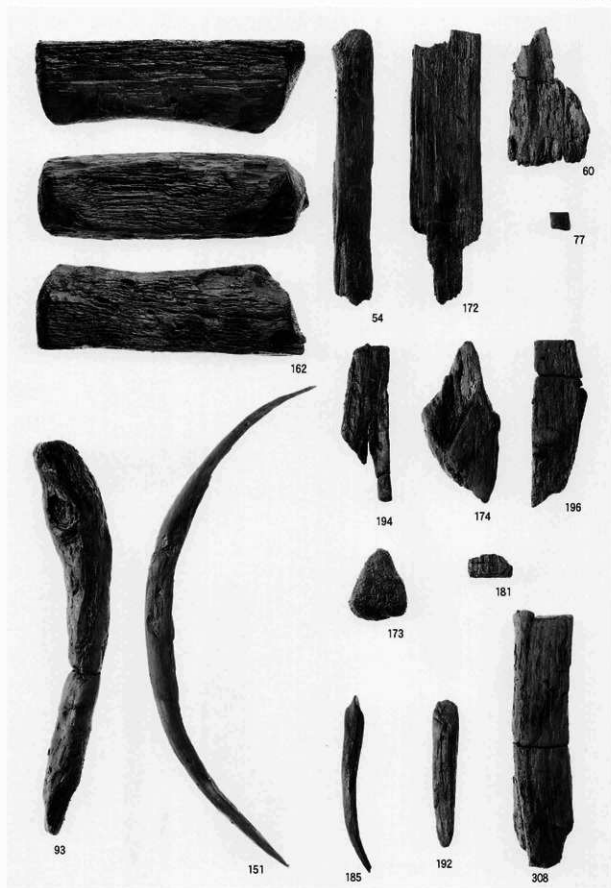
大珠 S: 1/2



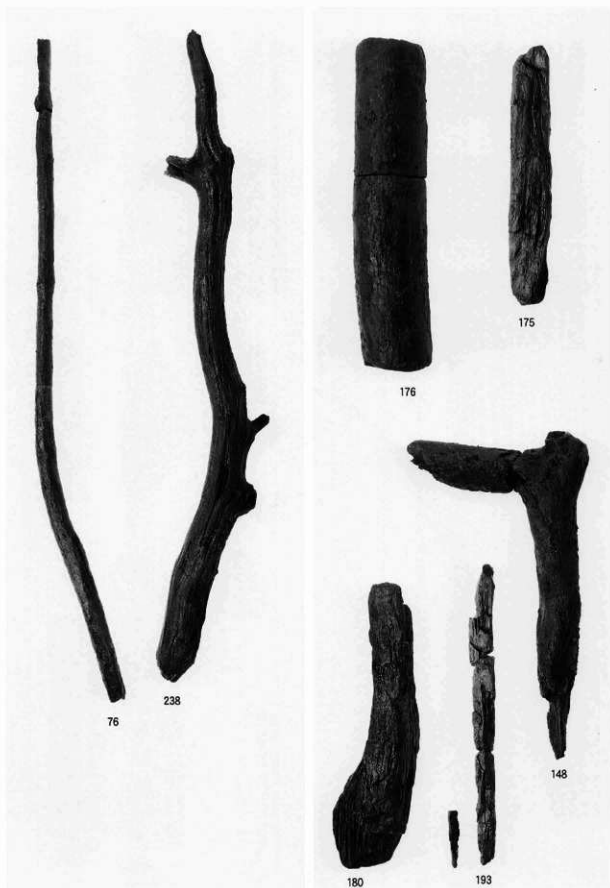
旧石器 S: 1/2



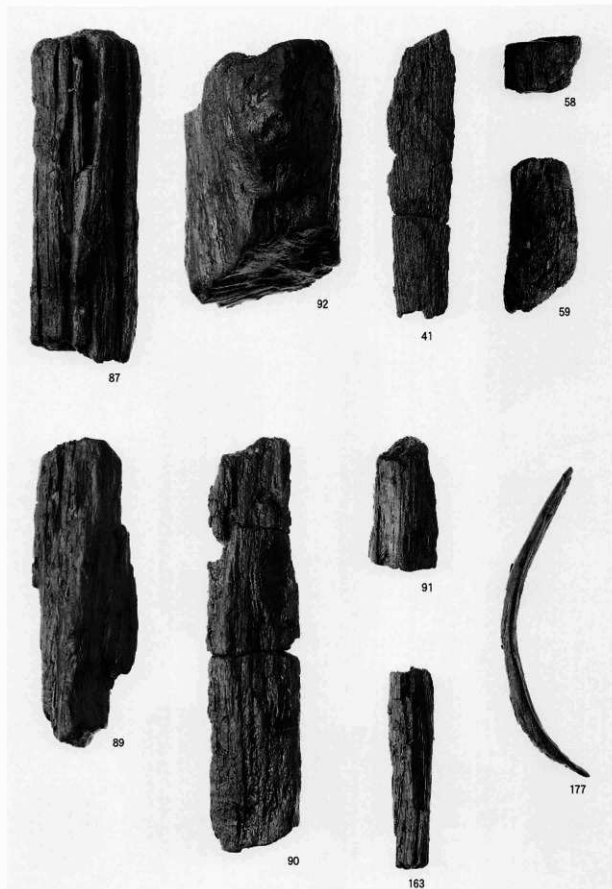
鉄鍋 S: 1/3  
包含層出土の遺物



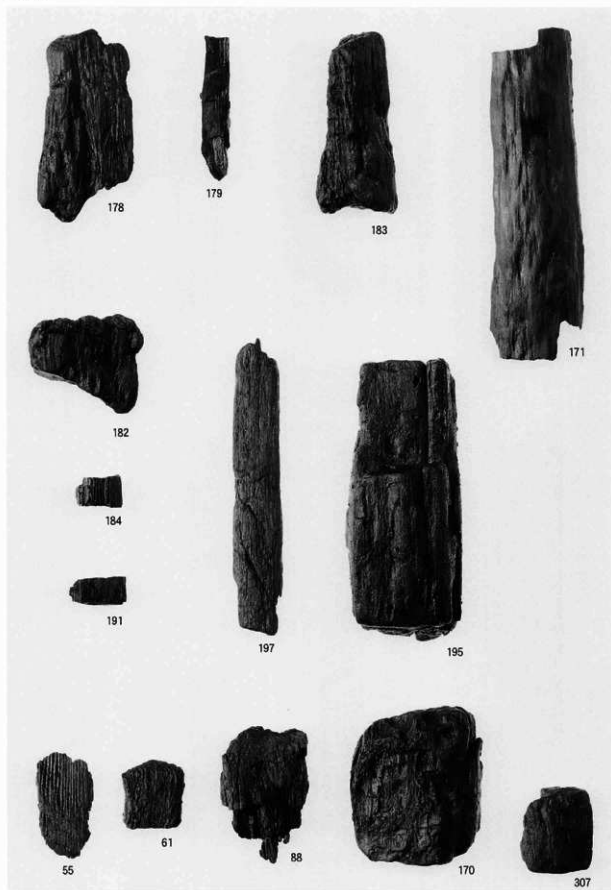
木製品 縄文時代 槓・板・棒 S: 1/3



木製品 縄文時代 柱・芯持材・分割材 S:左 1/12・右 1/6

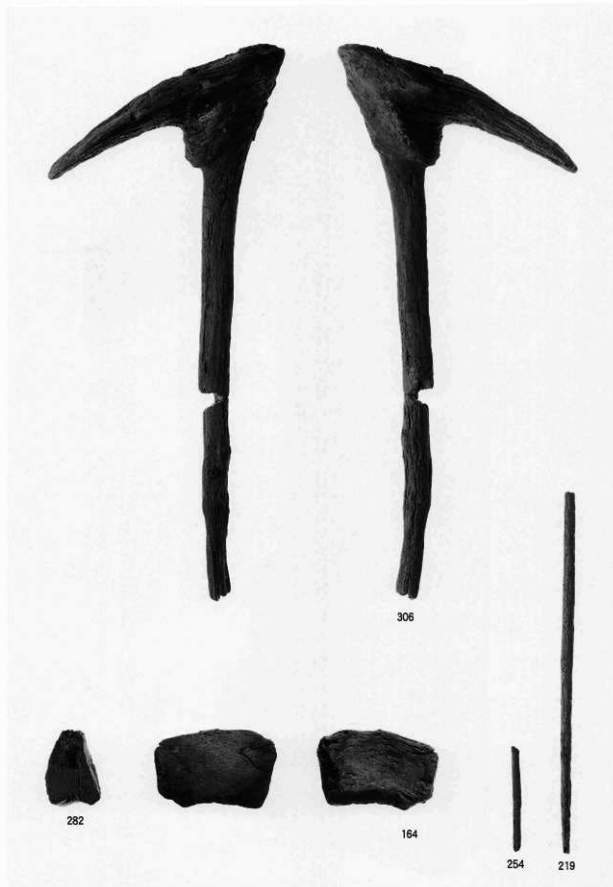


木製品 縄文時代 芯持材 S: 1/3



木製品 縄文時代 分割材・切片・木端 S: 1/3

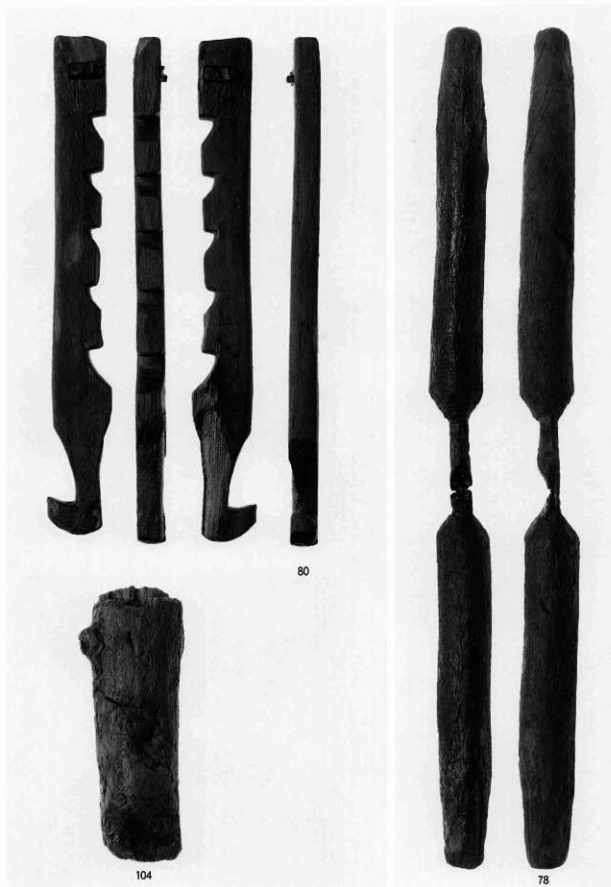




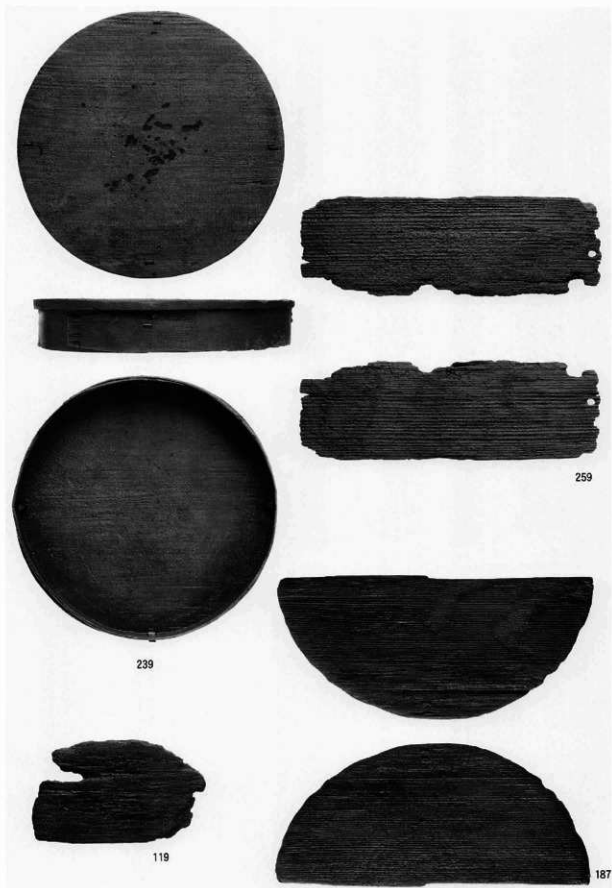
木製品 アイヌ文化期 鋸・容器・串 S: 1/3



木製品 アイヌ文化期 箕 S: 1/3



木製品 アイヌ文化期 自在鉤・杵・建材 S: 1/3



木製品 アイヌ文化期 曲物 S: 1/3



46



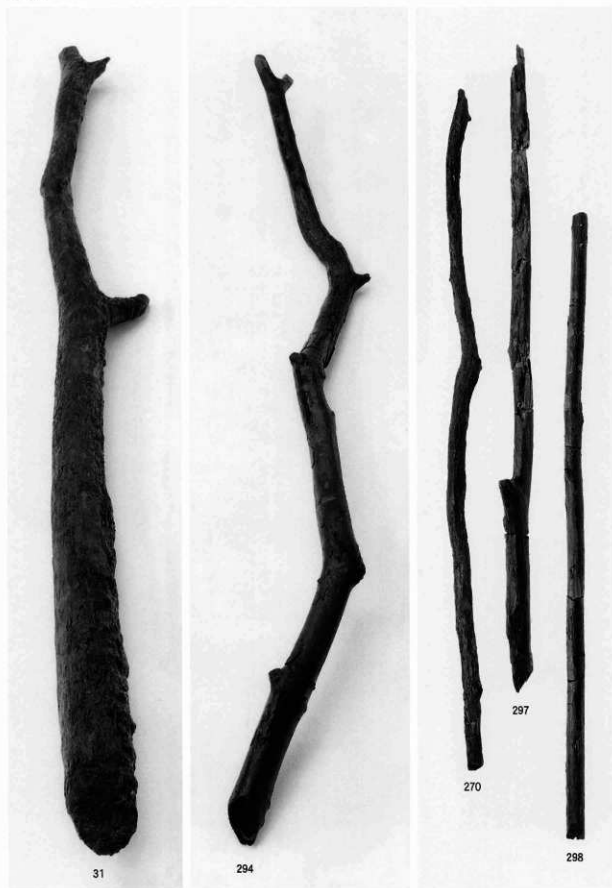
275



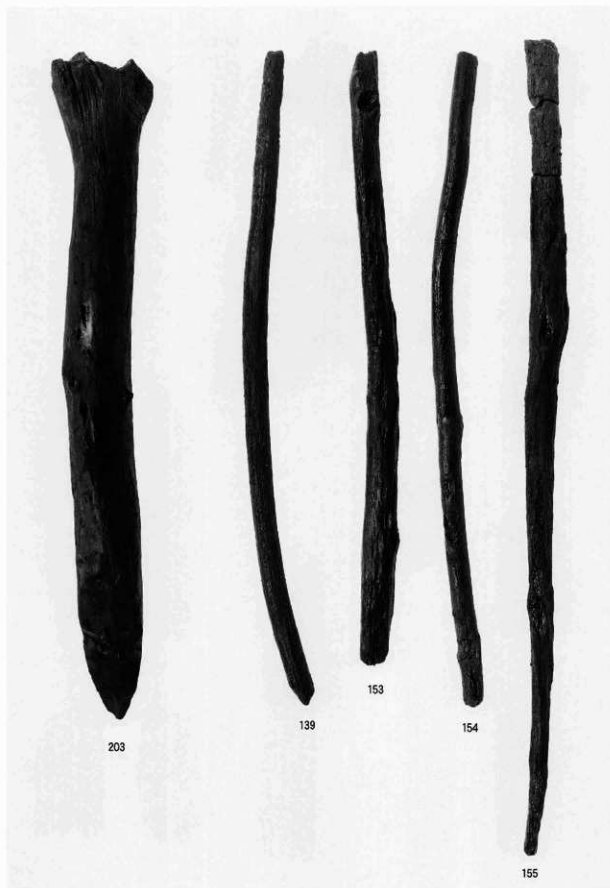
299



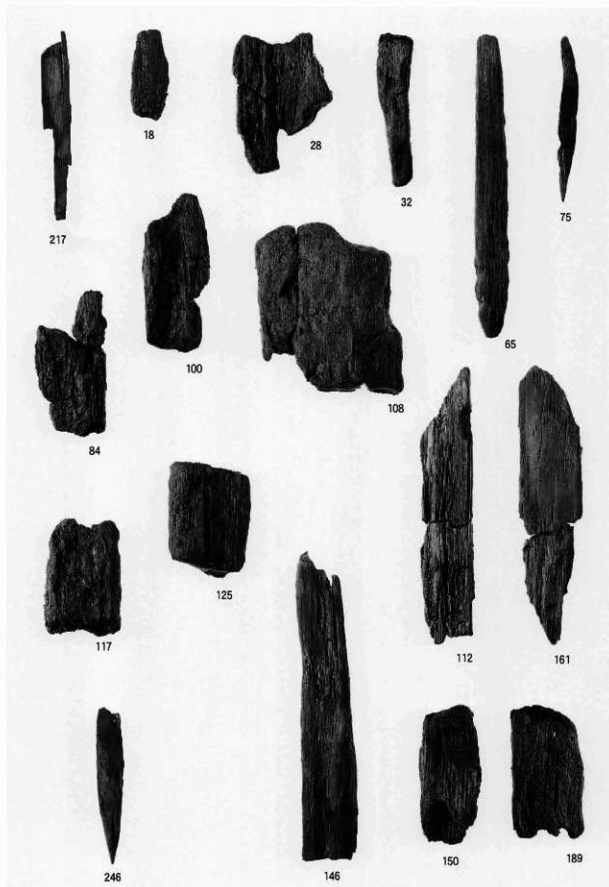
304



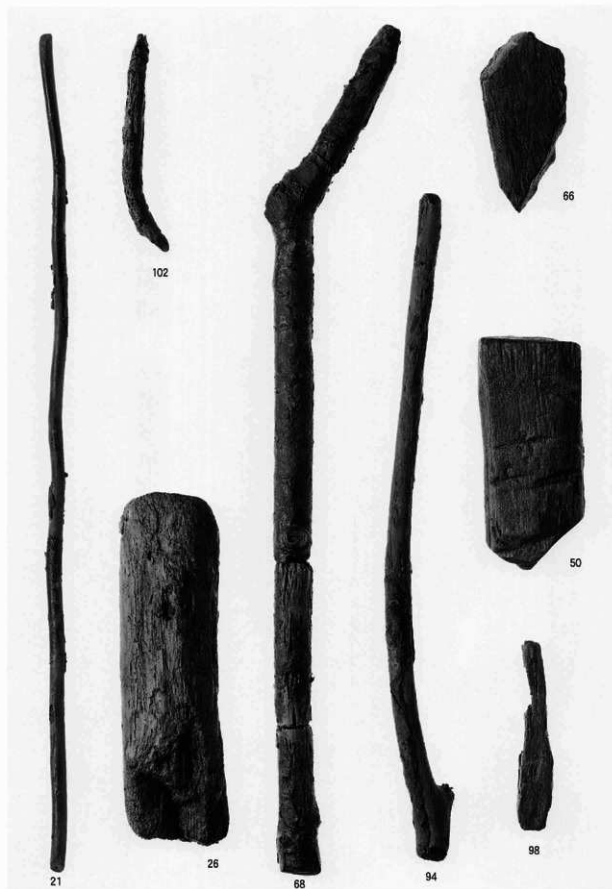
木製品 縄文～アイヌ文化期 柱・建材 S: 左 (長尺)・右 1/12



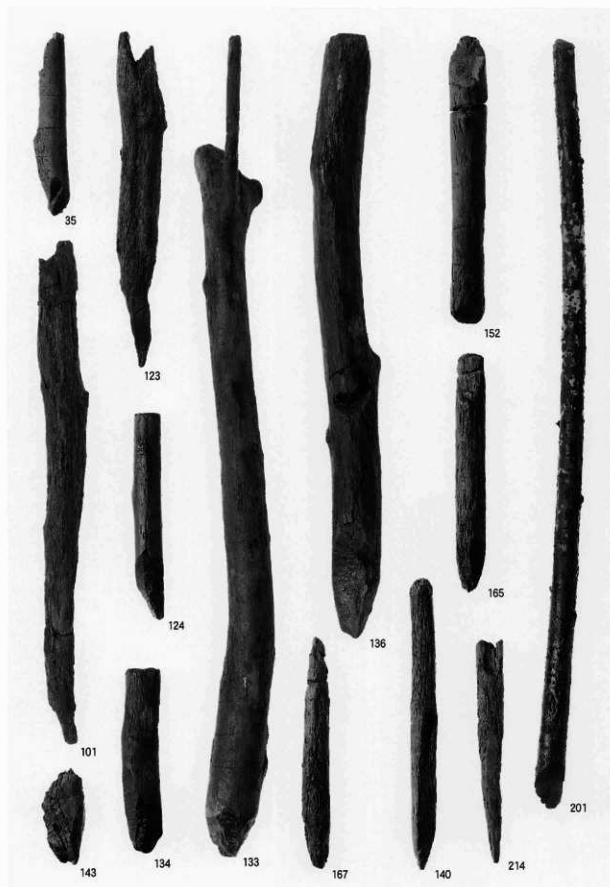
木製品 縄文～アイヌ文化期 柱・建材 S: 1/6







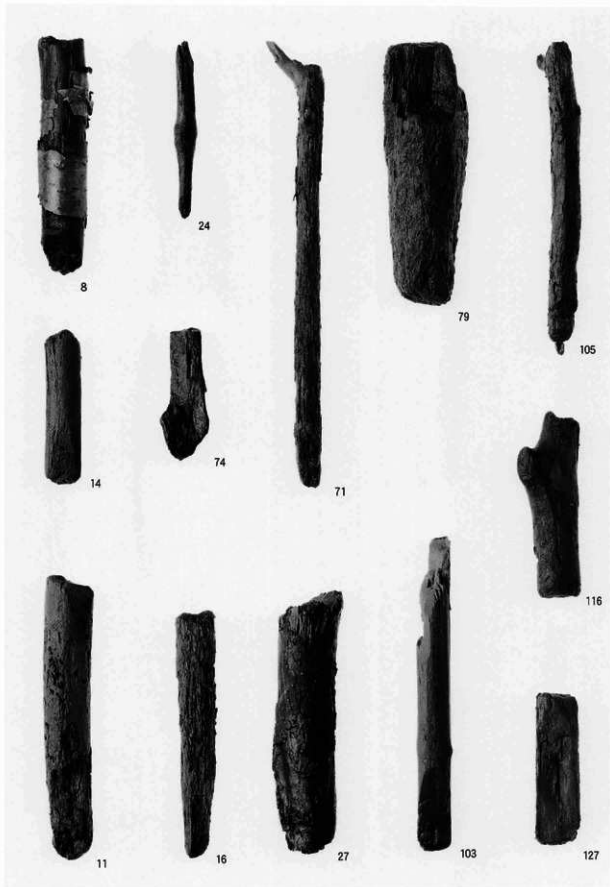
木製品 弥文～アイヌ文化期 棒 S: 1/3



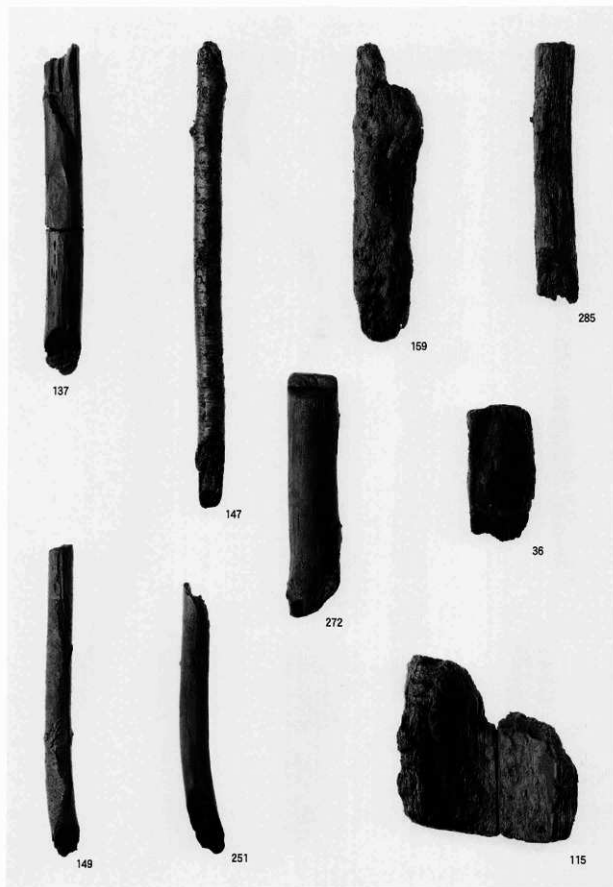
木製品 縄文～アイヌ文化期 杭 S: 1/6



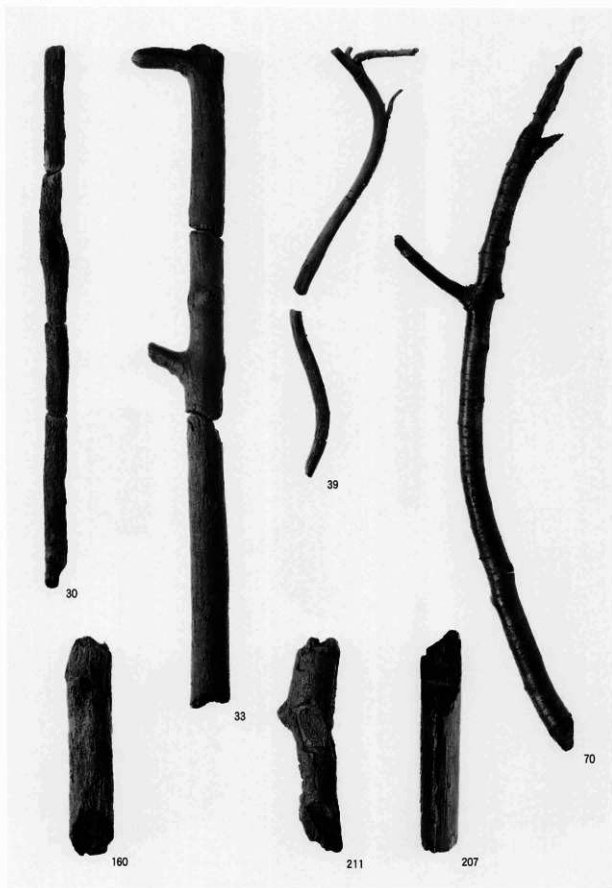
木製品 縄文～アイヌ文化期 杭・芯持材 S: 1/6



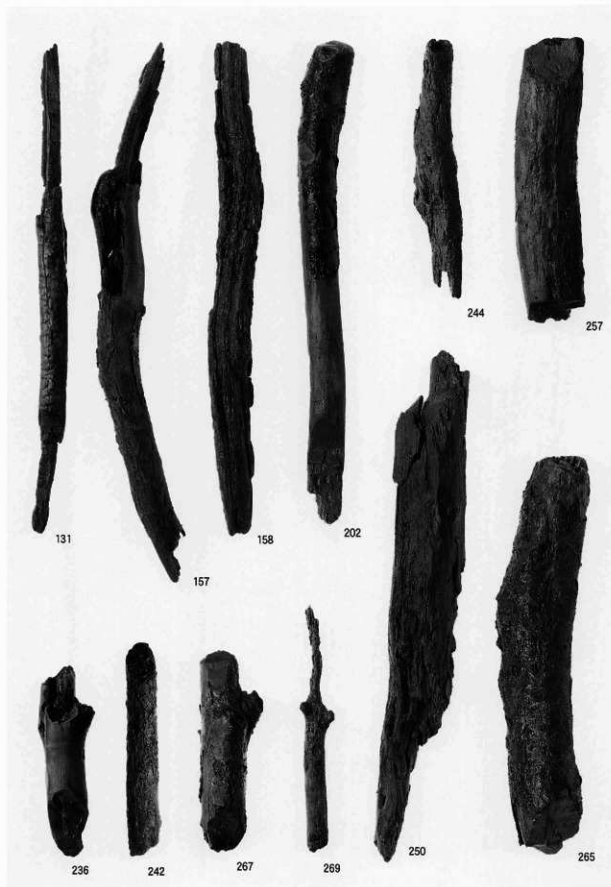
木製品 麻文~アイヌ文化期 芯持材 S: 1/3



木製品 縄文～アイヌ文化期 芯持材 S: 1/3



木製品 縄文～アイヌ文化期 芯持材 S : 1 / 6

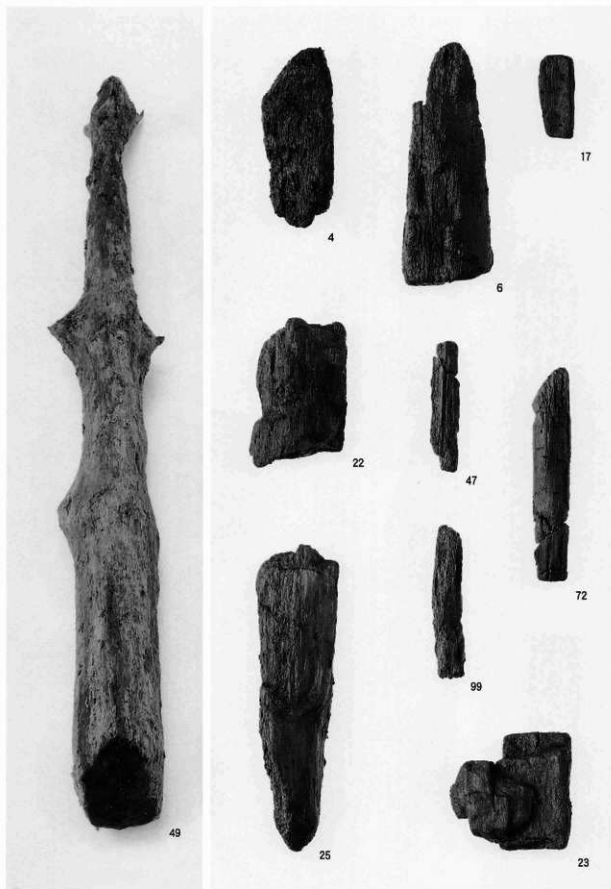


木製品 撫文～アイヌ文化期 芯持材 S: 1/6

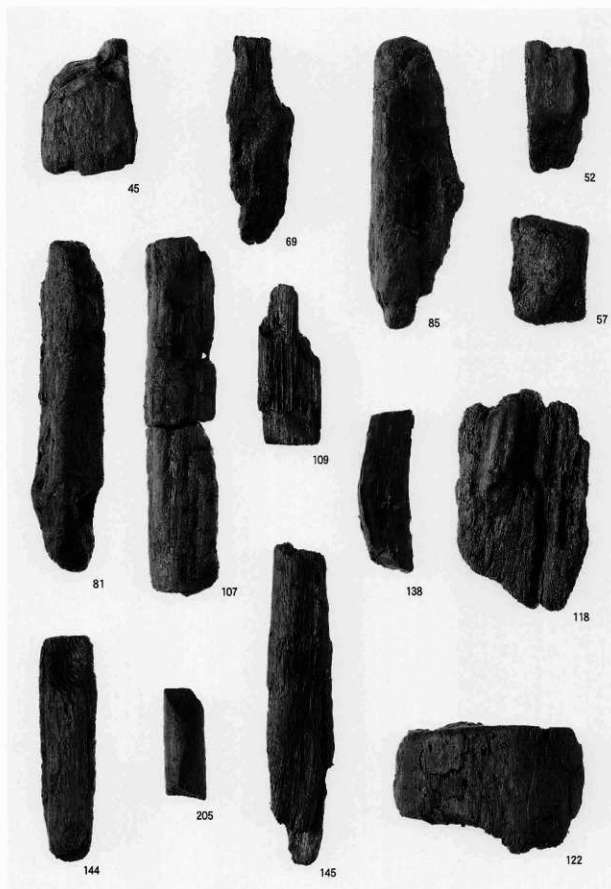


木製品 彌文～アスマ文化期 芯持材 S: 左 1/6・右 1/8

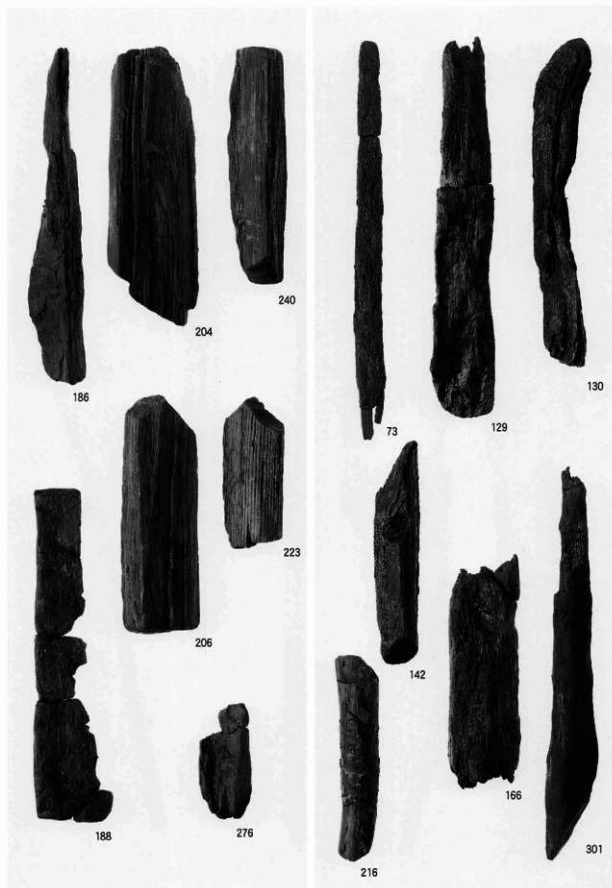




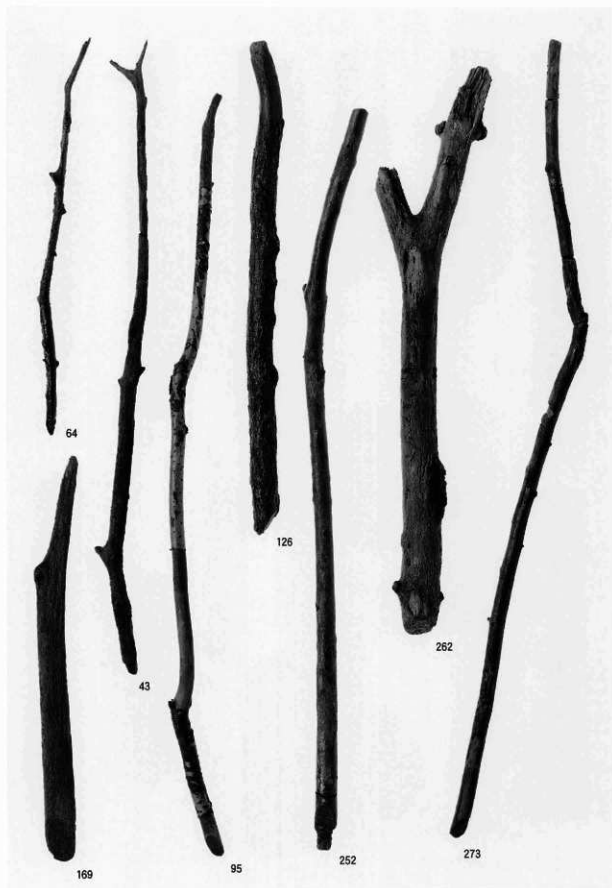
木製品 旗文～アイヌ文化期 芯持材（長尺）・分割材 S：右 1/3



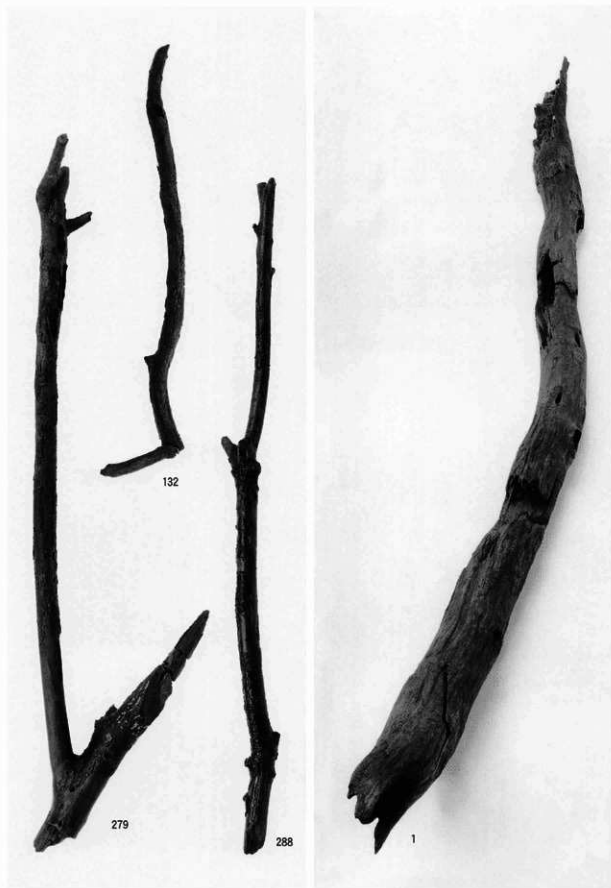
木製品 縄文～アイヌ文化期 分割材 S: 1/3



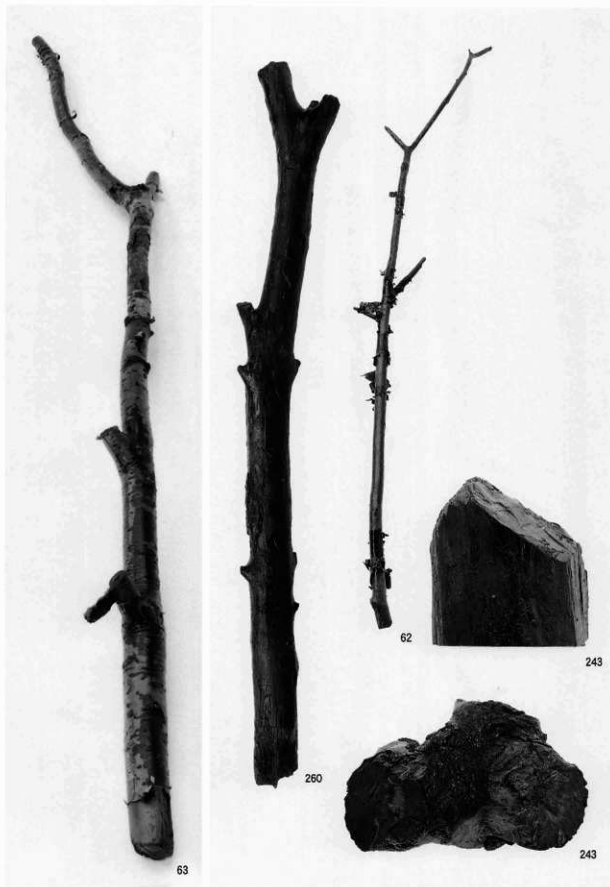
木製品 糠文～アイヌ文化期 分割材 S: 左 1/3・右 1/6



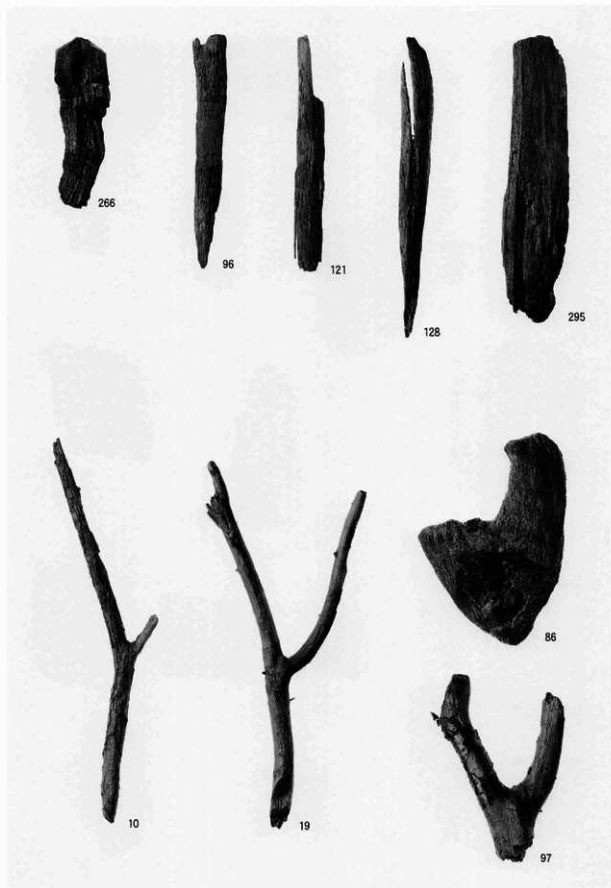
木製品 縄文～アイヌ文化期 残材 S: 1/6



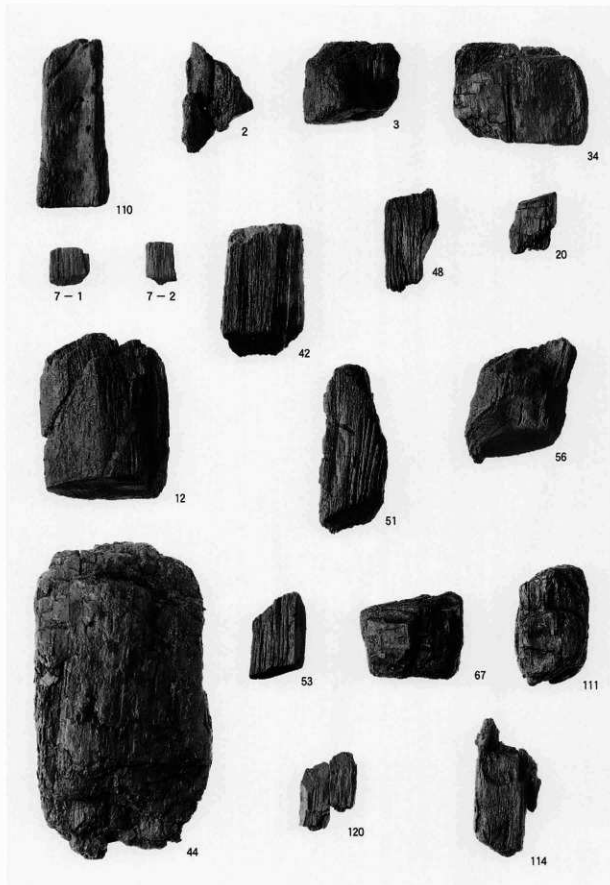
木製品 縄文～アイヌ文化期 残材 S: 左 1/6・右(長尺)



木製品 縄文～アイヌ文化期 残材 S:左(長尺)・右1/8

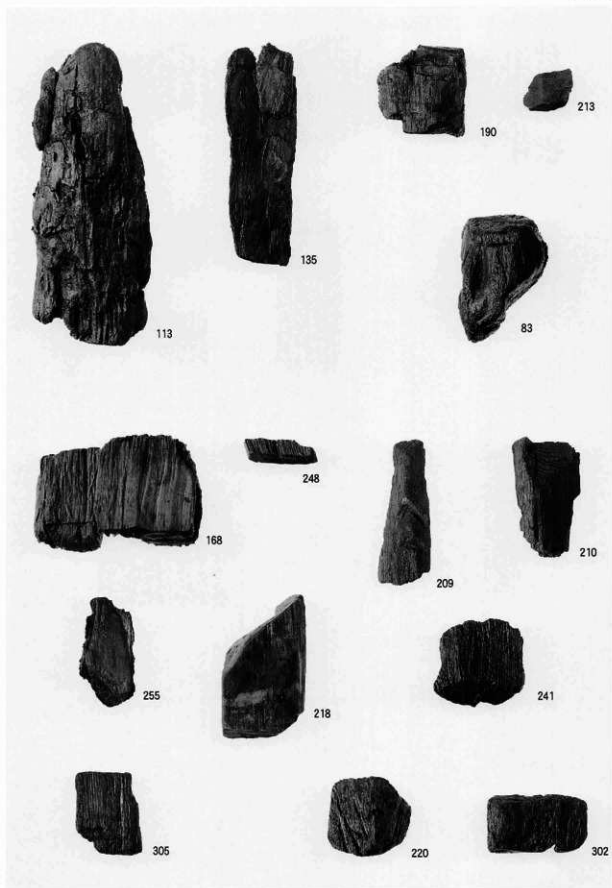


木製品 縄文～アイヌ文化期 残材・製材・切片・段木 S: 1/6

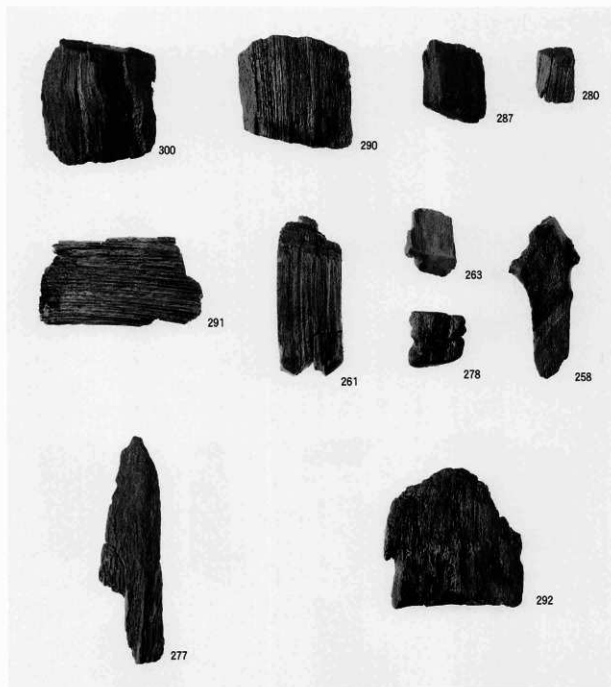


木製品 糠文~アイヌ文化期 副材・木端・切片 S: 1/3





木製品 縄文～アイヌ文化期 切片・剥材・木端 S: 1/3



木製品 擦文~アイヌ文化期 切片・木端 S: 1/3

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ちとせし きうす5いせき 8
書名	千歳市 キウス5遺跡(8)
副書名	一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	北埋調報
シリーズ番号	251集
編著者名	三浦正人・菊池慈人・末光正卓・袖岡淳子・広田良成
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL 011 (386) 3231
発行年月日	西暦2008年3月25日
ふりがな	きうす5
所収遺跡名	キウス5
ふりがな	ほっかいどう ちとせし ちゅうおう
所在地	北海道 千歳市 中央
市町村コード	1224
遺跡番号	A-03-93
北緯・東経	42度52分44秒・141度43分3秒(世界測地系)
調査期間	20030624~20031030・20060524~20061018
調査面積	4,200㎡・1,280㎡
調査原因	道路(国道337号)建設に伴う事前調査
種別	低位部
主な時代	縄文時代・縄文文化期・アイヌ文化期
主な遺構	縄文晩期:土坑15基・集石1基・フレイクチップ集中1カ所 縄文文化期:溝状遺構2条 アイヌ文化期:畑跡6面・平地住居跡1軒
主な遺物	土器:縄文早期・中期・後期・晩期・縄文など 石器:旧石器・石鏃・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・たつき石・台石・石皿・砥石など 石製品:緑泥石岩製大珠 鉄製品:内耳鉄鍋片 縄文期木製品:キウス型木槌・板材・割材・枝材丸木材・切片など アイヌ文化期木製品:槌・鍬・杵・箕・曲物・桶・串・自在鉤・徑目板・板材・割材・枝材・丸木材・柱・建材・建築部材・杭・切片・樹皮製品など
特記事項	*旧河道部の調査 *近世アイヌ文化期の畑跡調査 *縄文・近世アイヌ文化期の木製品
要約	キウス5遺跡は、石狩低地帯東辺の馬追丘陵から西流するキウス川右岸の丘陵下端部とキウス川旧河道の谷底平野に立地する。当報告はこのうちの旧河道を含む低位部を対象とするものである。旧河道は捉えられただけでも10条あり、キウス川の洪水堆積を主因として、旧石器から縄文・続縄文・縄文・アイヌ期とすべての時期の遺物が混在している。この河川地積によって形成された低位平坦面には縄文期までには土坑などの小規模遺構が散在するのみであるが、近世アイヌ文化期には平地住居が建ち、畝を持つ畑が耕起されている。攪乱された土砂に混在する遺物では、旧石器が5点検出されたほか、縄文早期・中期・後期・晩期の土器・石器(緑泥石岩製大珠も1点)が多い。また縄文期とアイヌ文化期の種々の木製品がみられる。縄文期ではキウス型木槌の出土、アイヌ期では畑やその集落に関係するものとみられる杵・箕・鍬・自在鉤・曲物・桶・建築材などが特筆される。

---

北海道埋蔵文化財センター調査報告書第251集

千歳市

**キウス5遺跡(8)**

— 一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財調査報告書 —

平成20年3月25日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒069-0832 江別市西野橋685番地1  
TEL (011) 386-3231 (代表)  
FAX (011) 386-3238  
<http://www.domaibun.or.jp>

印刷 株式会社 広報社印刷  
〒064-0808 札幌市中央区南8条西10丁目石黒ビル  
TEL (011) 532-8160 (代表)  
FAX (011) 532-9060

---